

八尾市

小阪合遺跡(その2)

八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第2次)

2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

河内平野の歴史は、水との戦いの歴史。現代人が地面を掘り下げる発掘調査もまた、水との戦い。その意味で、われわれはこの地に暮らした人びとと体験を共有できるのである。

土木技術が未熟なとき、自然はしばしば、憎悪の対象にすらなった。それを克服する智慧や勇気が、歴史を切り開く力ともなる。

前方後円墳が築かれはじめた頃、この地には、東海、山陰、四国などの土器が集った。はるばるもたらされた土器の存在によって、けっして気軽には行き来できない、彼の地との交流がうかがわれる。

都で王朝文化が華ひらく頃、この河内の一隅では、川は「まじなひ」の舞台となり、惜し気も無く、銭や食器や牛馬さえも供えられた。それだけに人びとの願いは真摯。長いときを経て、われわれの眼前に姿をあらわした、建物や手ずから作った品じな。それらを同じ視線で凝視することで、奈良・平安時代の民の息吹が伝わってくるのである。

そして、この地で、今を生きる人たちの、新たな暮らしがまたはじまろうとしている。生駒の山から見晴るかすたびに、この地に生きた人びとの労苦とそれを乗り越えてきた活力に、そして絶えることない人間の営みに想い至すのである。

調査では、都市基盤整備公団、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、八尾市文化財調査研究会、そして地元の方々に、多大なるご指導・ご協力を賜った。衷心よりお礼申し上げますとともに、今後ともなおいっそうのご支援をお願いするのである。

2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市に所在する小阪合（ござかあい）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市基盤整備公団から財団法人 大阪府文化財センターが平成14年4月1日から平成15年3月31日までの間委託を受け、平成14年4月15日から平成15年3月14日まで調査を行い、平成15年4月1日から平成16年3月31日まで遺物整理作業を行い、平成16年3月31日、本書刊行を以て完了した。
3. 現地調査は以下の体制で実施した。

調査部長玉井功、中部調査事務所長藤田憲司、調査第三係長辻本武、主査片山彰一〔写真〕、技師本間元樹、非常勤専門調査員福田由里子 調整課課長赤木克視、係長森屋直樹、技師山元達 整理作業は以下の体制で実施した。

調査部長玉井功、中部調査事務所長小野久隆、調査第二係長金光正祐、主査片山彰一〔写真〕、技師本間元樹 調整課課長赤木克視、係長森屋直樹、主査山上弘、技師山元達
4. 木器・金属器などの保存処理および樹種鑑定などは中部調査事務所主査山口誠治が行った。出土遺物については当センター職員より全般にわたって教示を得た。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会をはじめとし、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。（五十音順・敬称略）

岡田清一・小林義孝・辻康男・辻本裕也・西村公助・樋口薫・別所秀高・松岡良憲・清斉 現地調査および整理作業の参加者は以下の通りである。

現地調査 岩崎美紀子・平田麻希・森本征明・松田直子・森本節子
整理作業 松下知代・野口佳子・岩崎美紀子・平田麻希・池田美香・水取康人・中川寿美・前田千津子・波岸初美・田中正子・八十千里
6. 調査の実施にあたっては、以下の自然分野からの分析を行った。

花粉分析・珪藻分析・植物部珪酸体分析
7. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ寄稿し、執筆分担は下記に示す通りである。

辻本 武	第2章第1・3節、第7章第1節
福田由里子	第4章第1・2節
バリノ・サーヴェイ	第8章
本間元樹	第1章、第2章第2・4節、第3章、第4章第3節、第5章、第6章、第7章第2・3・4節、第9章

- 編集は本間元樹が行った。
- 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

- 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.=東京湾平均海水位）である。
- 遺構平面図の座標値は、世界測地系（測地成果2000）に基づく国土座標第VI系で表記する。単位はkmである。
- 遺構実測図等に付す方位針は、全て国土座標第VI座標系の座標北を示す。
- 現地調査は（財）大阪文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』（1988年）に、遺物整理は当センターの『遺跡調査基本マニュアル』（2003年）にてできる限り準拠した。
- 土層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』2001年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所監修を用いた。
- 遺構は、02-1・2・3・6区については調査区および遺構種類に関わらず通し番号（1～971）とした。02-4区（4001～4007）と02-5区（5001～5042）では、調査区内で遺構種類に関わらず通し番号とした。
- 図面の縮尺は、調査区平面図は1/100・1/200、遺構図は1/20、遺物1/3を基本とするが、対象物に応じて縮尺を変えている。図中にスケールバーを添付するとともに、縮尺も明示した。
- 土器類の断面は、須恵器・施釉陶器・磁器を黒塗り、瓦器をアミ伏せ、その他を白抜きとした。図上復元できない土器の小片は、「外面-内面-断面」あるいは「外面-断面」と配置した。
- 本書内の本文・図・表・写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。
- 各報文作成者により、見解、文章表現法、遺構呼称、使用文字などに統一性がないが、編集では敢えて統一していない。
- 写真に掲載される遺物の縮尺は任意である。

本文目次

序文	i
例言	iii
凡例	iv
本文目次	v
図目次	ix
表目次	xiii
写真図版目次	xiv

第1章 はじめに (本問文樹)	1
第1節 調査にいたる経緯と経過	1
第2節 調査・整理の方法	3
第3節 各調査区の対応関係	5
(1) 第V面以下の対応関係(5)	(2) 98-7区と02-6区の対応関係(5)	
(3) 98-1区と02-4区の対応関係(5)	(4) 第III面の問題(6)	
(5) 02-1・2・3区の対応関係(6)	(6) 02-5区の対応関係(6)	

第2章 02-1区の調査成果	14
第1節 層序 (辻本 武)	14
第2節 第3面より上層の遺構と遺物 (本問)	16
(1) 02-1区機械掘削層・攪乱層の遺物(16)	(2) 02-1区第0層の遺物(16)	
(3) 02-1区第1面の遺構と遺物(17)	(4) 02-1区第1層の遺物(24)	
(5) 02-1区第2面【第I・II面相当】の遺構と遺物(24)		
(6) 02-1区第2層の遺物(35)		
第3節 第3～5面の遺構 (辻本)	36
(1) 02-1区第3面(36)	(2) 02-1区第4面(43)	
(3) 02-1区古墳時代河川および第5面(46)		
第4節 第3面以下の遺物 (本問)	47
(1) 02-1区第3面の遺物(47)	(2) 02-1区第3層の遺物(49)	
(3) 02-1区第4面の遺物(49)	(4) 02-1区第4層の遺物(57)	
(5) 02-1区第5層の遺物(57)		

第3章 02-2区の調査成果(本間).....	60
第1節 層序	60
第2節 遺構と遺物	62
(1) 02-2区機械掘削層・攪乱層の遺物(62)	(2) 02-2区攪乱層除去面(62)	
(3) 02-2区第0層の遺物(62)	(4) 02-2区第1面【第I面相当】の遺構と遺物(63)	
(5) 02-2区第1層の遺物(72)	(6) 02-2区第2面【第Ⅱ・Ⅲ面相当】の遺構と遺物(72)	
(7) 02-2区第2層の遺物(78)	(8) 02-2区第3面【第V面相当】(79)	
(9) 02-2区第3層の遺構と遺物(79)	(10) 02-2区「階段室」(91)	
第4章 02-3区の調査成果	92
第1節 層序(福田由里子).....	92
第2節 遺構(福田).....	93
(1) 02-3区第1面(93)	(2) 02-3区第2面(93)	(3) 02-3区第3面(93)
(4) 02-3区第4面(102)	(5) 02-3区古墳時代河川および第5面(108)	
第3節 遺物(本間).....	111
(1) 02-3区攪乱層・旧耕作土の遺物(111)	(2) 02-3区第0層の遺物(111)	
(3) 02-3区第1面の遺物(111)	(4) 02-3区第1層の遺物(112)	
(5) 02-3区第2面の遺物(112)	(6) 02-3区第2層の遺物(113)	
(7) 02-3区第3面の遺物(114)	(8) 02-3区第3層の遺物(118)	
(9) 02-3区第4面の遺物(119)	(10) 02-3区第4層の遺物(122)	
(11) 02-3区第5層の遺物(123)		
第5章 02-4区の調査成果(本間).....	130
第1節 層序	130
第2節 遺構と遺物	131
(1) 02-4区攪乱層の遺物(131)	(2) 02-4区攪乱層除去面(131)	
(3) 02-4区第0層の遺物(131)	(4) 02-4区第1面(132)	
(5) 02-4区第1層の遺物(132)	(6) 02-4区第2面【第I面相当】(132)	
(7) 02-4区第2層の遺物(132)		
(8) 02-4区第3面【第Ⅱ・Ⅲ面相当】の遺構と遺物(132)		
(9) 02-4区第3層の遺物(132)	(10) 02-4区第4面【第IV面相当】(132)	
(11) 02-4区第4層の遺物(132)	(12) 02-4区第5面の遺構と遺物(132)	
(13) 02-4区第5層の遺物(136)	(14) 02-4区第6面の遺構と遺物(136)	
(15) 02-4区第6層の遺物(136)		
(16) 02-4区第7面【第V面相当】の遺構と遺物(136)		
(17) 02-4区第7層の遺物(139)		

第6章 02-5区の調査成果	(本間)	141
第1節 層序		141
第2節 遺構と遺物		144
(1) 02-5区攪乱層の遺物(144)	(2) 02-5区攪乱層除去面の遺構と遺物(144)	
(3) 02-5区第0層の遺物(144)	(4) 02-5区第1面(144)	
(5) 02-5区第1層の遺物(144)	(6) 02-5区第2面の遺構と遺物(144)	
(7) 02-5区第2層の遺物(147)	(8) 02-5区第3面の遺構と遺物(147)	
(9) 02-5区第3層の遺物(149)	(10) 02-5区第4面の遺構と遺物(151)	
(11) 02-5区第4層の遺物(152)	(12) 02-5区第5面の遺構と遺物(152)	
(13) 02-5区第5層の遺物(155)		
(14) 02-5区第6面〔第Ⅰ・Ⅱ面相当〕の遺構と遺物(155)		
(15) 02-5区第6層の遺物(158)	(16) 02-5区第7面〔第Ⅴ面相当〕(158)	
(17) 02-5区第7層の遺物(158)		

第7章 02-6区の調査成果		161
第1節 第1～3面の遺構	(辻本)	161
(1) 02-6区第1面(161)	(2) 02-6区第2面(163)	(3) 02-6区第3面(165)
第2節 第3面以上の遺物	(本間)	168
(1) 02-6区攪乱・盛土層の遺物(168)	(2) 02-6区第0層の遺物(168)	
(3) 02-6区第1面の遺物(168)	(4) 02-6区第1層の遺物(169)	
(5) 02-6区第2面の遺物(169)	(6) 02-6区第3面の遺物(170)	
第3節 第3層以下の層序	(本間)	173
第4節 第3層以下の遺構と遺物	(本間)	175
(1) 井戸971(175)	(2) 02-6区第4面〔第Ⅳ面相当〕の遺構と遺物(175)	
(3) 02-6区第5面(179)	(4) 02-6区第6面(179)	
(5) 02-6区第6層の出土遺物(179)	(6) 02-6区第7面(179)	
(7) 02-6区第7層の出土遺物(179)	(8) 02-6区第8面(179)	

第8章 小阪合遺跡(第2次)発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析 …180		
(辻本裕也・田中義文・辻 康男・伊藤良永・馬場健司：パリオ・サーヴェイ株式会社)		
はじめに ……………	180	
1. 試料 ……………	180	
(1) 縄文時代晩期～平安時代の古植生変遷と堆積環境変遷(180)		
(2) 古墳時代前期(庄内式～布留期)の河川周辺の古植生(180)		
(3) 弥生時代の層準における水田稲作の有無の検証(180)		
(4) 平安時代末期の落ち込み4007の埋没環境(183)		
2. 分析方法 ……………	183	
(1) 珪藻分析(183)	(2) 花粉分析(183)	(3) 植物珪酸体分析(183)
(4) 大型植物遺体同定(184)	(5) 炭化材同定(184)	
3. 結果 ……………	184	
(1) 珪藻分析(184)	(2) 花粉分析(195)	(3) 植物珪酸体分析(200)
(4) 大型植物遺体群の種類構成(203)	(5) 炭化材同定(203)	
4. 考察 ……………	203	
(1) 調査地点およびその周辺の縄文時代晩期～平安時代の古植生変遷と堆積環境変遷(203)		
(2) 古墳時代初頭の河川周辺の古植生(207)		
(3) 弥生時代相当層における土地利用の検討(207)		
(4) 平安時代末期の落ち込み4007の埋没環境(210)		
(5) 小結(210)		
第9章 まとめ …………… (本間) ……………	217	
第1節 小阪合遺跡の変遷 ……………	217	
(1) 縄文時代(217)	(2) 弥生時代(217)	(3) 古墳時代初頭(219)
(4) 古墳時代前～後期(219)	(5) 奈良時代(221)	(6) 平安時代前半(221)
(7) 平安時代中頃～後半(223)	(8) 鎌倉時代以降(224)	
第2節 古墳時代前期の外来系土器 ……………	224	
遺物観察表 ……………	227～266	
写真図版 ……………	1～50	
報告書抄録 ……………	巻末	

目 次

第1章 はじめに

図1 調査地位置	2
図2 調査区配置	2
図3 第I面全体図	8
図4 第II面全体図	9

第2章 02-1区の調査成果

図8 02-1区西辺断面	15
図9 02-1区地区割り	16
図10 02-1区第0層出土遺物	17
図11 02-1区第1面	18
図12 02-1区第1面 土坑9・10、ビット13	19
図13 02-1区第1面土坑9出土土器	20
図14 02-1区第1面溝2・3・4、 ビット18・29・39出土土器	21
図15 02-1区第1層出土土器	23
図16 02-1区第2面	25
図17 02-1区第2面掘立柱建物286 とその周辺	26
図18 02-1区第2面 ビット90・94・98・118・184・190	27
図19 02-1区第2面 ビット211・214・224ほか	32
図20 02-1区第2面溝81・ビット群 ・土坑264出土土器	33
図21 02-1区第2面 ビット118・184出土遺物	34
図22 02-1区第2層出土土器	35
図23 02-1区第3面	36
図24 02-1区第3面井戸82	37
図25 02-1区第3面方形土坑358	37
図26 02-1区第3面掘立柱建物A	40
図27 02-1区第3面掘立柱建物B	40

図5 第II面全体図	10・11
図6 第IV面全体図	12
図7 第V面全体図	13

図28 02-1区第3面掘立柱建物C	41
図29 02-1区第3面掘立柱建物D	41
図30 02-1区第3面ビット118・401・398 ・443・376・116、土坑126断面	42
図31 02-1区第4面	43
図32 02-1区第4面 土坑469・470・471・538、 ビット498、土器溜り467・468	45
図33 02-1区第5面	46
図34 02-1区第3面井戸82出土遺物	47
図35 02-1区第3面方形土坑358出土遺物	48
図36 02-1区第3面 ビット417、溝434・454出土土器	49
図37 02-1区第3層出土遺物(1)	50
図38 02-1区第3層出土遺物(2)	51
図39 02-1区第4面 土器溜り467出土土器(1)	52
図40 02-1区第4面 土器溜り467出土土器(2)	53
図41 02-1区第4面 土器溜り467出土土器(3)	54
図42 02-1区第4面土器溜り468、土坑470、 ビット498・513、土坑538出土土器	55
図43 02-1区第4層出土土器	56
図44 02-1区第5層〔上層〕出土遺物	57
図45 02-1区第5層〔下層〕出土土器(1)	58
図46 02-1区第5層〔下層〕出土土器(2)	59

第3章 02-2区の調査成果

図47	02-2区西辺断面	61
図48	02-2区地区割り	62
図49	02-2区第0層出土土器	63
図50	02-2区第1面	64
図51	02-2区第1面井戸287	65
図52	02-2区第1面井戸287出土土器(1)	66
図53	02-2区第1面井戸287出土土器(2)	67
図54	02-2区第1面 ピット57・溝66・土坑67	67
図55	02-2区第1面井戸65	68
図56	02-2区第1面ピット群・井戸65 ・溝66・土坑67出土土器	70
図57	02-2区第1層出土遺物	71
図58	02-2区第2面	73
図59	02-2区第2面ピット306・318 ・322・330・土坑350	74
図60	02-2区第2面土坑350出土遺物	75
図61	02-2区第2面溝群・ピット群 ・落ち込み340・土坑341出土土器	76
図62	02-2区第2層出土遺物	79

図63	02-2区第3面	80
図64	02-2区第3層(流路充填堆積物) 層理のスケッチ	81
図65	02-2区第3層中杭群371(全体)	82
図66	02-2区第3層中杭群371 (杭列A)	83
図67	02-2区第3層中杭群371 (杭列B・C)	84
図68	02-2区第3層中杭群371 (杭列D)	85
図69	02-2区第3層[第3面~T.P.+6.0m] 出土遺物	86
図70	02-2区第3層(T.P.+6.0~4.6m) 出土遺物(1)	87
図71	02-2区第3層(T.P.+6.0~4.6m) 出土遺物(2)	88
図72	02-2区第3層(T.P.+6.0~4.6m) 出土遺物(3)	89
図73	02-2区第3層(T.P.+4.5~3.6m) 出土土器	90

第4章 02-3区の調査成果

図74	02-3区層序模式図	92
図75	02-3区第1面	94
図76	02-3区第1面溝601~605断面	95
図77	02-3区第2面	96
図78	02-3区第2面 溝606・611~617断面	97
図79	02-3区第3面	98
図80	02-3区第3面井戸654・683 ・731・732・781・783	99
図81	02-3区第3面土坑740・794・803	100
図82	02-3区第3面 土坑群・ピット群・溝群断面	101
図83	02-3区第3面溝735	102

図84	02-3区第4面	103
図85	02-3区第4面建物	104
図86	02-3区第4面ピット群・土坑877	105
図87	02-3区第4面 土坑群・ピット群断面	106
図88	02-3区第4面土器溜り663・802	107
図89	02-3区第5面	109
図90	02-3区第⑥・⑦層杭列	110
図91	02-3区第0層出土土器	111
図92	02-3区第1面 溝601・602・604出土遺物	112
図93	02-3区第2面 溝613・614出土遺物	112

図94	02-3区第2層出土遺物	114
図95	02-3区第3面井戸732出土土器	116
図96	02-3区第3面ビット678、 井戸731・783、溝734・788、 土坑740出土土器	117
図97	02-3区第3層出土遺物	118
図98	02-3区第4面 土器溜り663出土土器	120
図99	02-3区第4面 土器溜り802出土土器	121

第5章 02-4区の調査成果

図108	02-4区東・南辺断面	131
図109	02-4区地区割り	133
図110	02-4区第1面	133
図111	02-4区第2面	134
図112	02-4区第3面	134
図113	02-4区第4面	135
図114	02-4区第5面	135

第6章 02-5区の調査成果

図120	02-5区北・東・南辺断面	142
図121	02-5区地区割り	143
図122	02-5区攪乱層除去面	145
図123	02-5区第1面	146
図124	02-5区第1～3層出土遺物	146
図125	02-5区第2面	147
図126	02-5区第3面	148
図127	02-5区第4面	150
図128	02-5区第4面 溝5028～5030断面	151
図129	02-5区第4面溝5028・5030、 土坑5031出土土器	151
図130	02-5区第4層出土土器	152

図100	02-3区第4面落ち込み840・920、 土坑887出土土器	122
図101	02-3区第4層出土土器	123
図102	02-3区第5層〔上層〕出土土器(1)	124
図103	02-3区第5層〔上層〕出土土器(2)	125
図104	02-3区第5層〔下層〕出土遺物(1)	126
図105	02-3区第5層〔下層〕出土遺物(2)	127
図106	02-3区第5層〔下層〕出土遺物(3)	128
図107	02-3区第5層出土木器	129

図115	02-4区第4～7層 ・第6面落ち込み4005出土土器	137
図116	02-4区第6面	138
図117	02-4区第7面	138
図118	02-4区第7面落ち込み4007	139
図119	02-4区第7面 落ち込み4007出土遺物	140

図131	02-5区第5面	153
図132	02-5区第5面 土坑5034・溝5035	154
図133	02-5区第5面 土坑5034出土土器	155
図134	02-5区第6面	156
図135	02-5区第6面土坑5041	157
図136	02-5区第6面ビット5042	157
図137	02-5区第6層中土器 (5027・5028)出土状況	157
図138	02-5区第6面ビット5042、 第6・7層出土土器	159
図139	02-5区第7面	160

第7章 02-6区の調査成果

図140	02-6区第1面	162	図148	02-6区第3面自然河川963 〔流路部〕出土土器	172
図141	02-6区第1面井戸825	163	図149	02-6区北辺断面(第3面以下)	174
図142	02-6区第2面	164	図150	02-6区井戸971および出土遺物	176
図143	02-6区第3面	166	図151	02-6区第4面	177
図144	02-6区第3面自然河川963 〔西側部〕土器出土状況	167	図152	02-6区第4面畦畔967-970	177
図145	02-6区第1面溝818・井戸825 ・土坑826出土土器	168	図153	02-6区第5面	177
図146	02-6区第2面 自然流路827出土土器	169	図154	02-6区第6面	178
図147	02-6区第3面自然河川963 〔西側部〕出土土器	171	図155	02-6区第7面	178
			図156	02-6区第8面	178

第8章 小阪合遺跡(第2次)発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析

図157	分析試料採取位置図と層序	181
図158	調査区配置図と試料採取地点	181
図159	02-4区・02-2区・02-6区における主要珪藻化石群集の層位分布	190
図160	02-3区における主要珪藻化石群集の層位分布	194
図161	02-4区・02-2区・02-6区における主要花粉化石群集の層位分布	197
図162	02-3区における主要花粉化石群集の層位分布	199
図163	02-6区北辺断面における植物珪酸体含量の層位分布	201
図164	弥生時代前期・古墳時代前期の花粉化石群集	206
図165	小阪合遺跡における古環境変遷	209

第9章 まとめ

図166	弥生時代の小阪合遺跡	218	図170	平安時代前半の小阪合遺跡	222
図167	古墳時代初頭の小阪合遺跡	218	図171	平安時代中頃～後半の小阪合遺跡	222
図168	古墳時代前～後期の小阪合遺跡	220	図172	古墳時代前期の外來系土器	225
図169	奈良時代の小阪合遺跡	220			

表 目 次

第1章 はじめに

表1 小阪合遺跡(第1・2次)遺構面の対照	7
-----------------------	---

第2章 02-1区の調査成果

表2 02-1区第1面の溝一覧	17
表3 02-1区第1面の 土坑・ピット一覧	22
表4 02-1区第2面の溝一覧	24
表5 02-1区第2面の 土坑・ピット一覧	28~31
表6 02-1区第3面の遺構出土遺物	50
表7 02-1区第4面の遺構出土遺物	56

第3章 02-2区の調査成果

表8 02-2区第1面の溝一覧	63
表9 02-2区第1面の土坑・ピット一覧	69
表10 02-2区第2面の溝一覧	72
表11 02-2区第2面の 土坑・ピット一覧	77・78

第4章 02-3区の調査成果

表12 02-3区第2面の遺構出土遺物	113
表13 02-3区第3面の遺構出土遺物	115
表14 02-3区第4面の遺構出土遺物	119

第6章 02-5区の調査成果

表15 02-5区第3面の溝一覧	149
表16 02-5区第3面の土坑・ピット一覧	149

第7章 02-6区の調査成果

表17 02-6区第1面の遺構出土遺物	169
---------------------	-----

第8章 小阪合遺跡(第2次)発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析

表18 試料表	182
表19 02-4区・02-2区・02-6区の珪藻分析結果	185~189
表20 02-3区の珪藻分析結果	192・193
表21 02-4区・02-2区・02-6区の花粉分析結果	196
表22 02-3区の花粉分析結果	198
表23 02-6区北辺断面の植物珪酸体含量	201
表24 大型植物遺体分析結果	202

写真図版目次

第1章 はじめに 関係

写真図版1 調査地全景

第2章 02-1区の調査成果 関係

写真図版2 02-1区遺構(1)

第1面 第1面土坑9 第1面ビット28 第1面ビット39

写真図版3 02-1区遺構(2)

第2面

写真図版4 02-1区遺構(3)

第2面ビット90 第2面ビット98 第2面ビット184
第2面ビット118 第2面ビット211 第2面ビット214

写真図版5 02-1区遺構(4)

第3面 西側セクション

写真図版6 02-1区遺構(5)

第3面井戸82 第3面方形土壇358

写真図版7 02-1区遺構(6)

第4面 第4面土器溜り467 第5層遺物出土状況

写真図版8 02-1区遺物(1)

第0層出土土器 第1面溝2出土土器
第1面ビット39出土土器 第1層出土土器

写真図版9 02-1区遺物(2)

第2面ビット101出土土器 第2面ビット199出土土器
第2面土坑264出土土器 第2層出土土器 第3面井戸82出土土器

写真図版10 02-1区遺物(3)

第3面方形土壇358出土土器

写真図版11 02-1区遺物(4)

第3層出土遺物

写真図版12 02-1区遺物(5)

第4面土器溜り467出土土器(1)

写真図版13 02-1区遺物(6)

第4面土器溜り467出土土器(2)

写真図版14 02-1区遺物(7)

第4面土器溜り468出土土器 第4面土坑470出土土器
第4面土坑538出土土器 第4層出土土器

- 写真図版15 02-1区遺物(8)
第5層〔上層〕出土遺物 第5層〔下層〕出土土器(1)
- 写真図版16 02-1区遺物(9)
第5層〔下層〕出土土器(2)

第3章 02-2区の調査成果 関係

- 写真図版17 02-2区遺構(1)
攪乱層除去面 第1面 第1面井戸287上部遺物出土状況
第1面井戸287井戸側断ち割り状況
- 写真図版18 02-2区遺構(2)
第2面 第2面土坑350遺物出土状況
第2面ピット322 第2面ピット330
- 写真図版19 02-2区遺構(3)
第3面 第3層中杭群371西部 第3層中杭群371北部
調査終了面 深掘りトレンチ断面
- 写真図版20 02-2区遺物(1)
第1面井戸287出土土器 第1面土坑67出土土器 第1層出土遺物
- 写真図版21 02-2区遺物(2)
第2面土坑350出土土器 第2面落ち込み340出土土器
第2面溝353出土土器 第2層出土土器
- 写真図版22 02-2区遺物(3)
第3層〔第3面~T.P.+6.0m〕出土遺物
- 写真図版23 02-2区遺物(4)
第3層〔T.P.+6.0~4.6m〕出土遺物(1)
- 写真図版24 02-2区遺物(5)
第3層〔T.P.+6.0~4.6m〕出土遺物(2)
第3層〔T.P.+4.6~3.6m〕出土土器

第4章 02-3区の調査成果 関係

- 写真図版25 02-3区遺構(1)
第1面 第2面
- 写真図版26 02-3区遺構(2)
第3面 第3面溝735他 第3面井戸732断面
- 写真図版27 02-3区遺構(3)
第4面 第4面土器溜り663 第4面土器溜り802

- 写真図版28 02-3区遺構(4)
第⑥・⑦層枕列出土状況 第⑥・⑦層枕列内土器出土状況
- 写真図版29 02-3区遺物(1)
第1面溝601出土土器 第1面溝602最下層出土瓦
第1面溝604最下層出土土器 第2層出土遺物
- 写真図版30 02-3区遺物(2)
第3面井戸732出土土器 第3面井戸731出土土器 第3面土坑740出土土器
- 写真図版31 02-3区遺物(3)
第3層出土遺物 第4面土器溜り663出土土器
- 写真図版32 02-3区遺物(4)
第4面土器溜り802出土土器 第4面土坑887出土土器
第5層〔上層〕出土土器(1)
- 写真図版33 02-3区遺物(5)
第5層〔上層〕出土土器(2)
- 写真図版34 02-3区遺物(6)
第5層〔下層〕出土遺物(1)
- 写真図版35 02-3区遺物(7)
第5層〔下層〕出土遺物(2)
- 写真図版36 02-3区遺物(8)
第5層〔下層〕出土遺物(3) 第5層出土木器

第5章 02-4区の調査成果 関係

- 写真図版37 02-4区遺構(1)
攪乱層除去面 第1面 第2面 第3面 第4面 第5面
- 写真図版38 02-4区遺構(2)
第6面 第7面 第7面落ち込み4007断面
第7面落ち込み4007サンプリング状況 東辺断面北半第0~4層
東辺断面南半第0~4層 東辺断面北半第5~7層 東辺断面南半第5~7層
- 写真図版39 02-4区遺物
第7面落ち込み4007出土遺物

第6章 02-5区の調査成果 関係

- 写真図版40 02-5区遺構(1)
攪乱層除去面 第1面 第2面
- 写真図版41 02-5区遺構(2)
第3面 第4面

- 写真図版42 02-5区遺構(3)
第5面 第5面土坑5034・溝5035
- 写真図版43 02-5区遺構(4)
第6面 第6面ピット5042 第6層土器(5027・5028)出土状況
第7面 北辺断面
- 写真図版44 02-5区遺物
第1層出土泥面子 第4面土坑5031出土土器 第6面ピット5042出土土器
第6層出土土器 第7層出土土器

第7章 02-6区の調査成果 関係

- 写真図版45 02-6区遺構(1)
第1面 第1面井戸825
- 写真図版46 02-6区遺構(2)
第2面 第2面西半部 第3面自然河川963内遺物出土状況
- 写真図版47 02-6区遺構(3)
第3面自然河川963 第3面自然河川963内土師器出土状況
- 写真図版48 02-6区遺構(4)
井戸971 第4面 第4面畦畔969・970 第1面検出井戸825最下部
- 写真図版49 02-6区遺物(1)
第1面井戸825出土土器 第1面土坑826出土土器
第2面自然流路827西出土土器 第3面自然河川963〔西肩部〕出土土器
- 写真図版50 02-6区遺物(2)
第3面自然河川963〔流路部〕出土土器

第8章 小阪合遺跡(第2次)発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析 関係

- 分析写真図版1 珪藻化石214
- 分析写真図版2 花粉化石215
- 分析写真図版3 植物珪酸体216

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯と経過

小阪合（こさかあい）遺跡は大阪府八尾市若草町、小阪合町1・2丁目、青山町1～5丁目、南小阪合町2・4丁目、山本町南7・8丁目に広がる。センター調査地はその北西部の若草町地内に位置する（図1・2）。

八尾市域は、江戸時代を通じて商品作物としての綿・業種生産で高い収益を上げた農村であった。明治時代以降、軽工業や宅地開発が伸展し、1948年八尾は大阪府下14番目の市となった。その頃から、近鉄八尾駅と山本駅との中間地点にあたる当遺跡周辺でも団地などの建設が本格化してきた。

小阪合遺跡では、1955年に大阪府住宅供給公社山本団地建設の際土器が出土して以来、八尾市文化財研究会、市教委、府教委によって数10次にわたる発掘調査が実施され、弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが判明している。

（財）大阪府文化財センター（2002年3月までは（財）大阪府文化財調査研究センター）は、都市基盤整備公団八尾団地の建替えに伴い、小阪合遺跡を2次にわたって発掘調査している。

第1次調査〔大阪府文化財調査研究センターが1998（平成10）年度に実施：調査区は98-1～7区〕

第1次調査地は、遺跡範囲の北西端、1956～57年に建設された2階建ての公団住宅が13棟建っていた範囲である。公団は、1995年9月に建替えのための折衝を開始し、1997年に建物を解体。発掘調査着手直前には、住宅の基礎などを重機により現地盤から約1m除去してあった。

対象面積6135㎡を7区に分割し、そのうち98-7区で6面、その他の区では2～4面を調査した。

検出遺構は、溝179条、竪穴住居2軒、井戸31基、土坑86基、ピット621個、掘立柱建物4棟、水田18枚、川4条、落ち込み8ヶ所、計953ヶ所であった。

出土遺物は、古代の土器をはじめ、瓦、石製品、和同開珎61枚をはじめとする皇朝銭70枚など約450コンテナ、破片総数124034点。その内訳は、土師器約64%、須恵器23%、弥生土器6%、瓦器2%、製塩土器1%、黒色土器1%ほかである。（駒井正明編2000『八尾市若草町所在 小阪合遺跡 都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集；以下「第1次報告書」と略称する）。

2004年現在、第1次調査範囲には9～12階建ての公団住宅が3棟（計262戸）建っている。

第2次調査〔大阪府文化財センターが2002（平成14）年度に実施：調査区は02-1～6区〕

第2次調査地は第1次調査範囲の南側にあたる。5階および2階建ての公団住宅、汚水処理場、集会所、公園などとして利用されていた部分である。

最終面の面積3270㎡（地表面では約4800㎡）を6分割し、02-1～6区で3～8面を調査した。

検出遺構は、約1020ヶ所。出土遺物は、平安時代および古墳時代初頭の土器など200コンテナ弱、66673点。遺構数は第1次調査とほぼ同じだが、出土遺物点数は約54%である。遺物の比率を示すと、土師器約63%、須恵器14%、弥生土器12%、瓦器5%、瓦2%、黒色土器0.5%ほかとなっている。

なお、地理的・歴史的環境については「第1次報告書」3～12頁の「第2章 位置と環境」を参照されたい。



図1 調査地位置

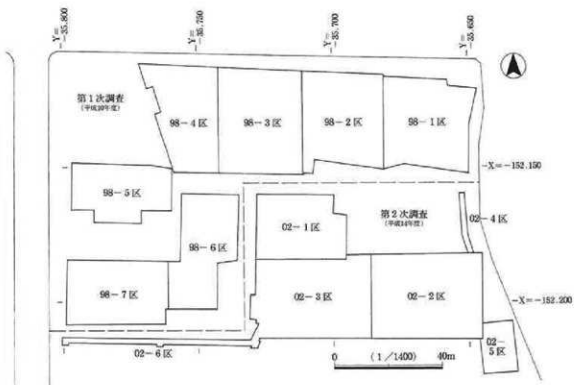


図2 調査区配置

第2節 調査・整理の方法

調査区の位置 (財)大阪府文化財センターの小阪合遺跡第1・2次調査地は、遺跡範囲内の北西部、八尾市若草町に位置する(図1)。

調査区の呼称 「小阪合遺跡」の後の「02」は第2次調査を行った2002(平成14)年度の下2桁、その後の「-1~6」はその1~6区を表す。同様に、1998(平成10)年度に実施した第1次調査の調査区名は「98-1~7区」である(図2)。

地区割り 当センターの前身のひとつである(財)大阪文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』(1988年)に定められた方法で地区割りを行った。国土座標軸(第VI座標系)を基準とし、調査対象地に5mメッシュをかける方法である。以下、その手順を述べる。

地区割りの基本は1/10000地形図である。大阪府下全域を南北6kmごとにA~O、東西8kmごとに0~8に分割する(第I区画)。第I区画を縦横各4分割、すなわち16等分したものが1/2500地形図(都市計画図)の範囲で、東西2km、南北1.5kmの区画となる(第II区画)。第II区画内を1辺100mの正方形に区画する(第III区画)。第III区画内を1辺10mの正方形に区画する(第IV区画)。第IV区画内を1辺5mの正方形に区画する(第V区画)。この第V区画が遺物取り上げのグリッドになる。

ただし、小阪合遺跡第2次調査を行った2002(平成14)年度は、使用測地系が「日本測地系(改正前)」から「世界測地系(測地成果2000)」への切り替え時期に当たり、それに伴い地区割りも含めて「遺跡調査基本マニュアル」の改定作業も進められていた。そのため、調査中は第V区画(5m四方)の具体的な命名基準が確定していなかった。そこで、第V区画には第2次調査限りの任意の名称を付けた。02-1・2・4・5区の具体的な地区割りは、当該区の頁(02-1区:16頁、02-2区:62頁、02-4区:133頁、02-5区:143頁)に掲載している。

方位 地区割り同様に国土座標に則り、座標北を採用した。第2次調査を実施した2002(平成14)年度では遺跡周辺の座標北は、磁北より東へ6°21'、真北より西へ13'振れていた。

高さ 東京湾平均海水位(T.P.)を適用した。T.P.と大阪湾最低潮位(O.P.)とは、T.P.+0.0m=O.P.+1.3mの関係にある。

なお、測地系の切り替えに伴い高さの基準も変更された。小阪合遺跡の調査に使用した水準点のひとつは、第1次調査時の「日本測地系(改正前)」ではT.P.+8.939mであったが、第2次調査時の「世界測地系(測地成果2000)」ではT.P.+8.9125mとなり、その差は26.5mmである。

面と層の呼称法 人力による調査の開始される面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様である。なお、ここでいう算用数字の「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、ある面と次の面との間の堆積は土層観察の結果○付き数字の土層に細分されることがある。

ただし、この面と層の番号は各調査区ごとに付けたため、たとえば同じ「第3面」でも調査区が違えば異なる面を指すことになった。そこで、第3節のように、第1次調査を基準とし、各調査区を通観し、ローマ数字の遺構面番号に整理しなおした。

遺構番号 当センターのもうひとつの前身である(財)大阪府埋蔵文化財協会の『発掘調査規定』(1985年)に則り、第2次調査でも02-1・2・3・6区については調査区や遺構の種類に関わらず通し番号(1~971)とした。ただし、02-4区(4001~4007)と02-5区(5001~5042)では、調査区内で遺構

種類に関わらず通し番号とした。

調査現場で付した遺構番号1～971を調査区と検出面ごとに具体的に示すと、02-1区第1面(1～47・266・267)、02-2区第1面(48～78・287)、02-1区第2面(79～265・268～286)、02-2区第2面(288～357)、02-1区第3面(358～370・372～466・544～600)、02-2区第3層中(371)、02-1区第4面(467～536)、02-1区第5面(537～543)、02-3区第1面(601～607)、02-3区第2面(608～662)、02-3区第3面(663～816)、02-3区第4面(829～924・945～955)、02-6区第1面(817～828・925～944)、02-6区第2面(956～963)、02-6区第3面(964～966・971)、02-6区第4面(967～970)となる。その他に遺構番号を付けなかった水田などもある。なお、調査後の検討により遺構の所属面を変更した場合がある。

遺物の取り上げ 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごと平面的には国土座標の5×5mの区画(第V区画)ごとに取り上げ、さらに必要に応じて出土位置を3次元で記録した。遺物登録番号は取り上げ単位ごとに付した。

図面作成 各区の調査区全体図は、クレーン測量、平板測量、または地区杭を基準とした測量で縮尺1/50ないし1/100で作成した。土層断面図は縮尺1/20に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況などは任意に図化した。

各種分析 花粉分析・珪藻分析・植物部珪酸体の分析を委託し、その成果を第8章に掲載した。

遺物整理 調査現場で登録と洗浄を完了し、注記も行った。登録番号ごとに分類と集計を行った後、報告書掲載のものを優先して復元、実測、写真撮影などを進めた。

遺物の編年観 土器をはじめとする遺物の年代は、一般的な年代観に従った。なお、主要遺物の編年や用語については、主に次の文献を参考とした。

弥生土器：寺沢 薫・森井真直1989「各地域の様式編年 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

古式土器：原田昌樹1993「久宝寺遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告37(財)八尾市文化財調査研究会

西村歩1996「和泉北部の古式土器と地域社会」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集

古墳時代の土器：辻美紀1999「古墳時代中・後期の土器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

須惠器：田辺昭三1966「陶器古類群Ⅰ」平安学園考古学クラブ

中村浩1978「和泉陶器出土遺物の時期編年」『陶器Ⅱ』大阪府教育委員会

古代の土器：古代の土器研究会編1992～1998「古代の土器1～5」古代の土器研究会

平安時代の土器：佐藤隆1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』(財)大阪市文化財協会

平安～室町時代の土器：小森俊寛・上村志幸1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号

(財)京都市埋蔵文化財研究所

瓦器類：尾上実1983「南河内の瓦器類」『藤澤一夫先生古稀記念 古分化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論文集刊行会

中世の土器類：中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真跡社

第3節 各調査区の対応関係

小阪合遺跡第1次調査の面積は約6700㎡。排土や通路の関係上、調査区を約1000㎡ごとに7分割した。調査範囲北東端の98-1区と北西端の98-5区から着手し、その後およそ98-2区→98-4区→98-6区→98-3区→98-7区と調査を進め、各区ごとに上から順に調査面番号を算用数字で付けていった。離れた区の調査を同時に進めたため各区の面の対応は必ずしも明確ではなかったが、調査担当者2名で日常的に協議し、ローマ数字の第Ⅰ～Ⅶ面に統一して整理・報告した。

第2次調査では、矢板打設や建設工事との関係から、おおむね02-1区→02-2区→02-5区→02-4区→02-3区→02-6区と調査し、各区ごとに上から順に調査面番号を算用数字で付けた。しかし、諸般の事情から調査中には遺構面の整合には至らなかった。

そこで、本節では第1次調査での第Ⅰ～Ⅶ面を基本として、第2次調査の調査面の対応関係を地層・レベル・出土遺物(時期)・遺構配置などを根拠として整理する。結論は表1・図3～7(第Ⅰ～Ⅶ面全体図)に示す通りで、その検討過程を以下略述する。

(1) 第Ⅴ面以下の対応関係

まず、判別できるのは、第Ⅴ面(「小阪合分流路跡」の上面)である。西から順に、02-6区第3面、02-3区第5面、02-1区第5面、02-2区第3面、02-4区第7面、02-5区第7面が、砂層(流路充填堆積物)上面という「地層」、相当の起伏はあるがT.P.+6m台の「レベル」、砂層に含まれる古式土師器という「出土遺物」から第1次調査の第Ⅴ面に該当する。

大半の調査区では、この第Ⅴ面の基盤層となる砂層(第Ⅴ層)の途中で掘削限界深度に達している。

第Ⅵ面は、第Ⅴ層(小阪合分流路跡の流路充填堆積物)の下面である。98-2区ではT.P.+2.6mで流路底を、98-6区と02-6区では流路の西肩から底にいたる斜面を検出した。

第Ⅶ面以下は、調査区西部の98-7区と02-6区でのみ調査した。02-6区の第4面は、黒色土壌化層という「地層」、水田畦畔の「遺構配置」、T.P.+6.5～6.7mの「レベル」の一致から98-7区第Ⅶ面と同一であり、このベース面である02-6区第5面も98-7区第Ⅶ面に相当する。

さらに下層は、第1次調査では、98-7区の下層確認においてT.P.+3.5mで黒色土壌化層を認めている。第2次調査では、02-6区で掘削限界のT.P.+4.1mまでに第6～8面を調査した。

(2) 98-7区と02-6区の対応関係

調査範囲南西部の98-7区第Ⅱ・Ⅲ面と02-6区第1・2面とは、面の「レベル」が近似し、「出土遺物」も平安時代を主体とする。さらに、この両区にみられる南北方向の水路(溝、川、自然流路)の「遺構配置」をみると、98-7区第Ⅱ面溝569と02-6区第1面自然流路827東、98-7区第Ⅲ川719と02-6区第2面自然流路827西、がそれぞれつながる。また、98-7区第Ⅴ面・02-6区第3面とも「小阪合分流路」の西肩部にあっている。

以上の諸点から、98-7区第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ面と02-6区第1・2・3面はそれぞれ対応する。

(3) 98-1区と02-4区の対応関係

一方、調査範囲東部では、先述のように98-1区第Ⅴ面と02-4区第7面とは、「地層」および「レベ

ル」から、同一面と考えられる。いずれも基盤となる砂層からは古式土師器が主体となって出土している。ただし、98-1区第V面の井戸196~198では古墳時代前期の土師器などが出土しているのに対し、02-4区第7面の落ち込み4007出土遺物は平安時代後半の土器類であって、時期が異なる。

その上層では、98-1区第Ⅲ層と02-4区第3層が橙7.5Y R 6 / 8細砂~シルトと褐色7.5Y R 4 / 4シルトという「地層」と、およそT.P.+6.7m「レベル」から、同一層の可能性が高い。同様の観点で、98-1区第Ⅳ層と02-4区第4層が対応する。

以上から、98-1区第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ面と02-4区の第3・4・7面はそれぞれ対応すると考える。なお、02-4区第5・6面は平安時代の面と考えられるが、98-1区では検出していない。

(4) 第Ⅲ面の問題

第1次調査では、発掘調査以前に既設の住宅を撤去し、T.P.+7.3mより上層を重機で除去してあった。そのため、調査範囲西部の98-5・7区の一部では、発掘調査着手時に第Ⅰ面が露出していた。

一方、調査範囲中~東部にあたる98-5区東半部および98-1・2・3・4・6区では、第Ⅰ・Ⅱ面はすでに削平されていた。T.P.+7.3mで輪郭が露出している遺構もあったので、断面を検討した上でそれに対応する面を第Ⅲ面として記録した。そのレベルはT.P.+6.7~7.3mだが、上層から掘り込まれたものも含めて、結果的に古墳時代から近世までの幅広い年代の遺構を検出することになった。

第2次調査での成果を勘案すると、第Ⅲ面とした面は本来は古墳時代中期~平安時代前半、第Ⅱ面は平安時代、第Ⅰ面は平安時代あるいはそれ以降の遺構面だと考えられる。

(5) 02-1・2・3区の対応関係

調査範囲中央~南東部の02-1・2・3区では、「地層」の対比にやや困難がある。「レベル」・「出土遺物」からみると、02-1区第2・3面、02-2区第1・2面、02-3区第2・3面は、いずれもT.P.+7.0~7.3m程度の平安時代の遺構面である。さらに、土坑・ピット・溝などの「遺構配置」に着目して、これらを第Ⅰ~Ⅲ面に相当させる。

02-1区第1面と02-3区第1面は、第1次調査の機械掘削停止面(T.P.+7.3m)より20~30cm高い「レベル」、平安~鎌倉時代という「出土遺物」、幅広い溝が卓越する「遺構配置」から、第Ⅰ面よりもさらに新しい時期の面と考えたい。

(6) 02-5区の対応関係

02-5区は調査範囲の南東隅に位置する。隣接する02-2区第3面と02-5区第7面が「地層」・「レベル」・「出土遺物」から第Ⅴ面に相当する。しかし、02-2区の南部が公団住宅の基礎で大幅に攪乱されているので、その上層の直接対比は難しい。

02-2区第1・2面とも平安時代の面で、東部(02-5区寄り)のおおよそのレベルは、第1面(第Ⅰ面相当)がT.P.+7.0m、第2面(第Ⅱ・Ⅲ面相当)がT.P.+6.9mである。02-5区北西部(02-2区寄り)では、第7層の砂層が盛り上がっている影響で第6層が第3面とほぼ同じT.P.+7.0mまで高くなり、第4・5・6面は東に傾斜している。「出土遺物」からみて第5面が室町時代中頃に位置付けられ、第4面以上はさらに時期が下る。したがって、平安時代後半の第6面が第Ⅰ~Ⅱ面に相当する可能性が高い。

表1 小阪合遺跡(第1・2次)遺構面の対照

第1次調査		第2次調査					
98-1~7区		02-6区	02-3区	02-1区	02-2区	02-4区	02-5区
中世	第1面(平安)	第1面(平安) 7.2m	第1面(平安以降) 西7.5m 東7.2m	第1面(平安以降) 7.6m	第1面(平安) 7.0~7.3m	第1面(中世) 7.2m	第5面(室町中頃) 6.9~7.2m
	第2面(平安) 7.0~7.6m		第2面(平安後半) 7.1m	第2面(平安) 北7.3m 南7.1m			第2面(平安以降) 7.0~7.3m
第3面(平安) 6.9~7.3m	第3面(平安) 7.0m	第3面(平安) 7.0m	第3面(奈良) ~平安) 7.1m	第3面(奈良) ~平安) 7.1m	第2面(平安) 6.9m	第3面(平安後半) 6.7m	
第4面(古墳中期~平安) 西7.3m 東6.9m							
第5面(分注路上面) 陸6.8m 川5.9~7.2m	第3面(古墳前期) 6.8m	第5面 6.4~6.9m	第4面(古墳中期) 6.9m	第5面 6.5~7.0m	第3面 6.3~6.7m	第4面(平安) 6.5m	第7面(平安後半) 6.2~6.7m
第6面(分注路底)							
第4面(弥生水田) 6.5~6.7m	第4面(弥生水田) 6.6m	第4面(弥生水田) 6.6m	第4面(弥生水田) 6.6m	第4面(弥生水田) 6.6m	第4面(弥生水田) 6.6m	第4面(弥生水田) 6.6m	第4面(弥生水田) 6.6m
第5面(木田<←ス)	第5面(弥生水田) 6.5m	第5面(弥生水田) 6.5m	第5面(弥生水田) 6.5m	第5面(弥生水田) 6.5m	第5面(弥生水田) 6.5m	第5面(弥生水田) 6.5m	第5面(弥生水田) 6.5m
黒色土壌化層上面	第6面 6.3m	第6面 6.3m	第6面 6.3m	第6面 6.3m	第6面 6.3m	第6面 6.3m	第6面 6.3m
	第7面 5.3~5.7m	第7面 5.3~5.7m	第7面 5.3~5.7m	第7面 5.3~5.7m	第7面 5.3~5.7m	第7面 5.3~5.7m	第7面 5.3~5.7m
黒色土壌化層上面	第8面 西4.8m 東5.2m	第8面 西4.8m 東5.2m	第8面 西4.8m 東5.2m	第8面 西4.8m 東5.2m	第8面 西4.8m 東5.2m	第8面 西4.8m 東5.2m	第8面 西4.8m 東5.2m
掘削境界	4.1m	4.1m	3.6m	5.3m	3.6m	5.1m	6.2m

※ 表中の数字は標高(T.P.+)

※ ほぼ確實な対応はゴチツク体、やや不確定な部分は明朝体で表示

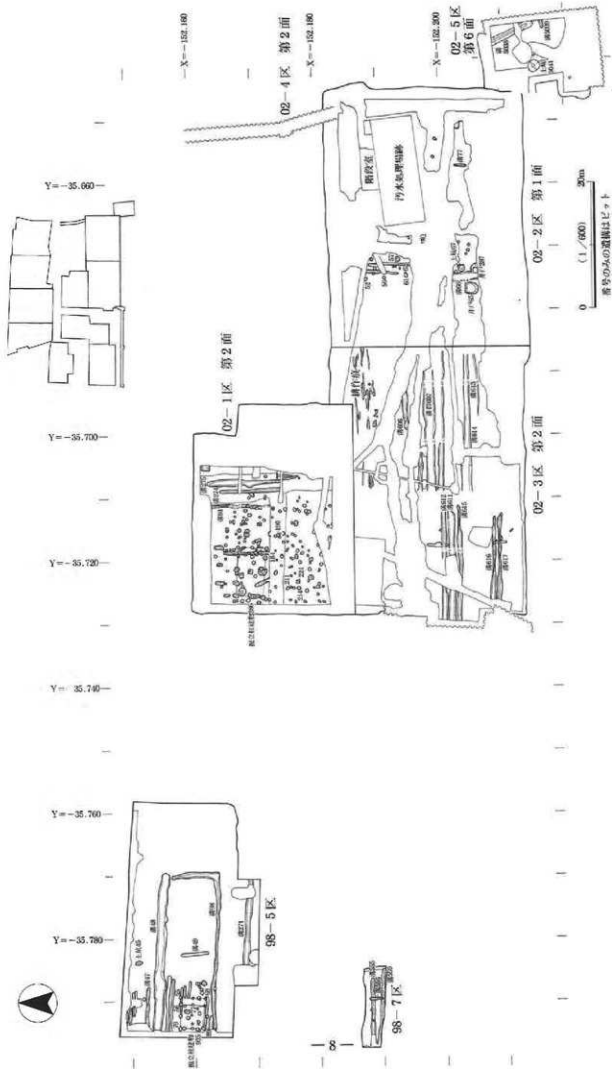


図3 第1面全体図

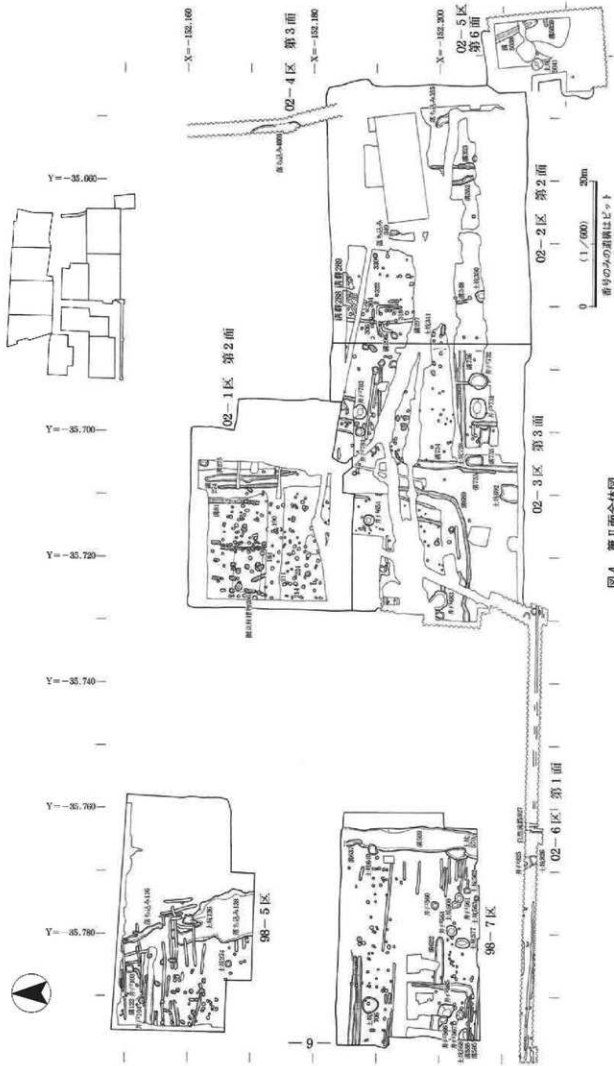


図4 第II面全体図

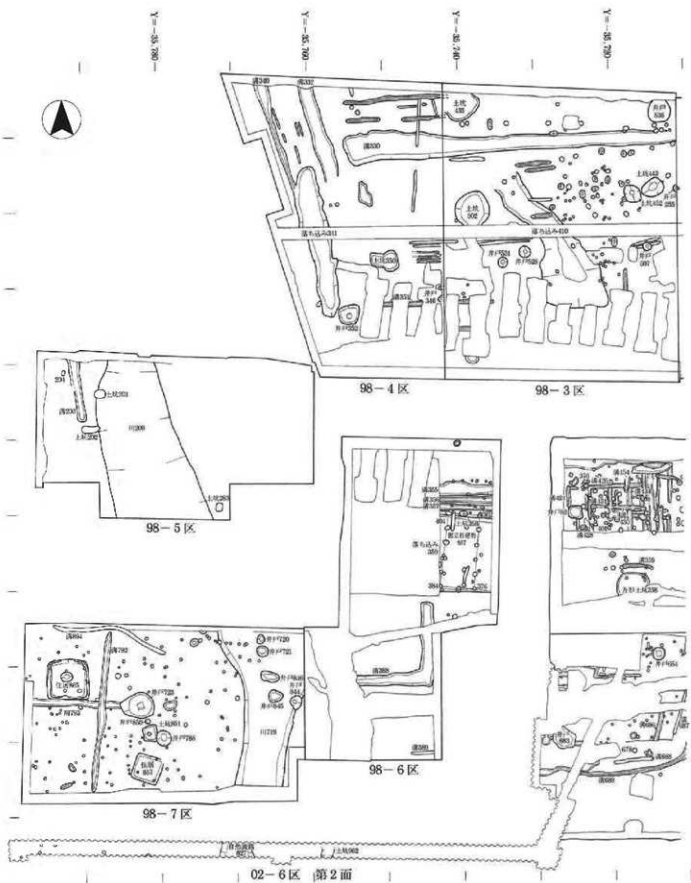
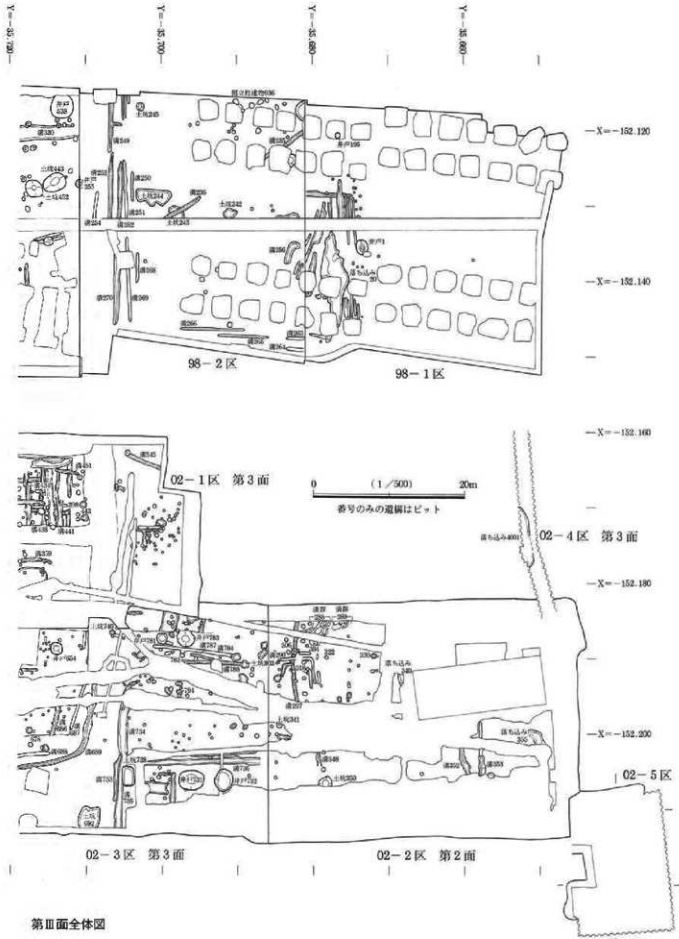


図5



第Ⅲ面全体図

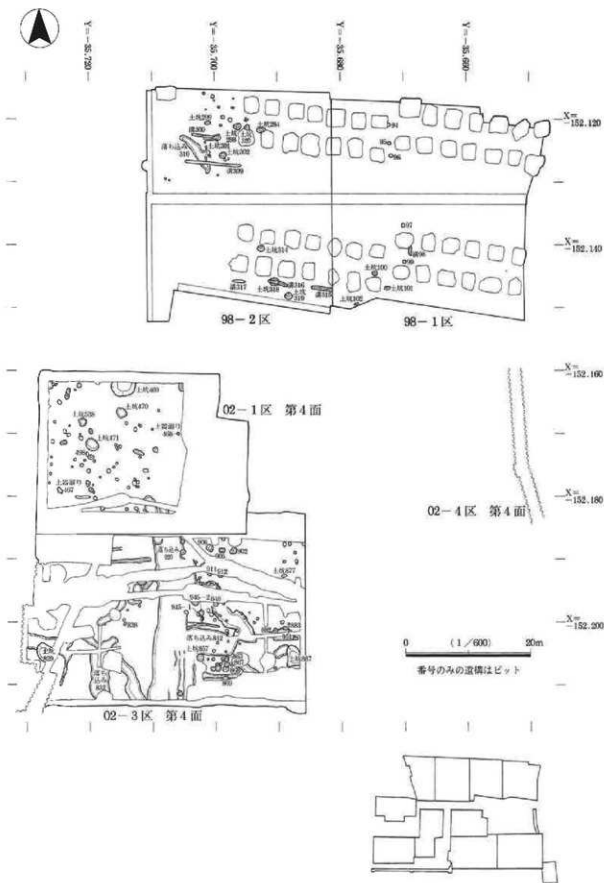


図6 第IV面全体図

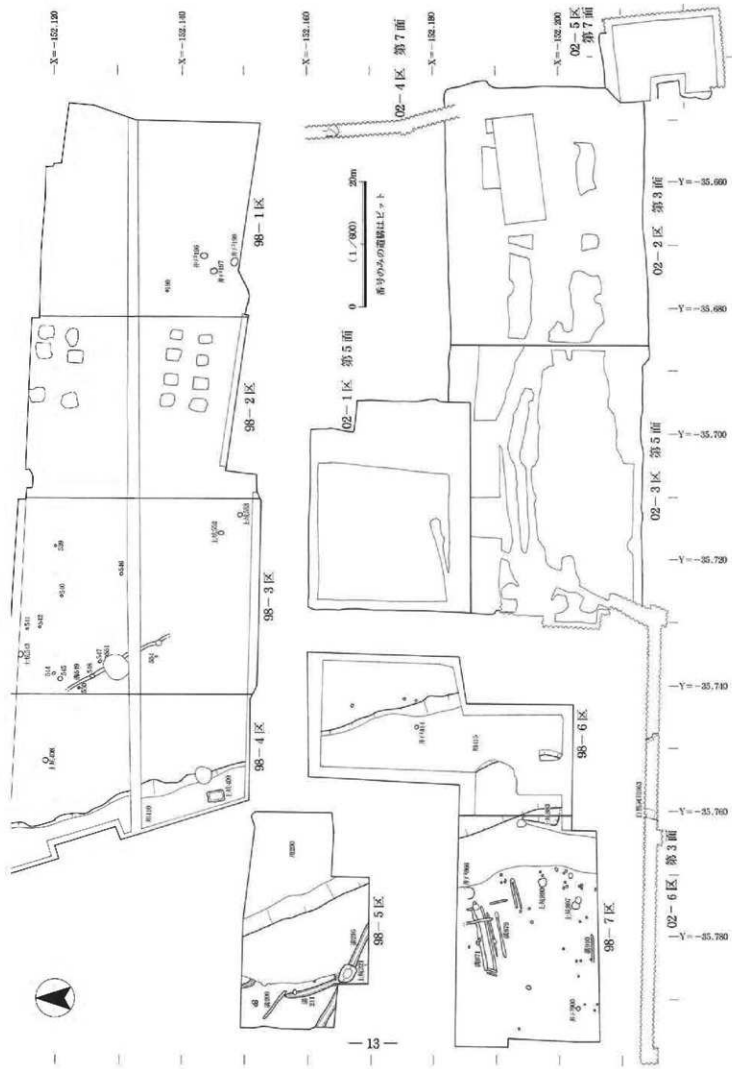


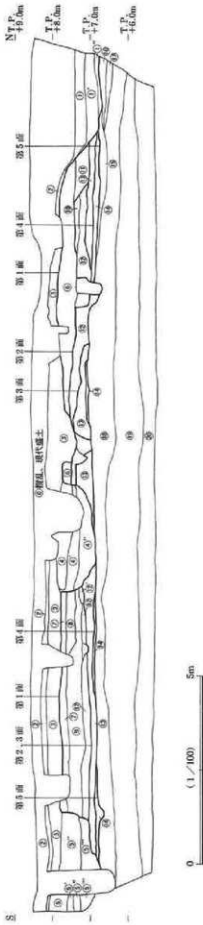
図7 開発区域図

第2章 02-1区の調査成果

第1節 層序

擾乱層 調査着手時において調査区全体を覆う土層である。昭和30年代の公団住宅建設時およびそれ以降最近までの盛土、擾乱土である。コンクリートやアスファルト塊、瓦礫、塩ビ管片等を含む。

- ①～①' 当区北端に沿って東西方向に検出された現代擾乱溝の埋土である。
- ② 昭和30年代の公団住宅建設直前の耕作土層。畝が観察された。
- ③ ②の下にあるにぶい黄褐色(10YR 6/4)シルト。旧耕作土とともに存在するもので、したがってそれに伴う土層であろう。これを除去した面を第1面とした。
- ④～④'・⑤～⑤' 第1面で検出した二条の大溝の埋土。おおむね黄褐色(10YR 5/4)～褐色(10YR 4/1)を呈し、一部黒褐色(10YR 3/2)である。二条とも埋土上層が砂ないしシルトで、下層が粘質土となる。
- ⑦・⑧・⑨ 当区南半部で第1面より下にある土層で、にぶい黄褐色(10YR 6/3)～灰色(7.5Y 6/1)シルト。この層のために下記の包含層の厚さが南半部においては薄くなっている。従って包含層を削平した遺構の埋土となる可能性のある土層である。
- ⑩・⑪・⑫ 当区に広く堆積する遺物包含層で、黒褐色(10YR 3/1)～褐色(7.5YR 6/1)を呈し、奈良～平安時代の遺物を大量に含む。その層厚は北半部では0.4～0.7m前後で、最大0.9mとなり、⑩と⑫の上下二層に分けることができた。⑩はそれに挟まるブロック層である。南半部では上記のように削平された可能性があり、当区西側断面で⑫が0.1～0.2mの厚さで残存していた。北半部で⑩および南半部で⑫を除去した面を第2面とした。そして次に北半部で⑫を除去し及び南半部で第2面を再精査した面を第3面とした。従って南半部において第2面と第3面とは同一面である。第3面のレベルはT.P.+7.05～7.15mを測る。
- ⑬ 第3面の基盤層となるにぶい黄褐色(10YR 6/4)シルト層である。古墳および奈良～平安時代の遺物を含むが、量は少ない。これを除去した面で古墳時代の土器溜まりや奈良～平安時代の遺構を検出した。これを第4面とし、そのレベルはT.P.+6.80～6.90mである。
- ⑭ 調査区全体を流れる古墳時代自然河川の最上層で、砂質の強い灰色(7.5Y 6/1)シルトである。川の流れの最終堆積物であろう。これを除去した面はいわゆる遺構面ではないが、旧地形復元のためにコンター図を作成した。
- ⑮～⑰ 古墳時代自然河川の埋土。おおむね粗いにぶい黄褐色(10YR 7/3)礫砂で、このうちの⑮～⑰はシルト・礫砂の互層となる。また部分的にラミナが見られた。設計深度のT.P.+5.3mまで掘削したが、川底には至らなかった。埋土からは、完形を含む古式土師器が多く出土した。



- ① 庄原層IOYB5.2シルト
- ② 瀬原層IOYR6.1シルトなど細砂を多く含む
- ③ 瀬原層IOYR4.1シルト
- ④ 瀬原層IOYR6.1シルト
- ⑤ 庄原層IOYR6.4シルト
- ⑥ 庄原層IOYR7.2砂層間
- ⑦ 庄原層IOYR5.4シルトと
- ⑧ 瀬原層IOYR4.1シルト
- ⑨ 瀬原層IOYR4.1シルト
- ⑩ 庄原層IOYR7.6 厚0.5mm-2mm<5Aの粗砂層
- ⑪ 庄原層IOYR4.2
- ⑫ 庄原層IOYR6.1シルト→瀬原層IOYR7.5V4.1
- ⑬ 庄原層IOYR5.2シルト 厚1cm程度の砂を少量含む

- ⑭ 庄原層IOYR6.3シルト
- ⑮ 庄原層IOYR4.1シルト
- ⑯ 庄原層IOYR6.3シルト
- ⑰ 瀬原層IOYR4.1→瀬原層IOYR3.1シルト
土層片を多く含む
- ⑱ 瀬原層IOYR3.1シルト
- ⑲ 庄原層IOYR6.4シルト
- ⑳ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉑ 瀬原層IOYR4.1シルト
- ㉒ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉓ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉔ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉕ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉖ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉗ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉘ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉙ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉚ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉛ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉜ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉝ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉞ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㉟ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊱ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊲ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊳ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊴ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊵ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊶ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊷ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊸ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊹ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊺ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊻ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊼ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊽ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊾ 庄原層IOYR6.1シルト
- ㊿ 庄原層IOYR6.1シルト

図8 02-1区西辺断面

第2節 第3面より上層の遺構と遺物

小阪倉遺跡02-1区は第1・2次調査範囲の中央部、第2次調査地の北部に位置する。貯水槽設置に伴う調査である。

調査前地盤高はおおよそT.P.+8.2m。攪乱層等を重機で0.4~0.7m除去、T.P.+7.5~7.8 mから調査限界のT.P.+5.3mまで包含層を約2.5m人力掘削し、5つの面で約500カ所の遺構を調査した。

(1) 02-1区機械掘削層・攪乱層の遺物

機械掘削層からは、土師器10片、黒色土器A類(内黒)2片、須恵器2片、瓦器1片、計15片が出土。攪乱層からは、土師器1475片、須恵器187片、瓦器73片、黒色土器A類29片、陶器21片(うち緑軸2片)、磁器13片、瓦質土器8片、瓦6片、製塩土器3片、黒色土器B類(両黒)1片、弥生土器15片、サヌカイトのチップ1点、計1832点が出土した。磁器には現代の日常食器を含む。

これら機械掘削層・攪乱層の遺物の大半は、昭和30年代の公団住宅建設に伴い下層の遺物を巻き上げたものであろう。

(2) 02-1区第0層の遺物(図10)

機械掘削停止面から第1面までの人力掘削層を第0層と呼ぶ。

土師器6113片、須恵器2044片、瓦器523片、黒色土器A類341片、同B類79片、陶器47片、瓦46片、瓦質土器20片、磁器20片、製塩土器20片、弥生土器17片、土鍾1点、サヌカイト剥片1点、焼土塊7点、計9279点が出土した。

図10-1001~1004は土師器。杯(1002:写真図版8)や皿(1001・1003)は平安時代に属する。高杯杯部(1004)の内面には放射状の暗文がみられる。飛鳥時代に属する。1005・1006は緑軸陶器椀。2点とも貼付け輪高台。1007は軒丸瓦片。残りは悪いが、内区に蓮華文、二重に巡る圓線の間に珠文帯がみられる。その他、須恵器・土師器は、平安時代のものが主体を占める。陶器47片のうち23片は緑軸陶器

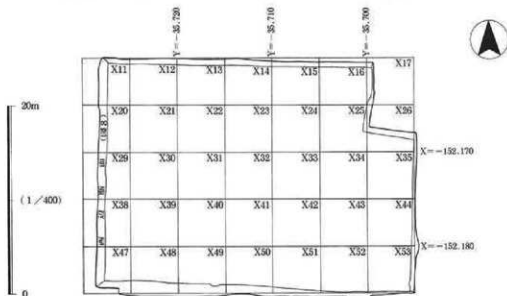


図9 02-1区地区割り

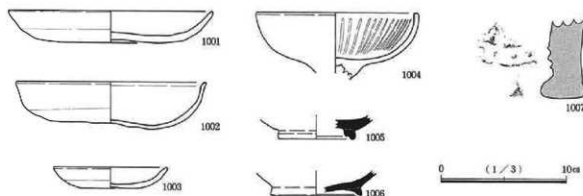


図10 02-1区第0層出土遺物

である。瓦はほとんどが平瓦の小片で、凸面は縄叩き、凹面には布目が見られるものが多い。磁器には、現代の磁器も混入しているが、青磁や白磁が含まれる。

以上の遺物から、02-1区第0層は平安時代以降の包含層と考えられる。

(3) 02-1区第1面(図11・写真図版2)の遺構と遺物

面の高さはT.P.+7.5～7.7 m。溝8条、土坑2基、ピット38個、計48カ所の遺構(番号1～18・20～47・266・267)を調査した。

溝は、基本的に東西あるいは南北の方向に沿う。個々の溝のデータは表2にまとめた。

溝2は、02-1区中央部で東西に伸びる。出土遺物は、土師器453片、須恵器190片、瓦器23片、黒色土器A類17片、瓦6片、黒色土器B類4片、緑釉陶器2片、瓦質土器2片、青磁1片、製塩土器1片、焼土塊1点、計700点。図14-1021(写真図版8)は瓦器皿。1022は土師器碗の底部。貼付け高台である。1023は土師器皿。その他、断面が十角形の高杯脚部等も出土した。以上の出土遺物から、溝2は平安時代後半に位置付けられる。

溝3は、02-1区中央部で南北に伸び、溝2とつながる。出土遺物は、土師器234片、須恵器181片、瓦器20片、黒色土器A類8片、瓦6片、瓦質土器3片、黒色土器B類1片、計453片。図14-1024～1029(1026は除く)は須恵器。平安時代前半頃の杯底部(1024)や鉢(1025)、古墳時代中期の杯(あるいは

表2 02-1区第1面の溝一覧

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			堀土 (全てシルト)	出土遺物						時期	
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒A	土師	須恵	その他		合計
1	X11～X15	東西	17.8	(161～221)	64	灰黄褐色10YR5/2		1	1	26	23	磁器1, 陶器1	53	平安後半
2	X29～X32	東西	17.5	274～312	62	にぶい黄褐色10YR5/4 楊灰10YR4/11ほか	23	2	4	17	453	110 磁器2, 陶器1 瓦6, 製塩1 焼土塊1	700	平安後半
3	X15, 他	北	(21.3)	296～406	46	にぶい黄褐色10YR7/3	20	3	1	8	234	181 瓦6	453	平安後半
4	X47～X51	東西	(18.3)	(26～69)	12	黒褐色10YR4/1ほか	8	1	3	2	57	18 瓦1, 焼土塊1	91	平安後半
5	X22～X23	西北西	(3.7)	44～61	5	暗灰黄2.5Y5/2					10	3	13	古代
6	X29～X32	東西	12.3	57～90	9	暗灰黄2.5Y5/2	2	2	8	90	16	陶器2	120	平安後半
7	X38～X42	東西	(17.9)	43～83	13	暗灰黄2.5Y4/2			3	2	126	25 陶器1, 瓦2	156	平安中頃
8	X42～X51	北	(7.6)	22～35	17	暗灰黄2.5Y4/2	3	1	3	19	26	瓦1	53	平安後半

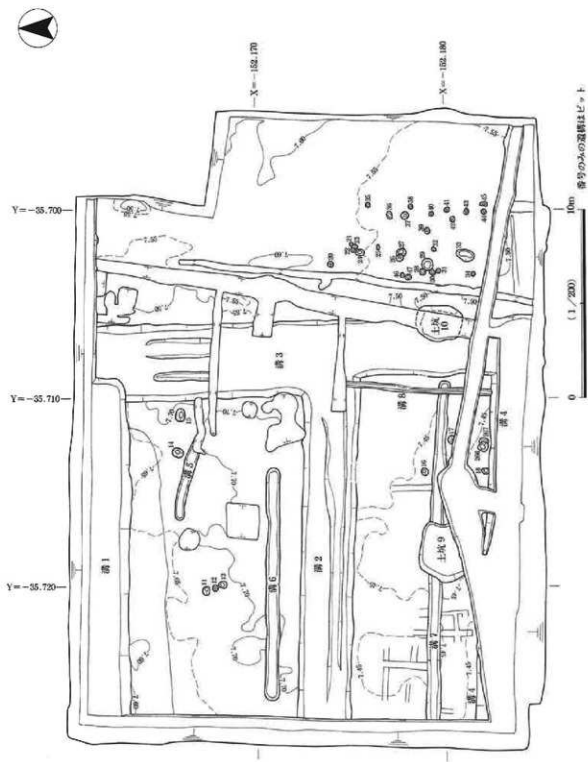


図11 02-1区第1面

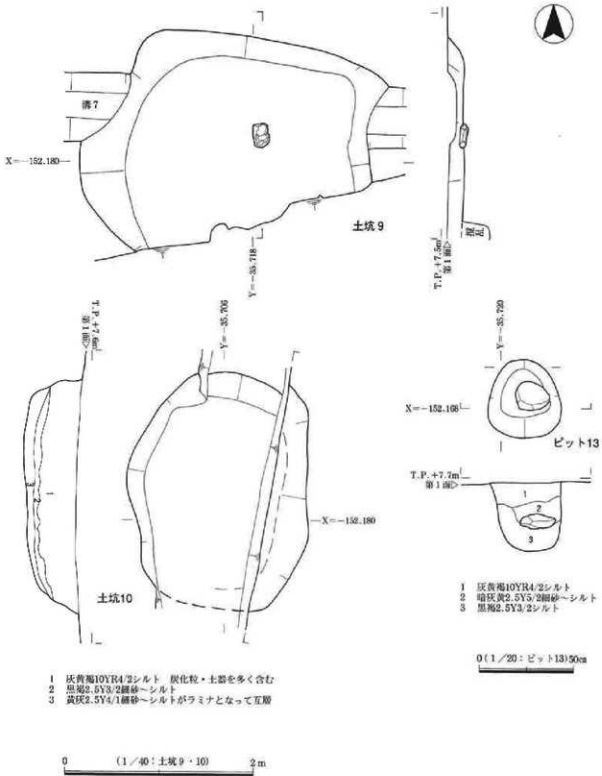


図12 02-1区第1面土坑9・10、ピット13

高杯（1027）と有蓋高杯（1028）、鉢底部（1029）もある。1026は土師器瓶。以上、図化できた土器類は古墳時代～平安時代初頭のものが多いが、遺物組成から溝3は平安時代後半に位置付けられる。

溝4は、調査区南部で、その北側を検出した。土師器57片、須恵器18片、瓦器8片、黒色土器B類3片、同A類2片、瓦1片、瓦質土器1片、焼土塊1点、計91点が出土した。1030は奈良時代後半頃の土師器杯。ただし、土器組成からみて、溝4は平安時代後半の所産であろう。

土坑9（図12：写真図版2）は02-1区南部に位置する。溝7に切られている。東西3.1m、南は埋設管に攪乱されており現存で南北2.3m、平面不整形と推定する。検出面からの深さは18cm。

出土遺物は、土師器325片、須恵器28片、黒色土器A類10片、瓦3片、黒色土器B類1片、緑釉陶器1片、焼土塊11点、計379点である。図13-1008～1017は土師器。碗（1008・1009）、皿（1010～1013）、羽釜（1014）、壺（1015～1017）ほかがある。1018は須恵器壺の口頸部。1019の須恵器壺の底部は糸切り。1020は円盤状高台の緑釉陶器碗。素地は軟質で、淡黄灰色を呈する。緑釉はほとんど剥落している。以

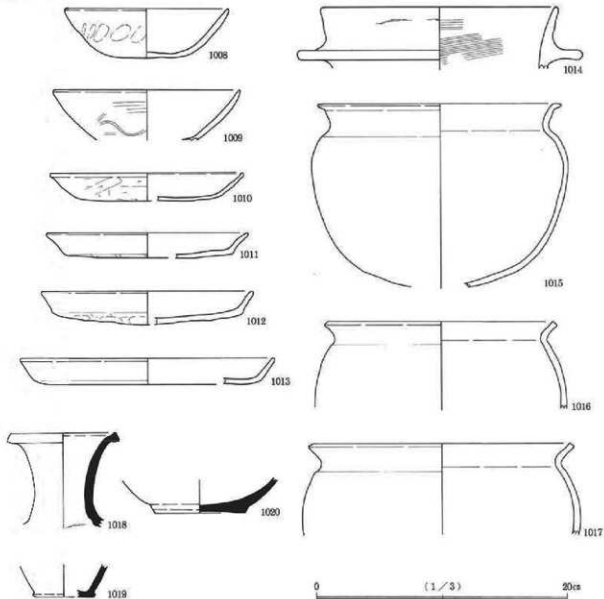
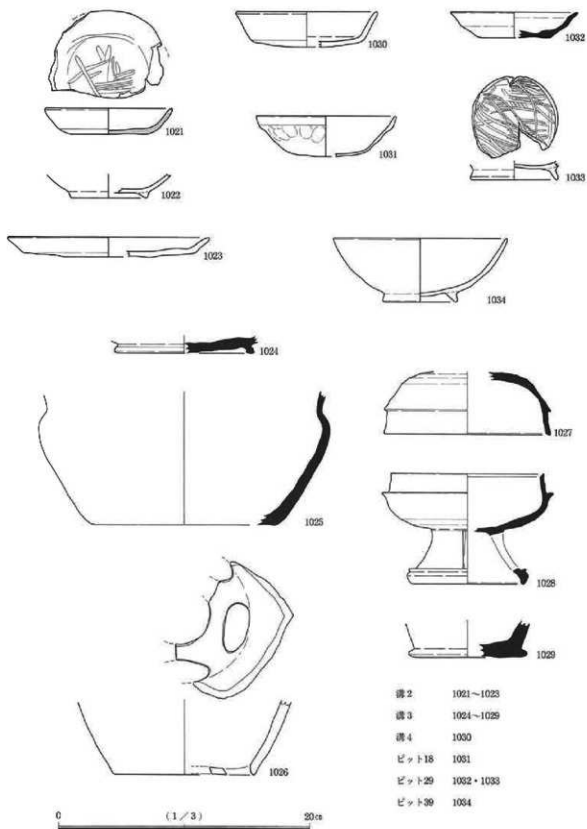


図13 02-1区第1面土坑9出土土器



- | | |
|-------|-----------|
| 溝2 | 1021~1023 |
| 溝3 | 1024~1025 |
| 溝4 | 1030 |
| ビット18 | 1031 |
| ビット29 | 1032・1033 |
| ビット39 | 1034 |

図14 02-1区第1面溝2・3・4、ビット18・29・39出土土器

表3 02-1区第1面の土坑・ピット一覧

	グッド	平面形	主軸 方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						時期		
				長さ cm	短径 cm	深さ cm		瓦 器	瓦 質	黒 B	黒 A	土 師	須 恵		その他	合 計
土坑9	X40, 他	不整形	東西	309	(203)	18	黒10YR2/1			1	10	325	28	陶器1 瓦3 焼土塊11	379	平安前半
土坑10	X42, 他	不整形	北	242	190	63	団12		5	15	16	234	39	陶器2 弥生3	314	平安後半
ピット11	X21	楕円	東西	45	30	25	にぶい黄褐10YR4/3炭化した小粒を含む			2	2	23			27	古代
ピット12	X21	楕円	東西	29	23	11	灰黄褐10YR5/2					5		焼土塊1	6	古代
ピット13	X22	楕円	北	38	32	37	団12			1	5	57		石1	64	平安中頃
ピット14	X23	楕円	北北東	56	44	41	灰黄褐10YR5/2			3	19	19		陶器1	32	平安前半
ピット15	X23	楕円	東西	65	45	57	黒褐10YR3/2			2	4	36	3		45	平安中頃
ピット16	X41	楕円	北北東	42	36	18	黒褐10YR3/2				1	4			5	平安前半
ピット17	X50	楕円	北西	42	(29)	43	褐灰10YR4/1			1	4	47	6		58	平安中頃
ピット18	X50	不整形		37	31	24	黒褐7.5YR3/2 径1~5cm程度の焼土ブロックを含む				3	14	1	灰塊1 焼土塊12	11	平安中頃
ピット20	X34	円		25	23	17	灰黄褐10YR4/2		1						1	平安後半
ピット21	X43	円		14	13	6	灰黄褐10YR4/2							陶器1	1	
ピット22	X43	円		16	16	10	灰黄褐10YR4/2					2			2	古代
ピット23	X43	楕円	北	30	24	11	黒褐2.5Y3/2					7	2		9	古代
ピット24	X43	楕円	北	40	27	21	暗褐10YR3/3			2		11	1		14	平安中頃
ピット25	X43	楕円	東西	21	13	2	暗灰黄2.5Y4/2				1				1	平安前半
ピット26	X43	円		35	34	30	黒褐2.5Y3/1		1	1	2	29	1	瓦1 金属1	36	平安後半
ピット27	X43	円		45	(26)	15	黒褐2.5Y3/2		2			20	5		27	平安後半
ピット28	X43	円		28	28	18	暗褐7.5YR3/3			1	1	11			13	平安中頃
ピット29	X43	円		61	54	37	暗褐7.5YR3/3			6		29	4		39	平安中頃
ピット30	X43	円		30	25	19	黒褐10YR3/2				1	10	1		12	平安前半
ピット31	X43	円		20	20	13	黒褐10YR3/1					2			2	古代
ピット32	X43	円		20	15	6	暗灰黄2.5Y4/2					2			2	古代
ピット33	X52	楕円	北北東	93	58	36	オリーブ黒5Y3/1			8	5	83	4		100	平安中頃
ピット34	X52	円		20	16	9	オリーブ黒5Y3/1				1	1			2	平安前半
ピット35	X44	円		19	17	25	黒褐2.5Y3/1					6		焼土塊1	7	古代
ピット36	X43	楕円	北東	37	26	4	褐灰10YR4/1					10	1		11	古代
ピット37	X43	円		36	32	17	暗褐10YR3/3				1	10	1		13	平安前半
ピット38	X44	円		21	20	7	オリーブ褐2.5Y4/3					2	1		3	古代
ピット39	X43	円		31	24	28	褐灰10YR4/1			1		7	1		9	平安中頃
ピット40	X43	円		16	16	10	にぶい黄褐10YR4/3				1	3			4	平安前半
ピット41	X52	円		25	21	9	にぶい黄褐10YR4/3					1	6	3	10	平安前半
ピット42	X52	円		24	22	14	黒褐10YR3/1					1	3	1	5	平安前半
ピット43	X52	楕円	北西	27	21	11	黒褐10YR3/2		1		1	5	1	瓦1	9	平安後半
ピット44	X52	円		23	21	20	暗褐10YR3/3			1		7			8	平安中頃
ピット45	X53	楕円	北	35	19	10	黒褐10YR3/2					7			7	古代
ピット46	X43	円		20	16	18	黒褐10YR3/2									
ピット47	X43	円		29	25	17	黒褐10YR3/2									
ピット266	X50	円		53	45	33	褐灰10YR4/1, 暗灰黄2.5Y4/2				2	8	3		13	平安前半
ピット287	X50	楕円	北	44	(19)	7	黒褐10YR3/2					19			19	古代

上の出土遺物から、土坑9は平安時代前半に位置付けられる。

土坑10(図12)は土坑9の東約10mに位置する。中央を南北に埋設管に攪乱されている。東西1.9m、南北約2.5mの平面不整形円形。検出面からの深さ20cm。

出土遺物は、土師器234片、須恵器39片、黒色土器A類16片、同B類15片、瓦質土器5片、緑釉陶器2片、ローリングの著しい弥生土器3片、計314片である。土器はいずれも細片だが、他の遺構よりも黒色土器B類の比率が高く、瓦器も出土しており平安時代後半に位置付けられる。

ピットを38個調査した。個々の寸法・遺物・時期などは表3にまとめた。

遺物は、ピット18から平安時代中頃(佐藤福年平安時代Ⅱ期新段階)の土師器碗(図14-1031)。ピット29から須恵器皿(1032)や黒色土器B類碗の底部(1033)、ピット39から土師器碗(1034;写真図版8)などが出土している。

02-1区第1面の溝・土坑・ピット出土遺物の総計は、土師器2052片、須恵器595片、黒色土器A類

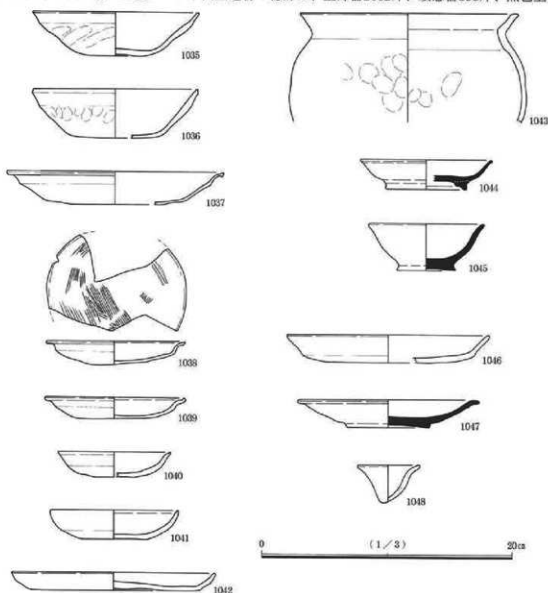


図15 02-1区第1層出土土器

105片、瓦器66片、黒色土器B類56片、瓦21片、陶器11片（うち緑軸9片）、瓦質土器7片、青磁2片、製塩土器1片、弥生土器3片、鉄製品1点、石1個、焼土塊27点、炭塊1点、合計2949点である。黒色土器B類や瓦器の存在から、平安時代中頃～後半に位置付けられる遺構が多い。

また、遺構番号は与えなかったが、02-1区南西部では東西あるいは南北に伸びる幅数10cmの黒味の強い土変りを検出した。サブトレンチで断面も検討したが、溝や畦畔といった遺構とは認識できなかった。耕作に伴う土変りであろうか。

(4) 02-1区第1層の遺物 (図15)

第1面と第2面との間を第1層と呼ぶ。

土師器2240片、須恵器939片、黒色土器A類107片、瓦器32片、黒色土器B類27片、陶器14片（うち緑軸1片、灰軸2片）、瓦13片、製塩土器8片、瓦質土器1片、弥生土器5片、サヌカイト剥片1点、焼土塊4点、炭塊4点、計3395点出土した。

図15-1035～1045は02-1区北半（X11～X35グリッド）から出土した。1035・1036は、平安時代前半（佐藤編年平安時代Ⅱ期古段階）の土師器杯。1037～1042は土師器皿。1037～1039（写真図版8）は平安時代中頃（同Ⅲ期古段階）に属する。1043は平安時代前半の土師器甕。1044は貼付け輪高台の緑軸陶器皿。1045（写真図版8）は糸切り円盤状高台の緑軸陶器小碗。

1046～1048は02-1区南半（X38～X53グリッド）から出土。1046は土師器皿。1047（写真図版8）は緑軸陶器皿。1048（写真図版8）はミニチュアの土師器甕か。

第1層では、第0層に比べ瓦器の比率が低くなり、土師器や緑軸陶器は平安時代前半を主体とする。以上の遺物からみて、第1層は第0層よりやや遅る平安時代の包含層である。古墳時代の須恵器も含むが、それらは下層からの巻き上げであろう。

(5) 02-1区第2面 (図16・写真図版3) [第Ⅰ・Ⅱ面相当] の遺構と遺物

面の高さは、調査区南半部でT.P.+7.0～7.1m、北半部でT.P.+7.2～7.3m。溝7条、土坑5基、ピット194個、計206カ所の遺構（番号79～265・268～286）を調査した。

溝80・81・274・275・277は南北方向、溝79・276は南南東から北北西に主軸をもつ。個々の溝は表4にまとめた。

土坑を5基調査した。土坑82以外の4基は表5を参照されたい。

土坑82は02-1区西部に位置する。南北1.8m、東西0.8mと南北に長く、西側が弧状を呈する平面三日

表4 02-1区第2面の溝一覧

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (全てシルト)	出土遺物						時期		
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		瓦器	瓦質 器	黒B	黒A	土師 器	須恵 器		その他	合計
79	X30	北北西	(2.4)	40～55	25					6	65	13		84	平安前半
80	X22-X31	北	(7.4)	26～45	20	黄灰2.5Y4/1				5	100	19	製塩1	125	平安前半
81	X23, 他	北	(9.7)	33～70	27	灰10Y4/1				1	71	10	瓦1	83	平安前半
274	X24, 他	北	(9.5)	34～60	10	焼灰10YR4/1				7	1		製塩1	9	古代
275	X24, 他	北	(11.7)	28～106	17	焼灰10YR4/1	2			10	7		陶器1	20	古代
276	X33-X42	北北西	(2.5)	15～32	8	焼灰10YR4/1									
277	X33-X42	北	(2.4)	11～20	5	焼灰10YR4/1									

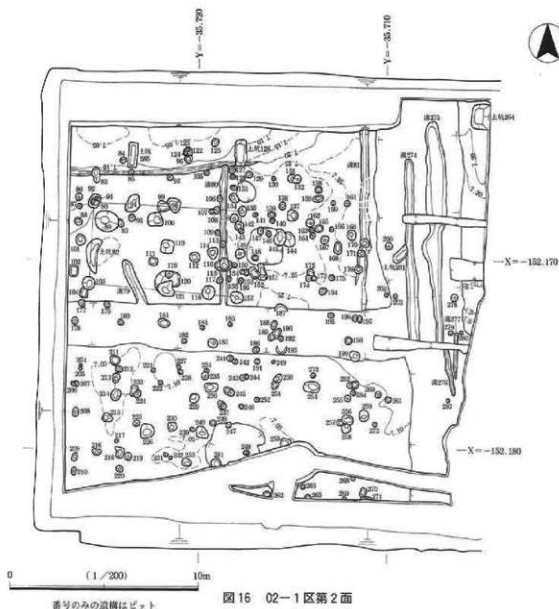


図16 02-1区第2面

月形の土坑である。検出面からの深さは南部で43cm、北部では66cm。出土遺物は、土師器86片、須恵器29片、円盤状高台の緑釉陶器碗1片、計116片。須恵器・土師器は細片が多く、平安時代前半のものが主体を占める。なお、下層の第3面でこの位置から井戸が検出され、同じ遺構番号が付けられている。混乱を防ぐため、「第2面土坑82」と「第3面井戸82」とに区別しておく。

ビットを194個調査した。基本的に北西部のものから番号を付けたが、ビット272・273・281～285は調査終盤で検出したために各所に分布する。ビットの中には、根石が埋め込まれたものが約10個あり、ビット184にはヒノキの柱自体が残っていた。ビット個々のデータは表5にまとめた。

ビット90・94・98(図18・写真図版4)は調査区北西部にあり、東西に並ぶ。いずれからも根石と推定される石を検出した。ビット94・98から細片ながら黒色土器B類が出土しているので、平安時代中頃に位置付けられる。ビット90出土土器も平安時代と考えられ、ビット94・98と併存しても矛盾ない。ビット90と94との心々距離(以下同じ)は2.0m、ビット94と98とは2.1mである。

この3個のビットを基準に掘立柱建物を想定する(図17)。まず、ビット90から西へは調査区外となるが、ビット列としては西側の98-4区までは伸びない。ただし、98-4区第4面の掘立柱建物937(平安

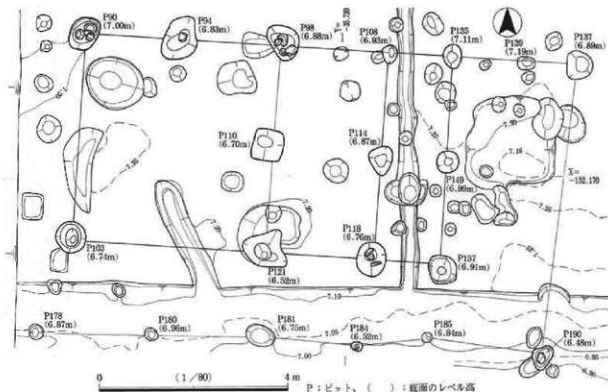


図17 02-1区第2面掘立柱建物286とその周辺

時代前半：10世紀)の北面柱列と平行している。

一方、ピット98からさらに東へは順に、2.3mでピット108、1.3mでピット135、1.6mでピット139、1.2mでピット137と並ぶ。ピット90から東へ並ぶピット列の北側には掘立柱建物を構成しそうなピットが見当たらないので、このピット列が掘立柱建物の北面と考えられる。その南側では、ピット90の南4.3mにピット103。ピット98の南2.2mにピット110、さらに2.3mにピット121。ピット108の南2.3mにピット114、さらに2.1mにピット118(図18;写真図版4)。ピット135の南2.2mにピット149、さらに2.3mにピット157が並ぶ。しかし、ピット139・137の南では柱通りが悪い。

これら以外に注意すべきピットとして、図17の南東隅に石が入ったピット190(図18)が、それから4.0m西にヒノキ柱(図21-1068)が残るピット184(図18;写真図版4)がある。ピット190は北側柱列東端のピット137の南6.3mに、柱の残るピット184はピット118の南1.8mに、それぞれあたる。ピット190から西へは順に、2.5mでピット185、1.5mでピット184、2.1mでピット181、2.2mでピット180、2.5mでピット178と並ぶ。

ピット検出面は、上層の溝による攪乱部分(図17の南部)を除いてはT.P.+7.20~7.27mとほぼ水平である。底面は、根石の伴うピット90・94・98・118がT.P.+6.76~7.00mで、掘立柱建物を構成する可能性のあるピット底面の大半は、このレベルに収まる。しかし、南部のピット190(底面6.48m)や柱の残るピット184(6.52m)はこれより深く、北東部のピット139(7.19m)は著しく浅い。

第2面検出のピットは194個ある(表5)。出土土器(細片が多い)からピットの時期を推定すると、平安時代前半が61個、中頃が20個、後半が4個、時期不詳の古代が84個と、平安時代前半が主体を占める。その中であって、掘立柱建物を構成する可能性のあるピット94・98・118から黒色土器B類が、ピット110・118からは瓦器が出土し、その他のピットに比べ時期が下がる傾向にある。なお、これらピット

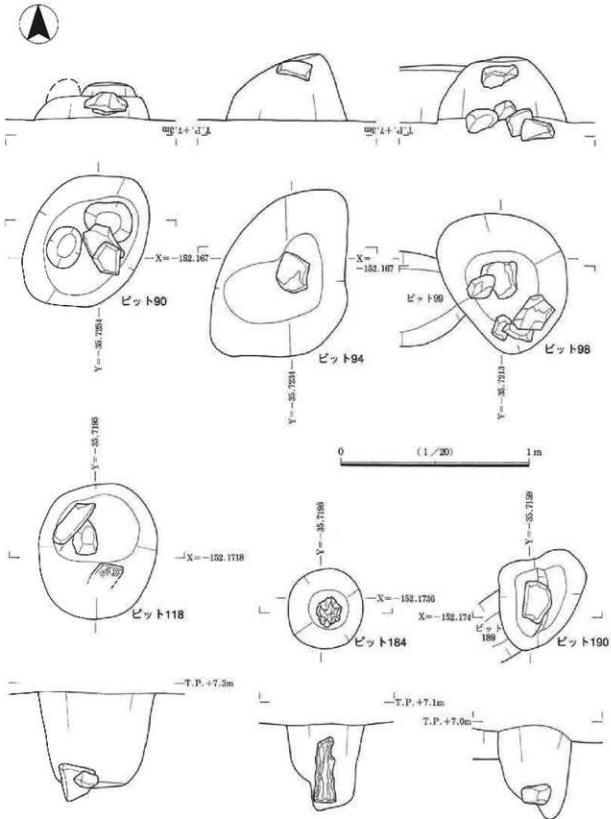


図18 02-1区第2面ピット90・94・98・118・184・190

表5 02-1区第2面の土坑・ピット一覧(1)

遺構 番号	グリッド	平面形	主軸 方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						時期		
				長径 cm	短径 cm	深さ cm		瓦	瓦 器	黒 土	黒 土	須 恵	その他		合計	
土坑82	X20, 他	不整円	北	180	57	67	上)オリーブ黒10Y3/2 下)オリーブ黒10Y3/1					86	29	陶器1	116	平安前半
ピット83	X20	不整円	北	80	40	21	オリーブ黒10Y3/1		1	1	25	2			29	平安中頃
ピット84	X12	円		31	30	29	黒褐2.5Y3/2, 暗灰黄2.5Y4/2粘質土含む				1	12			13	平安前半
ピット85	X21	円		26	25	24	黒褐2.5Y3/2, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック含む		1		3				4	平安中頃
ピット86	X20	円		33	31	31	黒褐10YR3/1					6	3		9	古代
ピット87	X20	円		21	21	25	灰黄褐10YR4/2炭化物少量含む					9			9	
ピット88	X20	円		36	35	17	黒褐10YR3/2炭化物含む				2	11			13	平安前半
ピット89	X21, 他	楕円	東西	125	105	46	黒褐10YR3/2炭化物含む			1	34	13		焼土塊1	49	平安中頃
ピット90	X20	楕円	北東	68	62	20	黒褐10YR3/2炭化物含む				16	8			24	古代
ピット91	X20	楕円	東西	25	(17)	5	黒10YR2/1炭化粘含む									
ピット92	X20	楕円	北	21	16	6	黒褐10YR3/1									
ピット93	X21	楕円	北北西	41	(24)	14	黒褐10YR2/2炭化粘含む					4			4	
ピット94	X21	不整円	北北東	96	68	35	褐灰10YR4/1炭化物含む		1	2	38	11		弥生2 焼土塊2	56	平安中頃
ピット95	X21	円	北	32	32	18	褐灰10YR4/1炭化物含む				9			焼土塊1	10	古代
ピット96	X12	円		38	(25)	12	黒褐2.5Y3/1								3	平安前半
ピット97	X21	円		30	26	20	黒褐10YR3/1炭化物少量含む				3				3	古代
ピット98	X21	楕円	北北西	77	61	36	黒褐10YR3/1炭化物含む		1	6	35	6		焼土塊1	49	平安中頃
ピット99	X21	楕円	東西	(59)	51	32	褐灰10YR4/1				2	32	5	緑釉1 弥生1	41	平安前半
ピット100	X21	不整円		78	65	28	褐灰10YR4/1				5	32	5		42	平安前半
ピット101	X20	円		54	50	26	黒褐10YR3/2				2	19	3		24	平安前半
ピット102	X29	隅丸方	北	55	42	17	灰10Y4/1炭化物含む				1	8	3		12	平安前半
ピット103	X29	円		64	62	50	黒褐10YR3/1炭化物含む				1	12	7	焼土塊2	22	平安前半
ピット104	X29	隅丸方	北	47	35	14	黒褐10YR3/1炭化物含む					5	1		6	古代
ピット105	X22	円		25	22	6	褐灰10YR4/1								6	古代
ピット106	X22	円		28	28	10	褐灰10YR4/1				4	2			6	古代
ピット107	X22	楕円	北東	(23)	23	12	褐灰10YR4/1, 黒褐2.5Y3/1					3			3	古代
ピット108	X22	楕円	北	38	29	31	褐灰10YR4/1炭化物(大)含む				6	65	5	炭1	76	平安中頃
ピット109	X22	円		26	25	6	黒褐10YR3/1炭化物含む				1	1		焼土塊3	8	平安前半
ピット110	X21	隅丸方	北	67	63	63	黒10YR2/1炭化物, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック含む		1	1	1	85	18		106	平安後半
ピット111	X30, 他	円		44	40	9	褐灰10YR4/1					8			8	古代
ピット112	X21	円		51	50	38	黒褐10YR3/2炭化物含む					18	2		20	古代
ピット113	X22	円		28	(27)	13	黒褐10YR3/1					2			2	古代
ピット114	X22	不整円	北	60	47	37	黒褐10YR3/1 炭化物含む, 土器片多く含む			1	1	25	7	焼土塊1 炭1	36	平安後半
ピット115	X31, 他	楕円	北	65	45	48	黒褐2.5Y3/2					1	23	5	29	平安前半
ピット116	X31	楕円	東西	85	37	40	黒褐10YR3/2				5	39		陶器1 製塩2 焼土塊1	50	
ピット117	X31	楕円	北東	32	26	26	褐灰10YR4/1炭化物含む					10	2		12	古代
ピット118	X31	楕円	北	71	51	58	黒褐10YR3/1炭化物多く含む			2	7	152	25	製塩2 焼土塊1 炭1 石2	192	平安中頃
ピット119	X30	円		(32)	31	23	黄灰2.5Y4/1粘質土				1	22	9	焼土塊4	36	平安中頃
ピット120	X30	不整円	東西	127	76	38	褐灰10YR4/1									
ピット121	X30	不整円	東西	96	85	88	黒褐10YR3/2炭化物含む				1	10	8	瓦1	20	平安前半
ピット122	X12	円		45	44	16	黄灰2.5Y4/1				2	10	2		14	平安前半
ピット123	X12	円		18	16	9	黄灰2.5Y4/1粘質土									
ピット124	X12	円		16	18	5	黄灰2.5Y4/1粘質土									
ピット125	X13	楕円	北	36	30	14	褐灰10YR4/1					3	2		5	古代
土坑126	X13	隅丸方	北	135	57	49	黒褐10YR3/2				2	9	5		16	平安後半
ピット127	X22	円		32	30	21	黒褐2.5Y3/2					2	1		3	古代
ピット128	X22	円		24	20	5	褐灰10YR4/1					1		焼土塊1	2	古代
ピット129	X22	楕円	東西	35	29	14	黒褐10YR3/1					7	2		9	古代

表5 02-1区第2面の土坑・ピット一覧(2)

遺構 番号	グリッド	平面形	主軸 方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						時期					
				長径 cm	短径 cm	深さ cm		瓦 器	瓦 質	黒 土	黒 土 A	須 恵	その他		合 計				
ピット130	X22	円		16	15	3	褐灰10YR4/1			1	2			焼土塊1	4	平安前半			
ピット131	X22、他	楕円	東西	40	(26)	25	褐灰10YR4/1炭化物含む					7	2	焼土塊2	11	古代			
ピット132	X23	楕円	北東	43	36	36	黒褐10YR3/1炭化物含む			1		9	1	炭1	12	平安中頃			
ピット133	X22	楕円	東西	30	21	7	黒褐10YR3/1						3			3	古代		
ピット134	X22	楕円	北西	48	35	28	黒褐2.5Y3/1						25	1		26	古代		
ピット135	X22	楕円	北	47	38	16	黒褐10YR3/1					2	10	3		15	平安前半		
ピット136	X22	楕円	北	44	35	33	黒褐10YR3/1炭化物含む					1	13	1	18	平安前半			
ピット137	X22、他	不整形		58	53	38	黒褐10YR3/1、 オリブ緑2.5Y4/3炭含む						17	4		21	古代		
ピット138	X22	円		40	35	6	黒褐10YR3/1、 オリブ緑2.5Y4/3							2	1		3	古代	
ピット139	X22	楕円	東西	35	25	8	黒褐10YR3/1、黄灰2.5Y4/1						5	3		8	古代		
ピット140	X22	円		26	21	6	黒褐10YR3/1							5			5	古代	
ピット141	X22	円		20	17	13	黒褐10YR3/1炭化物含む										2	古代	
ピット142	X22	不整形		44	(38)	22	褐灰10YR4/1			3	10	31	9	焼土塊4	57	平安中頃			
ピット143	X22	円		20	20	16	黒褐10YR3/1							2	2		4	古代	
ピット144	X22、他	楕円	北北西	78	(50)	14								14			14	古代	
ピット145	X22	不整形	北	88	58	51	黒褐10YR3/1、灰黄褐10YR4/2			2	7	62	12	緑輪1	84	平安中頃			
ピット146	X22	円		26	21	16	黒褐10YR3/1、オリブ緑2.5Y4/3			2		3					5	平安中頃	
ピット147	X22	円		30	26	26	黒褐10YR3/1炭化物含む					1	11	2		14	平安前半		
ピット148	X22	円		28	24	4	褐灰10YR4/1												
ピット149	X22	円		45	43	26	黒褐10YR3/1						18	2	焼土塊1	21	古代		
ピット150	X31	円		24	23	12	黒褐10YR3/1						1				1	古代	
ピット151	X31	不整形	北北西	85	31	33	黒褐10YR3/1					1	12				13	平安前半	
ピット152	X31	隅丸方	北西	64	38	13	褐灰10YR4/1						24		銅板1	25	古代		
ピット153	X31	楕円	北	30	22	6	黒褐10YR3/1							3	1		4	古代	
ピット154	X31	円		(23)	23	15	黒褐10YR3/1							4			4	古代	
ピット155	X31	楕円	北	26	19	11	黄灰2.5Y4/1							3	1		4	古代	
ピット156	X31	円		25	21	15	黒褐10YR3/1							1			1	古代	
ピット157	X31	隅丸方		58	57	35	褐灰10YR4/1							13	4		17	古代	
ピット158	X23	円		31	31	10	黒褐2.5Y3/2					2	3	炭1	6		6	古代	
ピット159	X23	楕円	東北東	53	30	8	黄灰2.5Y4/1					1	3				4	平安前半	
ピット160	X23	円		20	17	7	暗灰黄2.5Y4/2						4				4	古代	
ピット161	X23	円		27	26	17	黒褐10YR3/1								1		1	古代	
ピット162	X23	円		40	39	9	黒褐2.5Y3/2炭化物含む							8	3		11	古代	
ピット163	X23	円		28	25	28	黒褐10YR3/1					2	3	14	4		23	平安中頃	
ピット164	X23	円		26	25	16	褐灰10YR4/1							1	3		4	平安前半	
ピット165	X23	円		36	35	9	黒10YR2/1					2	17	1			20	平安前半	
ピット166	X23	円		19	17	8	黄灰2.5Y4/1								1		1	古代	
ピット167	X23	円		39	35	27	黄灰2.5Y4/1					1	6	1			8	平安前半	
ピット168	X23	楕円	北	51	45	43	黒褐10YR3/1					3	19	2	緑輪1	25	平安中頃		
ピット169	X23	隅丸方	北	58	35	41	黒褐2.5Y3/1、 暗灰黄2.5Y4/2ブロック					1	18	1	瓦1	21	平安前半		
ピット170	X23	隅丸方	東西	46	40	33	褐灰10YR4/1												
ピット171	X23	楕円	東西	43	30	23	褐灰10YR4/1						8	1			9	古代	
ピット172	X32	(34)		33	33	25	褐灰10YR4/1					1	6	2			9	平安前半	
ピット173	X32	楕円	東西	54	30	31	暗灰黄2.5Y4/2 黒褐10YR3/1							11	2		13	古代	
ピット174	X32	円		25	24	11	黒褐10YR3/1							8			8	古代	
ピット176	X32	円		42	41	24	黒褐10YR3/1炭化物含む						4	8	1		13	平安前半	
ピット177	X29	円		29	27	22	褐灰10YR4/1							1			1	古代	
ピット178	X29	円		32	29	18	褐灰10YR4/1					1	10				11	平安前半	
ピット179	X30	円		30	22	11	黒褐10YR3/1、黒10YR2/1ブロック					1	5				6	平安前半	
ピット180	X30	円		25	25	12	黄灰2.5Y4/1								12	1		13	古代
ピット181	X30	楕円	西北西	60	44	27	黒褐10YR3/1、 暗灰黄2.5Y4/2ブロック						1	7			8	平安前半	
ピット182	X30	円		26	22	24	黒褐2.5Y3/1					1	17	1	瓦1		20	平安前半	
ピット183	X31	円		46	44	32	褐灰10YR4/1						3	15			18	平安前半	

表5 02-1区第2面の土坑・ピット一覧(3)

遺構 番号	グリッド	平面形	主軸 方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物				時期			
				長さ cm	幅 cm	高さ cm		瓦 器	瓦 質	黒 土	黒 土 A		須 恵	その他	合計
ピット184	X31	円		42	39	47	褐灰10YR4/1			4	1	木1	6	古代	
ピット185	X31	円		20	19	17	黒10YR2/1			4	1		5	古代	
ピット186	X31	円		31	30	13	灰5Y4/1			4	1		4	古代	
ピット187	X31	円?		64	(36)	18	黄灰2.5Y4/1			2	13	4	19	平安前半	
ピット188	X31	楕円	北北東	45	30	29	黄灰2.5Y4/1			1	12		13	平安前半	
ピット189	X31	楕円	北東	(35)	34	7	灰5Y4/1			4	1		4	古代	
ピット190	X31	不整円	北	56	40	48	褐灰10YR4/1鉄分多く含む			7	2	焼土塊1	10	古代	
ピット191	X40	円		24	23	4	褐灰10YR4/1			1			1	平安前半	
ピット192	X31	円		24	21	15	黒褐10YR3/2			2	1		3	平安前半	
ピット193	X31	楕円?	北	50	(42)	29	黒褐10YR3/1		1	1	9	2	13	平安中頃	
ピット194	X32	楕円	北東	40	32	9	黒褐2.5Y3/1			4	2		6	古代	
ピット195	X32	楕円	東西	34	24	19	褐灰10YR4/1		1	1	9	1	11	平安中頃	
ピット196	X32	楕円	北	37	25	8	黒褐10YR3/1		1	4	1		6	平安前半	
ピット197	X32	楕円	北	36	20	10	黒褐10YR3/1			4	2	焼土塊1	7	古代	
ピット198	X32	円		36	35	9	褐灰10YR4/1			3			3	古代	
ピット199	X41, 他	楕円	北西	58	45	40	黒7.5Y2/1			6	43	3	焼土塊3	53	平安中頃
ピット200	X24	円		34	34	23	黒褐10YR3/1			1	1		1	古代	
土灰201	X24	隅丸方	北東	92	48	14	黒褐10YR3/1			5	1	焼土塊1	7	古代	
ピット202	X32, 他	円		18	17	16	黒褐10YR3/1			1	1		1	古代	
ピット203	X33	楕円	北	23	17	19	黒10YR2/1								
ピット204	X38	円		11	10	7	黒褐10YR3/2炭化物少量含む								
ピット205	X38	円		10	10	5	褐灰10YR4/1炭化物少量含む								
ピット206	X38	楕円	北西	23	18	13	黒10YR2/1炭化物含む			6			6	古代	
ピット207	X38	円		28	(15)	11	黒褐10YR3/2炭化物含む			1	4		5	平安前半	
ピット208	X38	楕円	北	45	29	25	黒褐10YR3/1, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック多く含む				11	1	瓦1	13	古代
ピット209	X47	楕円	北北東	42	26	11	黒褐2.5Y3/1								
ピット210	X47	楕円	北	37	21	10	黄灰2.5Y4/1			2			2	古代	
ピット211	X39	隅丸方		48	45	9	黒褐2.5Y3/1			4	1		5	古代	
ピット212	X39	円		33	30	14	褐灰10YR4/1			1	1		1	古代	
ピット213	X39	楕円	北	48	37	26	褐灰10YR4/1, 暗灰黄2.5Y4/2				18	2	20	古代	
ピット214	X39	円		55	50	30	黒褐10YR3/1			1	19	2	石1	23	平安前半
ピット215	X39, 他	不整円		55	44	23	黒褐10YR3/2, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック多く含む			5	2		7	古代	
ピット216	X47	楕円	東西	47	28	25	黒褐10YR3/1, 暗灰黄2.5Y4/2								
ピット217	X39	不整円		17	12	6	黒褐10YR3/1			2	1		3	古代	
ピット218	X48, 他	不整円		54	36	20	黒褐10YR3/2鉄分多く含む			3	1		4	古代	
ピット219	X48	円		36	35	20	黒褐10YR3/1			1	1		2		
ピット220	X48	円		33	30	20	褐灰10YR4/1			1	1		1	古代	
ピット221	X39	円		17	16	2	黒褐10YR3/2			1			1	古代	
ピット222	X39	円		18	17	9									
ピット223	X39	楕円	北	52	39	9	褐灰10YR4/1								
ピット224	X39	楕円	北北東	43	35	25	黒褐10YR3/1			4	2		6	古代	
ピット225	X39	不整円	北東	35	25	24	黒褐10YR3/2			3	1		4	古代	
ピット226	X39	隅丸方		72	70	33	褐灰10YR4/1 径1~5mmの白い小粒多く含む			2	18	4	24	平安前半	
ピット227	X39	楕円	北北西	22	13	5	黄灰2.5Y4/1			1	13	3	17	平安前半	
ピット228	X39	円		20	19	6	黄灰2.5Y4/1			2	5		2	古代	
ピット229	X39	楕円	北	53	47	49				10	5	瓦1	16	古代	
ピット230	X39	不整円		52	45	19	灰黄褐10YR4/2			3	10	1	緑釉1	18	平安前半
ピット231	X48	楕円	東西	20	14	6	黒褐10YR3/2								
ピット232	X48	円		16	14	4	黒褐10YR3/2								
ピット233	X48	楕円	北西	48	37	44				12	1	緑釉2	15	古代	
ピット234	X40	楕円	西北西	25	17	7	黄灰2.5Y4/1								
ピット235	X40	円		35	34	19	黒褐10YR3/1, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック底にたまる			1	4		5	平安前半	
ピット236	X40	楕円	東西	66	43	34	黒褐10YR3/1, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック多く含む			1	22	4	27	平安前半	

表5 02-1区第2面の土坑・ピット一覧(4)

遺構番号	グリッド	平面形状	主軸方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物					時期		
				長さ cm	短径 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒土	黒土	須恵		その他	合計
ピット237	X40	楕円	北西	50	35	15	黒褐10YR3/1, 暗灰黄2.5Y4/2少量含む				5			5	古代
ピット238	X40	円		29	27	23	黒褐10YR3/1				13	1		14	古代
ピット239	X39	円		25	21	18	黒褐10YR3/2			1	6			7	平安前半
ピット240	X40	不整形		59	58	34	1) 黒10YR1.7/1灰層 2) 暗灰黄10YR4/2炭化物を含む			4	30	1		35	平安前半
ピット241	X40	円		30	28	19	黒褐10YR3/2				3			3	古代
ピット242	X40	円		25	23	9	黒褐10YR3/2			3	3			6	平安前半
ピット243	X40	円		27	27	18	黒褐10YR3/1炭, 土器片多く含む				2			2	古代
ピット244	X40	円		25	(15)	14	暗灰黄2.5Y4/2			2	3	1		6	平安前半
ピット245	X40	楕円	北西	61	40	27	黒褐10YR3/1				10	4		14	古代
ピット246	X40	楕円	北西	23	18	9	黒褐10YR3/1				2			2	古代
ピット247	X40	不整形		25	24	23	黒褐10YR3/1			1				2	平安前半
ピット248	X40	楕円	東西	34	21	21	褐灰10YR4/1			1	4	1		6	平安前半
ピット249	X40	円		20	16	17	黒褐10YR3/2			1	13	1		15	平安前半
ピット250	X40	楕円	北北東	(45)	34	37	黒褐10YR3/1, 暗灰黄2.5Y4/2ブロック多く含む								平安中頃
ピット251	X40	楕円	北	(43)	35	28	黒褐10YR3/1								平安中頃
ピット 250・251	X40									2	26	4		32	
ピット252	X40	円		25	20	13	黒褐10YR3/1				1	1		2	古代
ピット253	X40	楕円	北	55	(38)	22	黒褐10YR3/1			4	14	1		22	平安前半
ピット254	X41	楕円	東西	85	56	43	黒褐10YR3/1				21	8		29	古代
ピット255	X41	円		31	29	18	黒褐10YR3/1, 暗オリーブ褐2.5Y3/3ブロック多く含む			1	4	7	2	14	平安中頃
ピット256	X41	楕円	東西	56	44	24	黒2.5Y2/1			3	13	3		19	平安前半
ピット257	X41	楕円	東西	(30)	30	21	黒褐2.5Y3/1				12			12	古代
ピット258	X41	円		(46)	45	22	褐灰10YR4/1				1	19		20	平安前半
ピット259	X41	楕円	北	60	50	36	褐灰10YR4/1			1	8	51	4	64	平安中頃
ピット260	X41	円		28	28	8	黒褐10YR3/2			1	8		51	60	平安中頃
ピット261	X42	円		27	26	5	黒褐10YR3/1, 黒褐2.5Y3/1ブロック少量含む								
ピット262	X49	楕円	北北東	35	(25)	18	黒2.5Y2/1, 暗灰黄2.5Y4/2				14			14	古代
ピット263	X50	円		25	23	11	褐灰10YR4/1								
土坑264	X15, 他	楕円	東西	127	(92)	65			2	1	24	7		34	平安後半
ピット265	X50	円		38	(24)	17	褐灰10YR4/1			1	6			7	平安前半
ピット268	X50	円		19	17	8	黒褐10YR3/2				2			2	古代
ピット269	X50	円		18	(10)	12	黒褐10YR3/2								
ピット270	X50	楕円	北	47	35	25	黒7.5Y2/1			2	5			7	平安前半
ピット271	X50	楕円	東西	57	(10)	16	褐灰10YR4/1				7			7	古代
ピット272	X41	円		16	15	3	黒褐10YR3/1					1		1	古代
ピット273	X41	円		23	23	15	黒褐10YR3/1			2	12			14	古代
ピット278	X33	円		32	29	11	黒褐10YR3/2								
ピット279	X33	円		30	18	15	褐灰10YR4/1				4			4	
ピット280	X33	円		15	14	3	褐灰10YR4/1								
ピット281	X49	楕円	北	45	(40)	11	褐灰10YR4/1								平安前半
ピット282	X41	楕円	東西	56	35	30	黒褐10YR3/2			1	9	3		14	平安前半
ピット283	X42	円		15	13	6	黒褐2.5Y3/2, 暗灰黄2.5Y4/2								平安前半
ピット284	X41	楕円	東西	25	(19)	22	黒褐10YR3/2				7	1		8	平安前半
土坑285	X12	楕円	北	132	45	36	黒褐10YR3/2				14	1		15	平安前半

群を南北に貫く溝80は平安時代前半に埋設しており、掘立柱建物以前の所産と考えらえる。

以上の検討を経て、ビット90を北西角、ビット108を北東角、ビット118を南東角、ビット103を南西角とする築行き南北2間(4.4m)×桁行き東西3間(6.5m)、面積約29㎡の母屋の東に幅1.3mの庇部が付く掘立柱建物286(図17の太線)を推定復元する。ただし、この復元案では、西面中央の土坑82と、南面でも溝79にあたる位置の柱穴が未検出である。この建物は、98-5区第I面掘立柱建物935(平安時代前半)と同様に東側に庇部をもち、建物の方位も掘立柱建物935および98-4区第III面検出掘立柱建物937(平安時代前半～中頃)と共通する。

この他の復元案として、最小の場合、ビット90を北西角、ビット98を北東角、ビット121を南東角、ビット103を南西角とする、南北2間(4.4m)×東西2間(4.2m)、約18㎡の建物(細線)。あるいは最大の場合、南側にあるヒノキ柱のビット184や石の入るビット190を重視して、ビット90を北西角、ビット

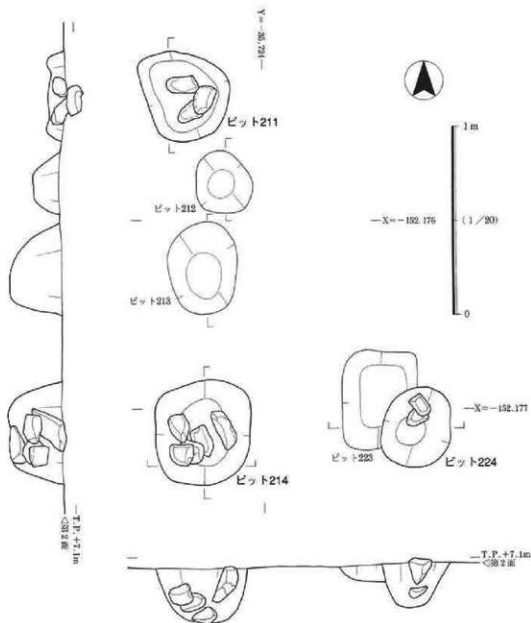
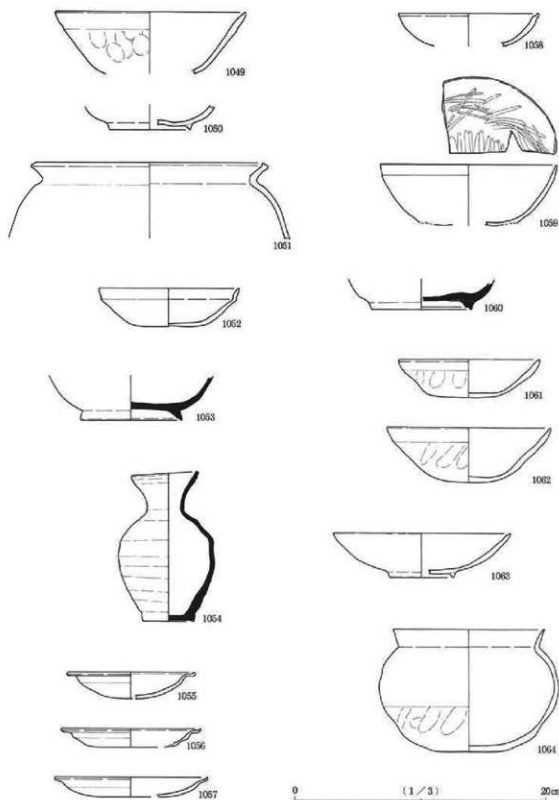


図19 02-1区第2面ビット211・214・224ほか



溝81 1049~1051
 ビット98 1052
 ビット99 1053
 ビット101 1054

ビット108 1055~1057
 ビット145 1058・1059
 ビット168 1060

ビット199 1061・1062
 ビット247 1063
 土坑264 1064

図20 02-1区第2面溝81・ビット群・土坑264出土土器

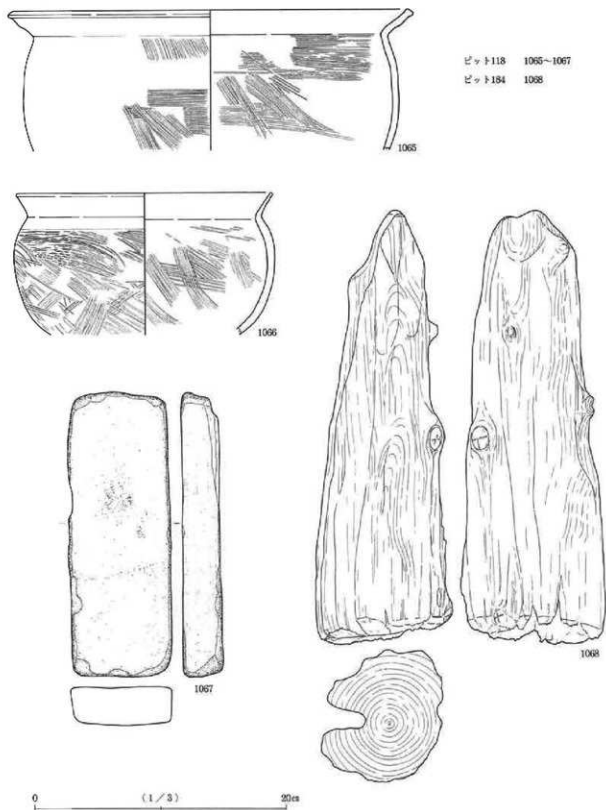


図21 02-1区第2面ピット118・184出土遺物

137を北東角、ビット190を南東角、ビット178を南西角とする、南北3間(6.3m)×東西5～6間(10.5m)、面積約66㎡の建物(細線)も想定できるが、柱間の不揃いなどから可能性は低いと考える。

02-1区南西部のビット211・214・224(図19・写真図版4)にも根石が伴う。ビット211の南1.8mにビット214、その東1.2mにビット224とし字形に並ぶ。これらビットの遺物は土師器・須恵器の細片を主とするが、ビット214から黒色土器A類が1片出土しているため、平安時代前半のビット群と考えられる。ビット211・214・224は掘立柱建物286と一連とはいいがたく、周辺のビットの分布状況からみて掘立柱建物の復元も困難である。

その他、ビットが列状に並ぶ状況は各所にみられるが、掘立柱建物あるいは欄列などを根拠を持って復元するには至らない。

02-1区第2面では、溝81から平安時代の椀(図20-1049・1050)や甕(1051)が出土。ビット89から平安時代中頃(佐藤編年平安時代Ⅱ期新段階)の土師器椀(1052)、ビット99から削り出し輪高台の緑釉陶器椀(1053)、ビット101から須恵器壺(1054;写真図版9)、ビット108から土師器「て」字状口縁皿(1055~1057)、ビット118から土師器甕(図21-1065・1066)や砂岩製砥石(1067)、ビット145から土師器杯(図20-1058)や黒色土器A類椀(1059)、ビット168から貼付け輪高台の緑釉陶器椀(1060)、ビット199から土師器椀(1061・1062;写真図版9)、ビット247から黒色土器A類椀(1063)、土坑264から土師器壺(1064;写真図版9)などが出土している。

その他、第2面の遺構出土遺物には、黒色土器B類(ビット132・145・163・195・255で黒色土器B類と分類したものは、黒色土器A類椀口縁部の可能性もある)や瓦器の出土が少なく、緑釉陶器、黒色土器A類、土師器、須恵器などから平安時代前半～中頃に位置付けられるものが多い。

(6) 02-1区第2層の遺物(図22)

土師器1799片、須恵器395片、黒色土器A類35片、製塩土器27片、瓦4片、陶器3片(うち緑釉陶器2片)、瓦器2片、黒色土器B類1片、弥生土器1片、サヌカイト割片2点、砥石1点、焼土塊4点、計2274点出土。

図22-1069は土師器杯。1070(写真図版9)は土師器皿。1071(写真図版9)は黒色土器A類椀。平安時代前半に属する。

02-1区第2層の遺物組成は第1層と大きくは変わらず、平安時代の包含層である。

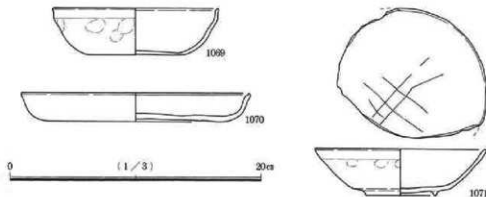


図22 02-1区第2層出土土器

第3節 第3～5面の遺構

(1) 02-1区第3面

第3面は、調査区の北半部においては第2面の基礎層である包含層下層（厚さ0.1～0.2m）を除去した面であり、南半部においては第2面を再精査して新たに遺構を検出した面であり、東端部においては当区調査最終段階時に包含層を除去した面である。このように当該面は部分によってそれに至る経過が異なるという複雑なものとなったが、ぶい黄橙色（10YR 6/4）シルトを基盤とする遺構面で、レベルはT.P.+7.05～7.15mを測る。層位的・レベル的に考えると、面として同一時期の様相を示すものとしていいであろう。なお南東端部では、設計掘削深度が当該面に達しなかったため、遺構未検出として空白となった。

井戸82 調査区の西端中央やや北寄りに所在する。上面で検出した土城82がこの井戸の埋土ブロックと考えられたため、当遺構番号も同じものを付した。

掘方は東西1.8m、南北1.7mの隅丸方形を呈し、検出深は1.1mである。掘方内に0.7～0.8mの間隔において四隅に柱を立て、周囲に板を重ね並べて井戸枠とする。従ってこの遺構は一辺0.7～0.8mの方形の井戸となる。しかし土圧によって井戸枠下部が内にずれ込むなどしたため、遺構としては崩壊状態であった。出土した井戸枠はこのように残存状況が決して良いと言えるものではなかったが、その板材を測つ

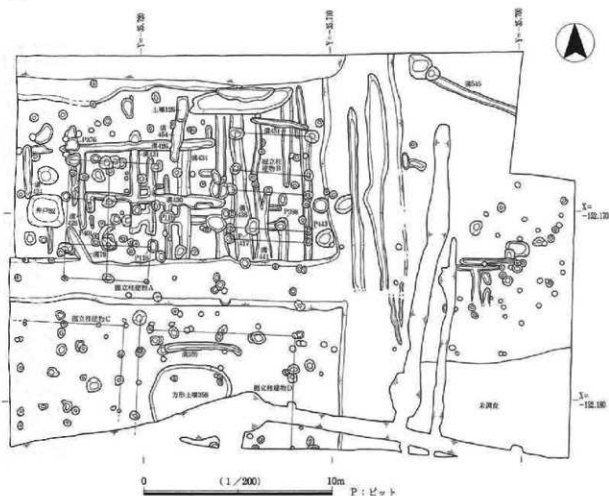


図23 02-1区第3面

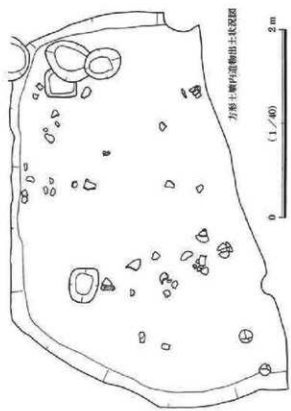
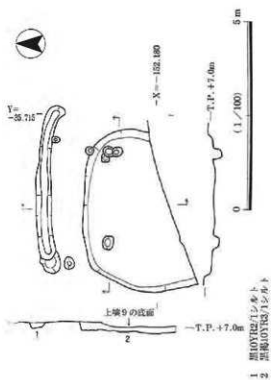


図25 02-1区第3面方形土庫358

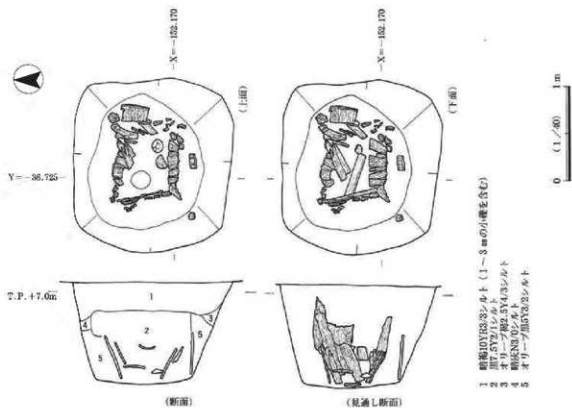


図24 02-1区第3面井戸82

てみると幅10~15cm、厚さ1cm程で、長さは最も長いもので70cmである。当遺構の埋土は掘方上部が暗褐色(10YR3/3)土、井戸内が黒色(7.5Y2/1)土、井戸外の掘方内がオリーブ黒色(5Y3/2)土である。

方形土塋358・溝359 方形土塋358は調査区南半部の南西寄りに所在する。遺構の南半部分は現代の埋設管によって攪乱されたため正確な形状は不明だが、一辺4.2m前後の隅丸方形となろう。北辺は直線で、西辺は西へ弧状に影らむ。検出深は0.15~0.25m、遺構底面は凹凸がありながらもT.P.+6.8~6.9mのレベルで平坦であった。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、当遺構面基盤層であるにぶい黄褐色(10YR6/4)シルトとは明瞭な違いがあり、また遺物出土量も多かった。

この土塋内において北西隅から内へ0.6m離れた位置に一つ、北東隅に接するような位置に三つの小ピットを検出した。小ピットは径0.3~0.4m程度、深さ0.2m程のものである。これらは方形土塋に伴う柱穴の可能性が大きい。

溝359はこの土塋より北に0.8m離れた地点で検出した。長さ4.1m、深さ0.1~0.15mで東西方向に走るが、東端で南へやや屈曲する。この溝は方形土塋の北辺と長さがほぼ同じでかつ平行しており、東端の屈曲部が当土塋の北東端に対応する。従ってこの溝は当土塋と関連するものであることが確実である。埋土は黒色(10YR2/1)シルトで、これも当該面基盤層と明瞭な違いがあった。

方形土塋は形状を見れば4本柱の竪穴式住居の様相を呈する。しかしまとめて出土した遺物の時期は平安時代前期を示す。大阪地域において最も新しい竪穴式住居は管見では松原市の観音寺遺跡において発見されたもので奈良時代とされているが、さらに新しく平安時代とされる報告例は見当たらない。当遺構名を「竪穴式住居」と断定するには躊躇するところであり、「方形土塋」とした所以である。竪穴式住居とすれば、かなり特異な例となろう。

ところで当土塋は上述したように再精査して検出したものであるが、さらにその上面で検出された土塋9と位置的に重なり、また出土遺物に違いが少なく、従って関係のある可能性がある。その場合はこの遺構の本来の検出面がもっと上であることになろう。

掘立柱建物A 井戸82の東に接して所在する。東西2間(4.5m)、南北3間(6.1m)の総柱建物である。柱間寸法は東西では2.2m程の等間隔であるが、南北は北から2.0、2.5、1.8mと不揃いなものである。

柱穴は径0.5~0.7mであるが、一部に方形を呈するものもある。検出深は0.3~0.4mが多いが、P-118だけが0.7mで他と際違って深くなり、また底から砥石の出土を見た。埋土は黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR3/1)シルトである。

この建物の西、北、東を囲むように溝424、426、434が走り、一見すると建物と関係があるように見える。しかし溝群はこれらだけでなく建物の範囲を大きく越えて、南北あるいは東西に平行して並んで走っており、直接には関係がないものと思われる。

P-118 この小ピットは掘立柱建物Aを構成する柱穴の一つである。径0.7~0.5mの楕円形を呈し、深さは0.7mを測る。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)土。この遺構は第4面の土塋471の中央を切るものである。建物の柱穴であるが、柱痕を観察することができなかった。

P-401 掘立柱建物A内で検出した小ピットである。径0.4m、深さ0.25mの遺構底に15~20cm大の礎盤状の石が据えられており、柱穴の可能性はある。しかし今のところ対応する小ピットが見当たらず、別の建物ではなく建物Aに伴うものと考えた方がよいであろう。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)である。

掘立柱建物B 掘立柱建物Aより東に4m離れて所在する。南北方向で小ピット五つが北から2.0、1.1、

2.0、0.5mの間隔で並び、さらにその東に4.0m離れて対応するように小ピットが五つ並ぶ。以上は全体が長方形になることから、掘立柱建物と判断した。

南北の柱間寸法から考えると、東西4.0m、南北2.0mの同規模建物が1.1m離れて南北に並んで建ち、さらに南に庇を持つと考えることもできる。複数の解釈が可能であるが、ここでは一応一つの建物として扱いたい。

建物の規模は東西4.0m、南北5.5m。東西はその間に柱穴が見当たらず1間となる。南北は上述のように不揃いな間隔で4間である。柱穴は径0.4～0.8m、検出深が0.1～0.2mと浅いものが多く、北辺の二つが0.4～0.5mと深くなる。埋土は黒色(10YR 2/1)～暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト。柱穴のうち、P-443には断面に柱根の痕跡が観察された。

P-443 この小ピットは掘立柱建物Bを構成する柱穴の一つである。径0.45m、深さ0.3mを測り、断面に柱痕が観察された。埋土は、掘方部が暗灰黄色(2.5Y 4/2)土、柱痕部が黒色(10YR 2/1)土に褐灰色(10YR 4/1)の小ブロックを含むものであった。

P-398 掘立柱建物B内で検出したピットである。径0.5m、深さ0.45mを測り、断面に柱痕が観察された。埋土は掘方部が黒褐色(10YR 3/1)土、柱痕部上層が黒色(N 2/0)土、同下層が褐灰色(10YR 4/1)土に黄灰色(2.5Y 4/1)ブロックを含むものであった。柱痕があるので柱穴であることは確かであるが、今のところ対応する小ピットがなく、建物Bに伴うものと考えた方がよいであろう。掘立柱建物C 掘立柱建物Aより南へ2.5m離れて所在するが、建物と断定するには若干の疑問であり、今のところ推定としておきたい。東西に四つの小ピットが2.0mと1.5m間隔に直線に並び、その東端から南へ直角に折れて1.5mの等間隔に四つの小ピットが直線に並ぶ。掘立柱建物の一部が崩壊して残存したものと考えたい。確認できたところの規模は東西5.5m、南北4.5mとなるが、調査区外に延びる可能性があり、正確には不明と言わざるを得ない。柱穴は径0.15～0.4m、検出深0.05～0.15mの小さなものである。埋土は再精査して検出したものでは黒褐色(10YR 3/2)シルトである。

掘立柱建物D 調査区南部中央やや西寄り、掘立柱建物Cの東に接して所在する。近年の埋設管や集水枡等によってかなりの擾乱を受けていたが、残存および再精査して検出した小ピットから建物を復元することができた。

建物の規模は、北・東・南辺から測ると南北3間(6.0m)、東西4間(8.0m)で、柱間は2.0mの等間隔の寸法である。ただし西辺は他の辺の並びから外れ、四つの柱穴の柱間寸法が1.8mとなり、しかも西辺と北辺が共有する北西隅柱が見当たらない。周辺での精査を繰り返したが、他に小ピットはなかった。結局この掘立柱建物は、その西辺だけが通常とは違うというものである。

柱穴は径0.2～0.4m、検出深は0.15～0.3m。埋土は再精査して検出したものでは黒褐色(10YR 3/1)～黄灰色(2.5Y 4/1)シルトである。

この建物内に上述の方形土壇358、溝359がある。当初は掘立柱建物内の遺構かと考えたのであるが、上述したように方形土壇はさらに上面の土壇9と関係のある可能性を有するものである。従って建物Dは、方形土壇より時期的に古いものと考えたい。

またこの建物の北辺と建物Cの北辺とが1.3mの距離を置いて一直線に並ぶ。このことからこの二つの建物が関係を有することは確かであると思われる。

溝群 調査区北半部において南北方向に13本、東西方向に3本ほどの溝が、また東端部においても南北および東西方向の溝が検出された。幅はほとんどが0.4～0.6mであるが、溝275のように1mを越すもの

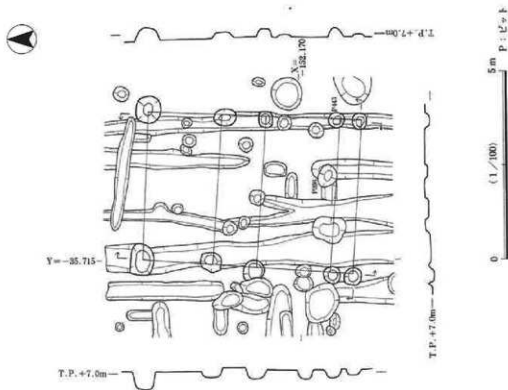


図 27 02-1区第3面掘立柱建物B

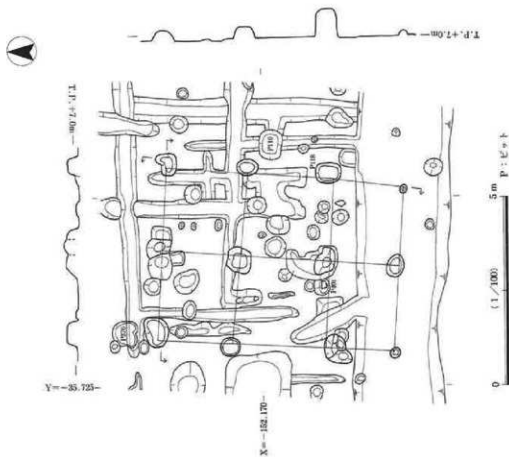


図 26 02-1区第3面掘立柱建物A

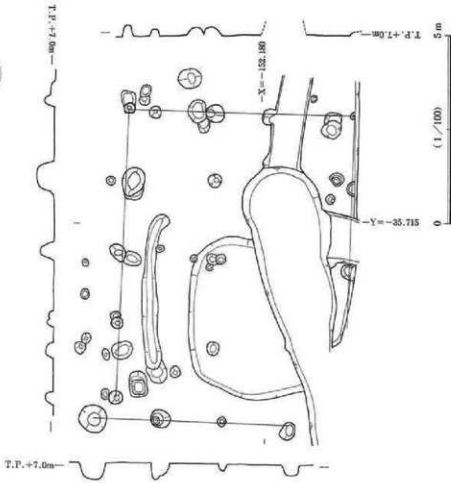


図29 02-1区第3面掘立柱建物D

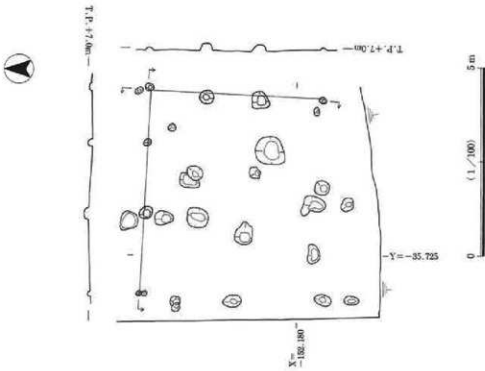


図28 02-1区第3面掘立柱建物C

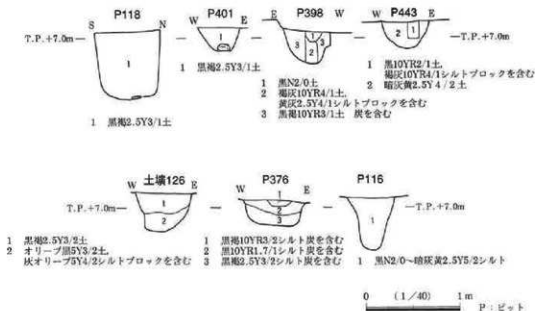


図30 02-1区第3面ピット118・401・398・443・376・116、土壌126断面

もある。深さは0.05~0.1mとかなり浅い。埋土は黒色（10YR2/1）～黒褐色（2.5Y3/1）で、他の小ピット群と区別の難しいものであった。

南北方向の溝では、西から溝424、428、431、434、438、451の6本が2.8m前後の等間隔に平行しているのに注目される。またこれらが掘立柱建物A・Bと重なり、南半部の建物C・D周辺にまで及ばない。

東西方向では、北から溝426、430の2本が走る。平行しておらず、東に行くに従い開くが、両方とも掘立柱建物Bの直前で終わる。

これらの溝群は掘立柱建物と関係があるのかどうかについては、にわかに判じがたい。おそらくは関係のあるものと無関係のものが混在していると思われるが、判断する材料に乏しいものである。

なお溝79、545は方向が北西～南東で、以上の溝とは全く違うものである。性格も異なるものと考えられる。

土壌126 掘立柱建物Aの北東2.5m離れて所在する。当初長さ3.5mほどの南北方向の溝454と考えたが、その北半が深くなるので別遺構とした。幅0.5m、深さ0.45mほどのもので、埋土は上層が黒褐色（2.5Y3/2）土、下層がオリーブ黒色（5Y3/2）土に灰オリーブ色（5Y4/2）ブロックを含むものである。

P-376 掘立柱建物Aの北西隅柱穴の北に接して所在する小ピットである。径0.6m、深さ0.3mを測る。埋土は、上層が黒褐色（10YR3/2）、中層が黒色（10YR1.7/1）、下層が黒褐色（2.5Y3/2）土の三層に分かれ、各層とも炭片を含むという特徴を持つ。

P-116 掘立柱建物Aの東に接して所在する小ピットである。径0.6~0.8mの楕円形を呈する。深さは0.55mで、当面で検出した小ピットではかなり深いものである。埋土は黒色（N2/0）～暗灰黄色（2.5Y5/2）シルトである。

(2) 02-1区第4面

第4面は第3面の基盤層であるにおい黄橙色(10YR 6/4)シルト層を除去し、古墳時代自然河川の最上層に堆積した砂質の強い灰色(7.5Y 6/1)シルトを基盤層として検出した遺構面である。レベルはT.P.+6.8～6.9mと平坦であるので、人工的に整地された可能性がある。調査区の東端は、公団住宅建替え工事で掘削される設計深度がこの面にまで達していないため、遺構は保存されるという考えによって調査は行わなかった。従って第4面の調査範囲は第3面より小さなものとなっている。

この面においても多数の小ピットや溝が検出された。しかし上面の第3面より深く掘られた遺構もまたこの面に残ることとなった。現地調査では両者の区別をせずに白線を引き、空撮を行なった。また下面の第5面で検出した土壌538等については、第4面で検出されるべき遺構と考えられる。

以上の結果、上面からの遺構を省き、下面で検出した遺構を加えて、第4面としての本来の遺構図をここでは提示する。

土壌471 調査区中央やや西寄りで検出された。径1.9m程、深さ0.4m程であるが、平面はやや不定形を呈する。中央に上面のP118によって切り込まれており、遺構としては残存状況の良いものであった。埋土は黒褐色(2.5Y 3/1)～褐灰色(10YR 4/1)シルト。馬歯がまとも出土しており、馬の埋葬ピットの可能性がある。

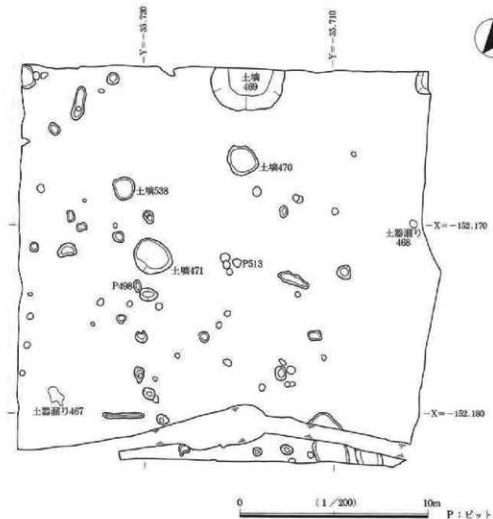


図31 02-1区第4面

土壙469 調査区北端中央に所在する。平面はやや方形を呈し、東西3.9mを測るが、南北については北セクションに当遺構が及ばないことが確認できたので2.5m程度となる。深さ1.0mで、埋土は礫、粗砂がほとんどである。埋土に関する限り、他の遺構とは大きな違いを見せている。

土壙470 土壙469の南2m離れて所在する。径1.5mの円形を呈し、深さ0.15~0.25m。遺構の底面は凹凸が激しい。埋土は上層が黒褐色(2.5Y3/1)、下層がオリーブ黒色(5Y3/1)シルトで、炭や木片を含む。

土壙538 調査区北東部において土壙471より北北東2.2m離れて所在する。前述したように第5面で検出した遺構であるが、その後の検討によって第4面の遺構と考えることが妥当なものである。径1.2m、検出深0.05~0.1mで、埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト。土師器甕の口縁部が掘わた状態出土した。

P-498 土壙471の南0.5m離れて所在する。南北0.6m、東西0.35mの長細い楕円形を呈し、深さは0.3m。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、須恵器壺が出土した。

小ピット群 第4面でも小ピット遺構が多数検出された。調査区南西端に小ピットが三つ、1.5mの等間隔に並ぶが、果たして掘立柱建物跡の一部としてよいのか、断定できない。現段階では当調査区では建物として復元できるものはなかったとしたい。

土師器壺467 調査区南西部に所在する。第4面直上面で出土したもので、東西0.9m、南北1.1mの範囲に集中する。土師器の甕と高坏だけで構成されるという特徴をもち、古墳時代中期の須恵器出現以降の土師器一括資料として貴重なものである。図化できなかったが、須恵器細片が1点伴出している。なお当初は掘立柱建物に伴うものかと考えたが、その後の検討により伴わないと判断した。

甕は全部で9個体の出土で、口縁が短く外反し、端部は尖り気味もしくは丸くおさまる。頸部の屈曲は弱く、体部は球形で、内面はナデとヘラケズリ、外面はタテハケなどが施される。9個体のうち、器高20cmほどのものが2個体、同16cmほどのものが2個体、同12cmほどのものが5個体と三種類に分類することができる。また完形に復元し得たものは二次焼成後の底部穿孔があり、おそらく他も同様の穿孔がなされていたものと考えられる。

高坏は坏部を数えると14個体の出土である。口径27~29cmの大型のものが4個体、口径16cmほどで口縁端部が外反する中型のものが5個体、口径14cmほどで口縁端部が内傾もしくは直立する小型のものが5個体と三種類に分類することができる。脚部の出土が少なく、完形に復元できたものは大型のもの1個体だけである。特に中・小型のもの脚柱部が全くなかったことに注目される。

これらの遺物は、大型高坏のなかに中・小型の高坏や甕を積み重ねたり、その周囲に甕・高坏を丁寧に置いている様子が伺われるものである。またこれに伴う土壌あるいは溝については、周辺の精査を繰り返したが見当たらなかった。つまりこの遺構は土器が投棄されたというものでは決していない。

出土土器には底部穿孔があったり、同種類のもの数が4、5点と揃っていたりする特徴から、祭祀的な意味合いがあるのは確実であろう。祭祀時の廃棄なのか、祭祀後の廃棄なのか等々様々な考えられるが、土器祭祀の一資料として貴重であろう。時期は5世紀後半と考えられる。

土師器壺468 調査区東端中央に所在する。東西0.4m、南北0.3mの範囲に広がる。土師器壺としたが、完形に復元できる土師器の甕と韓式土器片からなるものである。周辺を精査したが、遺構と認識できるものは検出されなかった。時期は上述の土師器壺と同じと考えられる。

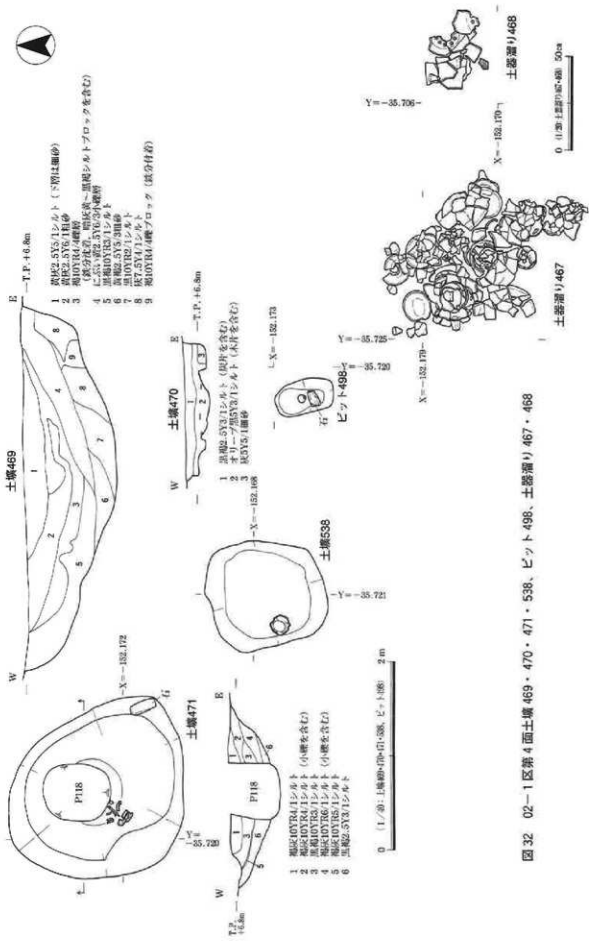


図32 02-1区第4面土塚469・470・471・538、ピット498、土器溜り467・468

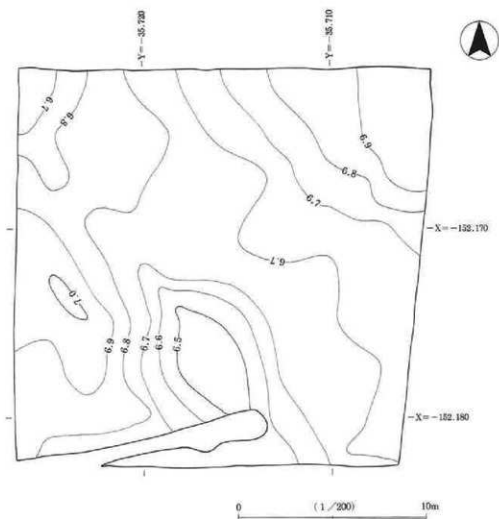


図33 02-1区第5面

(3) 02-1区古墳時代河川および第5面

当調査区は全面が小阪合分流路とも称される古墳時代前期の河川の一部である。この河川の埋土は基本的に粗い黄褐色礫砂で、一部にシルト・礫砂の互層およびラミナが見られた。

第4面の基盤層である④灰色シルトを除去すると、この礫砂の上面に至る。この面は平坦ではなく凹凸を有し、その高低差は0.5mを越えるものである。それは人工的なものではなく、河川の急な流れに伴い堆積した礫砂の一時期の様相を示すもので、自然地形と言える。遺構面と言えるものではないが、この面を第5面としてコンター図を作成した。

当調査区の設計掘削深度はT.P.+5.3mであるが、この深さでは川底に至らなかった。また川の中の調査となって、川岸は調査区外であった。

なおこの河川の埋土からはかなりの量の古式土師器が出土しており、完形のものも少なくなかった。しかしこれらは原位置ではなく、流されて偶然に埋もれたと考えられるものである。

第4節 第3面以下の遺物

(1) 02-1区第3面の遺物(図34-36)

第3面井戸82から、土師器98片、須恵器32片、黒色土器A類7片、瓦1片、瓦質土器1片、製塩土器1片、曲物1点、計141点出土した。図34-1072~1077(写真図版9)は土師器碗、1078(写真図版9)は皿。いずれも平安時代前半(佐藤編年平安時代Ⅱ期古段階)に属する。1079(写真図版9)の須恵器壺には2条の刻書がみられる。1080も須恵器壺。内外面ともローリングが著しい。1081はスギ製の曲物。

方形土坑358出土遺物は、土師器547片、須恵器51片、黒色土器A類32片、緑釉陶器3片、瓦2片、製塩土器2片、焼土塊17点、計654点である。図35-1082~1102は土師器。碗(1082~1093:写真図版10)、皿(1094~1097:写真図版10)、断面七角形の高杯脚部(1098)、甌か(1099)、甕(1100・1101)、ミニチュア甕(1102:写真図版10)などがある。1103・1104は黒色土器A類碗。1105~1107は須恵器で、杯蓋(1105)、耳壺(1106)、杯底部(1107)がみられる。1108は丸瓦、1109は平瓦。これら図示した土器および出土物の組成から、方形土坑358は平安時代前半(佐藤編年平安時代Ⅱ期古段階)に位置付けられる。

このほか、ピット417から奈良時代後半の土師器杯(図36-1110)や須恵器杯(1111)、溝434から土師

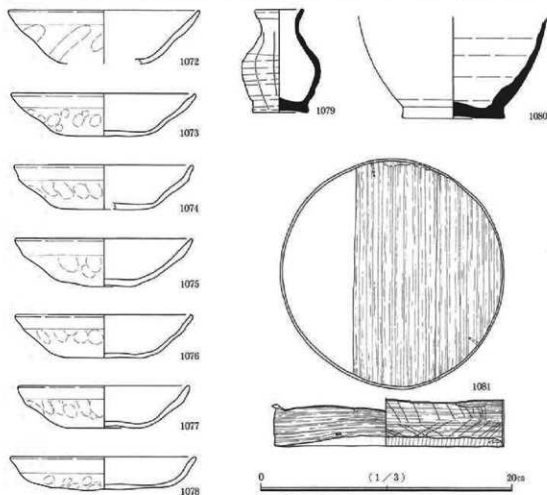


図34 02-1区第3面井戸82出土遺物

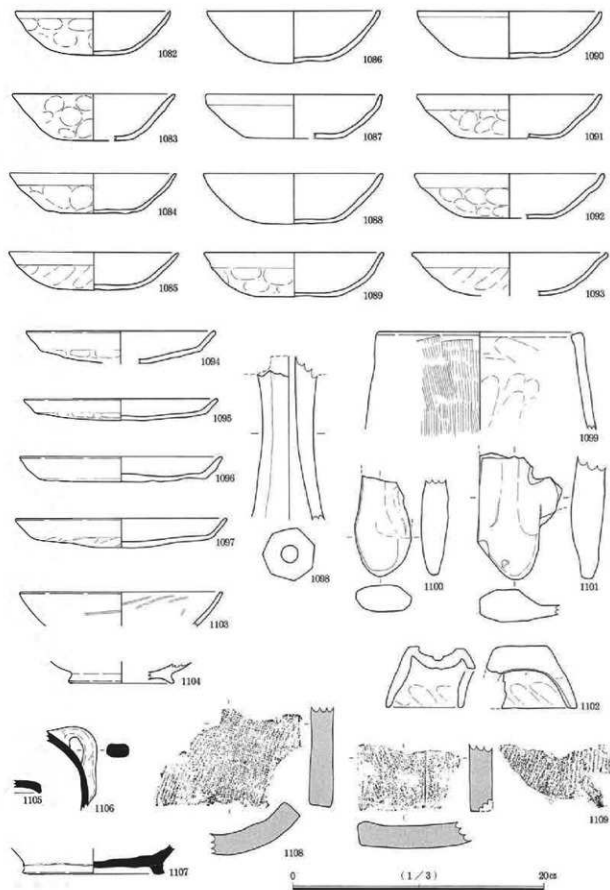


図 35 02-1区第3面方形土坑 358出土遺物

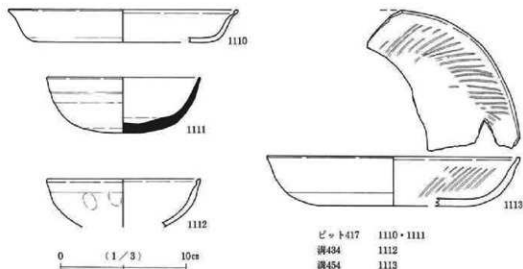


図36 02-1区第3面ビット417、溝434・454出土土器

器杯(1112)、溝454からは内面に一段放射状暗文が施された奈良時代中頃(平城宮土器Ⅲ)の土師器杯(1113)が出土した。

その他の遺構出土遺物は、表6にまとめた。

02-1区第3面では、土師器・須恵器からみると奈良時代～平安時代初頭の遺構が多い。

(2) 02-1区第3層の遺物(図37・38)

土師器1879片、須恵器725片、黒色土器A類8片、製塩土器5片、韓式系土器3片、瓦器1片、焼土塊1片、投弾片1点、弥生土器29片、サスカイト剥片2点、計2654点出土した。

図37-1114は土師器杯。1115は須恵器杯。1116は土師器甕。これらは奈良時代に属する。1117(写真図版11)は土師器の小形高杯。図38-1118~1132は須恵器。杯身(1118~1120)のうち、1118(写真図版11)はTK10型式。1119・1120の杯身、杯蓋(1121~1125:写真図版11)、有蓋高杯の蓋(1126)はTK23~TK47型式に属する。他に、無蓋高杯(1127:写真図版11・1128)、壺(1129)、甕(1130)、カップ形(1131:写真図版11・1132)がみられる。1128は短脚一段透かしの高杯で、杯部外面には上下を稜線で区画された櫛描き波状文が施され、つまみが2個付く。1133(写真図版11)は土師器有稜高杯。1134(写真図版11)は土師器小形丸底土器。1135(写真図版11)は滑石製の有孔円板。1136(写真図版11)も滑石製の紡錘車。

以上の遺物から、02-1区第3層は古墳～奈良時代の包含層といえる。

(3) 02-1区第4面の遺物(図39~42)

土器溜り467から、土師器26点と須恵器1片が出土した。出土土師器(図39~41・写真図版12・13)については、遺構の項(44頁)を参照。

土器溜り468から、土師器8片、須恵器3片、韓式系土器1片、計12片出土した。図42-1163(写真図版14)は土師器甕。胴部外面に縄帯文タタキが施される。1164は格子叩きの施された韓式系土器。

土坑470から、土師器9片、須恵器3片、計12片出土した。1165・1166は土師器杯。1165の内面には放

表6 02-1区第3面の遺構出土遺物

遺構名	出土遺物(片・点数)					合計	時期	遺構名	出土遺物(片・点数)					合計	時期		
	瓦質土器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器				その他・備考	瓦質土器	黒色B	黒色A	土師器			須恵器	その他・備考
井戸82	1		7	98	32	瓦1, 曲物1, 製塩土器1	141	平安前半	土坑419			3	30	10	製塩土器2	45	平安前半
方形土坑 358			32	547	51	陶器3, 埴土塊17, 瓦2, 製塩土器2	654	平安前半	ピット421				6	3		9	古代
溝359			1	29	8		38	平安前半	溝424				1			1	古代
ピット373					2		2	古代	溝425				6	1		7	古代
ピット374				10	2		12	古代	溝426				54	16	製塩土器2	72	古代
ピット375				3	1		4	古代	溝427				7	1		8	古代
ピット376			20	6		埴土塊2	28	奈良?	溝428			1	10		製塩土器1	12	平安前半
ピット380			1	1			2	古代	溝429		1		25	2	製塩土器1	29	平安中頃
ピット381				8	1		9	古代	溝430				21	5		26	古代
ピット382				2	2		4	奈良?	溝431				52	7	製塩土器1	60	古代
ピット383				6			6	古代	溝432				27	3		30	古代
ピット384				7	2		9	古代	溝434				28	4	弥生土器1, 製塩土器2	35	古代
ピット385				1			1	古代	溝436				1			1	古代
ピット387				5			5	古代	溝437				24	5		29	古代
ピット388				3			3	古代	溝438		1		75	10	製塩土器1	87	平安前半
ピット389				9	2		11	古代?	溝439			4	22	3		29	平安前半
ピット391			1	13	1		15	平安前半	溝441				56	15	製塩土器1	72	古代
溝392						弥生土器1	1		溝442				6	3		9	古代
ピット393				3			3	古代	ピット443				2	1		3	古代
ピット396		1	63	38		瓦2, 埴1	105	平安前半	ピット444				1			1	古代
ピット398				15	4		19	古代	ピット445				5	1		6	古代
ピット401		3	4	1			8	平安前半	ピット446				3	1		4	古代
ピット403				5	3	弥生土器1, 埴土塊1	10	平安?	ピット448				2	1		3	古代
ピット405				1			1	古代	溝449			1	11	1	埴土塊1	14	平安前半
ピット407				19			19	古代	溝450				3			3	古代
ピット408				4	1		5	古代	溝451			1	3	2		6	平安前半
ピット410				33	5		38	古代	溝453				10	1		11	古代
ピット411		1		10			11	平安中頃	溝454				19	1	製塩土器1	21	奈良
ピット414				1	25	6	32	平安前半	溝455				6	1		7	古代
ピット415			1	3	1	製塩土器1	6	平安前半	ピット457				2		製塩土器1	3	古代
ピット416				5			5	古代	ピット458			1	1			2	平安前半
ピット417				35	4		39	奈良後半	溝461				16	6		22	古代
土坑418				2	2		4	古代	土坑462			2	14	7		23	平安前半

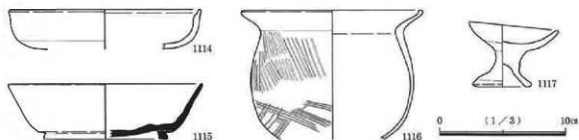


図37 02-1区第3層出土遺物(1)

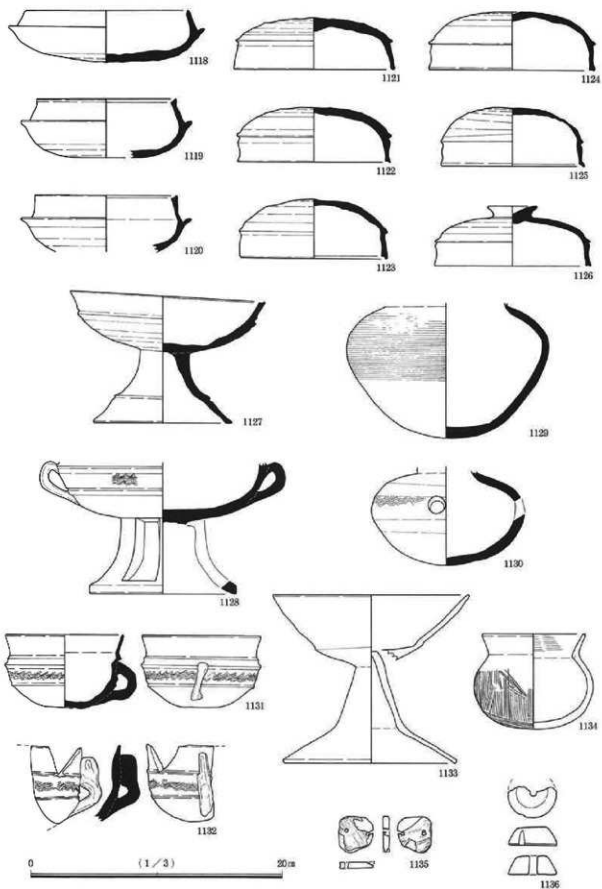


図36 02-1区第3層出土遺物(2)

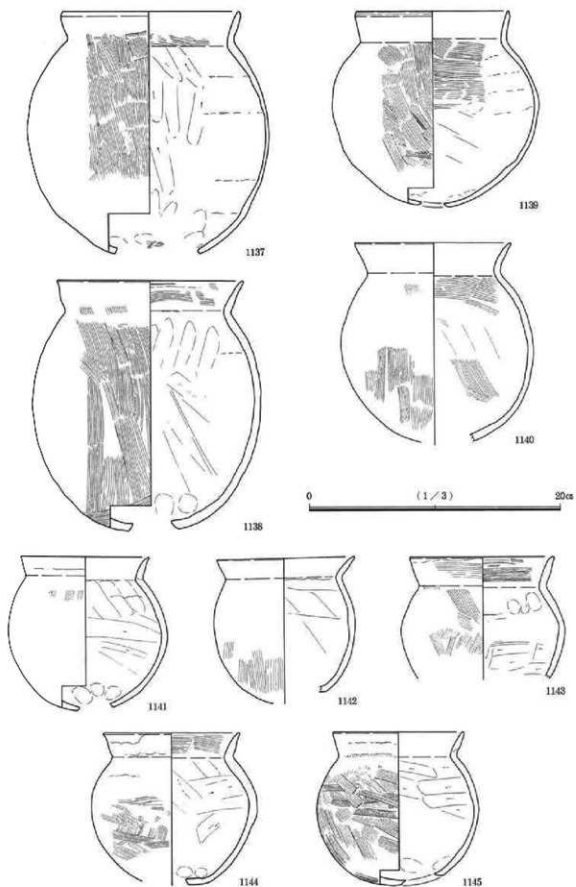


図39 02-1区第4面土器溜り467出土土器(1)

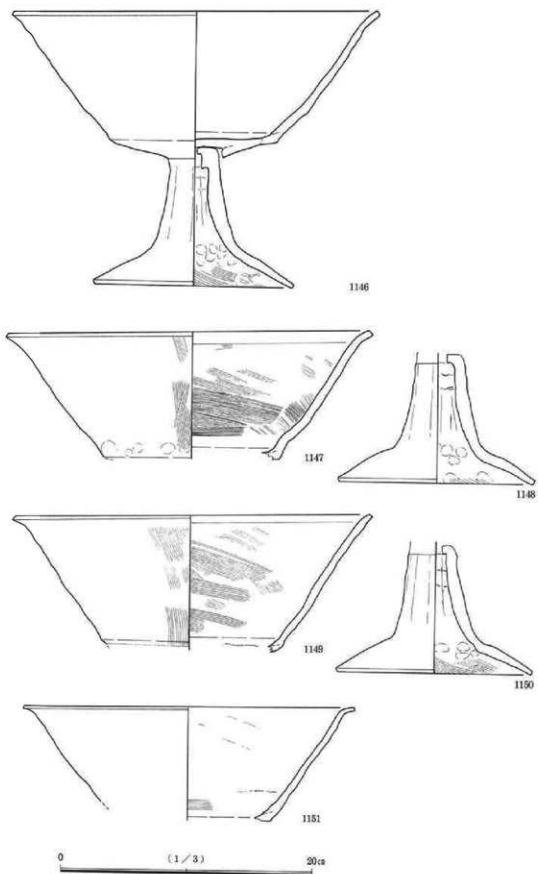


図40 02-1区第4面土器溜り467出土土器(2)

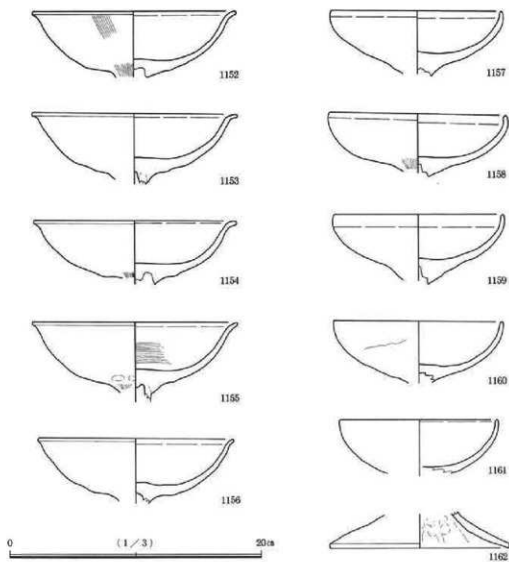


図41 02-1区第4面土器溜り467出土土器(3)

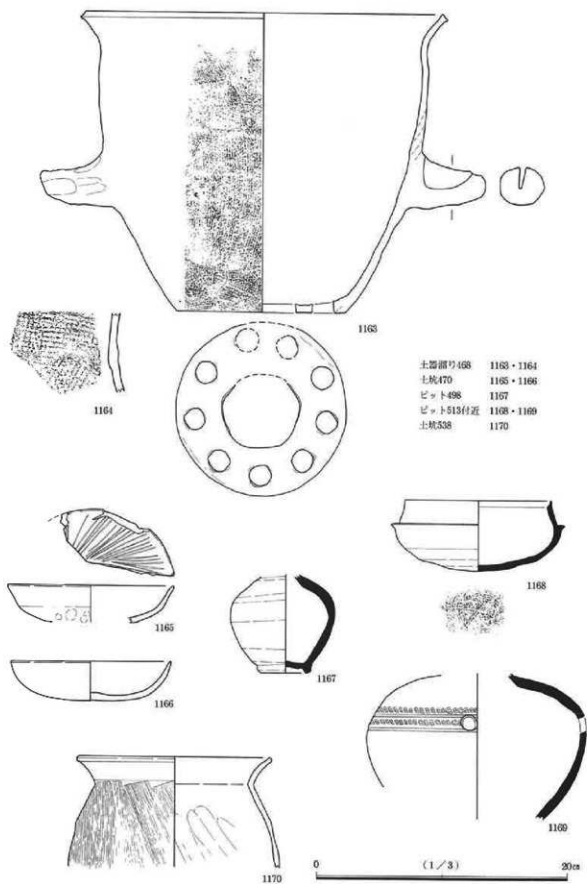


図42 02-1区第4面土器溜り468、土坑470、ピット498・513、土坑538出土土器

表7 02-1区第4面の遺構出土遺物

遺構名	出土遺物(片・点数)					時期	遺構名	出土遺物(片・点数)					時期			
	瓦器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器			その他・備考	合計	瓦器	黒色B	黒色A		土師器	須恵器	その他・備考
土器溜り467				20	1	27	古墳中期	ビット489				20		20	古代	
土器溜り468				8	3	12	古墳中期	ビット492				1		1	古代	
土坑469	1			20	3	25	平安後半?	ビット498				2	製塩土器1	3	平安前半	
土坑470				9	3	12	奈良～平安	ビット501				2		2	古代	
土坑471		1	22	6	石1, 製塩土器4, 鉄歯多数	34 +備	平安前半	ビット510				3		3	古代	
								ビット512				13	1	14	古代	
溝472				1		1	古代	ビット513				87	2	89	古墳中期	
溝473				6		6	古代	ビット515					弥生土器1	1		
ビット474				14		14	古代	ビット525			1	8	3	9	平安前半	
ビット479				2		2	古代	ビット531				2	2	4	古代	
ビット480			1	9	1	11	平安前半	落ち込み533		1	13		施土塊1	15	平安前半	
ビット481				1		1	古代	ビット534				3		3	古代	
ビット484				2		2	古代	土坑538				2	1	製塩土器1	4	古墳後期?
ビット496				2	2	1	平安前半									

射暗文が施される。1166(写真図版14)は奈良～平安時代前半に属する。

ビット498から、須恵器2片と製塩土器1片のみ出土。1167は奈良～平安時代の須恵器壺。

ビット513付近から、土師器87片、須恵器2片、計89片出土した。土師器は細片ばかりだか、古墳時代が主体を占める。1168は須恵器杯。底部外面に「×」のヘラ記号がみられる。TK47型式に属する。1169は須恵器大形甕。第3層出土の破片と接合した。

土坑538から、土師器2片と須恵器1片が出土。1170(写真図版14)は土師器甕。胴部外面の縦方向のハケ調整が顕著。古墳時代後期に属するか。

その他の遺構出土遺物は、表7にまとめた。

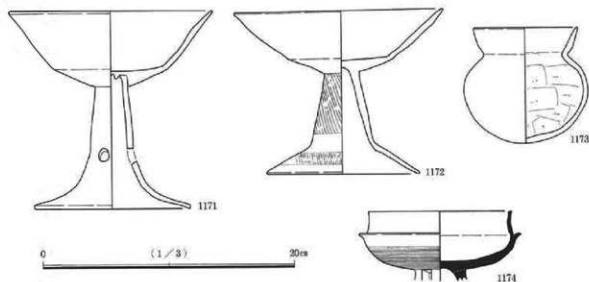


図43 02-1区第4層出土土器

(4) 02-1区第4層の遺物(図43)

土師器95片、須恵器38片、弥生土器9片、瓦器1片、韓式系土器1片、サヌカイト剥片1点、計145点出土した。図43-1171~1173は土師器。1171(写真図版14)は無稜直口高杯、1172(写真図版14)は有稜高杯。いずれも古墳時代中期に属する。1173(写真図版14)は布留式の小形丸底土器。1174は須恵器有蓋高杯。脚部の透かしは3カ所。TK208型式に属する。

以上の土器から、02-1区第4層は古墳時代前~中期を主体とする包含層と考えられる。

(5) 02-1区第5層の遺物(図44~46)

第5層出土遺物は〔上層〕と〔下層〕とに分けて取り上げられている。

〔上層〕出土遺物は、土師器327片、弥生土器188片、サヌカイト製石鏃1点、サヌカイト剥片10点、計526点である。図44-1175(写真図版15)は庄内式の甕。1176(写真図版15)は吉備系の甕。上方に拡張された口縁端面に緋掛平行線文が施される。下田所式~亀川上層式に属する。1177は土師器鉢。1178(写真図版15)はサヌカイト製の凹基打製石鏃。0.7g。

〔下層〕からは、土師器1448片、弥生土器1054片、サヌカイト石核4点、サヌカイト剥片53点、計2559点出土している。図45-1179~1184は甕。阿波系(1179;写真図版15)、布留式(1180・1181;写真図版15)、庄内式(1182;写真図版15)、弥生形(1183;写真図版16・1184)がみられる。1182の胎土は生駒山西麓産。図46-1185(写真図版16)は布留式の直口壺。1186(写真図版16)は小さな底部をもつ壺。1187・1188は高杯杯部。1189は鉢。全体に薄手で、口縁端部が上方に短く拡張されている。1190(写真図版16)は小形丸底土器。1191(写真図版16)は鼓形器台。

以上、02-1区第5層では、〔上層〕・〔下層〕ともに古式土師器と弥生土器を主に含む。庄内式土器は他の時代の土器に比べ生駒山西麓産の胎土の比率が高い。弥生土器とサヌカイト剥片はローリングが著しく、水流によって運ばれてきたと推定できる。

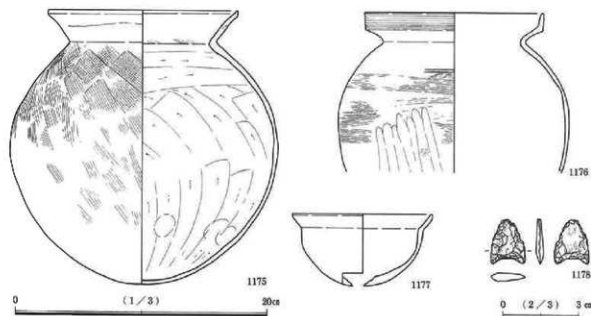


図44 02-1区第5層〔上層〕出土遺物

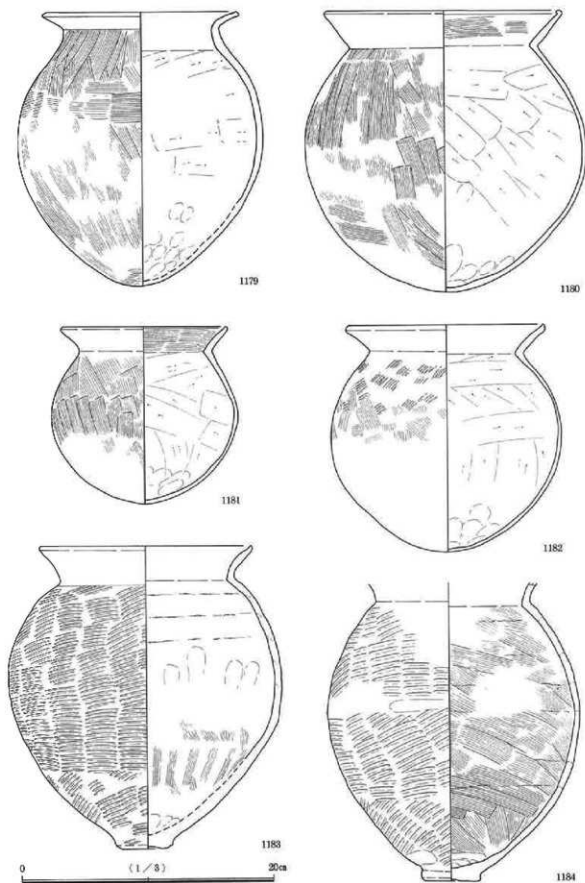


図45 02-1区第5層〔下層〕出土土器(1)

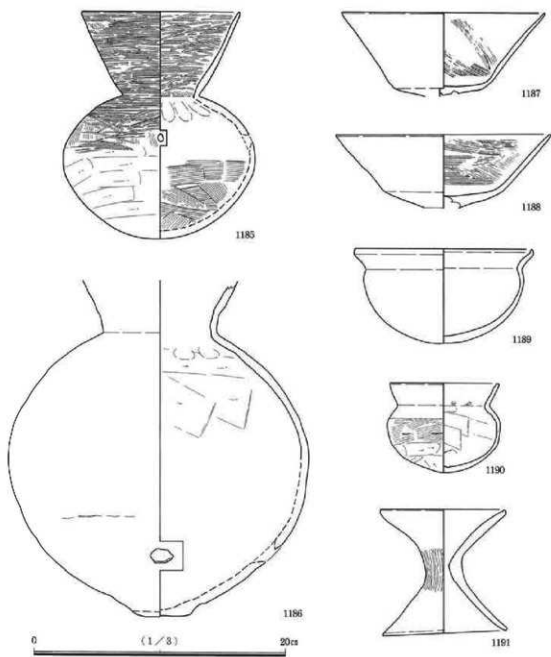


図46 02-1区第5層〔下層〕出土土器(2)

第3章 02-2区の調査成果

小阪合造跡02-2区は、第2次調査範囲の東側に位置する。公団の高層集合住宅建設に伴う調査である。

調査前地盤高はT.P.+8.1~8.2m。攪乱層等を重機で0.7~1.1m除去し、T.P.+7.0~7.4mから最も深い所でT.P.+3.6mまで人力により掘り下げた。その結果、遺構面3面と103カ所の遺構を検出した。

第1節 層序

02-2区西辺断面、現地表面（T.P.+8.1m）から掘削限界（T.P.+3.6m）までの層序（図47）を掲げる。なお、古植生変遷と堆積環境変遷を分析するために第1層③層（サンプル1-4）・第2層⑩層（サンプル1-5）を採取した（第8章参照）。

整地層 現地表面から約0.6mは住宅建設に伴う整地層であった。さらに、調査区南部に存在した公団住宅の基礎および調査区中部に埋設されていた地中管の部分も、重機で掘削した。

第0層（①層） 暗灰黄2.5Y 4/2シルト。

第1層（②~⑧層） 第1層上部の西辺中部以北には、ぶい黄褐10Y R 5/3の非常によく締まったシルト（②層）がみられる。西辺中部では径2~3cmの礫を含み、層自体もかなりガチガチしている。西辺中部の第1層中層は灰黄褐10Y R 4/2シルト（③層）。②層ほど多くはないが、径1~3cmの礫を含む。④~⑥層は西辺南部に堆積している。④層は、黄褐2.5Y 5/4粗砂を基本とし、シルトや径1~3cmの礫も混じる。⑤層は、よく締まった灰黄2.5Y 6/2シルト。⑥層は、褐灰10Y R 4/1シルト。一方、⑦・⑧層は西辺北部にみられる。⑦層は、サラサラとしたきれいな黄褐10Y R 5/6細砂。その下層の⑧層は、オリーブ褐2.5Y 4/3シルト。

第2層（⑨~⑬層） A~C層は第2面の遺構埋土。A層は黒褐10Y R 3/1シルトだが、面的には検出していない。B層はピット356で、灰黄褐10Y R 5/2シルト。C層はピット301で、暗灰黄2.5Y 4/2シルト。

⑨~⑬層は調査区南部にみられる。⑨層は、灰黄褐10Y R 4/2シルト。その下層の⑩層は、黒褐10Y R 3/1粗砂混じりシルト。⑨・⑩層に切られた格好の⑪層は、灰黄2.5Y 6/2シルト。⑨~⑪層下部の⑫層は、オリーブ褐2.5Y 4/4粗砂を基本とし、径2~4cmの礫を多く含み、細砂~シルトからなる南下がりのラミナもみられる。⑬層は、灰7.5Y 4/1やぶい黄2.5Y 6/3の細砂が南下がりのラミナをなす。

⑭層は第2層の主体となる層。黄褐2.5Y 5/3細砂や暗灰黄2.5Y 4/2シルトなどが薄いラミナを幾重にも形成しており、下部の方が粒子が粗い。⑬層の北端上部では、⑭層との分層は困難である。

第3層（⑮層） いわゆる小阪合分流跡の流路充填堆積物。黄褐色など色調不定の礫~粗砂。ラミナが発達している。

なお、第3層についてはこの西辺断面と直交方向となる流路充填堆積物（T.P.+6.0~3.6m）横断面の層理のスケッチを図64（81頁）に掲げる。

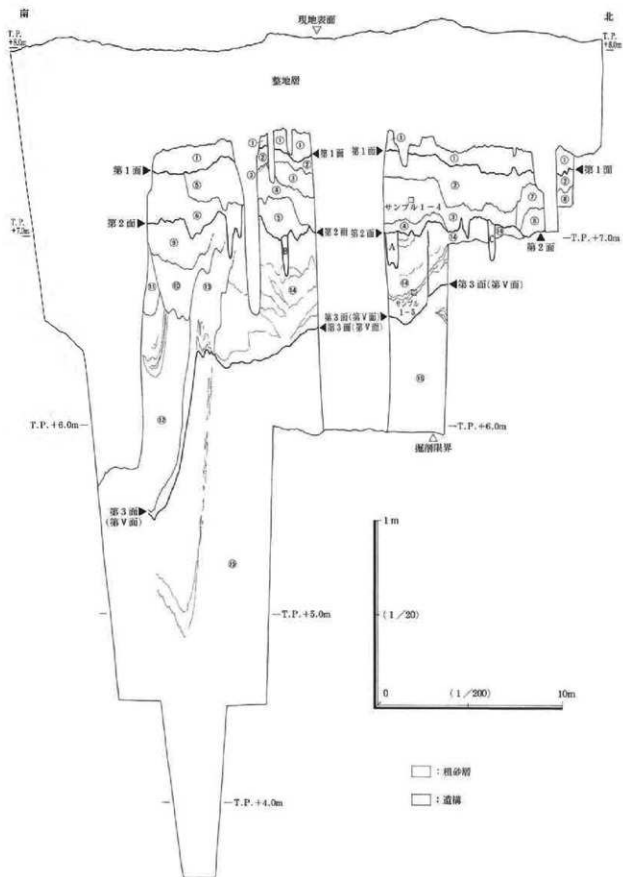


图 47 02-2 区西边断面

第2節 遺構と遺物

(1) 02-2区機械掘削層・攪乱層の遺物

機械掘削層から、土師器7片、須恵器2片、計9片出土。

攪乱層からは、土師器579片、須恵器101片、瓦器46片、瓦8片、陶器5片、磁器3片、瓦質土器3片、裂塩土器2片、黒色土器A類（内黒）1片、サメカイト剥片1点、計749点が出土した。

(2) 02-2区攪乱層除去面

機械掘削の後、埋設管等の攪乱を人力により除去した面。

02-2区の中央から東にかけては汚水処理場跡、中央から西へはそれに繋がる埋設管、さらに南側は5階建ての旧公団住宅の基礎により攪乱されていたので、重機で除去した。それら以外の範囲では、T.P.+7.0~7.4mで攪乱を受けていない包含層の上面を検出した。

(3) 02-2区第0層の遺物（図49）

土師器229片、須恵器57片、瓦器32片、磁器10片、陶器8片、黒色土器A類（内黒）4片、瓦質土器3片、黒色土器B類（内黒）1片、鉄片？1点、計345点出土した。

図49-2001は黒色土器A類、貼付け輪高台の皿。平安時代初頭に属する。2002は口縁部外面下に凹縁がめぐる瓦質の火鉢。江戸時代に属するか。

02-2区第0層からは、平安時代の土器が多く出土するが、それ以降現代までの遺物も含まれる。

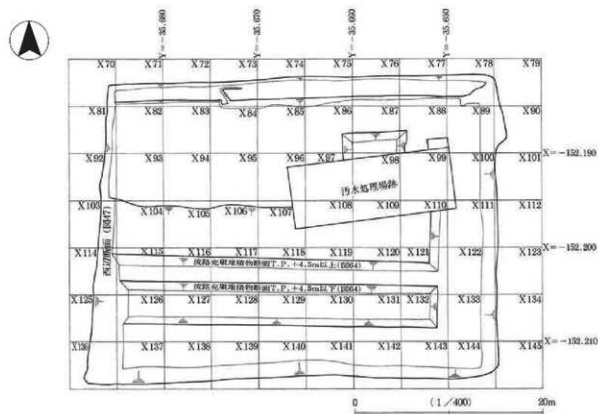


図48 02-2区地区割付



図49 02-2区第0層出土土器

(4) 02-2区第1面(図50・写真図版17)〔第I面相当〕の遺構と遺物

面の高さはT.P.+7.0~7.3m。遺構(番号48~78・282・267)として、溝6条、井戸2基、土坑2基、ビット2個を検出した。

溝は南北を指向するものが多い。溝66以外は表8にまとめた。

溝66(図54)は幅2.5mと第1面では最大規模の溝で、切り合いから井戸287より新しい。平安時代を主体とする土師器109片、須恵器30片、瓦器14片、製塩土器11片、瓦質土器1片、緑釉陶器1片、計166片出土した。図56~2041・2042は土師器鉢。2043は瓦器椀。2044は糸切り円盤状高台の緑釉陶器椀。遺物組成から平安時代後半に位置付けられる。

井戸287(図51・写真図版17)は掘形東西径1.3m、井戸側は一辺85cm、現存高30cm。井戸側内中央部は直径40cmの円筒状に細砂と黒シルトのブロックが詰まっており、その中央から須恵器小壺(図53~2025)が出土した。検出面から90cm下が底で、その中央に平石が据えられている。

出土遺物は、土師器272片、須恵器57片、製塩土器50片、黒色土器A類6片、瓦器6片、瓦2片、サヌカイト剥片1点、計394点。図52~2003~2021は土師器。2003~2011(写真図版20)は無高台の椀。平安時代前半(佐藤編年平安時代II期古段階)に属する。2012(写真図版20)は高台付椀で、底部外面には「家」あるいは「承」と読める墨書がある。2015(写真図版20)の皿か杯の底部外面に「井」の墨書、2013の見込みに螺旋暗文、2014の底部外面に3本の刻書がそれぞれみられる。土師器には他に皿(2016~2018:写真図版20)、壺(2019~2021)、高杯などもみられる。2022~2024は黒色土器A類で、無高台・平底の椀(2022:写真図版20)と高台のある椀(2023・2024)がある。2025は須恵器小型壺。須恵器は古墳時代の器台なども少量混じるが平安時代の壺や壺が主体となる。製塩土器は細片化しており、余形をうかがえるものはない。2026~2029に口縁部を図化した。瓦器は細片ばかりである。瓦は、凹面に布目痕がみられる丸瓦片と、凸面縄叩き、凹面布目痕の残る平瓦片。瓦はいずれも平安時代と考えられる。サヌカイト剥片は磨耗しており、土器類の時期からみても下層からの混入の可能性が高い。

井戸287は、以上の出土遺物から、平安時代前半(9世紀代)に位置付けられる。

表8 02-2区第1面の溝一覧

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			掘土 (全てシルト)	出土遺物						時期		
			検出長さ m	幅 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒B	黒A	土師	須恵		その他	合計
48	X84・X95	北	(2.2)	40~45	5	にぶい黄褐10YR5/3					10			10	古代
49	X84・X95	北北東	(1.4)	26~36	5	灰黄褐10YR4/2				2	11	1		14	平安前半
50	X95・他	北・北北西	(5.5)	23~28	4	にぶい黄褐10YR5/3							総器1	1	
51	X95	北北東	(1.9)	13~16	4	にぶい黄褐10YR5/3					4			4	古代
66	X117, 他	北北西	(4.2)	106~138	60	図54	14	1			109	30	陶器1 製塩11	166	平安後半
77	X120	北	1.8	15~31	5	灰黄褐10YR4/2					1			1	古代

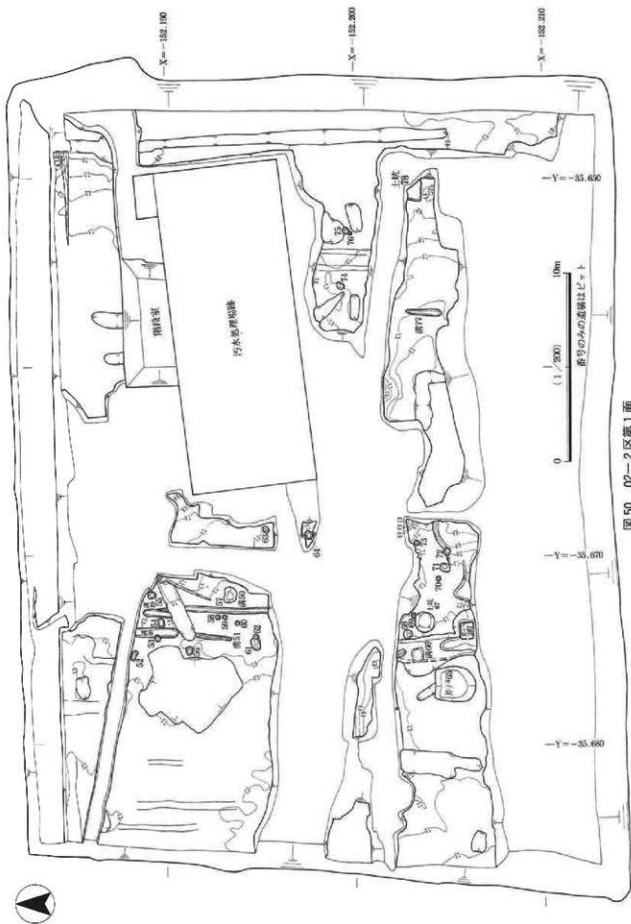


図50 02-2区第1面

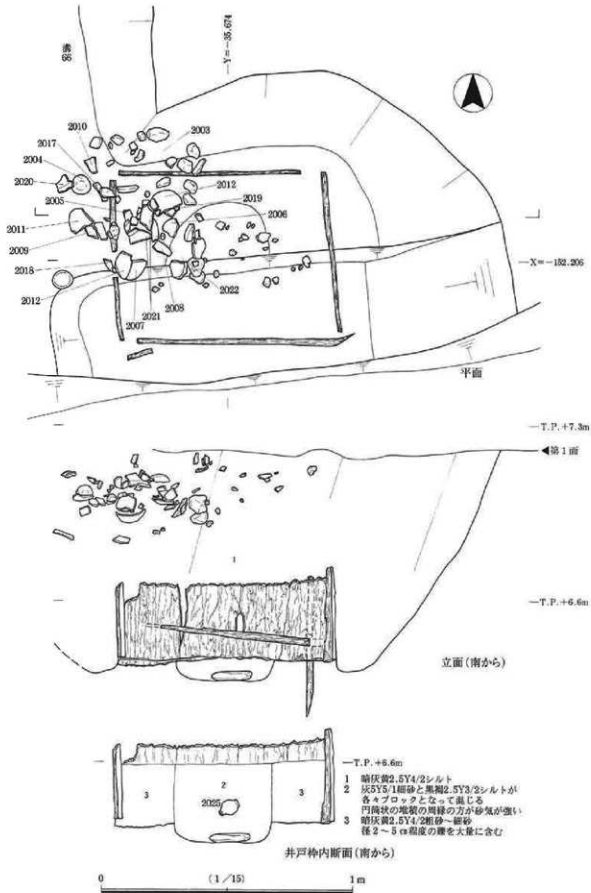


図51 02-2区第1面井戸287

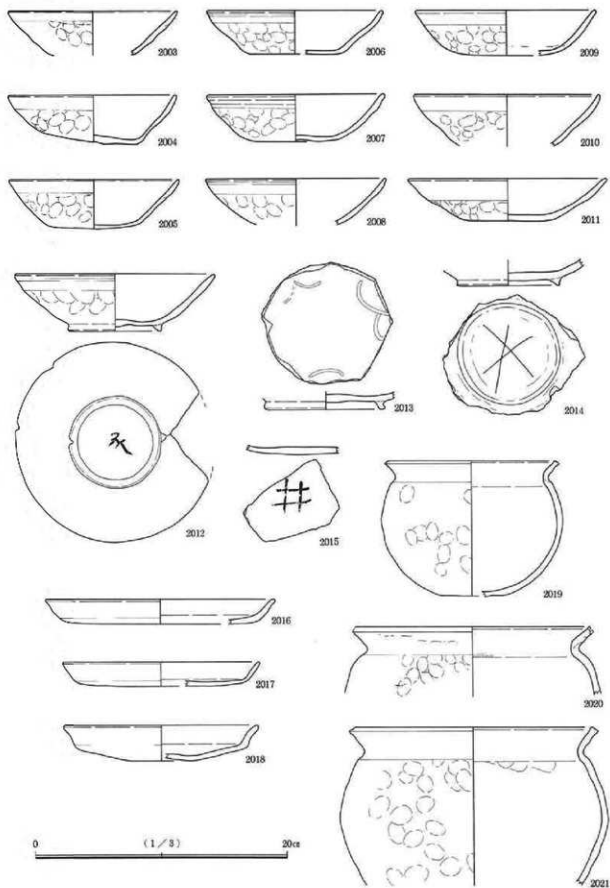


図 52 02-2区第1面井戸287出土土器(1)

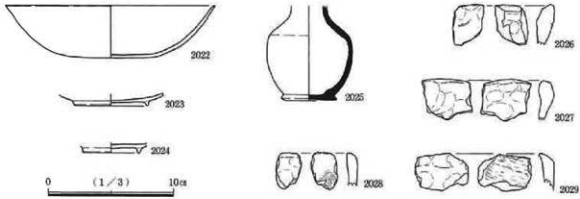


図53 02-2区第1面井戸287出土土器(2)

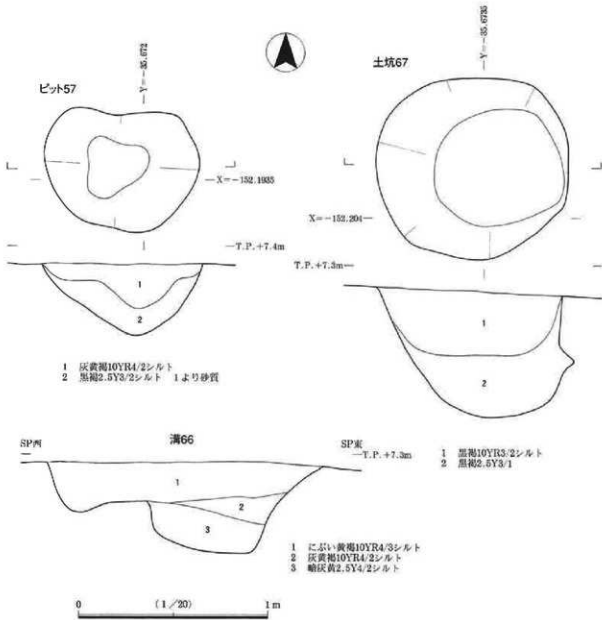


図54 02-2区第1面ピット57・溝66・土坑67

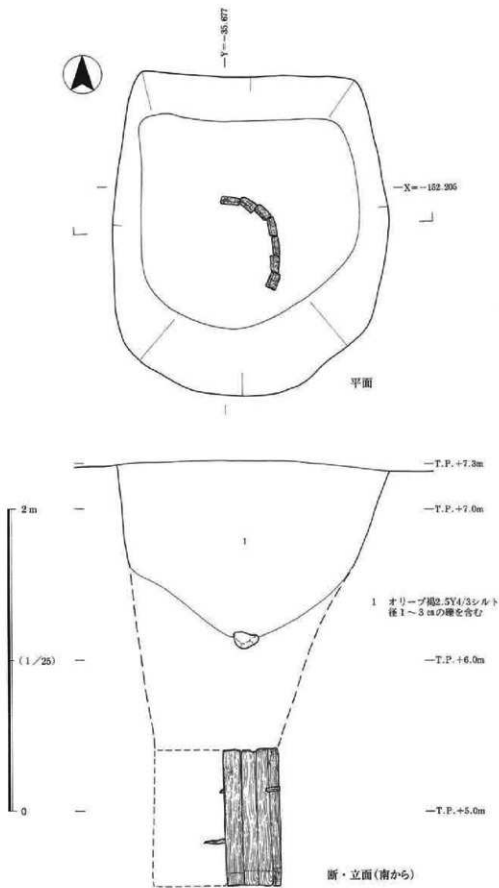


図55 02-2区第1面井戸65

井戸65(図55)は木組み井戸。掘形の平面は不整形で、南北2.1m、東西1.8m。深さは2.8mで、下部に推定径85cmの桶状の縦板組みが設えてある。出土遺物は、磁器1片、陶器2片、瓦6片、瓦質土器1片、瓦器1片、須恵器2片、土師器5片、計18片。図56-2040は土師器甕の底部。この土器は時期不詳だが、井戸の構造と遺物組成からみて、井戸65は平安時代後半以降に位置付けられる。

土坑やピットは、ある程度まとまって分布するが、掘立柱建物などの復元には至らない。個々の土坑・ピットは表9にまとめた。

土坑67(図54)は溝66のすぐ東に位置する。平面円形で、径96~101cm、深さ71cm。出土遺物は、土師器42片、須恵器17片、黒色土器A類3片、同B類1片、丸瓦1片、計64片。図56-2045は土師器皿、2046(写真図版20)は甕。

ピットの出土遺物には、ピット52の見込み部に放射状暗文らしき痕跡がみられる土師器皿(図56-2030)や壺の底部(2031)、ピット56の土師器「て」字状口縁皿(2032・2033)や須恵器杯(2034)、ピット57(図54)の土師器甕(図56-2035)や製塩土器(2036)、ピット61・62の土師器碗(2037)、土師器甕(2038)、須恵器杯蓋(2039)などがある。

02-2区第1面の遺構は、瓦器・黒色土器B類・黒色土器A類などの出土遺物から、平安時代の中で時期差が認められる。

表9 02-2区第1面の土坑・ピット一覧

遺構 番号	グリッド	平面形	主軸 方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						合計	時期	
				長径 cm	短径 cm	深さ cm		瓦 器	瓦 質	黒 B	黒 A	土 師	須 恵			その他
ピット52	X83	楕円	西北西	50	23	8	黒褐10YR3/1					17	2		19	古代
ピット53	X84	円		35	25	28	にぶい黄褐10YR4/3	4				12	2		18	平安後半
ピット54	X84	楕円	東西	45	26	4	灰黄褐10YR4/2					2			2	古代
ピット55	X84	円		37	34	30	灰黄褐10YR4/2					28			28	古代
ピット56	X94, 他	楕円	東西	38	28	29	灰黄褐10YR4/2					20	2		22	古代
ピット57	X95	楕円	東西	80	60	38	図54		2	40	5	製塩2		49	平安前半	
ピット58	X95	円		20	20	4	黄褐2.5Y5/3									
ピット59	X95	円		21	19	4	黄褐2.5Y5/3				1	2			3	平安前半
ピット60	X95	円		16	15	5	黄褐2.5Y5/3				1				1	平安前半
ピット61	X95	楕丸方	東西	59	40	25	黄褐2.5Y5/3					2			2	古代
ピット62	X95	円		26	(19)	15	灰黄褐10YR4/2					2	1		3	古代
ピット 61・62												15	2		17	古代
ピット63	X107	円		30	28	16	灰黄褐10YR5/2					1			1	古代
ピット64	X107	不整形円		41	37	14	黄褐2.5Y5/3					5			5	古代
土坑67	X117	円		101	96	71	図54		1	3	42	17	瓦1	64	平安中頃	
ピット68	X117	円		41	37	26	黒褐10YR3/2					20		炭1	21	古代
ピット69	X117	楕丸方	北西	21	17	22	灰黄褐10YR4/2				3	4	2		9	平安前半
ピット70	X117	円		19	18	25	灰黄褐10YR4/2					10	1		11	古代
ピット71	X117	楕丸方	北北東	50	43	22	灰黄褐10YR4/2		1	64	3			68	平安前半	
ピット72	X118	円		37	32	42	灰黄褐10YR4/2				1	1	製塩1	3	古代	
ピット73	X118	楕円	北北東	26	20	27	黒褐10YR3/2					15	2		17	古代
ピット74	X109	不整形円	北東	36	27	8	灰黄褐10YR4/2									
ピット75	X110	円		29	28	9	にぶい黄褐10YR4/3					1		石1	2	古代
ピット76	X110	円		(15)	15	3	灰黄褐10YR4/2									
土坑78	X121	楕丸方	東西	(90)	(75)	7	灰黄褐10YR4/2						1		1	古代

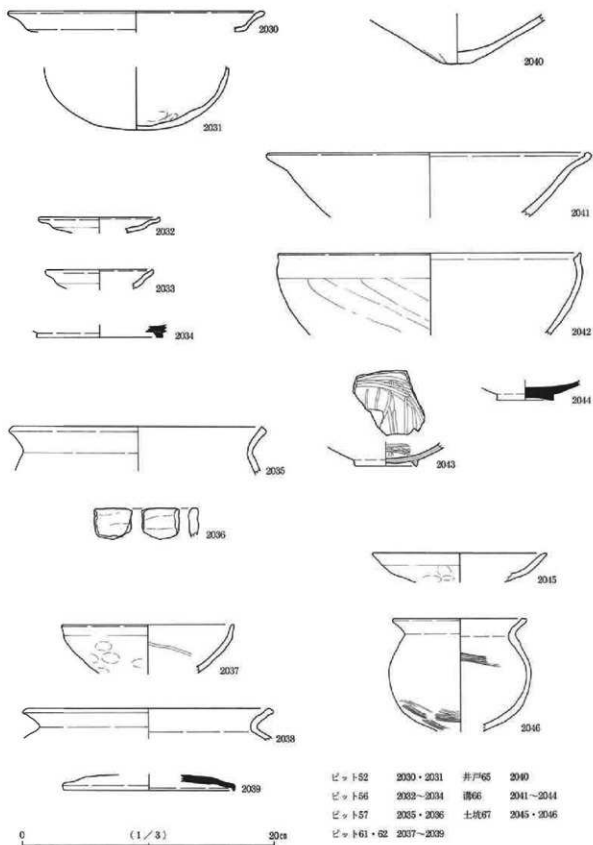


図56 02-2区第1面ビット群・井戸65・溝66・土坑67出土土器

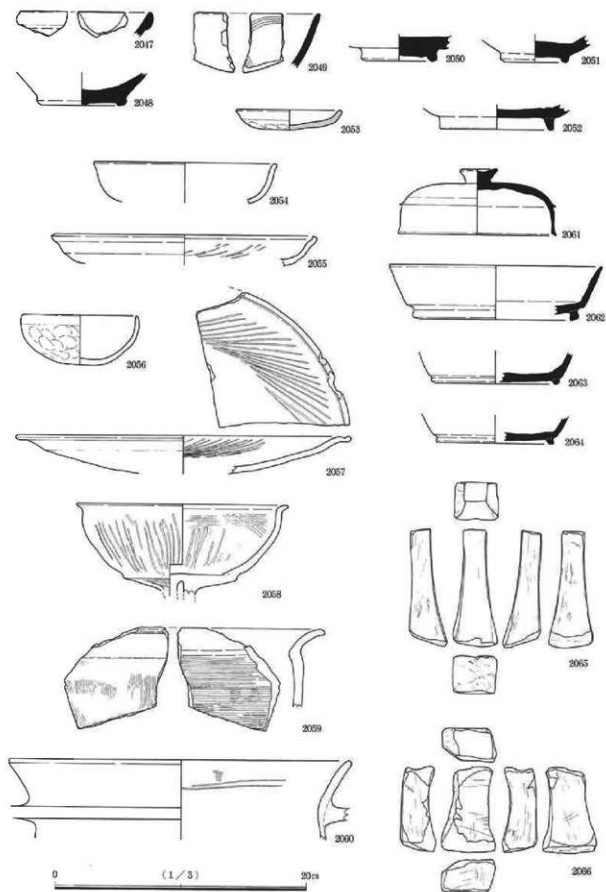


图 57 02-2区第1層出土遺物

(5) 02-2区第1層の遺物(図57)

土師器1774片、須恵器580片、瓦器245片、瓦質土器24片、瓦20片、製塩土器19片、磁器12片、陶器12片、黒色土器A類12片、黒色土器B類5片、その他、サヌカイト剥片7点、弥生土器3片、砥石2点、焼土塊2点、無蒸石蔥の破片1点、獣歯1点、計2719点の遺物が出土した。

図57-2047・2048は白磁碗。玉縁の口縁部(2047)と削り出し高台の底部(2048)。2049-2051は青磁碗。2050・2051は断面四角形の削り出し高台の部分で、高台部壘付とその内側は露胎である。2052は貼付け輪高台の緑釉陶器碗。2053は瓦器皿。2054-2060の土師器では、奈良時代の杯(2054:平城宮土器Ⅱ)、皿(2055:平城宮土器Ⅲ)、高杯(2057:平城宮土器Ⅱ)、甕(2059)、羽釜(2060)とそれらより古い様相をもつ杯(2056:写真図版20)や高杯(2058)を図化した。2061-2064は須恵器。古墳時代中期の有蓋高杯蓋(2061:T K216-T K208型式)もあるが、杯(2062-2064)など奈良時代のものが主体を占める。2065・2066(写真図版20)は砥石。両者とも花崗岩で、2065は87.2g、2066は85.8g。

以上、図化できた土器は奈良時代のものが多い。しかし、02-2区第1層には磁器から弥生土器まで各時代の遺物が含まれ、なかでも平安時代前半の土師器やそれらと時期的に矛盾しない黒色土器A類や須恵器が多くみられる。

(6) 02-2区第2面(図58・写真図版18)[第Ⅱ・Ⅲ面相当]の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.9~7.1m。溝13条、土坑3基、ピット52個、落ち込み2カ所、計70ヶ所の遺構(番号288~357)を検出した。

特に調査区北西部には、南北にのびる溝297、直角に曲がる溝290、南北に並ぶピット群などの遺構が多くみられる。ただし、掘立柱建物などを復元するには至らない。

個々の溝のデータは、表10にまとめた。

土坑350(図59・写真図版18)は、掘形東西径1.8m、深さ56cm。出土遺物は土師器77片、須恵器16片、製塩土器6片、瓦器7片、瓦2片、黒色土器A類2片、計110片。図60-2067-2072(写真図版21)は瓦器皿。2073は土師器杯。須恵器には、甕(2074)、壺底部(2075)などがある。2077の平瓦は須恵質で、

表10 02-2区第2面の溝一覧

溝番号	グランド	主軸方向	寸法			埋土 (全てシルト)	出土遺物						時期			
			検出長 m	幅 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒B	黒A	土師	須恵		その他	合計	
290	X82, 他	北北西-東西	(6.5)	13~25	10											
291	X93	北北東-東西	2.3	18~45	9											
292	X94	北北西	1.5	18~25	3											
293	X82	東西	1.5	23~30	3											
294	X83	北	0.7	14~18	4											
295	X93	北北西	2.3	13~20	8											
297	X82, 他	北	(10.8)	30~50	32	暗灰黄2.5Y4/2	2				57	3		62	平安後半	
344	X115	西北西	(1.7)	23~55	11	灰黄褐10YR4/2			1		1			2	平安前半	
348	X116	北	(1.9)	25~40	13	暗灰N3/	1				22		製塩1	25	平安後半	
352	X119, 他	北	(3.5)	47~91	30	暗灰黄2.5Y4/2粘土質					16	4		20	古代	
353	X120, 他	北	(5.9)	8~90	33	黒褐2.5Y3/1粘土質 (黄灰2.5Y6/1ブロック入る) (カタランのような汚い溝)						5		5		

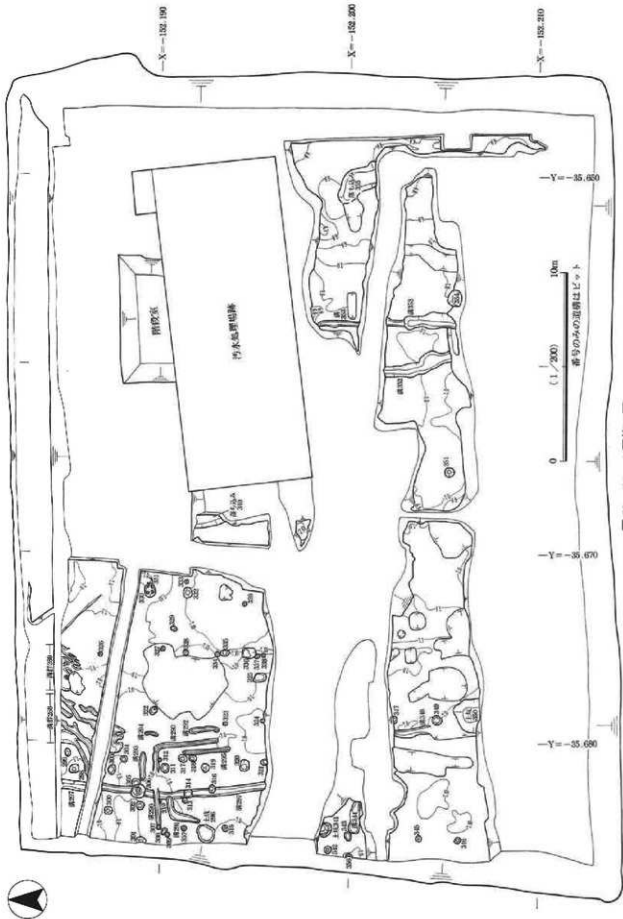


図58 02-2区第2面

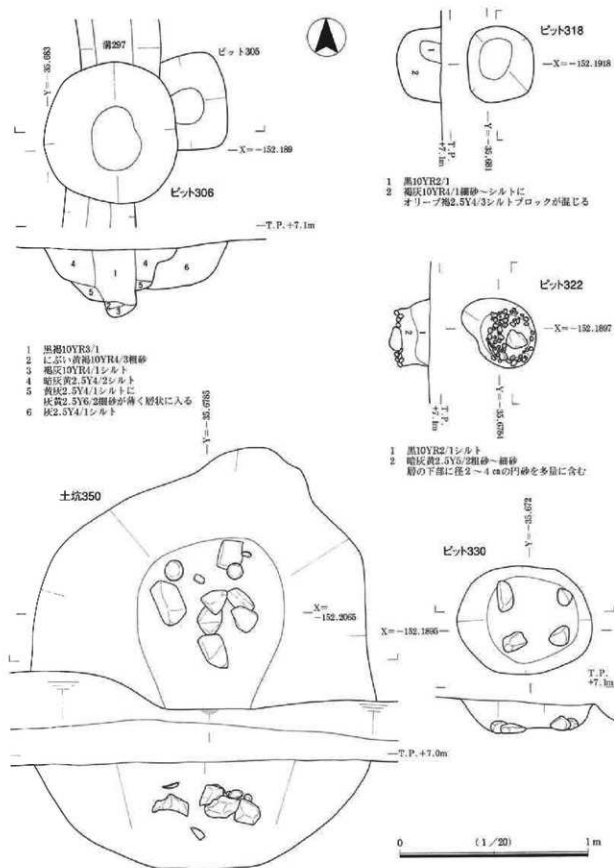


図59 02-2区第2面ピット306・318・322・330、土坑350

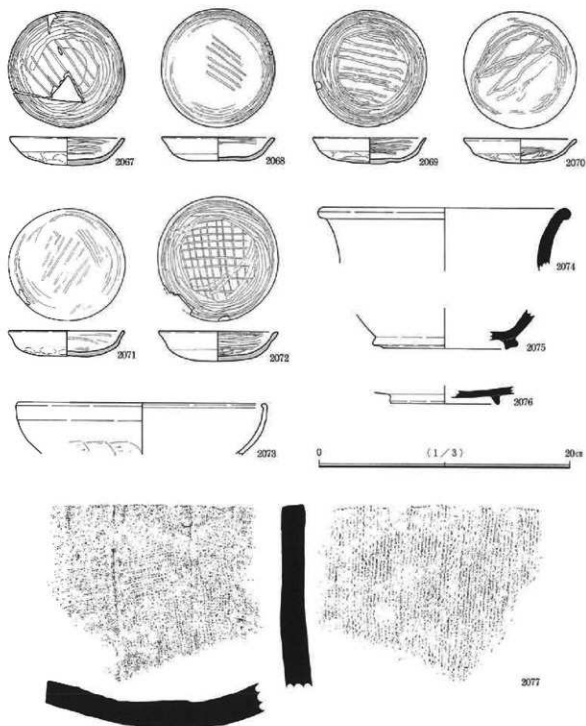


图60 02-2区第2面土坑350出土遺物

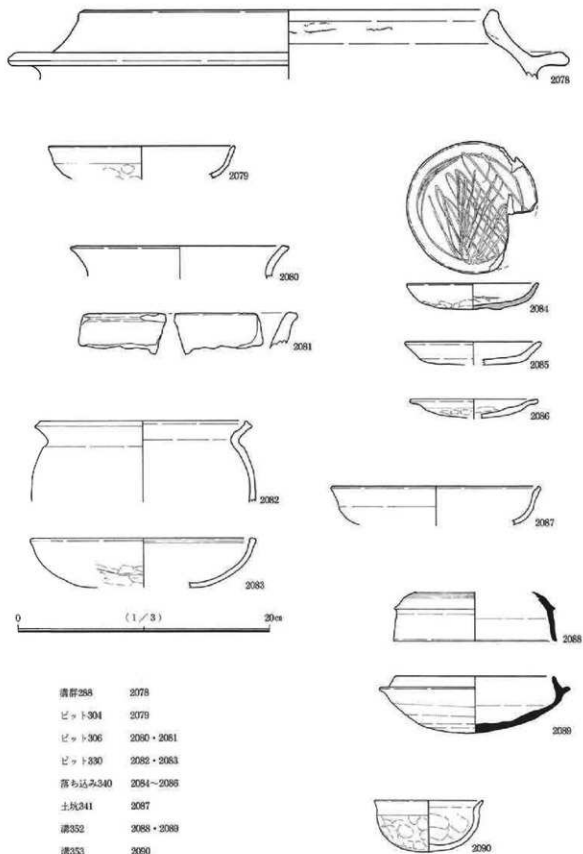


図 61 02-2区第2面溝群・ビット群・落ち込み340・土坑341出土土器

表11 02-2区第2面の土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						時期		
				長径 cm	短径 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒土 A	黒土 B	黒土 C	須恵		その他	合計
土坑296	X93, 他	不整形		95	84	24	黒褐10YR3/1(褐灰2.5Y4/1混じる)					20	1	製塩2	23	古代
ピット298	X82	隅丸方	北	48	40	28	黒褐10YR3/1					3	2	5	5	古代
ピット299	X82	楕円	東北東	36	29	13	黒褐10YR3/1					1	1	2	2	古代
ピット300	X82	隅丸方	北北東	38	35	16	黒褐2.5Y3/1					4		4	4	古代
ピット301	X81	不整形	北	48	(25)	22	暗灰黄2.5Y4/2					8		8	8	古代
ピット302	X82	円		43	40	14	暗灰黄2.5Y4/2					8		8	8	古代
ピット303	X82	楕円	北西	53	37	21	黒褐10YR3/1					11	1	12	12	古代
ピット304	X82	円		34	33	24	黒褐10YR3/1					2		2	2	古代
ピット305	X82	隅丸方		51	(27)	26	黄灰2.5Y4/1					8		8	8	古代
ピット306	X82	不整形		75	70	38	団59				2		16	18	平安後半	
ピット307	X82, 他	不整形		21	18	9	黒褐10YR3/1, オリーブ褐2.5Y4/3(炭含む)									
ピット308	X93	楕円	北西	40	(24)	21	黒褐10YR3/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック含む)					1		1	1	古代
ピット309	X93, 他	円		25	21	8	黒褐10YR3/1					2		2	2	古代
ピット310	X93	楕円	東西	14	8	7	黒褐10YR3/1			1				土玉1	2	平安中頃
ピット311	X93	楕円	西北西	44	36	26	黒褐10YR3/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック)					9	1	10	10	古代
ピット312	X93, 他	円		19	17	12	黒10YR2/1					1		1	1	古代
ピット313	X93	円		26	24	18	黒褐10YR3/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック含む)					8		8	8	古代
ピット314	X93	隅丸方	北	42	36	19	黄褐2.5Y6/3 (黒褐10YR3/1ブロック含む)					4		4	4	古代
ピット315	X93	円		28	28	19	黒褐10YR3/1			1	3			4	平安前半	
ピット316	X93	楕円	東西	40	34	19	黒10YR2/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック含む)					14	2	製塩2	18	古代
ピット317	X93	楕円	北北東	45	36	26	黒10YR2/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック含む)					13		製塩2	15	古代
ピット318	X93	隅丸方	北	36	30	23	団59					5	1	6	6	古代
ピット319	X93	円		42	39	36	黒10YR2/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック含む)					1		1	1	土塊2
ピット320	X93	隅丸方	西北西	56	45	23	黒褐10YR3/1 (黒褐2.5Y3/1多く含む)					3		3	3	古代
ピット321	X104	楕円	北	(30)	27	15	黒10YR2/1					1		製塩1	2	古代
ピット322	X83	不整形	北西	44	34	17	団59			6	1	2	23	2	2	平安中頃
ピット323	X94	円		15	14	3	黒褐10YR3/1									
ピット324	X105	楕円	北	(20)	18	15	黒褐10YR3/1					4		4	4	古代
ピット325	X105	隅丸方	北	53	40	8	オリーブ褐2.5Y4/3, 灰10Y4/1					7		7	7	古代
ピット326	X83	円		21	18	14	暗灰黄2.5Y4/2					5	1	6	6	古代
ピット327	X94	円		21	17	5	黒褐10YR3/1					1		1	1	古代
ピット328	X94	円		24	23	9	黒褐10YR3/1					12	1	13	13	古代
ピット329	X95	楕円	北北東	33	21	5	褐灰10YR4/1 (オリーブ褐2.5Y4/3ブロック含む)									
ピット330	X84	楕円	東西	72	57	18	褐灰10YR4/1					15	3	18	18	古代
ピット331	X84	円		25	(14)	9	褐灰10YR4/1									
ピット332	X95	楕円	東北東	51	45	40	褐灰10YR4/1					33	2	35	35	古代
ピット333	X95	円		16	14	10	黒褐10YR3/1									
ピット334	X94	隅丸方		24	23	12	褐灰10YR4/1									
ピット335	X94	楕円	北北西	46	33	41	黒褐10YR3/1(下部に溜まる) オリーブ褐2.5Y4/3ブロック多く含む					12	1	13	13	古代
ピット336	X94	不整形	北	65	53	10	黒褐10YR3/1 (暗灰黄2.5Y4/2ブロック含む)				1	14	3	18	18	平安前半
ピット337	X105	楕円	北西	25	15	6	黒褐10YR3/1					1		1	1	古代
ピット338	X105	円		13	11	6	黒褐10YR3/1					4		4	4	古代
ピット339	X95	円		21	16	12	黒褐10YR3/1									

表11 02-2区第2面の土坑・ピット一覧(2)

遺構 番号	グリッド	平面形	主軸 方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						時期		
				長さ cm	短径 cm	深さ cm		瓦 器	瓦 質	黒 土 器	黒 土 器	須 恵	その他		合 計	
土坑341	X104	不整形	北西	82	(54)	44	上部:黄灰2.5Y4/1 下部:黒埴2.5Y3/1 (上部と下部の間に黄灰2.5Y6/1細砂 が層となっている)					7	1		8	古代
ピット342	X103	円		36	36	14	黒埴2.5Y3/1					2			2	古代
ピット343	X104, 他	楕円	東西	44	30	6	黒10YR2/1(炭含む)					2		製埴1	3	古代
ピット345	X115, 他	円		26	25	16	黒埴10YR2/1 (オリーブ埴2.5Y4/3ブロック含む, 炭を含む)	1				10	1		12	平安後半
ピット346	X125	円		29	25	13	黒10YR2/1(炭含む)				1	7		製埴1	9	平安前半
ピット347	X116	楕円	東西	32	17	10	黒埴10YR3/1					7	2		9	古代
ピット349	X116	不整形		47	47	13	灰5Y4/1粘土 (黄灰2.5Y5/1層になって入る)					5		製埴1	6	古代
土坑350	X127	不整形	北	175	(138)	67	埴灰N3・粘土質 (埴灰黄2.5Y4/2ブロック含む下層に径 5cm程度の白磁多く含む)	7			2	77	16	瓦2 製埴6	110	平安後半
ピット351	X129	円		48	47	31	埴灰N3/(内イカクランの層なもの)									
ピット353	X131	不整形		80	72	35	黒埴10YR3/1									
ピット356	X103, 他	円		30	(12)	24	灰黄埴10YR5/2					1			1	古代
ピット357	X93	円		25	23	10	黒埴2.5Y3/1									

凸面縄タタキ、凹面布目。特に瓦器皿から、土坑350は平安時代末に位置付けられる。

ピットのうち、ピット322(図59・写真図版18)では底面中央に石を据え、その周囲に径約2cmの小石が敷き詰めてあった。ピット330(図59・写真図版18)では底面の四隅に拳大の石が据えてあった。個々の土坑・ピットは表11にまとめた。

第2面の遺構出土遺物には、調査区北西部に位置する溝群288の土師器羽釜(図61-2078)、ピット304の土師器杯(2079)、ピット306(図59)の土師器甕(2080・2081)、ピット330の土師器の甕(2082)や杯(2083)、落ち込み340の瓦器皿(2084:写真図版21)や土師器皿(2085・2086)、土坑341の土師器杯(2087)、溝352の古墳時代の須恵器杯蓋(2088)と杯(2089)、溝353の土師器碗(2090:写真図版21)などがある。

02-2区第2面は、第1面と同様に平安時代の遺構面だが、第1面の遺構よりも黒色土器B類や瓦器の比率が小さく、同じ平安時代でも時期が若干遅る傾向がある。

(7) 02-2区第2層の遺物(図62)

土師器362片、須恵器57片、黒色土器A類2片、瓦器1片、製埴土器1片、土鍾1点、陶器1片、弥生土器25片、サヌカイト剥片3点、計453点の遺物が出土した。

図62-2091~2097は土師器。奈良時代の皿(2091)・甕(2092)や、古墳時代の甕(2093~2095)・高杯(2097)がみられる。2095は受け口状口縁の甕。2096は復元口径11.5cmの小形甕。口縁端部に面をもち、その両端は非常にシャープな稜線をなす。胎土は生駒山西黄産。2098は須恵器甕の底部。2099は古墳時代後期(TK43型式)の須恵器杯。2100(写真図版21)は円筒状の土鍾。

図化できなかった遺物も含めて、02-2区第2層は古墳時代~平安時代の包含層。時期の判明する須恵器は古墳時代が主となる。土師器は平安時代以前の各時期に及ぶが、古式土師器が比較的多い。

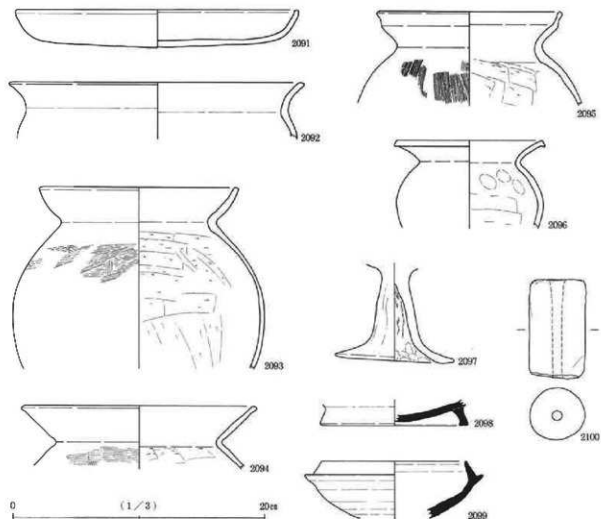


図62 O2-2区第2層出土遺物

(8) O2-2区第3面 (図63・写真図版19) [第V面相当]

「小阪合分流路跡」流路充填堆積物の上面。面の高さはT.P.+6.3~6.7mで起伏に富むが、検出遺構はない。第1次調査の第V面に相当する。

(9) O2-2区第3層の遺構と遺物 (図65~73)

O2-2区第3層は、小阪合分流路の充填堆積物の砂礫層である。この調査区では北北西に流下しており、トラフ型斜行層理がみられる (図64・写真図版19)。なお、古植生変遷を分析するために土壌サンプル (サンプル1-15) を採取した (第8章参照)。

第3層 [T.P.+6.0~4.6m] 中から検出した杭や流木を杭群371 (図65~68・写真図版19) として記録した。杭が列状に並ぶのは次のA~Dの4か所。

杭列A (図66) は南南西から北北東に約2.7m、10数本並ぶ。砂層中で検出され、打設面は判然としない。大半の杭 (長さ20~60cm) は頭 (上部) が西、先端 (下部) が東にあるが、140cm程度の長い2本の杭は先端が西にある。杭列北部から西へ引がかかったように横たわるのはミズキ、杭列内の比較的太

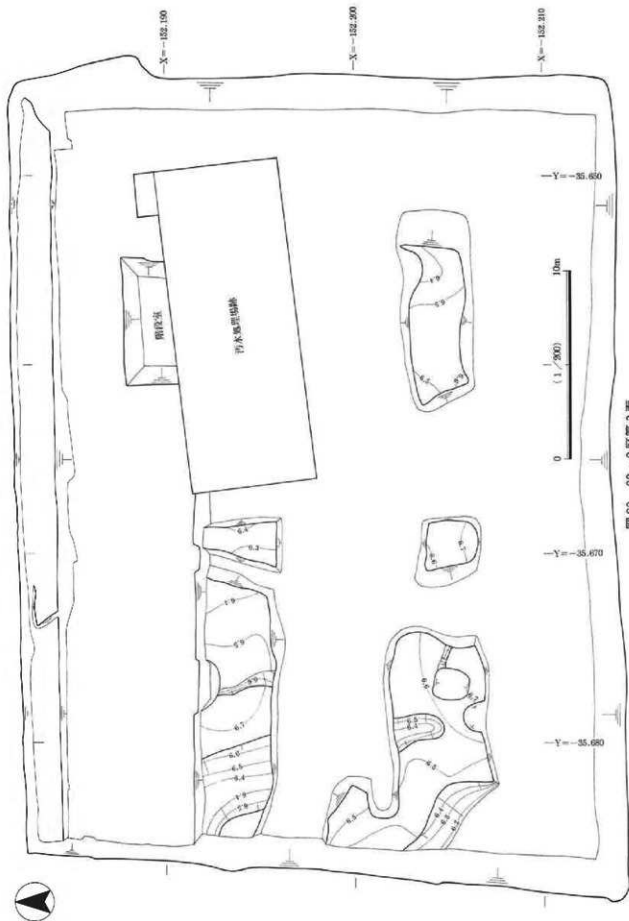


図 63 02-2区第3面

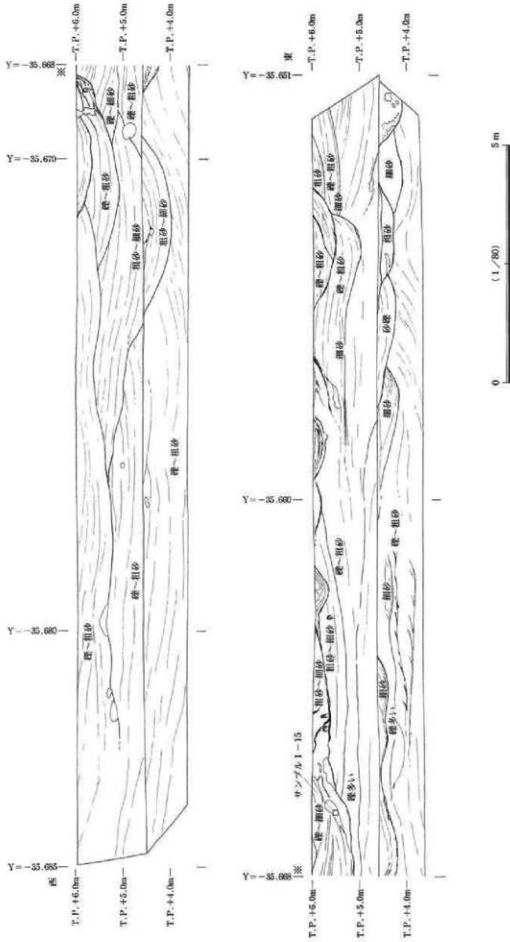


図 64 02-2 区第 3 層 (深路充填地預物) 層理のスケッチ

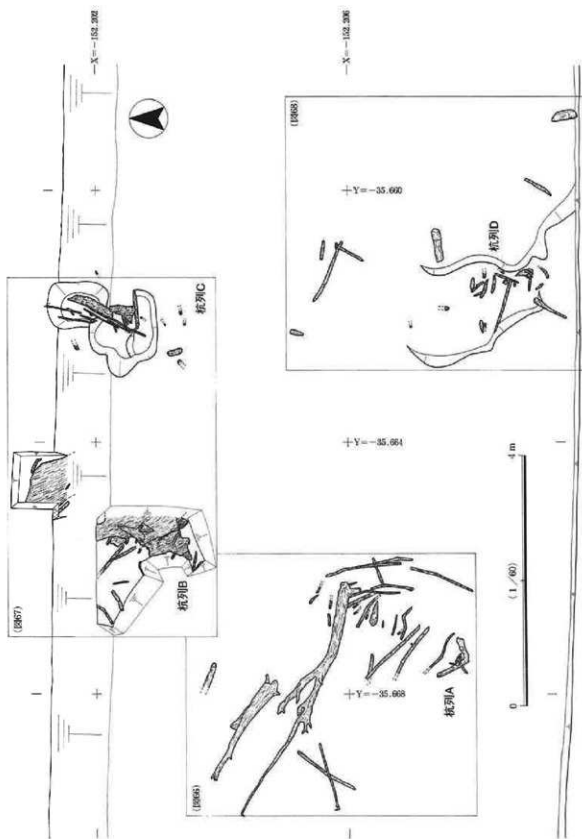


图 65 02-2区第3層中坑群371 (全体)

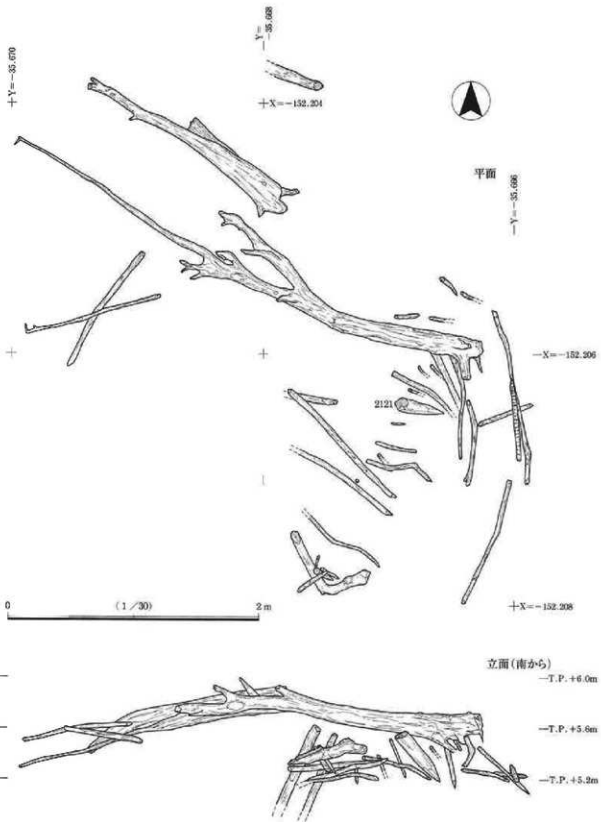


図66 02-2区第3層中杭群371 (杭列A)

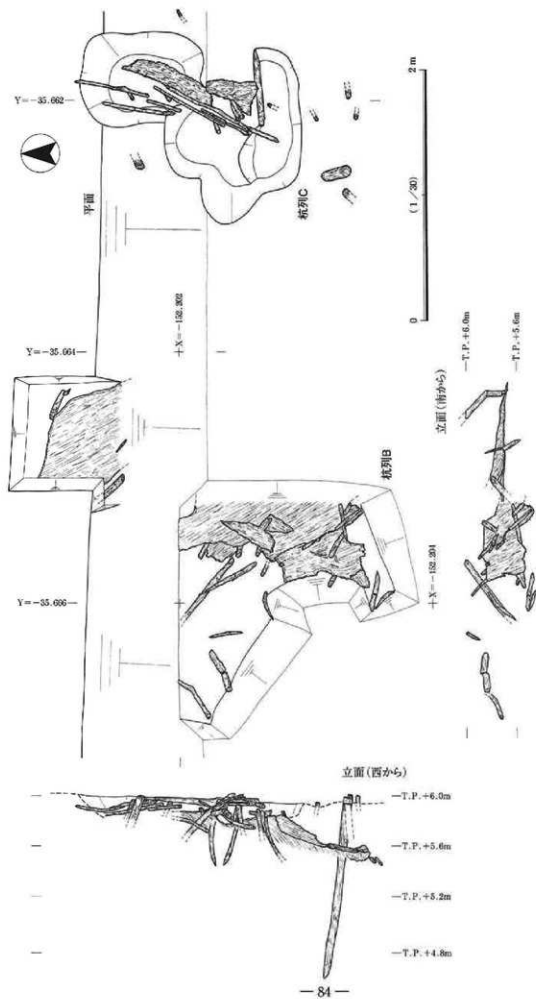


図 67 02-2区第3層中柱群 371 (柱列B・C)

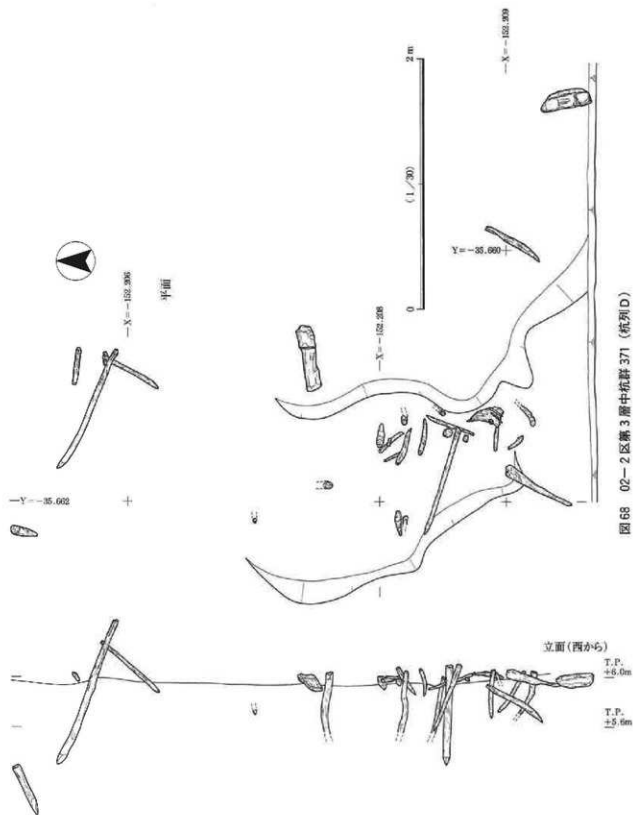


图 68 02—2 区第 3 層中杭群 371 (統列 D)

い杭（図71-2121）はヤナギ属である。杭列B（図67の西部）も杭列Aと同方向に約2.5m、10本弱並ぶ。大半の杭の先端は東にある。杭の長さは30~80cm以上。杭列東側では、敷物状のイネ科の茎が南東に傾斜して敷かれたような状態であった。杭列AとBとの間1.7mでは杭を検出できなかったが、並びと杭の傾斜が一致するので、杭列AとBは一連であった可能性が高い。

杭列C（図67の東部）を第3層中の砂礫層上面のくぼみにシルトが溜まった部分で検出した。南北に25~60cm程度の杭が数本並び、その上端のレベルで縦杭に挟まれるように板状の材や杭がほぼ水平に置かれている。杭列の東側に敷物状のイネ科の茎が残っていた。

杭列D（図68）はほぼ南北に約3.5m、10数本並ぶ。杭列Cと同様に第3層中の砂礫層に打ち込まれ、杭上部はシルト層に埋まっていた。杭の向きは杭群Aと同様に、30~60cmの杭の大半は頭を西、先端を東とするが、140cmほどの長い2本の杭は先端を西とする。杭列Dの東側にも、20×30cm程と小さいながら敷物状のイネ科の茎がみられた。

以上、杭群371は、小阪合分流路がある程度埋まった段階での流水制御施設であろう。

第3層は、第3面（T.P.+6.3~6.7m）から掘削限界（T.P.+3.6m）まで約3mの層厚があるので、掘削深度に応じて、以下のように、〔第3面（T.P.+6.3~6.7m）~T.P.+6.0m〕、〔T.P.+6.0~4.6m〕、〔T.P.+4.6~3.6m〕の3つの層に区分して遺物を取り上げた。

第3層〔第3面~T.P.+6.0m〕から、土師器210片、弥生土器155片、瓦器2片、須恵器2片、土錘1点、サヌカイト剥片15点、計386点の遺物が出土した。

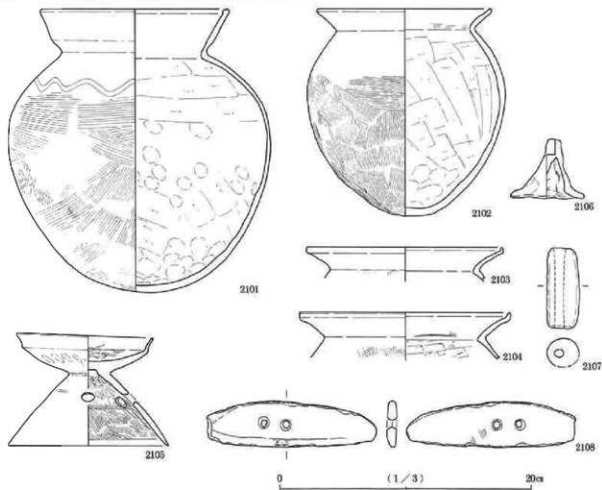


図69 02-2区第3層〔第3面~T.P.+6.0m〕出土遺物

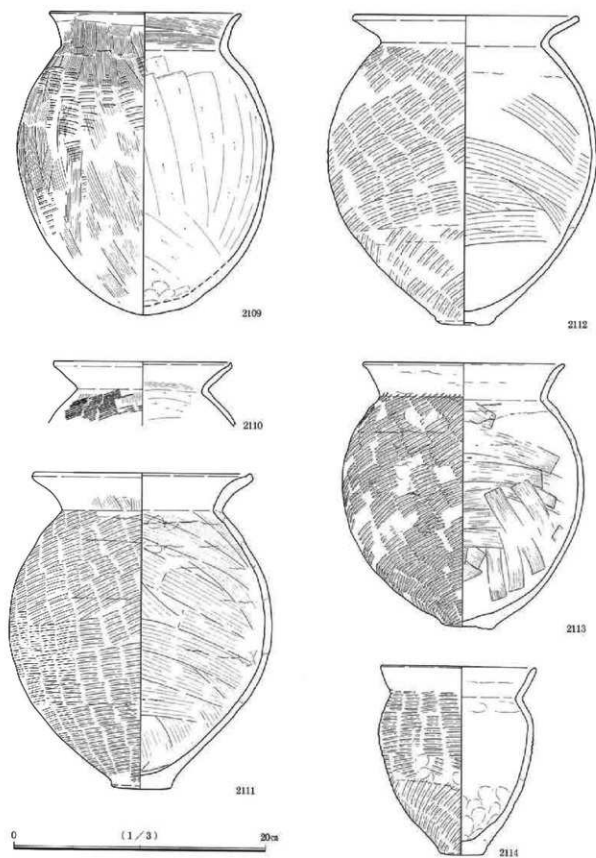


図70 02-2区第3層 [T.P.+6.0~4.6m] 出土遺物 (1)

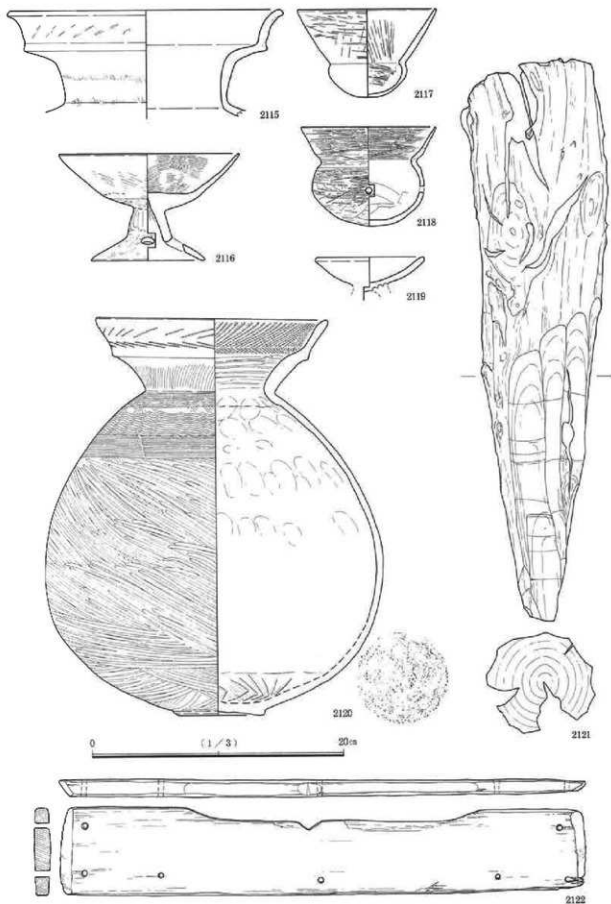


図71 02-2区第3層〔T.P.+6.0~4.6m〕出土遺物(2)

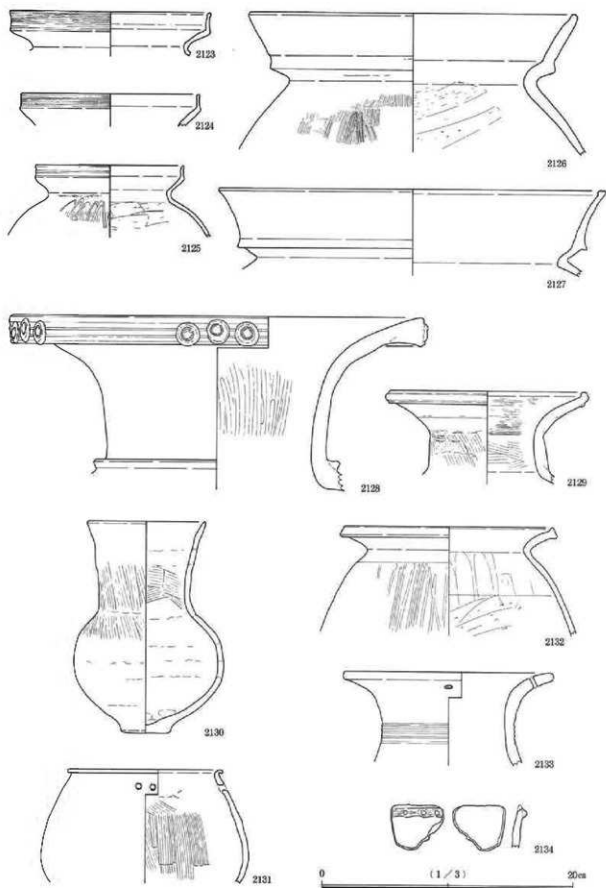


図72 02-2区第3層 (T.P.+6.0~4.6m) 出土遺物 (3)

図69-2101(写真図版22)は布留式併行の山陰系の甕。肩部に波状沈線が一条巡る。胎土は乳褐色。2102(写真図版22)は布留傾向甕。体部外面下半のハケメが明瞭。2103・2104は庄内式甕の口縁部。両者とも胎土は生駒山西麓産。2105(写真図版22)は口縁端部が外反する小形器台。布留式に属する。2106(写真図版22)は手づくね土器。傘形の蓋あるいは鉢の模造品であろう。2107(写真図版22)は土鉢。2108(写真図版22)は紡錘形石包丁。背・刃ともに潰れ痕がある。粘板岩製で、63.8g。

第3層〔T.P.+6.0~4.6m〕では、弥生土器1042片、土師器465片、サヌカイト剥片27点、瓦器1片、須恵器1片、モモ核6点、計1542点出土した。

図70-2109(写真図版23)は布留式後半の甕。2110は庄内式甕。胎土は生駒山西麓産。2111~2114(写真図版23)は弥生形の甕。外面に右上がりのタタキが、内面にはハケが施される。体部下半の分割成形が明瞭にわかる。図71-2115は複合口縁壺。2116は布留式の高杯。杯部底部外面にはケズリの痕が残り、杯部内外面のハケも粗い。2117・2118(写真図版23)は小形九底土器。2119は小形器台。

2120・2123~2127は外來系土器。2120(写真図版24)は柳ヶ坪壺型と呼ばれる東海地方の広口壺。口縁部は有段で、内外面に羽状の列点文が施される。体部上半はクシ描きの直線文(横線文)と波状文で飾られる。体部最大径は体部下半にありいわゆる下ぶくれである。木葉底。布留式に併行する廻面Ⅲ式に属する。図72-2123~2125は吉備系(亀川上層式)の甕。2126・2127は山陰系と考えられる複合口縁壺。

2121は杭群371杭列A(図66)出土の杭。ヤナギ属。2122(写真図版24)も杭群371杭列A付近(X129グリッド)出土の木器。紐結合の箱の側板といわれる部材に類似する。材質はスギ。

2128~2133は弥生土器。口縁端部が凹線文と3個一単位の円形竹管浮文で加飾された後期前半の広口壺(2128)、中期末~後期前半と考えられる広口壺(2129)、後期でも後半に属する長頸壺(2130;写真図版23)、中期後半の無頸壺(2131)や甕(2132)、前期の広口壺(2133)などがある。このうち2128・2131・2133の胎土は生駒山西麓産。2134は刻目突帯文土器。口縁部からわずかに下がった所に、軽いD字のキザミが施された突帯が付く。これら第3層に含まれる弥生土器や刻目突帯文土器は磨耗が著しい。

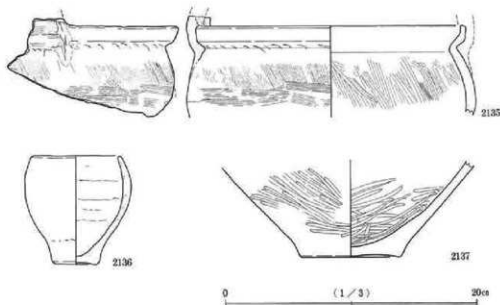


図73 02-2区第3層〔T.P.+4.6~3.6m〕出土土器

第3層〔T.P.+4.6～3.6m〕からは、弥生土器143片、土師器26片、突帯文土器1片、サヌカイト剥片・テップ7点、計177点の遺物が出土した。

図73-2135（写真図版24）は手焙形土器。鉢の上部に覆いが付く。弥生時代末～庄内式期に類例が多い。2136（写真図版24）は弥生時代の小形甕。水流によるローリングが著しく、口縁とした部分は偽口縁かもしれない。2137は弥生土器の底部。底部から体部への広がり具合と器厚から、前期の壺と推定する。胎土は生駒山西麓産。

以上のように、02-2区第3層は、弥生時代後期～布留式期を主体とする土器を多く含む。各時期の弥生土器やサヌカイト剥片も含まれるが、水流によるローリングが著しい。

この第3層中で02-2区の調査予定深度であるおよそT.P.+3.6mに達したが、この砂礫層はさらに下層に続く。

(10) 02-2区「階段室」

階段室は、02-2区の北東部、汚水処理施設の北側部分にあたる。発掘調査後、高層公団住宅の階段室を建設する部分である。02-3区では公団住宅の本体と階段室とは一連の調査範囲であるが、02-2区では、汚水処理施設により分断される格好となるため、特に「階段室」と呼称する。階段室は、調査面積が狭く、汚水処理施設と埋設管による攪乱を受けているために、他調査区のような面的な発掘が困難であった。そこで、02-2区と02-4区とのつながりを検討するための断面観察および遺物回収に重点を置き調査した。

「階段室」からは各層一括で、土師器17片、須恵器7片、瓦器4片、瓦3片、緑釉陶器1片、銭1点、計33点が出土した。土師器・須恵器は細片だが、古代を主とし古墳時代のものも含まれる。瓦も細片だが、うち1点は凹面に布目のみられる丸瓦。銭は半欠の上、遺存状況も悪く銘は判読できない。

第4章 02-3区の調査成果

第1節 層序

攪乱層・旧耕作土 現況地盤約T.P.+8.5mの地表面を覆う層で、現代の整地土や公団住宅の基礎・配管などの地下埋設物を含む。特に配管等は調査区の縦横に渡って配されており、深さは第⑥層まで達するものである。旧耕作土は一部にしかなく、ほとんど攪乱層によって削られているため下面遺構は検出されていない。

①・② ①はにぶい黄褐色シルト層からなる層で、②はにぶい黄褐色・灰色シルトからなる。①・②ともに調査区の西半部に厚く、東半部に薄く堆積していた。これは西から東へと傾斜をもって堆積しているのではなく、中央部で段差をもつ地形となっている。①を除去した面を1面とした。東半部では包含層が薄く、第2面相当の遺構も同時に検出された。第1面のレベルは調査区西半部でT.P.+7.5m、東半部はT.P.+7.3~7.2mである。②を除去し検出された遺構面を第2面とした。第2面のレベルはT.P.+7.1m前後である。

③ 調査区に広く堆積する遺物包含層で、褐灰色~黒褐灰色シルトからなる。1区よりつながる包含層であるが、ここでの層厚は0.1m程度である。奈良・平安時代の遺物を大量に含む。これを除去し、第3面とした。第3面のレベルはT.P.+7.0m前後である。

④ 第3面の基盤層となる、にぶい黄褐色シルト層である。これを除去した面を第4面とした。第4面のレベルはT.P.+6.8m前後である。調査区中央部は灰色粘質土が広がり、落ち込みとして検出した。

⑤ 第4面の基盤層となっているが、斜行条線などがみられる洪水堆積層である。砂質の強い灰色シルトを呈する。これを除去した面で掘り残しの遺構がないか確認し、コンター図を作成した。

⑥・⑦ ⑥・⑦ともに粗砂を中心とする洪水堆積層である。⑥は粗い黄褐色礫砂層からなり、厚さ1.6mに及ぶ。⑦は灰白色極粗砂~細砂からなり、上層より細かい砂が堆積しているものである。これらの層では洪水によって流されてきたと考えられる古墳時代の遺物が多数出土している。また杭列が検出されている。

⑧~⑬ 調査区の一部にトレンチを設定し、粗砂洪水堆積層の底面T.P.+4.8m以下の遺構の確認を行った。灰色~オリーブ灰色・暗青灰色を呈するシルト~粘土からなる層で、上層より検出した塚の一部が打ち込まれているほかは、遺構や遺物はみいだされなかった。

各層とも土壌サンプルを採取している。

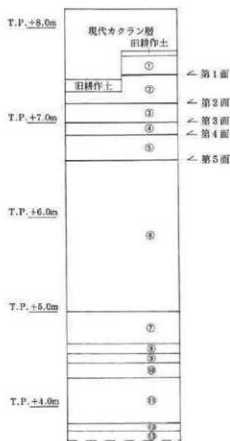


図74 02-3区層序模式図

第2節 遺構

(1) 02-3区第1面

第1面は擾乱・旧耕作土層下の、にぶい黄褐色シルト層を除去して検出した面である。調査区西半部と東半部では現存する遺構面の高さが異なっており、西半部でT.P.+7.5m、東半部でT.P.+7.3~7.2mとなっている。上層での削平等によるものと考えられるが、結果東半部では下がった地点で遺構を確認したため下面相当の遺構も同時に検出した。西半部との遺構の連続性を考慮して、第1面相当遺構として報告する。

溝601~605(図76) 溝601・603~605は東西方向に並ぶ溝で、調査区中央部南北方向に位置する溝602を中心として交互に配される。溝601~603の深さは25~50cm、溝604・605の深さは20~40cmで、東側の遺構は残存状況が悪いため深度が浅くなっている。溝601・604は幅7m程、溝602は幅3.2mである。他の溝は擾乱によって遺構の掘り込みが検出できず正確な幅は不明である。いずれの溝も肩部に黄褐色砂質土~礫砂を伴っており、それらの砂土で一度埋まったものを再掘削し使用されたと考えられる。また溝601・605と溝602の切り合い関係は見いだされなかった。

溝に挟まれた平坦面は台状を呈しており、ピット等の遺構は見られなかった。調査区全体に渡るこれらの遺構の状況から、溝部分を水田面、台状の部分が島島と考えられる。水田・島島が南北方向に並列し、東西方向に交互に配置されるものである。

また溝602は第2面調査時に溝の最下層を検出した。溝が一度埋まった後再び掘削された小溝と下層を掘り分けていたことになってしまったが、溝の規模の縮小によって溝の機能が変化したものと考えられる。中央の溝602は下層では水田面であったものが、埋没後再掘削されたときには水路などの小溝として機能する少なくとも二時期があったと推定される。

(2) 02-3区第2面

第2面はにぶい黄褐色・灰色シルト層を除去した面で、下層の褐灰色~黒褐灰色シルト層を基盤層とする。第2面のレベルはT.P.+7.1m前後である。調査区東側では、遺構の残存状態が悪く、第1面調査時に第2面相当の遺構も同時に検出されたため、再精査して新たに遺構を検出した。また、調査区北辺・北西部は設計掘削深度に達し調査が終了したため空白となっている。

溝606・607・611~617(図78) 東西方向にのびる溝で、現存長は22.0~14.0mを検出した。幅1.0m~0.3m、深さ10~5cm。鋤溝と考えられる。調査区北東部分でも東西方向の畝など耕作痕と考えられる凹凸が検出された。

溝613・614(図78) は破片ながら土器などの遺物が多数出土し、鋤溝ではない可能性もある。

溝618~621・土坑622・ピット626は鋤溝群に切られており、溝群より下の遺構としてまとめて検出された。

(3) 02-3区第3面

第3面は第2面の基盤層である褐灰~黒褐灰色シルト層を除去して検出した面である。この層は奈良・平安時代の遺物を大量に含んでいるが、一部中世の遺物も見られる。井戸5基・土坑20基・落ち込み5ヶ所・ピット117個・溝30条を検出した。02-1区の第2・3面に相当するが、層厚が02-1区ほど

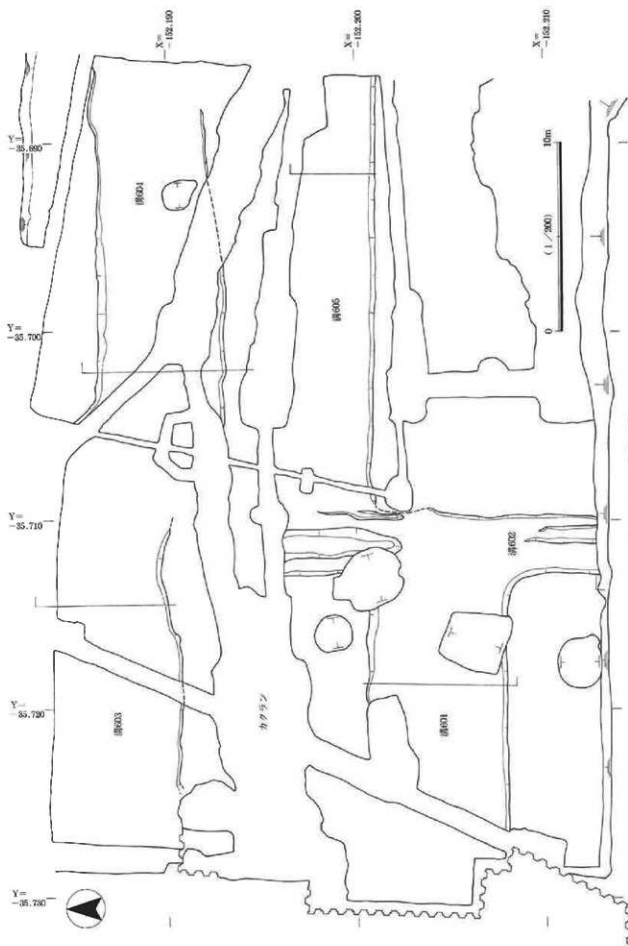


図75 02-3区第1面

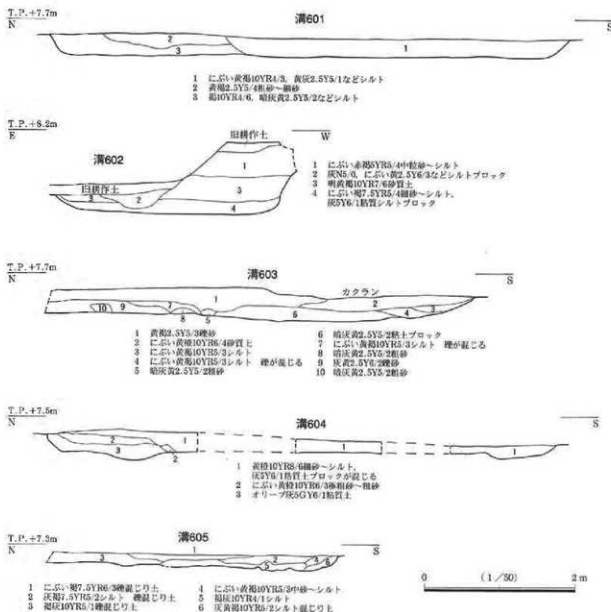


図76 02-3区第1面溝601～605断面

厚くなく層を分けることができなかった。また調査区南西では遺構が少なくなる傾向があり遺跡の中心は調査区北西側になるようである。レベルはT.P.+7.0m前後である。

井戸731・732(図80)は調査区南東に位置する。西側の井戸731は東西3.4m、南北2.7mの隅丸方形を呈し、検出深55cm。井戸枠などは検出されず素掘り井戸である。底部から火をうけた痕跡のある石が検出され、井戸廃絶後投棄されたものと考えられる。瓦や瓦器碗、黒色土器、土師皿などの遺物が出土している。東側の井戸732は東西2.45m、南北2.85mの楕円形で検出深0.9m。素掘り井戸。井戸の掘り方肩部や堀土なかほどの地点で完形の瓦器や土師器が多数出土した。

井戸781・783(図80)は調査区北東に所在する。井戸781は東西1.3m、南北1.4mの隅丸方形を呈する。深度は55cm。断面では中央に掘り込みがみられ小規模な井戸枠があった可能性があるが、現存しない。井戸783は東西2.3m、南北2.2mのほぼ円形を呈する。深度は70cm。素掘り井戸。瓦器碗などの遺物が出

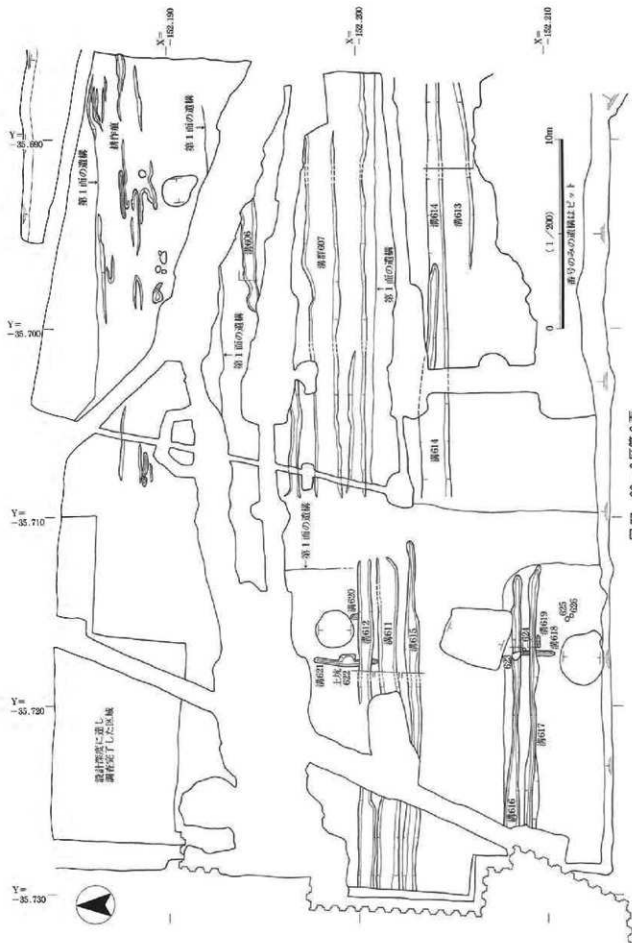


図 77 02-3区第2面

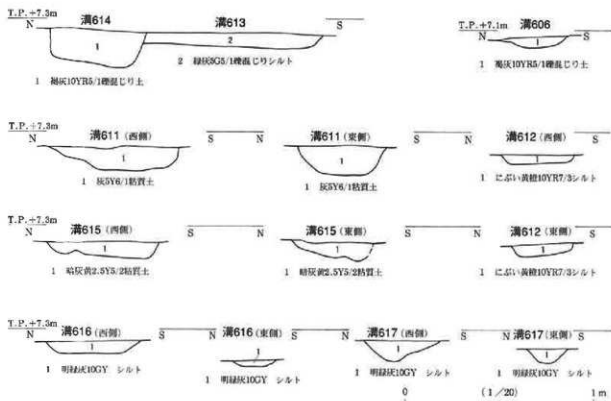


図78 02-3区第2面溝606・611～617断面

土した。

井戸654 (図80)は調査区北側中央からやや西に所在する。東西1.6m、南北1.6mの隅丸方形を呈する。深度は70cm。こまかいブロック土を埋土としている。素掘り井戸。

井戸683 (図80)は調査区西側中央に所在し、2.0×3.0m程の規模の不定形をなす。深度は65cm。埋土が大きなブロック土で、時期が新しいものの可能性がある。

土坑803 (図81)は調査区北東、溝788の東端に位置するが切り合い関係は不明である。最大幅1.0mの不定形を呈し、深度は10cmで底部は皿状の浅い土坑である。灰色5Y4/1粘質土を埋土とする。瓦片、土師器片が出土している。

土坑794 (図81)は2つのピットが切りあっている可能性がある。埋土は上層が黄灰色2.5Y6/1シルト、下層が黒褐色2.5Y3/1粘質土。火を受けた痕跡のある上面が平らな石が据えられており、礎石とおもわれる。

土坑740 (図81)は調査区北側の中央に位置する。最大径68cmのほぼ円形を呈する。深度は30cm。埋土は黒褐色10YR3/1シルトで下層は粘質が高い。深さ15cmの地点で羽釜が割られた状態で埋納されていた。

土坑692 (図82)は調査区南側中央に位置する。東西2.0m、南北2.0m以上あるものと考えられる。深度は30cm。ほぼ方形を呈するが、遺物などは出土しておらず、性格は不明である。

土坑728 (図82)は調査区南側中央よりやや東に位置する。東西1.6m、南北2.6mの方形で、深度は27cm。埋土は3層に分けられ、上から黄灰色2.5Y5/1シルト、黒褐色10YR3/1シルト、褐灰色10YR5/1シルト層となっている。中層は炭化物を多く含み、火を使用した跡の可能性がある。

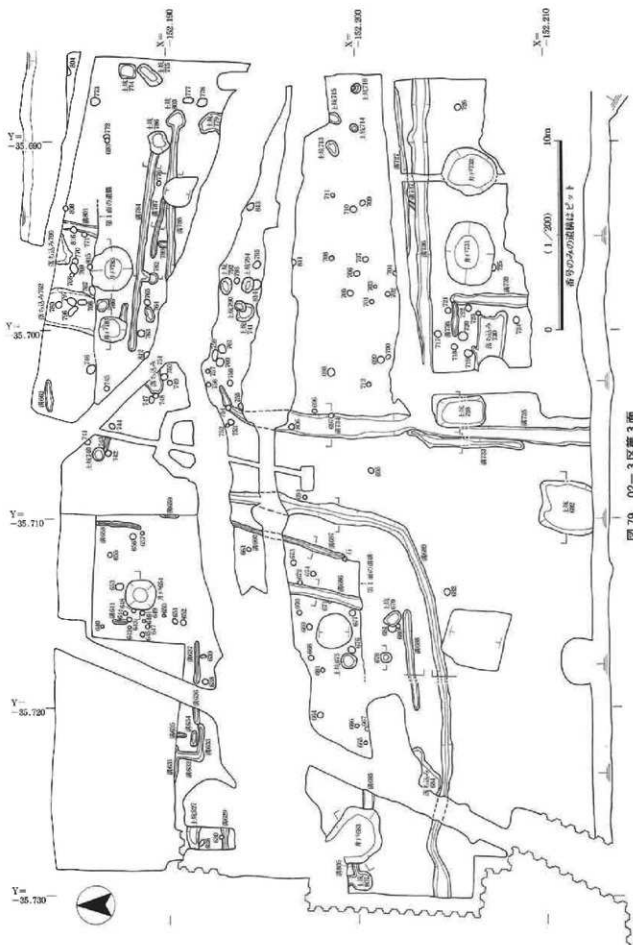


図79 02-3区第3面

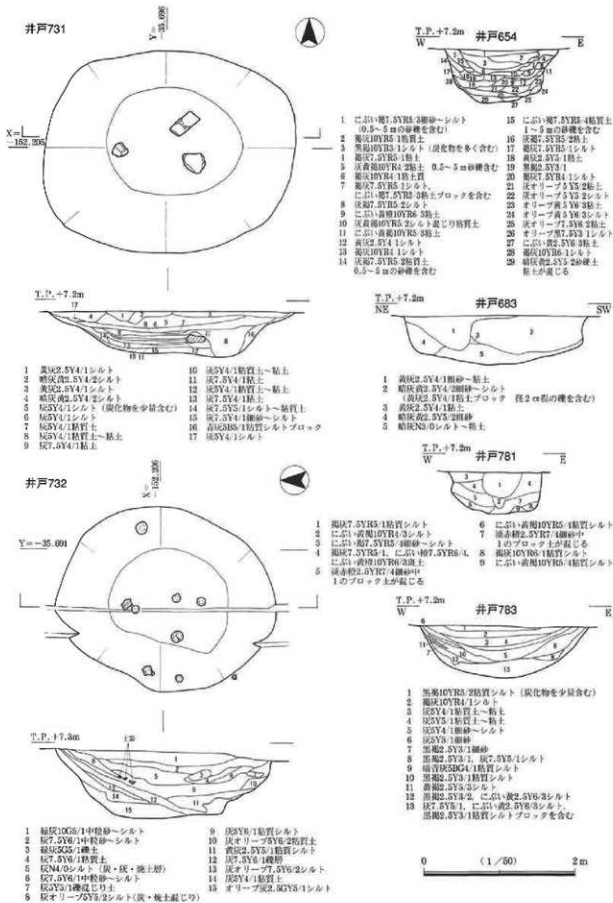


図80 02-13区第3面井戸654・683・731・732・781・783

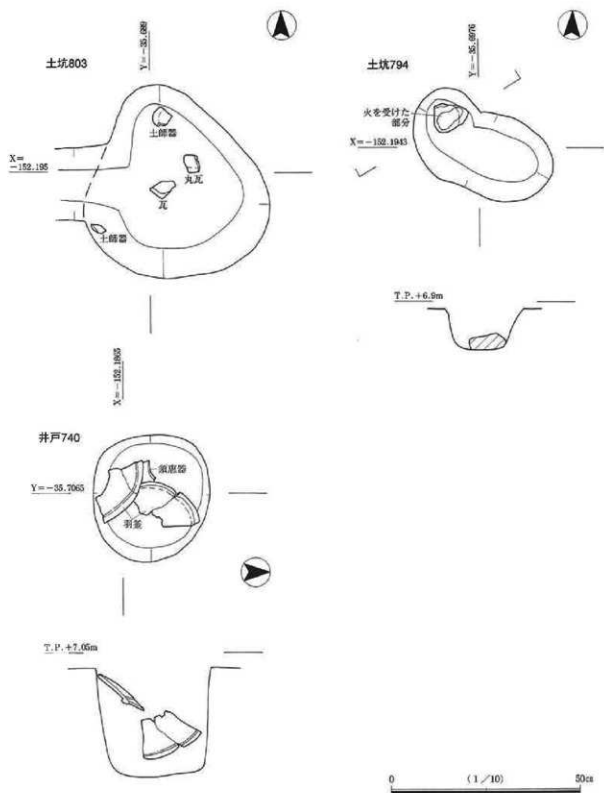


図 81 02-3区第3面土坑740・794・803

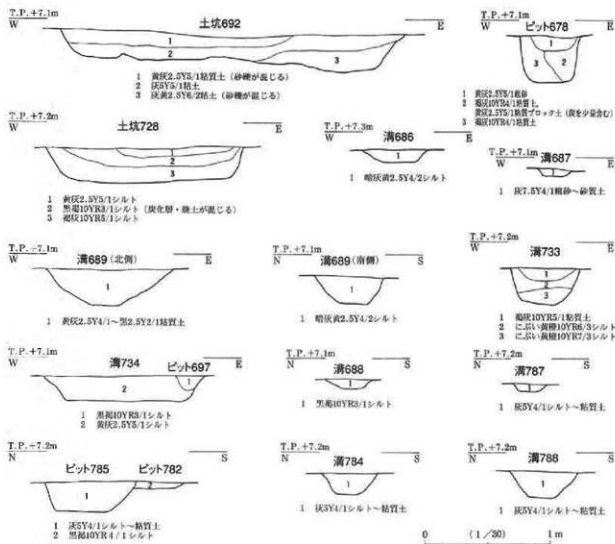


図82 02-3区第3面土坑群・ビット群・溝群断面

溝733・734・735 (図82・83)は調査区中央に南北に並ぶ溝で、溝734は最大幅1.2mで、長さ10.0m。攪乱に切られているが北に細くなり取束するものと思われる。この溝の南に続くのが溝733・735であるが若干西にずれた場所に位置する。溝735 (図83)は最大幅1.0mで長さ7.0m。深度は10cm程度で、直径10cm前後の石が底面に集中して置かれていた。雨落ち溝のようであるがそれともなう建物などは見当たらなかった。溝733でも石が若干検出されたが、溝735由来のものと考えられる。溝734にはこのような配石はみられない。

溝686・687・688・689 (図82)は調査区西半部に位置する。溝689は幅90～50cm、全長約29mのやや直角に曲がる溝である。深さは東西方向を向く南側で約30cm、南北方向を向く北側で約40cmとなっている。南側よりも北側のほうが深く、V字型の掘り方となっている。溝686・687は南北方向、溝688は東西方向を向く溝で、溝689に沿う形になっているように見うけられる。これらの溝の深さは10cm前後である。

溝784・787・788 (図82)は調査区北東に位置する。東西方向に並ぶ溝で、溝784は幅60cm、長さ8.8m、深さ25cm。遺物は須恵器壺が出土している。

ビット678は調査区西半部中央よりやや南に位置する。東西50cm、南北60cmの楕円形を呈する。深さは

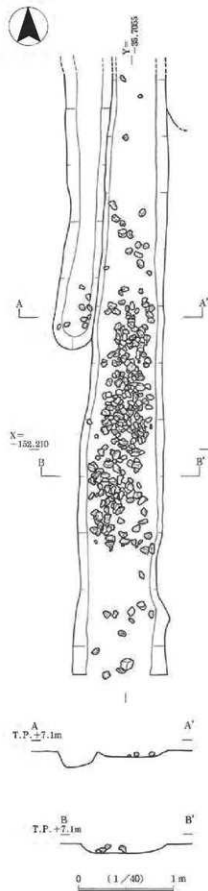


図83 02-3区第3区溝735

42cm。埋土は上層が黒褐色10Y R 3/1シルト、下層は褐灰色10Y R 5/1粗砂～小礫。土師皿などの遺物が出土している。

多くの遺構を発見し多数ピットを検出したが、建物などに復元できなかった。調査区南西部は遺構が少なく、溝689以北や溝735以東に遺構が密集することから、これらの溝が集落を区画する溝であった可能性が考えられる。

(4) 02-3区第4面

にぶい黄褐色シルト層を除去して検出した面である。この層は下層の洪水堆積層の上層が土壌化したもので、第3面の掘り残しなどの遺構も同時に検出される。土坑5基、落ち込み15ヶ所、ピット75個、溝11条を発見した。特に調査区東側に遺構が集中していた。レベルはT.P.+6.9m前後である。

建物(図85)は調査区北側、中央よりやや東に位置する。擾乱によって削平をうけているが、東西2間(3.5m)、南北1間もしくは2間(3.2m)に復元したい。主軸は座標北よりやや東に振る。柱穴はピット906が径95cmのほぼ方形で深さは23cmで、木片が検出されたが柱材とは考えにくい。ピット905は東西90cm、南北60cmの長方形を呈する。深さは50cm。埋土から縦50cm、横20cm、高さ13cmの石が出土した。礎石と考えられるが本来の位置を留めていないものと思われる。ピット902は掘り方が東西75cm、南北80cmの方形ピットで、南西隅が抜き取り痕状を呈している。断面に柱痕のようなものが見られる。また木片が検出された。

ピット838(図86)は調査区西半部中央に位置する。東西70cm、南北80cmの楕円形を呈する。深さは40cm。径30cm程の長方形の石が2個埋納されていた。ほかに遺物は出土していない。

ピット867・898・918-2・945(図86)のこれらのピットからは木製礎盤が検出されている。ピット867は調査区南側中央よりやや南よりに位置する。東西70cm、南北80cmの方形で、深さ約35cmである。ピット863・868・869(図87)など周辺にピットが集中して見つかったが、礎盤があるのはこのピットだけである。

ピット898・918-2は、落ち込み918の中から検出された遺構で、2つのピットの切り合い関係は不明だが、礎石をともなうものと、礎盤をともなうものが並ぶ。礎盤は一辺35cm

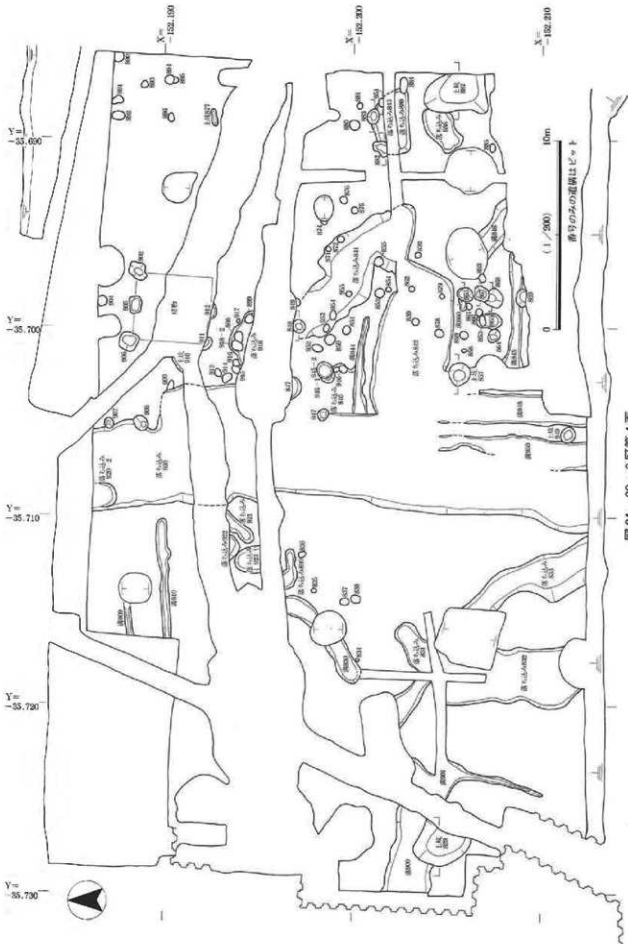
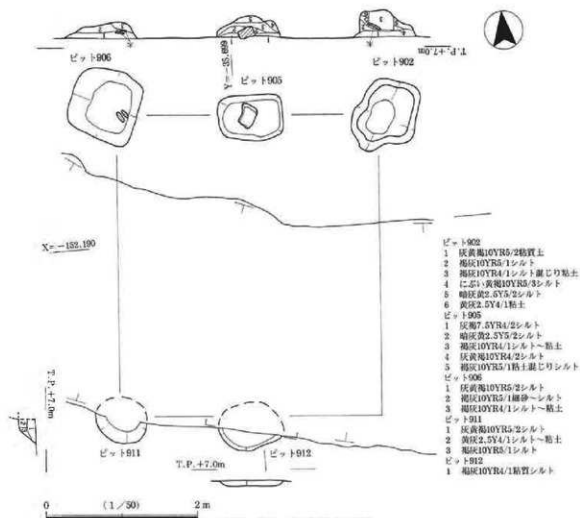


図 84 02-3区第4面



ほどの方形の板である。礎石はピット底部に挿えられており現位置を保っていると思われる。ここから南は4m程の位置に、ピット945が存在する。西側のピットは落ち込みとともに検出され、礎盤を置くピットが高く残っている。礎盤はピット898のものに類似しているものである。周辺はピット848 (図87) などしっかりしたピットが集中しているが、建物に復元できていない。

土坑877 (図86) は調査区北東に位置し、擾乱の下から検出され東西30cm、南北90cmの長方形を呈する。礎盤と考えられる長方形を呈する木材が出土している。

ピット882・883・951 (図87) は調査区東隅の落ち込み843周辺に集中して見つかったピットである。ピット882は東西70cmの不定形で、深さは42cm。擾乱によって半分が削られて残されていないが断面に柱痕がみられ、根石と考えられる石が出土している。

土坑829・887 (図87) 調査区西側に位置する土坑829は直径1.85m、調査区南東隅に位置する土坑887は東西2.0m以上と遺物を伴う大きな土坑や、落ち込みなどが第4面では多く検出される。落ち込みとした遺構は、深さ5~15cm程度で、黄灰色2.5Y 5/1粘質土を埋土としている。とくに落ち込み920は調査区中央に東西方向の溝状となっており、自然地形の落ち込みとも考えられる。落ち込み920北側より土師器(920-2とした)が出土しており、落ち込み921からも同様な土器片が多数検出された。

土器溜り802 (図88) は調査区北辺の東よりに検出された。須恵器、土師器などの土器や石材が東西2m、

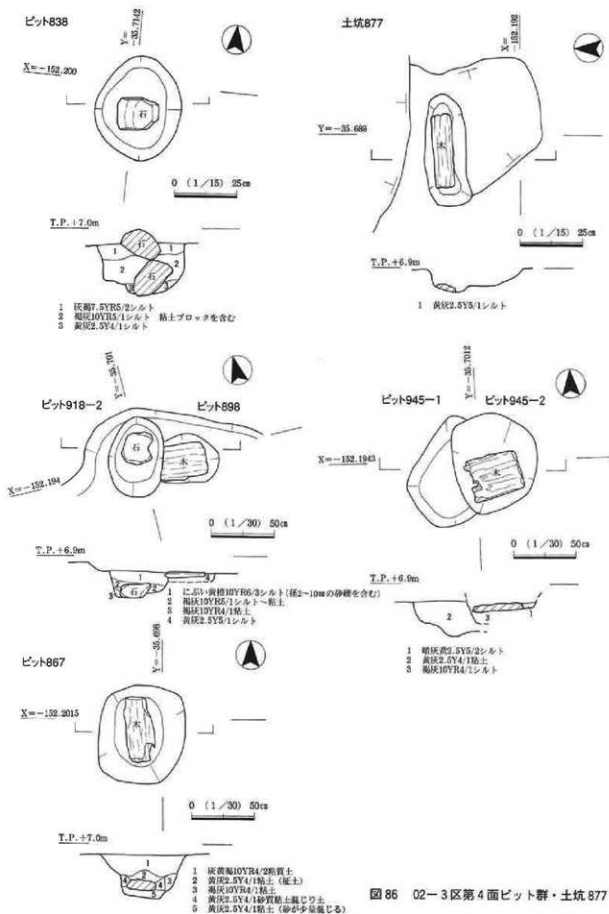


図 86 02-3区第4面ピット群・土坑 877

第4章 02-3区の調査成果

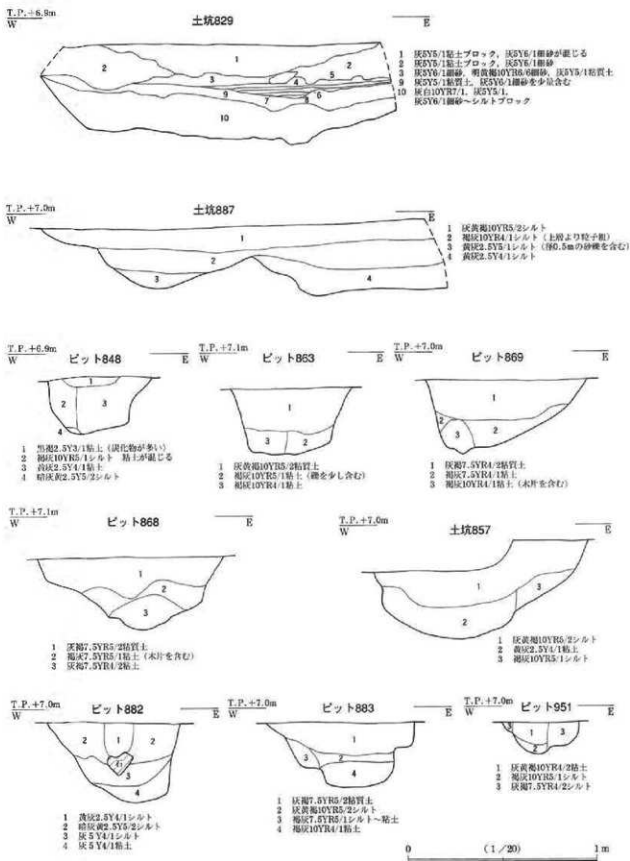
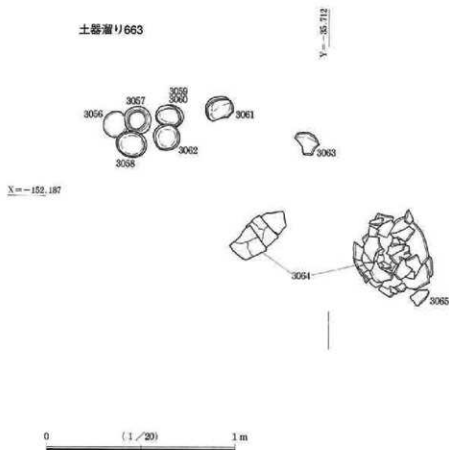


図 87 02-3区第4面土坑群・ピット群断面



土器溜り663



土器溜り802

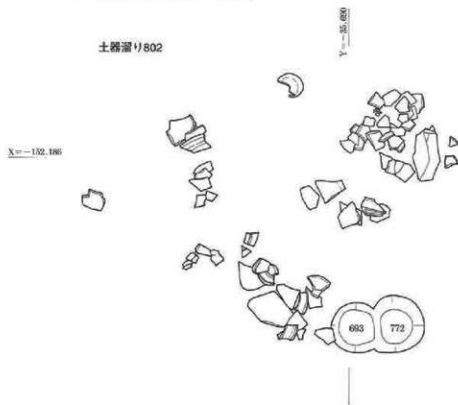


図 88 02-3区第4面土器溜り663・802

南北1.5mの範囲にまとまって出土した。ややくぼんだところから検出されたが、掘り方などは見当たらなかった。

土器溜り663(図88)は調査区北辺の中央に位置する。東西1.6m、南北1.2mの範囲に、須恵器がまとまって出土した。須恵器杯蓋の一群は、杯と蓋が上向きになって重なって出土しており意図的に置かれたものと考えられる。また掘り方などの遺構は見いだせなかった。

(5) 02-3区古墳時代河川および第5面

02-1区と同様に、自然河川堆積の上面のコンター図を作成した。

杭列(図90)は遺構面以下の自然河川堆積層掘削中より検出した。この層中からは、洪水によって流れてきたと考えられる土師器などが多数出土するものの、いわゆる遺構面は存在しない。またこの自然河川の幅は調査区を超えるものであり、部分的な流路の掘り分けは行えなかった。

杭列はやや南に振るが東西方向に直線状に伸び、現存長13m、幅およそ1.0mである。杭はほぼ垂直に立っており、横木や斜木のような部材が若干残存している。この点で堰の可能性が考えられる。杭列の現存する高さはT.P.+5.6m前後で、杭の長さは長いもので1.6mである。杭列西側7.8m分は杭が自然河川堆積層の下層の粘質土層におよそ80cm打ち込まれ、残りの杭列東側は自然河川堆積層中に打ち込まれており、杭列の機能と関わるものであるが、洪水堆積層大きな自然河川堆積のなかで流路や遺構をみいだせず、今後の課題としたい。底部に完形の古式土師器が残されているが、杭列の打たれる時期の前後のものと思われる。また杭列中から横樋・樋が見つかった。

設計深度までトレンチを設定し、杭列の打ち込まれた粘質土層以下を調査した。ここでは遺物や遺構が検出されず、自然河川堆積層の底部の一部もしくは地山層を確認し、調査を終了した。

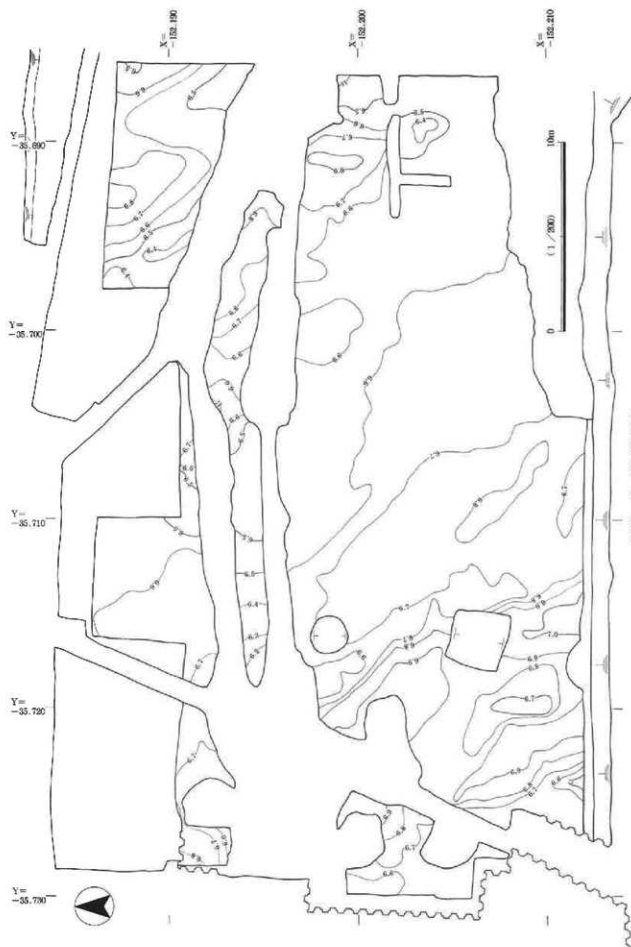


図89 02-3区第5面

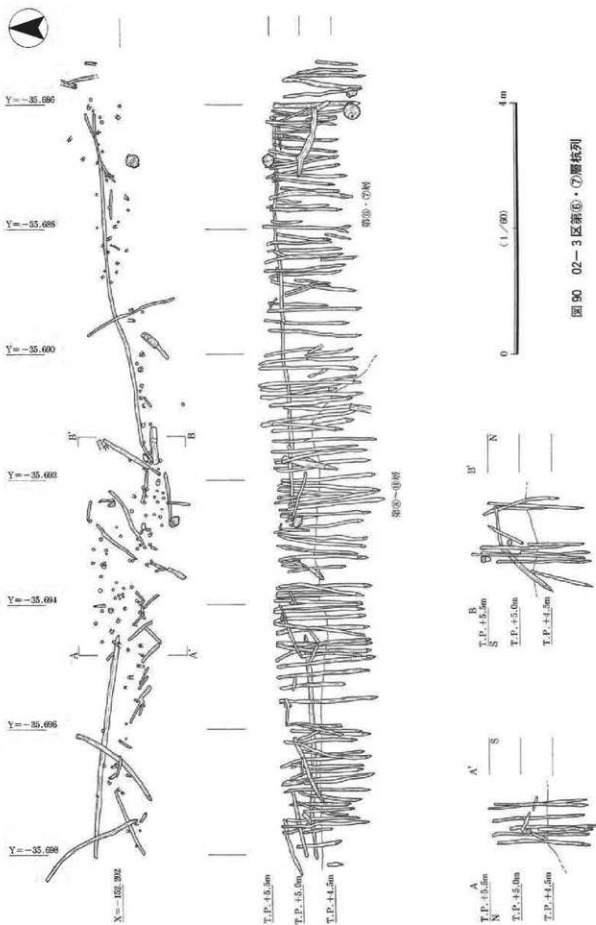


図 90 02-3区第⑥・⑦層抗列

第3節 遺物

(1) 02-3区攪乱層・旧耕作土の遺物

攪乱層から、土師器174片、須恵器79片、瓦13片、瓦器11片、磁器9片、陶器3片、黒色土器A類(両黒)2片、瓦質土器1片、黒色土器B類(内黒)1片、埴輪1片、弥生土器13片、サヌカイト剥片1点、計308点出土した。

旧耕作土から、土師器34片、須恵器16片、瓦器13片、磁器3片、陶器3片、計69片出土した。

これらは平安時代の土師器片が多いが、弥生土器から現代の磁器まで様々な遺物が混じる。

(2) 02-3区第0層の遺物(図91)

土師器502片、須恵器250片、瓦器156片、瓦19片、黒色土器B類15片、黒色土器A類13片、瓦質土器10片、磁器8片、陶器7片、埴輪1片、炉壁?1片、焼土塊1点、サヌカイト剥片4点、計987点出土した。

図91-3001は瓦器碗。内面は摩滅が著しいが、ヘラミガキと認められる。平安時代後半(尾上編年I-2~3期)の所産。3002は土師器皿。

(3) 02-3区第1面の遺物(図92)

第1面検出の近代井戸(複数?)から、磁器1片、瓦10片、瓦器2片、須恵器2片、土師器5片、弥生土器1片、計21片出土した。

溝601から、土師器214片、須恵器188片、瓦器22片、瓦17片、磁器5片、陶器5片、黒色土器B類3片、黒色土器A類3片、計457片出土した。図92-3003(写真図版29)は瓦器碗。高台は形骸化している。鎌倉時代中頃(尾上編年IV-1~2期)に属する。

溝602から、土師器16片、須恵器9片、陶器2片、黒色土器A類2片、瓦器1片、瓦1片、計31片出土した。須恵器2片・土師器1片の計3片以外は最下層の出土。3004は削り出し輪高台、いわゆる蛇の目高台の緑釉陶器碗。平安時代前半か。3005(写真図版29)は7世紀中葉(白鳳時代)、原山庵寺式の単弁八弁蓮華文軒丸瓦。

溝601と602が交差するところからは、須恵器17片、土師器17片、瓦器4片、瓦3片、黒色土器A類2片、瓦質土器1片、計44片出土した。

溝603から、土師器129片、須恵器79片、瓦器24片、黒色土器A類7片、瓦質土器2片、磁器2片、瓦2片、陶器1片、計246片出土した。細片ばかりだが、遺物組成から平安時代後半以降と考えられる。

溝604から、土師器1041片、須恵器537片、瓦器199片、黒色土器B類15片、瓦15片、黒色土器A類8片、陶器8片、磁器5片、瓦質土器3片、製塩土器2片、韓式系土器1片、弥生土器1片、焼土塊1点、サ



図91 02-3区第0層出土土器

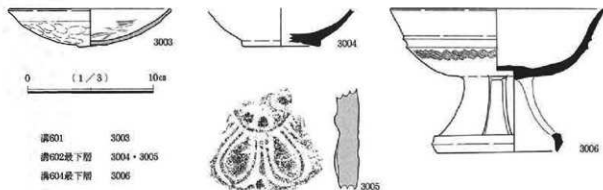


図92 02-3区第1面溝601・602・604出土遺物

ヌカイト剥片2点、計1838点出土した。3006（写真図版29）は古墳時代中期（TK23型式）の須恵器無蓋高杯。土師器は古式から平安時代に及ぶ。溝604からは古墳時代の土器も多く出土しているが、遺物組成からみると平安時代後半以降か。

溝605から、土師器745片、須恵器298片、瓦器122片、瓦8片、黒色土器B類6片、瓦質土器4片、磁器4片、黒色土器A類3片、陶器2片、製塩土器1片、サヌカイト剥片5点、計1198点出土した。遺物組成から平安時代後半以降の所産であろう。

(4) 02-3区第1層の遺物

土師器624片、須恵器390片、瓦器57片、瓦21片、黒色土器A類15片、黒色土器B類12片、磁器2片、陶器2片、瓦質土器1片、弥生土器1片、サヌカイト剥片1点、計1126点出土した。須恵器では甕の体部片が目立つ。以上の遺物から、02-3区第1層は平安時代の包含層といえる。

(5) 02-3区第2面の遺物 (図93)

3条の溝の出土遺物を記述し、その他の遺構出土遺物は表12にまとめる。

溝607から、土師器38片、須恵器14片、瓦器5片、黒色土器A類1片、青磁1片、白磁1片、計60片出土。土師器には「て」字状口縁の皿片が含まれる。白磁は玉縁の椀口縁部。その他の遺物とも合わせ、

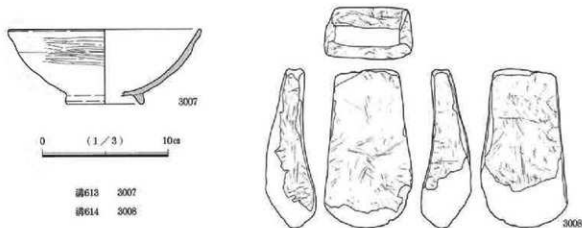


図93 02-3区第2面溝613・614出土遺物

表12 02-3区第2面の遺構出土遺物

遺構名	出土遺物(片・点数)						合計	時期	遺構名	出土遺物(片・点数)						合計	時期
	瓦器	瓦質土器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器				その他・備考	瓦器	瓦質土器	黒色B	黒色A	土師器		
溝606	5				21	9	35	平安後半	ピット630				2			2	古代
溝607	5			1	38	14	60	平安後半	溝631				2			2	古代
溝611				1	5	22	28	平安前半	溝632			1	9	2	瓦1	13	平安前半?
溝612	1			1	35	22	60	平安後半	溝633				3			3	古代?
溝613	11		1	1	133	40	191	平安後半	溝634				4	1		5	平安前半
溝614	24	1	1	2	196	33	262	平安後半	溝636				6			6	古代?
溝615	1		1	1	4	1	8	平安後半	ピット638				7	2		9	古代
溝616					2	1	3	古代	溝641				3			3	古代
溝617				1	3	2	6	平安前半?	ピット643			1	4	1		6	平安前半?
溝618				1			1	平安前半?	ピット644				1			1	古代
溝621・土坑622	2		1	1	8	2	14	平安後半	ピット647				1	2		3	平安前半
									ピット651				3	2		5	古代
									ピット652				2			2	古代
									ピット655				1	1	弥生土器3	3	古代

溝607は平安時代後半の所産と考えられる。

溝613から、土師器133片、須恵器40片、瓦器11片、瓦3片、陶器1片、黒色土器B類1片、同A類1片、製塩土器1片、計191片出土。図93-3007は瓦器碗。水流によるローリングが著しいが、内面にもミガキが施されている模様。平安時代後半に属する。

溝614から、土師器196片、須恵器33片、瓦器24片、瓦2片、黒色土器A類2片、同B類1片、陶器1片、瓦質土器1片、砥石1点、サヌカイト剥片1点、計262点出土。3008は砂岩製砥石。所々に赤色顔料?が付着している。386.2g。遺物組成からみて、溝614も平安時代後半の所産であろう。

(6) 02-3区第2層の遺物(図94)

土師器1095片、須恵器465片、瓦器50片、黒色土器A類33片、瓦26片、黒色土器B類6片、製塩土器5片、瓦質土器2片、磁器2片、陶器1片、砥石1点、土製品1点、焼土塊1点、弥生土器14片、サヌカイト剥片2点、計1704点と獣歯複数が出土した。

図94-3009-3011(写真図版29)は瓦器碗。3点とも同一グリッド(3X64)から出土している。平安時代後半(尾上彌年I-2期)に属する。3012-3015は土師器。碗(3012・3013:写真図版29)と皿(3014・3015)を図化した。いずれも平安時代中頃に属する。3016-3018須恵器。3016は平安時代前半の鉢。3017(写真図版29)は円面硯片。3018(写真図版29)体部外面のカキメが顕著な蓋短頸蓋。古墳時代中期(TK23型式前後)に属する。3019・3020は白磁碗。3019は玉縁の口縁部。3021は土師器を転用した有孔土製品。3022(写真図版29)は砂岩製の砥石。318.2g。図化していないが、弥生土器・サヌカイトは水流によるローリングが著しい。

以上の出土遺物から、02-3区第2層は平安時代の包含層と考えられる。

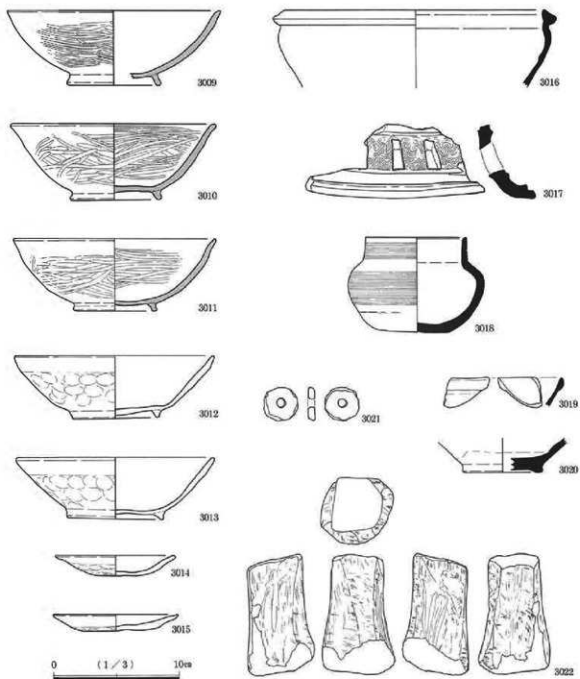


図94 02-3区第2層出土遺物

(7) 02-3区第3面の遺物(図95・96)

遺物を図化した遺構を番号順に報告する。その他の遺構出土遺物は表13にまとめた。

ビット678から土師器13片出土。図96-3035・3036は土師器皿。奈良～平安時代初頭に属する。

井戸731から、土師器24片、須恵器7片、黒色土器A類2片、平瓦2片、計35片出土。3037～3039(写真図版30)は土師器皿。3040(写真図版30)は黒色土器A類碗。これらの土器から、井戸731は平安時代中頃(10世紀後半)に位置付けられる。

表 13 02-3区第3面の遺構出土遺物

遺構名	出土遺物(片・点数)					合計	時期	遺構名	出土遺物(片・点数)					合計	時期	
	瓦器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器 その他・備考				瓦器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器 その他・備考			
井戸654				10	3	13	平安	溝736				7	1	8	古代	
ビット674					1	1	古代	土坑740	2	1	1	29	10	焼土塊1	44	平安後半?
ビット675				16	4	20	平安前半	溝743			1	3	1	5	平安前半	
ビット676				1		1	古代	ビット744				5		5	平安前半	
ビット678				13		13	古代	ビット745			1	1	製塩土器2	4	古代	
ビット679				3		3	平安	ビット749				1		1	古代	
井戸683	1	1	49	13	弥生土器7	71	古代	ビット750	1		11	4		16	平安後半	
土坑884				1	12	13	平安前半	落ち込み751						製塩土器1	1	
溝686	1					2	平安後半	ビット752				1		1	古代	
溝688				4	2	6	平安	ビット753			1	1		2	古代	
溝689		2	6	68	38	瓦1	116	平安中頃	ビット758			3	4	7	古代	
溝690				13	2	15	平安前半	ビット760			1	1		2	古代	
土坑692				14	5	土師「て」字皿あり	19	平安中頃	ビット761				1		1	古代
ビット693					1	1	古代	落ち込み762	2	1	59	13	土師「て」字皿あり	75	平安後半	
ビット698				2		2	古代	ビット766				2		2	古代	
ビット699				2		2	古代	ビット767	1	1	3	2		7	平安後半	
ビット700				1	1	2	古代	落ち込み776	2		1	2		5	平安後半	
ビット702				9		9	古代	土坑778				2		2	古代	
ビット706				3	2	5	古代	土坑779			1	7	5	13	平安前半	
ビット707				3		3	古代	井戸781				20	2	22	古墳?	
ビット722					瓦1	1		井戸783	4		10	1		15	平安後半	
ビット726		1	1	3		5	平安中頃	溝784			9	3		12	古代	
溝727				19	4	23	古代	ビット785			7	1		8	古代	
土坑728				17	2	製塩土器1 土師「て」字皿あり	20	平安中頃	土坑786	2		6	3		11	平安後半
土坑729	2			11	1	土師「て」字皿あり	14	平安後半	溝787			15	3		18	古代
土坑730	1			31	2	34	平安後半	土坑790			11			11	平安	
井戸731				2	24	7	瓦2	35	平安中頃	落ち込み799	1		8	2	11	平安中頃
井戸732	24			211	11	陶器1, 礎土塊1, 瓦2, 製塩土器4	254	平安後半	落ち込み800	2		39	17	製塩土器9	67	平安後半
溝733				1	49	5	陶器1	56	平安前半	ビット806			7		7	古代
溝734				67	8	瓦1, 製塩土器1 土師「て」字皿あり	77	平安中頃	溝809			1			1	古代
溝735	2	1		74	9	製塩土器1	87	平安後半	ビット811			3		3	古代	
溝736	2			65	19	陶器1, 礎石1	88	平安前半	ビット815			1	1		2	古代

井戸732から、土師器211片、瓦器24片、須恵器11片、製塩土器4片、瓦2片、陶器1片、焼土塊1点、計254点出土。図95-3023・3024(写真図版30)は瓦器碗。3023の見込み部には格子状暗文が施される。平安時代後半(尾上編年I-2期)に属する。3025は瓦器皿。3026(写真図版30)は黒色土器B類の碗。口縁内側の一部に漆?が附着し光沢をもつ。11世紀中頃(平安京土器IV中)に属する。3027~3034は土師器。皿(3027~3030;写真図版30)、杯(3031・3032;写真図版30)、羽釜(3033・3034)などがある。以上の出土遺物から、井戸732は平安時代後半(11世紀後半)に位置付けられる。

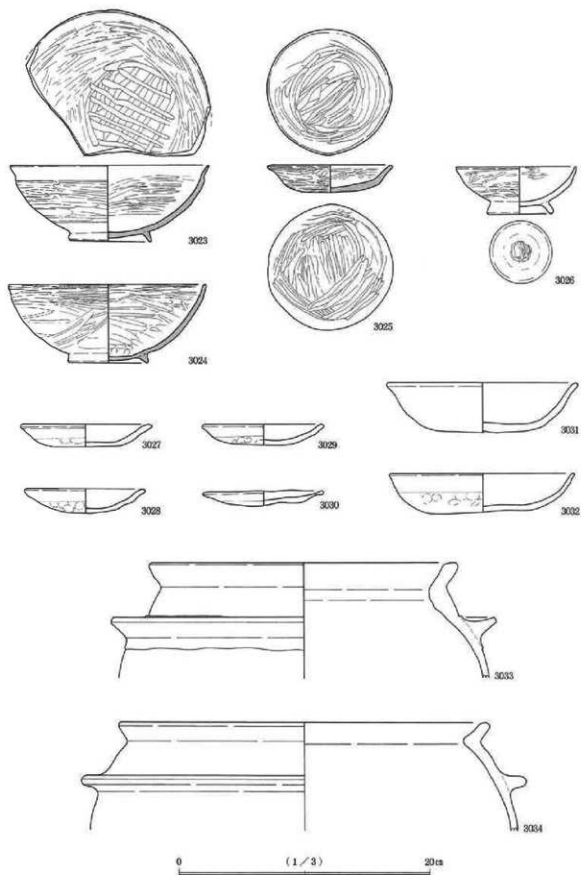


図 95 02-3区第3面井戸732出土土器

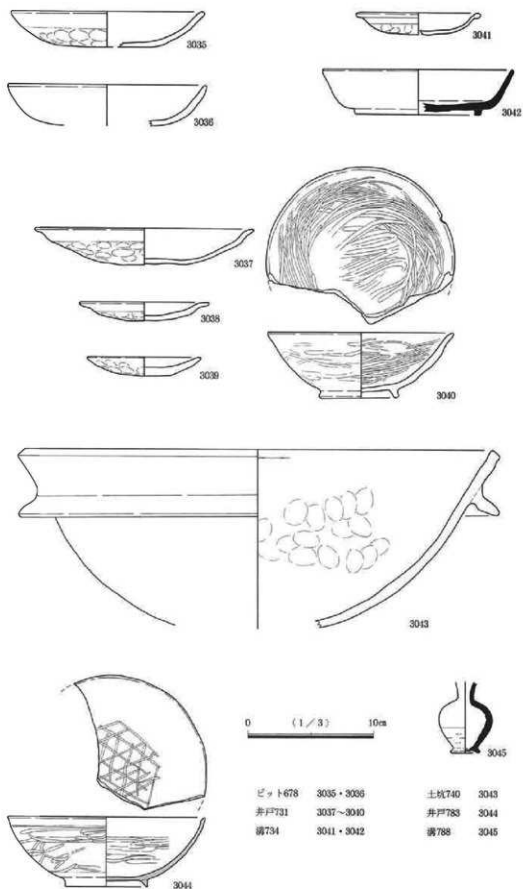


図96 02-3区第3面ビット678、井戸731・783、溝734・788、土坑740出土土器

溝734から、土師器67片、須恵器8片、製塩土器1片、平瓦1片、計77片出土。図96-3041は土師器「て」字状口縁皿。3042は奈良時代の須恵器杯。3041などから溝734は平安時代中頃に位置付けられる。

土坑740からは、土師器29片、須恵器10片、瓦器2片、黒色土器A・B類各1片、焼土塊1点、計44点出土した。3043（写真図版30）は土師器羽釜。平安時代前半に属する。ただし、瓦器も出土しているのので、土坑740は平安時代後半に下る可能性もある。

井戸783から、土師器10片、瓦器4片、須恵器1片、計15片出土した。3044は瓦器椀。内外面ヘラミガキ、見込み部には斜格子状の暗文が施される。平安時代後半（尾上福年I-3期頃）に属する。

溝788から、土師器14片、製塩土器2片、須恵器1片、計17片出土した。3045は須恵器小形瓶。平安時代前半か。

(8) 02-3区第3層の遺物 (図97)

土師器1242片、須恵器270片、瓦18片、黒色土器A類15片、製塩土器13片、鉾滓5点、黒色土器B類4

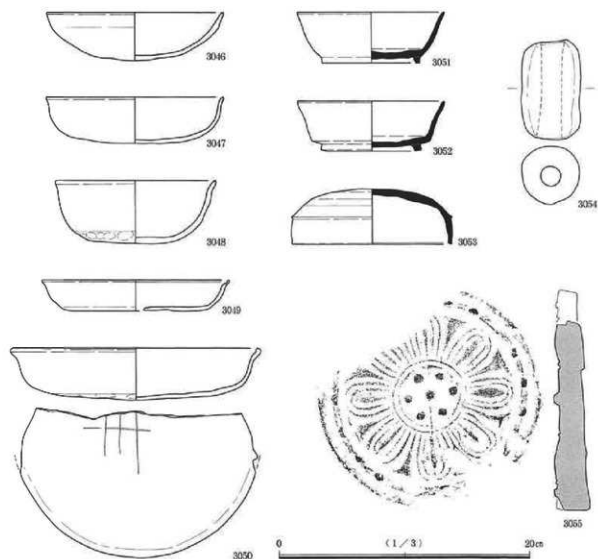


図97 02-3区第3層出土遺物

片、獣歯2点、瓦器1片、磁器1片、土鍾1点、焼土塊1点、弥生土器4片、サスカイト剥片2点、計1579点出土した。

図97-3046~3050は土師器。奈良時代後半~平安時代初頭の碗(3046)や奈良時代の杯(3047~3050)がある。3050(写真図版31)の底部外面に焼成前と思しき刻書が見られる。図の向きが正しいとして、刻書は縦3本の後に横1本が刻まれている。筆遣いからみて、漢字ではなく、記号と推定する。内面に暗文はみられない。奈良時代末(平城宮土器VI)に属する。

3051~3053は須恵器。3051は平安時代初頭、3052は奈良時代の杯。3053は古墳時代中期(TK23型式)の杯蓋で、下層からの混入であろう。3054は土師質の土鍾。

3055(写真図版31)は重弁八弁蓮華文軒丸瓦。中房に1+6の蓮子、その回りを圏線で区画、蓮弁に子葉をもつ重弁蓮華文。外区の帯状突帯の上に連珠文、周縁には不鮮明ながら鋸歯文がみられる。径172mm。范型の痕跡が残る。7世紀後半(白鳳時代)の所産。小阪合遺跡では同范瓦が、八尾市教育委員会の調査で2点、大阪府教育委員会の調査で4点出土している。

(9) 02-3区第4面の遺物(図98~100)

遺物を図化した遺構を番号順に報告し、その他の遺構出土遺物は表14にまとめた。

表14 02-3区第4面の遺構出土遺物

遺構名	出土遺物(片・点数)						時期	遺構名	出土遺物(片・点数)						時期	
	瓦器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器	その他・備考			合計	瓦器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器		その他・備考
土器溜り963	1			49	35		85	古墳中期	土坑883			18	1		19	古代
土器溜り902	2			149	116		278	古墳中期	土坑887			94	8		102	奈良
土坑829			1	4	2	瓦1		平安前半	落ち込み888			7	2	弥生土器1	10	古代
落ち込み831				1			1	古代	溝889			12			12	古代
落ち込み832				3			3	古代	ビット894			3			3	古代
落ち込み833				1			1	古代	ビット897			5	1		6	古代
落ち込み840				52	4	焼土塊2	58	奈良	落ち込み899			4	1		5	古代
落ち込み841				42	8	馬の歯1	51	古代	溝900			4			4	古代
落ち込み842				64	16		80	奈良末	ビット905			4	2		6	古代
落ち込み843				5			5	古代	ビット906			7	2		9	古代
溝844				3			3	古代	ビット910			2			2	古代
溝845				7		製塩土器1	8	古墳?	ビット911							弥生土器1
ビット847					1		1	古代	ビット915			3			3	古代
ビット852				6			6	古代	ビット916			1			1	古代
ビット854				2			2	古代	落ち込み918			2			2	古代
土坑857				6		弥生土器2	8	古墳?	ビット918-2			5	1		6	古代
ビット863				13			13	古代	落ち込み920			364	45	サスカイト剥片1 焼土塊1	411	奈良
ビット864				2			2	古代	ビット945			1	2		3	古代
ビット866		1	1				2	平安中頃	溝948			33		瓦1	34	古代
ビット867				6	2	製塩土器2	10	奈良	ビット949			8			8	古代
ビット868				9	1		10	古代	落ち込み950			11			11	古代
ビット869				2	1	弥生土器2	5	古代	ビット951			1			1	古代
ビット880				1			1	古代	ビット952			4			4	古代
土坑882					7		7	古代								

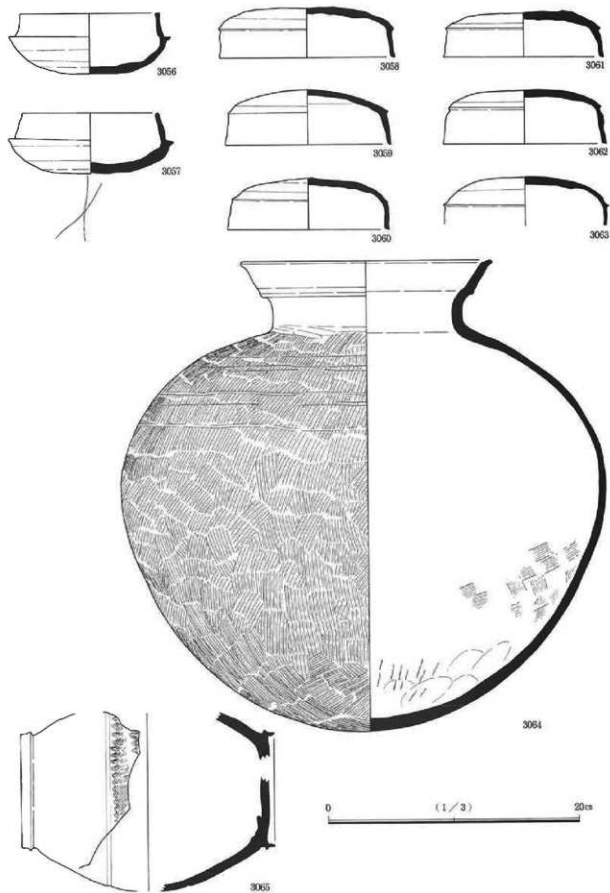


図98 02-3区第4面土器溝り663出土土器

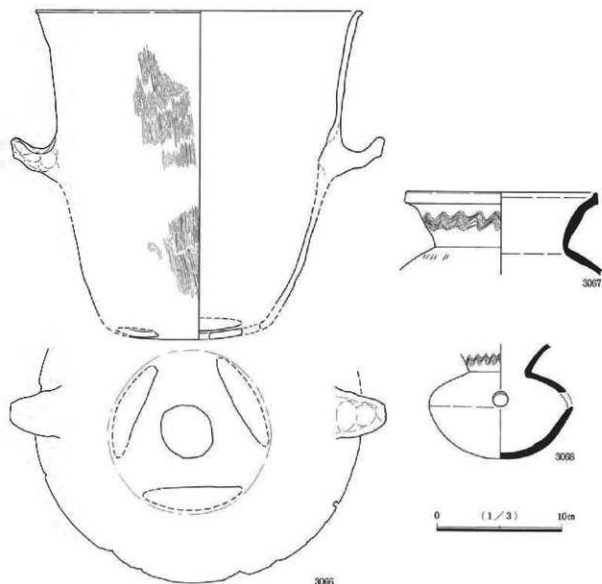


図99 02-3区第4面土器溜り802出土土器

土器溜り663から、土師器49片、須恵器35片、瓦器1片、計85片出土した。図98に掲げたものは全て須恵器。杯身（3056・3057）、杯蓋（3058～3063）、甕（3064：写真図版31）、樽形甕（3065）を図化した。3057の杯身外部底面にはヘラ記号がみられる。瓦器を混入と考えると、土器溜り663は古墳時代中期（TK208型式）に位置付けられる。

土器溜り802から、土師器149片、須恵器116片、製塩土器12片、瓦器2片、計279片出土。図99-3066（写真図版32）は土師器甕。3067は須恵器甕。3068は須恵器甕。これらの土器から、土器溜り802は古墳時代中期（5世紀後半）の所産と考えられる。

落ち込み840から、土師器52片、須恵器4片、焼土塊2点、計58点出土。図100-3069は土師器皿。奈良時代中頃（平城宮土器Ⅲ）に属する。3070は土師器杯。

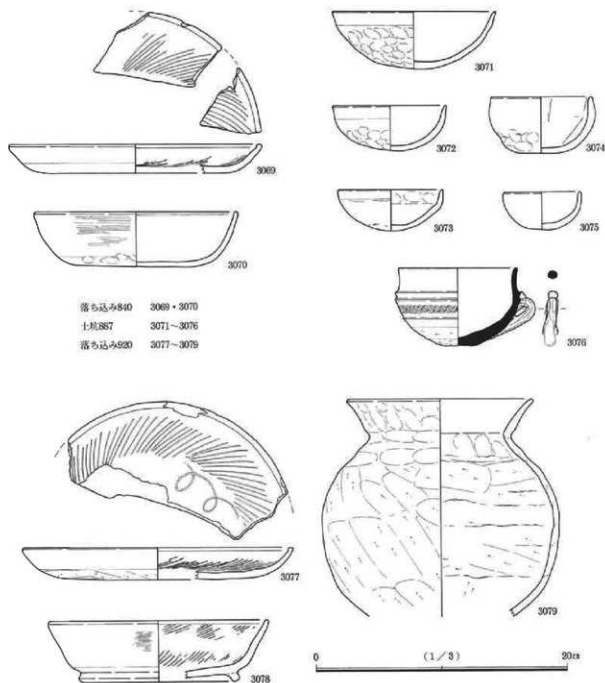
土坑887からは、土師器94片、須恵器8片、計102片出土した。3071～3075（写真図版32）は土師器碗。3071は奈良時代末頃の所産か。3072～3075の小形品も、3071と調整などが類似する。祭祀用か。3076は古墳時代中期のカップ形須恵器。

落ち込み920から、土師器364片、須恵器45片、焼土塊1点、サヌカイト剥片1点、計411点出土。3077は土師器皿。底部内面に螺旋状暗文、口縁部内面に一段放射状暗文が施される。奈良時代中頃（平城京土器Ⅲ）に属する。3078の須恵器杯、3079の土師器壺とも奈良時代として矛盾ない。

(10) 02-3区第4層の遺物(図101)

土師器326片、弥生土器52片、須恵器29片、瓦3片、瓦器1片、計411片出土した。

図101-3080は奈良時代後半の、3081は奈良時代中頃（平城京土器Ⅲ）の土師器杯。3082は奈良時代～平安時代初頭の須恵器杯。3083はハケ調整が卓越する布留系の高杯。



落ち込み840 3069・3070
土坑887 3071～3076
落ち込み920 3077～3079

図100 02-3区第4面落ち込み840・920、土坑887出土土器

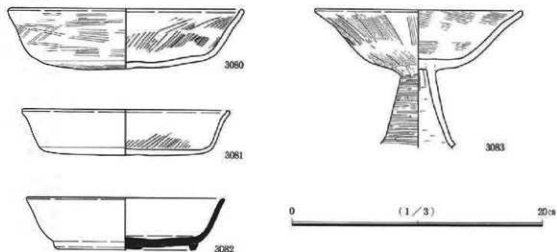


図101 02-3区第4層出土土器

(11) 02-3区第5層の遺物 (図102~107)

第5層出土遺物は〔上層〕と〔下層〕とに分けて取り上げられている。

〔上層〕出土遺物は、土師器1480片、弥生土器686片、サヌカイト剥片28点、須恵器13片、瓦器2片、製塩土器1片、陶器1片、計2211点である。

図102-3084・3085 (写真図版32) は庄内式の甕。3085の胎土は生駒山西麓産。3086 (写真図版33) は吉備系 (亀川上層式) の甕。図103-3087・3088 (写真図版33) は布留式前半の直口壺。3088の肩部には鋸歯状などの短沈線がヘラ状工具で施されている。3089 (写真図版33) は直口の小形壺。底部は非常に小さい。3090 (写真図版33) は小形丸底土器。3091は弥生土器の台付鉢。胎土は生駒山西麓産。

〔下層〕からは、土師器2640片、弥生土器1563片、サヌカイト剥片62点、同チップ4点、サヌカイト製石鍬2点、鉄斧1点、土鍾1点、突帯文土器1片、須恵器2片、瓦器1片、計4277点と木器が出土した。

図104-3092-3094 (写真図版34) は庄内式の甕。3点とも胎土は生駒山西麓産。3095 (写真図版34) は複合口縁をもつ丸底の甕。肩部にはクシ描き波状文が施される。布留式に併行する山陰系の甕であろう。3096・3097 (写真図版34) は弥生形甕。図105-3098 (写真図版35) は広口短頸壺。体部が下ぶくれの形状をなし、肩部にはヘラ状工具でジグザグの文様が施される。3099 (写真図版35) は細頸直口壺。胎土は生駒山西麓産。3100 (写真図版35) は広口壺。体部には龍目が残る。3101 (写真図版35) は広口短頸壺。胎土は生駒山西麓産。3098-3101は庄内式に属する。図106-3102は四国系の複合口縁壺。内面は黒化している。3103・3104は広口壺。3104は第5層の土器の中では底部がしっかりしており、比較的古い様相を示す。胎土は生駒山西麓産。3105は口径が11.5cmと小さい有稜高杯杯部。3106はおそらく有稜高杯杯部。3107 (写真図版35) は口縁部が直立する鉢、吉備系か。3108 (写真図版36) は底部に外面から焼成前の穿孔が6個施された弥生土器底部。水流によるローリングが著しい。胎土は生駒山西麓産。

3109 (写真図版36) は枕列内から出土した小形の袋状鉄斧 (柄袋鉄斧・新)。現存長5.6cm、幅3.6cm、

厚さ1.3cm。3110・3111（写真図版36）はサヌカイト製の突基石礫。3110は4.1g、3111は3.5g。これらを含め第5層出土のサヌカイト成品・剥片はいずれも水流によるローリングが著しい。

図107は杭列出土の木製品。3112（写真図版36）は櫂。3113（写真図版36）は木槌か。両者ともアカガシ亜属。3114～3116は杭。順にサカキ、ミズキ、コナラ亜属。3117（写真図版36）は二股に分かれた木で、先端は断面長方形の柄状に加工されている。

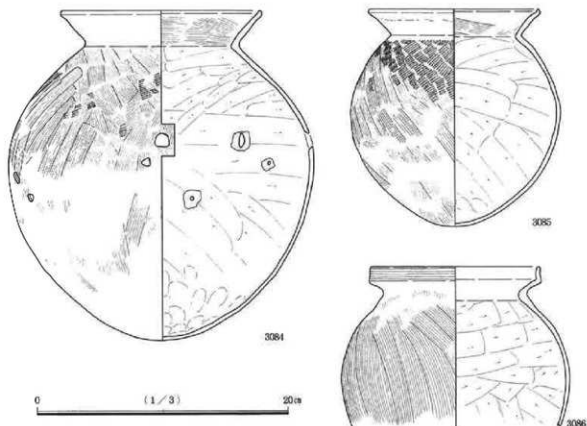


図102 02-3区第5層（上層）出土土器（1）

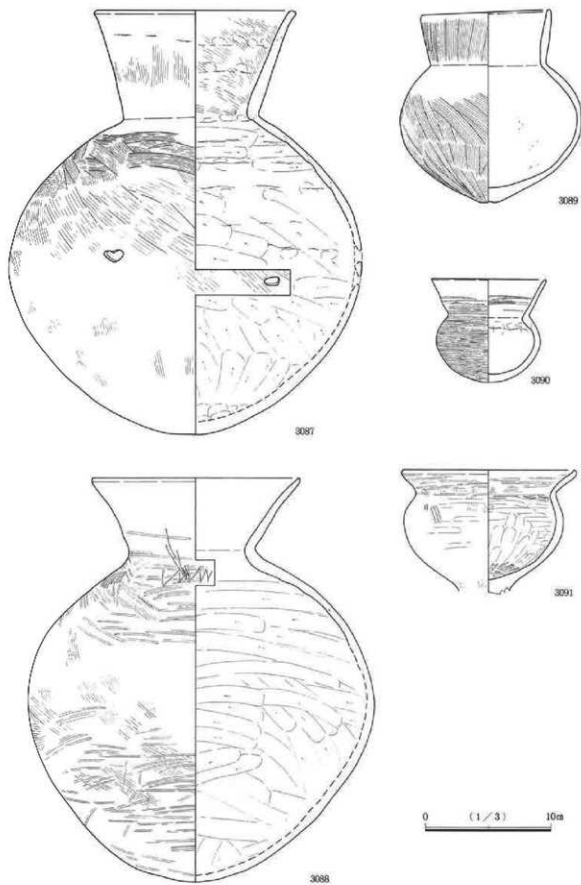


图 103 02—3区第5層〔上層〕出土土器（2）

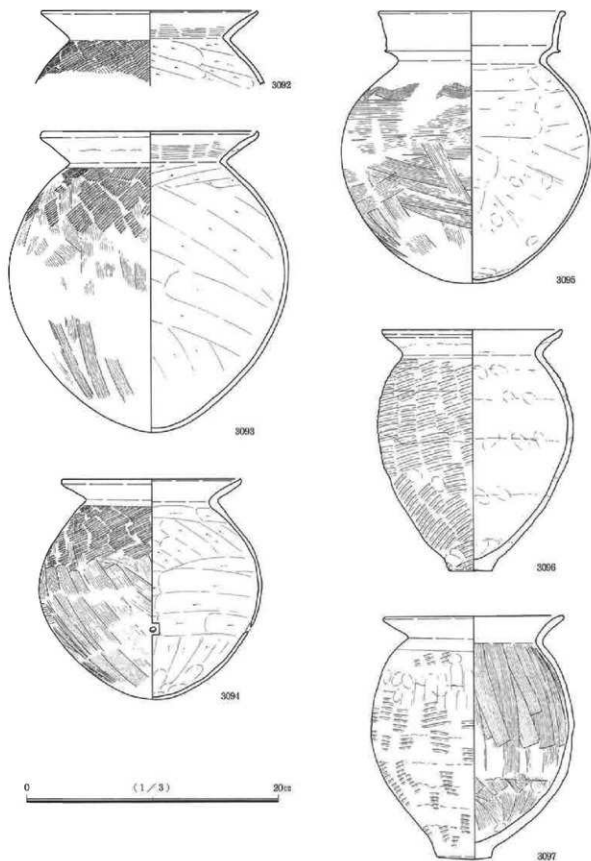


図104 02-3区第5層〔下層〕出土遺物(1)

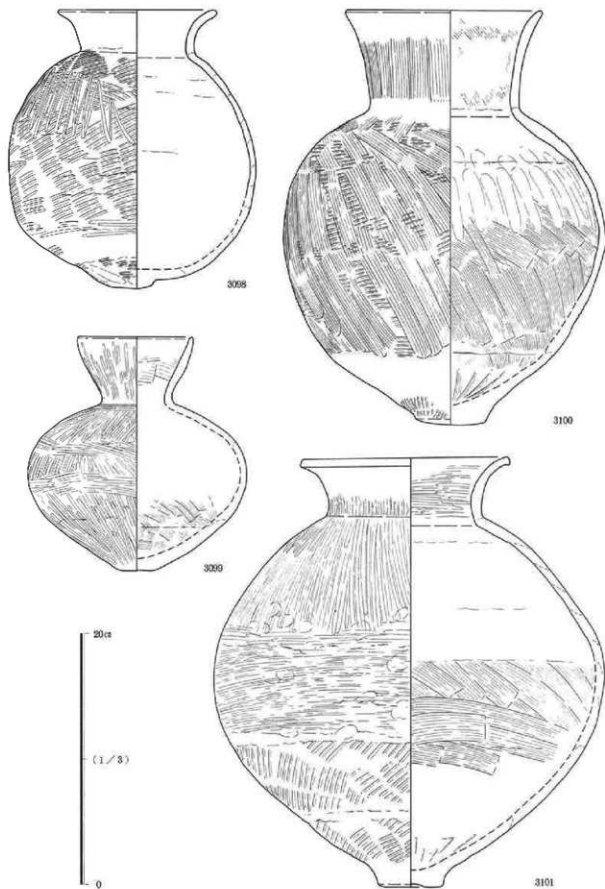


图105 02-3区第5層(下層)出土遺物(2)

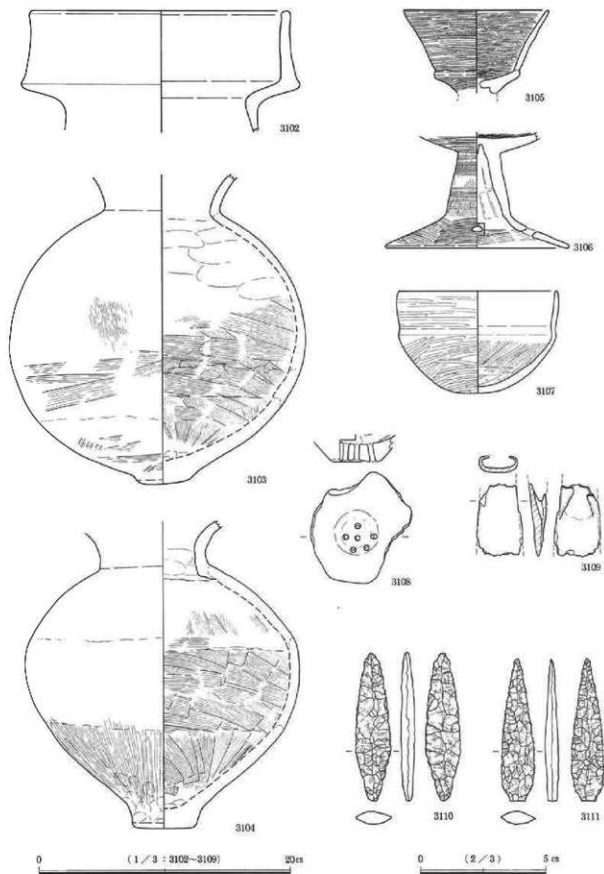


図106 02-3区第5層〔下層〕出土遺物(3)

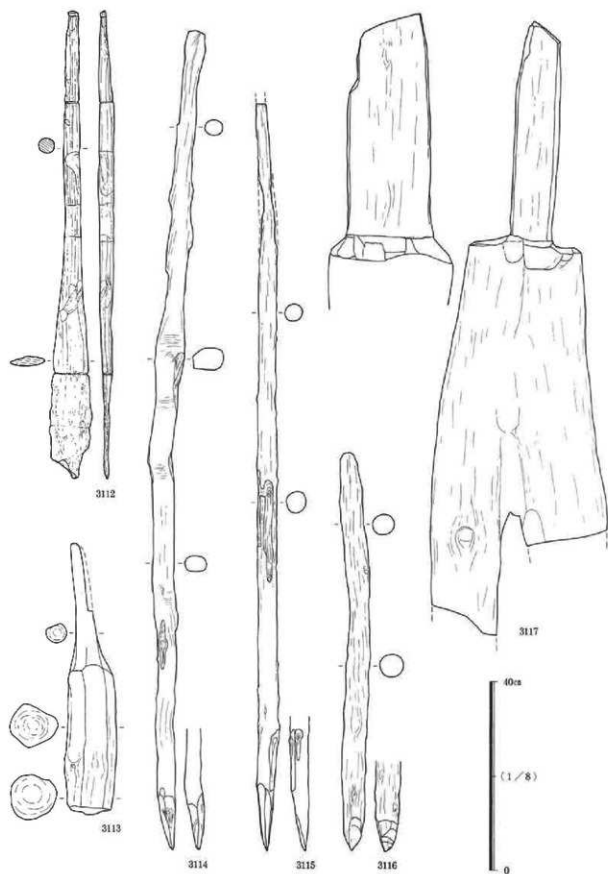


图107 02—3区第5層出土木器

第5章 02-4区の調査成果

02-4区は、第2次調査範囲の北東に位置する。合流管埋設に伴う調査のため、東西2.0m、南北約26mと細長く、その面積は約50㎡である。

調査前地盤高はおよそT.P.+8.5m。攪乱層等を重機で1.2～1.3m除去し、T.P.+7.2～7.3mから調査限界のT.P.+5.1mまで約2.1m厚の包含層を人力掘削した。7面を調査し、7カ所の遺構を検出した。

第1節 層序

東辺断面は調査の進行に伴い逐次実測した。他方、南辺断面は、先に調査が終了した02-2区(南)側より、02-4区掘削に先立って攪乱層除去面(T.P.+7.2m)からT.P.+4.9mまでの地層断面を通して観察・図化した。東辺断面と同時に掲載するために、反転して北からみた状態として掲載する。

第0層(①層) 黒褐10Y R 3/2シルト。

第1層(②層) オリーブ褐2.5Y 4/3シルト。

第2層(③層) 灰黄褐10Y R 4/2シルト。断面図には現れないが、第3面落ち込み4001の埋土も③層である。

第3層(④・⑤層) 南半は褐7.5Y R 4/3シルト(④層)、北半ではやや明るい色調の褐7.5Y R 4/4シルト(⑤層)となる。調査区中央部での観察から強いていえば④層の方が上部に堆積しているが、同質・同色系の地層である。

第4層(⑥・⑦層) 第3層の④・⑤層が南と北に分布していたのに対し、第4層では、上部に褐7.5Y R 4/3細砂～シルト(⑥層)、下部にオリーブ褐2.5Y 4/4粗砂～細砂(⑦層)と、上下に細分できる。下層ほど粒子が粗くなる。第5面の溝4002～4004の埋土も⑦層である。

第5層(⑧・⑨層) 上半は褐10Y R 4/4シルト(⑧層)、下半は灰黄褐10Y R 4/2シルト(⑨層)。⑨層は第6面で検出した落ち込み4005の埋土でもある。

第6層(⑩・⑪層) A層は第6面落ち込み4006の埋土。第5層の⑨層に似るが、やや黒味が強い。

第6層上半はオリーブ褐2.5Y 4/3シルトとにぶい黄褐10Y R 5/4シルトがよく混じり合う(⑩層)。下半は弱いラミナがみられる灰黄褐10Y R 5/2粗砂～細砂を主体とし、暗オリーブ灰2.5GY 4/1シルトが混じる(⑪層)。

第7層(⑫層) B層は第7面落ち込み4007の埋土。B-1層は暗オリーブ灰2.5GY 3/1シルト。B-2層は暗オリーブ灰2.5GY 4/1細砂に微小な擬礫と植物遺体が混じる。B-3層は枝や樹皮などの植物遺体。B-4層は暗オリーブ灰2.5GY 3/1シルトに少量の粗砂と植物遺体が混じる。B-5層は黒2.5GY 2/1シルトで、黒化した植物遺体が混じる。B-3・B-4・B-5層から1点ずつ、埋没環境分析用のサンプルを採取した(第8章参照)。

第7層は、黄褐2.5Y 5/3粗砂～細砂を主体とする。ラミナが発達し、擬礫も含まれる。第7層のおよそT.P.+5.0mで掘削限界に達した。

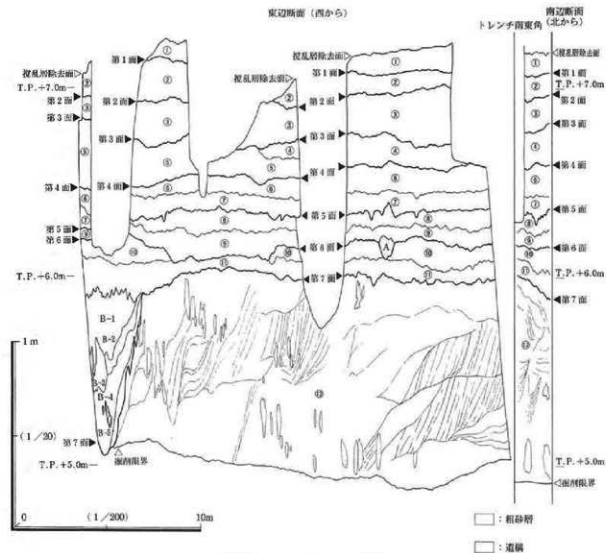


図108 02-4区東・南辺断面

第2節 遺構と遺物

(1) 02-4区攪乱層の遺物

現代の攪乱層である。土師器16片、磁器8片、須恵器6片、瓦2片、陶器1片、瓦器1片、計34片出土した。

(2) 02-4区攪乱層除去面 (写真図版37)

現代の水田床土と考えられる層の上面。昭和30年代前半の公団住宅建設に伴う埋設管等による攪乱がなお残る。面の高さはおよそT.P.+7.2m。

(3) 02-4区第0層の遺物

土師器3片、須恵器3片、陶器1片、瓦器1片、計8片出土した。時期の判別できる土器はほとんどないが、土器の組成から中世以降の包含層と考えられる。

(4) 02-4区第1面(図110・写真図版37)

面の高さはT.P.+7.1~7.2mで、ほぼ平坦。遺構・遺物は見いだせなかった。

(5) 02-4区第1層の遺物

土師器11片、瓦器6片、須恵器4片、磁器3片(うち青磁1片)、陶器2片、瓦1片、瓦質土器1片、焼土塊1点、計29点出土した。細片が多く確定しがたいが、中世以降の包含層と考えられる。

(6) 02-4区第2面(図111・写真図版37)〔第I面相当〕

面の高さはT.P.+6.9~7.0mで、ほぼ平坦。遺構・遺物ともになし。

(7) 02-4区第2層の遺物

土師器11片、瓦器7片、須恵器6片、瓦質土器3片、磁器2片、陶器2片、計31片出土した。第1層同様細片が多く、時期の特定は難しいが、平安時代以降の包含層と考えられる。

(8) 02-4区第3面(図112・写真図版37)〔第II・III面相当〕の遺構と遺物

T.P.+6.6~6.8mで、わずかに南が高い。調査区中央で落ち込み4001を検出した。

落ち込み4001は、調査区内で南北8.1m以上、東西1.3m以上、深さ19cmだが、全体の形状は不明。埋土は第2層の灰黄褐色10YR 4/2シルト。出土遺物はない。

(9) 02-4区第3層の遺物

土師器16片、瓦7片、須恵器4片、瓦器3片、瓦質土器1片、計31片出土した。やはり細片が多い。土師器では平安時代の杯が目立ち、他の土器組成からも、平安時代ないしそれ以降の包含層と考えられる。

(10) 02-4区第4面(図113・写真図版37)〔第IV面相当〕

面の高さはT.P.+6.4~6.6mで、南が高い傾向にある。遺構・遺物はない。

(11) 02-4区第4層の遺物(図115)

土師器30片、須恵器12片、瓦器12片、磁器1片、計55片出土した。

図115-4001~4003は瓦器碗。4001は1/12周程の口縁部で、復元口径は約15cm。見込み部に直線状の暗文がみられ、外面にもわずかながらヘラミガキが残る。4002の見込み部には直線状のヘラミガキ、4003には斜格子状の暗文がみられる。これらの瓦器は平安時代後半に属する。その他は細片が多いが、土師器のうち時期の判明するものも平安時代後半を主体とする。

以上の出土土器から、02-4区第4層は平安時代後半の包含層と考えられる。

(12) 02-4区第5面(図114・写真図版37)の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.2~6.3mで、ほぼ平坦。長さ1.1~1.7m、幅14~20cm、深さ2~3cmの小規模な溝3条(溝4002~4004)を検出。耕作に伴うゆるぎ素掘り小溝であろう。

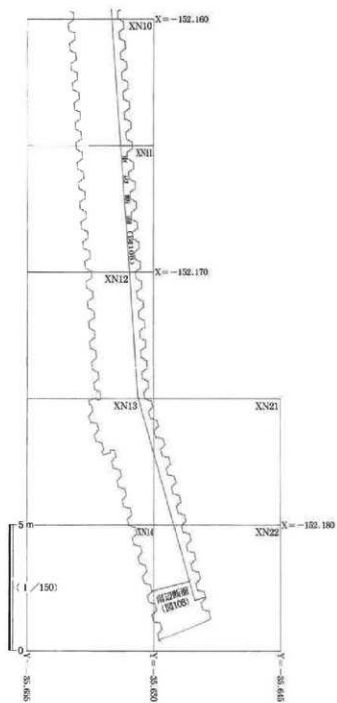


図109 02-4区地区割り

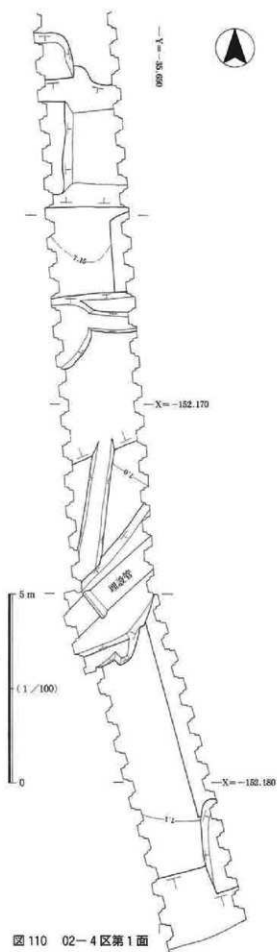


図110 02-4区第1面

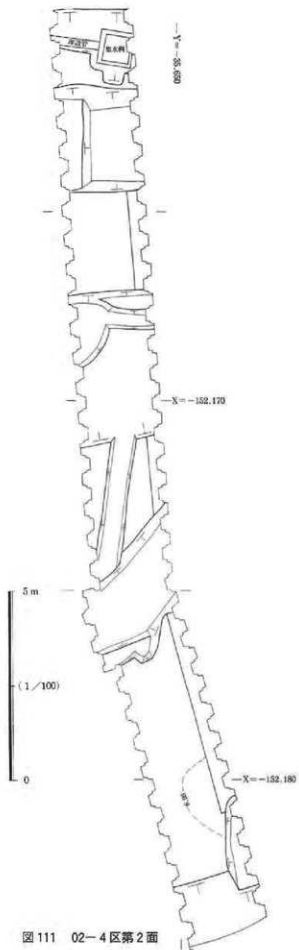


図111 02-4区第2面

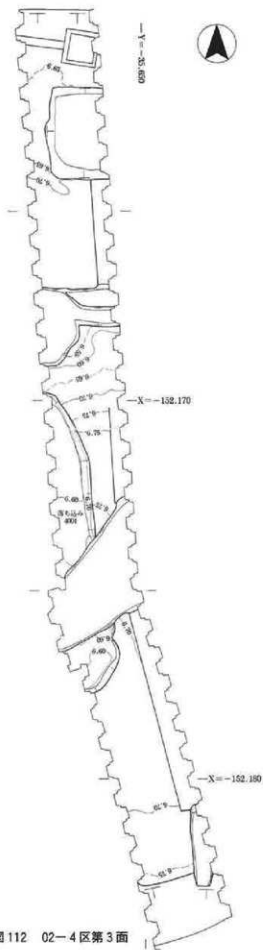


図112 02-4区第3面

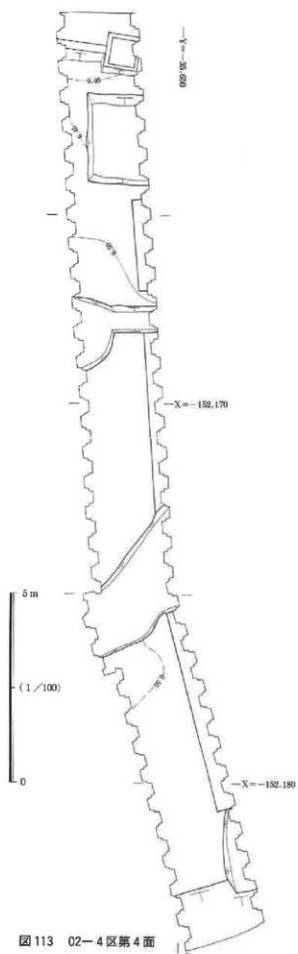


図 113 02-4区第4面

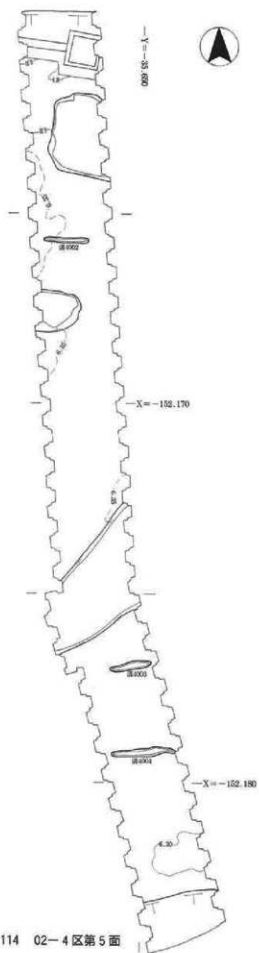


図 114 02-4区第5面

出土遺物はないが、上下の包含層の時期とも考え合わせると、02-4区第5面は平安時代後半に位置付けられる。

(13) 02-4区第5層の遺物(図115)

土師器136片、須恵器22片、瓦器16片、黒色土器A類1片、弥生土器4片、計179片が出土した。

図115-4004は須恵器片口鉢。口縁端部が上下に拡張される。平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。

4005～4007は土師器。4005は小片からの図上復元のため傾きや口径にやや不安が残るが、平安時代の杯または盤であろう。4006は直口壺の口縁部か。4007は高杯脚部。この他小片ではあるが甕の口縁部も2点出土している。以上の土師器は古墳時代に属する。4008・4009は弥生土器の広口壺口縁部。2点とも胎土は生駒山西麓産。これら土師器・弥生土器は、ローリングが著しく、他の土器よりも時期が大幅に遡るので、下層(第7層)からの巻き上げと考えられる。

土師器には古式土師器もみられるが、破片数では平安時代後半のものが主体を占める。

(14) 02-4区第6面(図116・写真図版38)の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.1～6.2mで、わずかに北が高い。落ち込みを2か所検出した。

落ち込み4005は南北5.8m、東西1.4m以上、深さ約6cm。北西と南西角の形状から、隅丸方形と推定できる。出土遺物は、土師器44片、須恵器8片、瓦器2片、瓦質土器1片、黒色土器A類1片、計56片。図115-4010は土師器椀か。口縁端部が面をなす。4011は、頂部につまみの付く飛鳥時代の須恵器杯臺。4012・4013の土師器は布留式の甕口縁部。図化できた遺物は以上だが、土器組成や上下の包含層との対照から、落ち込み4005は平安時代の所産と推定される。

落ち込み4006は南北90cm、東西10cm狭い範囲の検出に止まった。出土遺物はない。

(15) 02-4区第6層の遺物(図115)

土師器98片、瓦器38片、須恵器32片、瓦2片、瓦質土器1片、サヌカイト剥片1点、計172点出土した。

図115-4014は土師器皿。4015は瓦器皿。4016は鎌倉時代の、いわゆる京都型の瓦質焼成羽釜。4017は高台が底部外縁に付く須恵器杯底部。平安時代前半か。4018は柳摺き波状文が施された古墳時代の須恵器壺口縁部。

(16) 02-4区第7面(図117・写真図版38)〔第V面相当〕の遺構と遺物

砂層上面。面の高さはT.P.+5.8～5.9m。調査区北部で、直径3m以上、検出面からの深さも85cm以上ある落ち込み4007を検出した。

落ち込み4007(図118・写真図版38)は調査区北部に位置する。調査範囲の制約のため全掘できなかったが、推定直径数m、検出面からの深さも85cm以上と比較的規模が大きい。

出土遺物は、土師器42片、瓦器31片、須恵器23片、瓦4片、磁器3片、瓦質土器1片、計104片。図119-4019・4020は瓦器椀。4019の内面のミガキは緻密で、見込み部には直線状のヘラミガキがみられる。外面にはミガキが施されていない。平安時代後半(尾上編年Ⅱ-2～3)に属する。4020は口縁部を欠くが、体部下半の内外面ともヘラミガキが密に施され、高台の形態も4019よりやや古い要素を持つ。

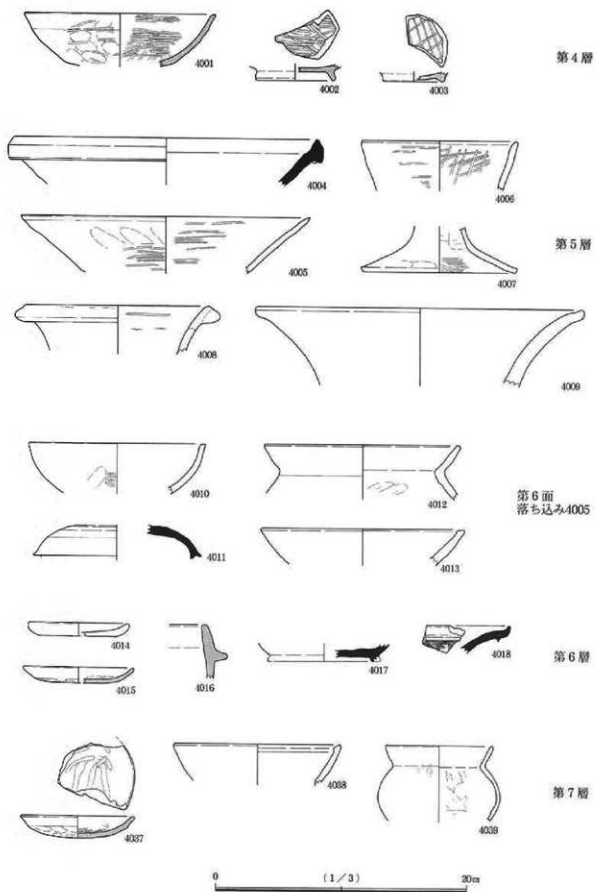
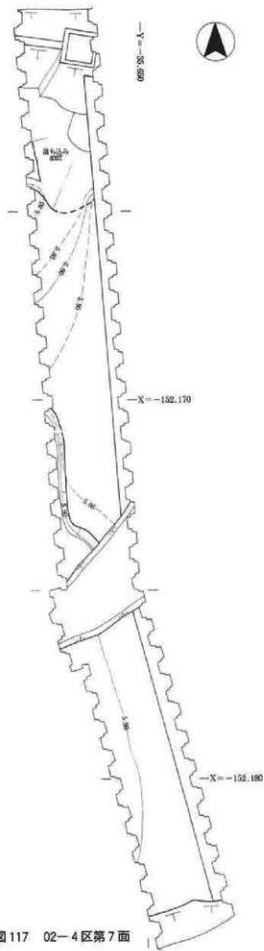
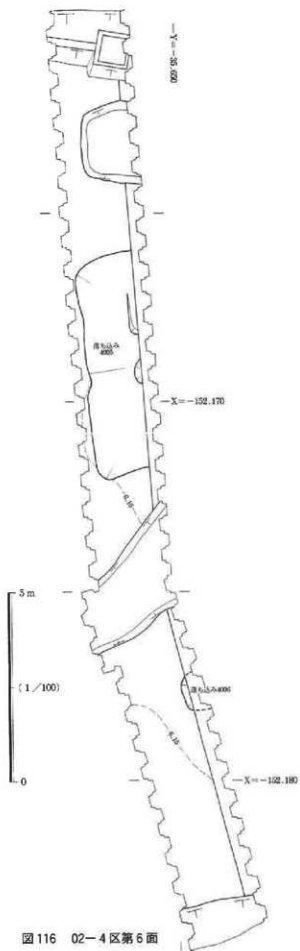


図115 02-4区第4～7層・第6面落ち込み4005出土土器



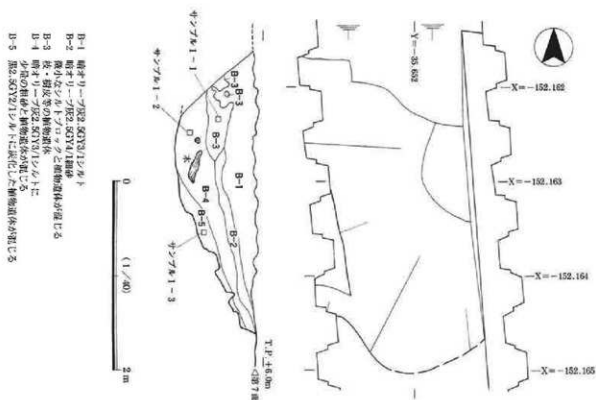


図118 02-4区第7面落ち込み4007

4021～4023（写真図版39）は瓦器皿。直径は約8cm。4021の内面には平行線状のヘラミガキがみられる。4024は瓦質羽釜の足。4025～4033は土師器。小皿（4025～4027；写真図版39）、皿（4028・4029；写真図版39）、台付皿（4030；写真図版39）、羽釜（4031～4033）などがある。4034・4035は玉縁口縁の白磁碗（大宰府分類Ⅳ類）である。平安時代後半か。4036（写真図版39）は土師質の焼き物で、矢羽状の線刺が施される。図示していないが、瓦はいずれも平瓦で、凸面に縄叩き、凹面には布目が残る。須恵器は壺の破片が大半を占める。これら出土遺物から、落ち込み4007は平安時代末に位置付けられる。

(17) 02-4区第7層の遺物（図115）

第7層は流路充填堆積物である。土師器39片、須恵器15片、弥生土器14片、瓦器11片、磁器1片、瓦質土器1片、サヌカイト剥片1点、計82点出土した。

図115-4037は瓦器皿。4038・4039は土師器。4038は壺の口縁部。4039は小形丸底土器。体部外面にはハケメが残るが、口縁部（端部）と内面は磨耗しており調整不明。両者とも布留式に属する。

02-4区では、第7層の途中、T.P.+5.1～5.2mで調査予定深度に達した。

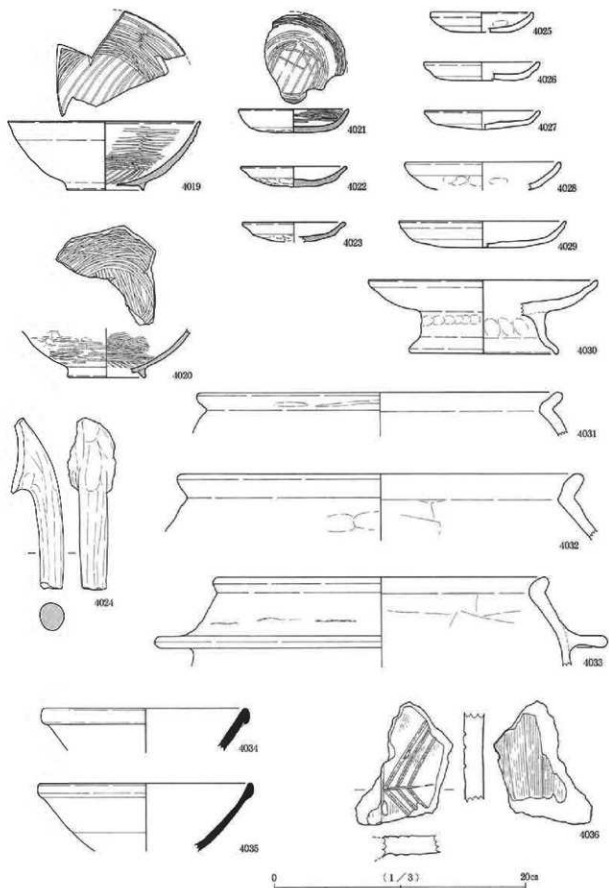


図119 02-4区第7面落ち込み4007出土遺物

第6章 02-5区の調査成果

02-5区は、第2次調査範囲の南東に位置する。機械式駐車場建設に伴う調査で、南北約18.4m、東西約13m、面積約240m²である。

調査前地盤高はおよそT.P.+8.5m。攪乱層等を重機で1.0m除去後、T.P.+7.5mから6.2mまでの1.3mを人力掘削し、遺構面7面と42ヵ所の遺構を検出した。

第1節 層序

02-5区では、北・東・南の各辺の断面(図120)を掲げる。

攪乱層除去面の畝溝群(A層) におい黄褐10YR4/3粗砂～細砂を基本とする。調査区北部では、これに灰10Y5/1細砂が混じる。

第0層(①層) オリーブ黒5Y3/2シルト。

第1層(②層) 調査区南半では灰黄褐10YR4/2シルトに粗砂が少量混じる。北へ向かうにつれて粗砂の含有が多くなり、加えて北東部ではグライ化のため色調が灰オリーブ7.5Y4/2に変化する。

第2層(③層) 黄灰2.5Y4/1シルトを基本とするが、第1層同様に調査区北東部では、グライ化のために灰5Y4/1を呈する。第3面で調査した溝の多くは③層で埋まっている。

第3層(④層) 調査区南半では、暗褐10YR3/4シルトで層厚10cm程度と比較的薄い。一方、北半ではおい黄褐10YR4/3シルトで層厚約30cmと厚くなり、植物の地下茎が縦方向に認められる。この二者は東辺断面の南から約6m地点で層相を異にするが、上下関係は認識できない。

第4層(⑤～⑦層) B～F層は、第4面の遺構埋土。北辺のB層は溝5027の埋土で、灰黄褐10YR4/2シルト。東辺の溝5028(C層)・溝5029(D層)・溝5030(E層)の断面は、図128(151頁)に掲載している。南辺中央やや西寄りのF層は土坑5031の埋土。暗褐10YR3/3細砂～シルト(F-1)、褐灰10YR4/1シルト(F-2)、褐灰10YR5/1シルト～粘土(F-3)に分かれる。

第4層は、調査区北西部を中心に黒褐2.5Y3/2シルト(⑤層)が広がる。よく攪拌されているが、層下部の所々に細砂のラミナが残る。その下層の比較的低い部分では、暗灰黄2.5Y5/2細砂と灰黄2.5Y4/1シルトが水平方向のラミナをなす(⑥層)。一方、南部では、おい黄褐10YR4/3シルトに灰黄褐10YR5/2シルトのブロックが混じる(⑦層)。⑤層同様によく攪拌されている。

第5層(⑧・⑨層) G層は、第5面溝5035断面の輪郭で、その埋土は図132(154頁)を参照。

第5層は、調査区北西部に分布する。上部は、オリーブ黒10Y3/1シルトに、粗砂～細砂が混じる(⑧層)。下部は、暗灰黄2.5Y4/2細砂～シルト(⑨層)。わずかにラミナが認められる。第6面の溝5038・5039とした浅いくぼみも、⑨層で埋まっている。

第6層(⑩～⑰層) 第6層は所によって層相が異なる。北辺西部では、おい黄褐10YR5/4細砂と灰黄褐10YR4/2シルトがラミナをなす(⑩層)。北辺中部では、おい黄褐10YR5/4細砂が細かなラミナをなし、層の下部には厚さ6～8cmの灰黄褐10YR4/2シルトがたまる(⑪層)。調査区北西部では、よく攪拌され、下層の第7層⑱層の細砂を含むオリーブ黒5Y3/2シルト(⑱層)。東辺断面、第4面溝5029の下層部分では、黄褐2.5Y5/3細砂～シルトに、灰黄褐10YR4/2シルトのプ

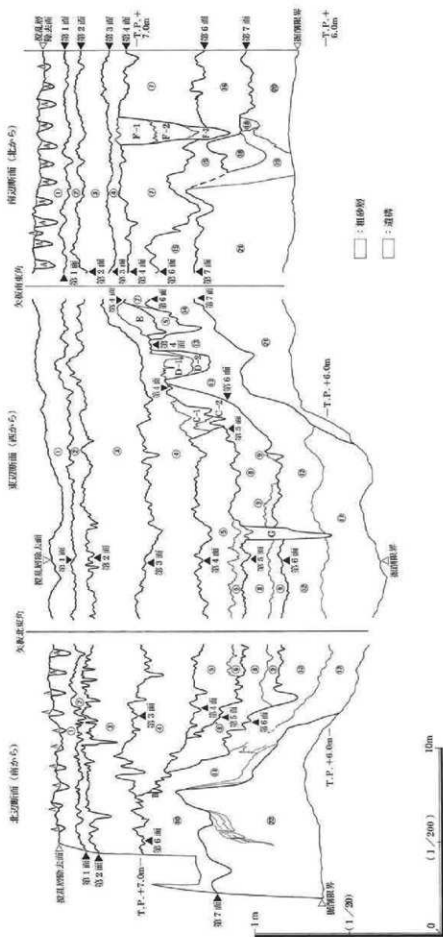


図120 02-5区北・東・南辺断面

ロックや褐灰10Y R 6 / 1粗砂などが混じる (⑬層)。調査区南東部では、にぶい黄褐10Y R 5 / 4シルト (⑭層)。南辺中部では、灰黄褐10Y R 4 / 2細砂～シルト (⑮層)。南辺西部では、褐灰10Y R 4 / 1シルト (⑯層)。⑭～⑯層は、色調は微妙に異なるが、よく似ている。

以上の⑭～⑯層がいわば横方向の変化だったのに対し、調査区北東部の⑰層は、⑫層下層の低い部分に堆積している。⑰層は、暗灰黄2.5Y 5 / 2細砂を基本とし、所々にみられる黒褐2.5Y 3 / 1シルトとともに不定方向のラミナをなす。

第7層 (⑱～⑳層) 南辺中部に、にぶい黄褐10Y R 5 / 4粗砂 (⑱層) がみられる。ラミナは不明瞭。その下層では、暗灰黄2.5Y 4 / 2細砂～シルトが細かなラミナをなす (⑳層)。⑳層の下層西側は、東下がりのラミナがみられる暗灰黄2.5Y 5 / 2粗砂 (㉑層)。

調査区南東部には、にぶい黄褐10Y R 5 / 3粗砂 (㉒層)。層の上部に径2～3cmの礫を含む。北西部には、にぶい黄褐10Y R 5 / 4粗砂 (㉓層)。層中の所々に褐灰10Y R 5 / 1細砂～シルトのラミナがみられる。㉒・㉓層とも基本的に水平方向のラミナをなし、層相も酷似している。北北西に流下する一連の流路充填堆積物と考えられる。

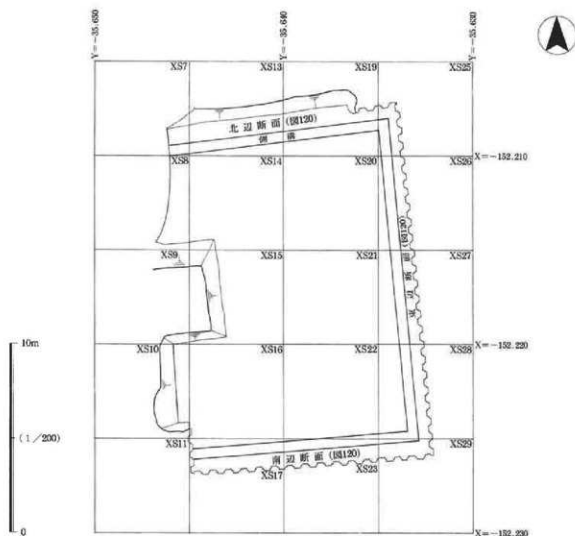


図 121 O2-5 区地区割り

第2節 遺構と遺物

(1) 02-5区攪乱層の遺物

陶器2片、須恵器1片、計3片出土した。

(2) 02-5区攪乱層除去面(図122・写真図版40)の遺構と遺物

面の高さは約T.P.+7.5m。近年までの耕作によると推定される、いずれも南北方向に伸びる畝溝11条と畦状の高まり1条を検出した。

畝溝はいずれも南北方向に伸び、幅20~40cm、検出面からの深さ3~11cm。埋土にはおい黄褐10Y R 4/3粗砂~細砂を基本とし、北部ではこれに灰10Y 5/1細砂が混じる。11条の畝溝から合せて、土師器2片、磁器1片、須恵器1片、サヌカイトチップ1点、計5点出土した。磁器以外は、下層からの巻き上げであろう。

畦状の高まりを調査区南西隅で1条だけ検出した。基底部幅30~35cm、高さ17cm。

(3) 02-5区第0層の遺物

土師器34片、須恵器11片、瓦器6片、磁器3片、陶器1片、瓦1片、計56片出土した。中~近世の包含層である。

(4) 02-5区第1面(図123・写真図版40)

面の高さはT.P.+7.3~7.4mで、ほぼ平坦。遺構はない。調査区北東部ではグライ化が著しい。

(5) 02-5区第1層の遺物(図124)

土師器143片、須恵器31片、瓦器13片、瓦12片、瓦質土器10片、磁器10片、陶器9片、黒色土器A類(内黒)2片、黒色土器B類(両黒)1片、泥面子1点、サヌカイトチップ1点、計233点出土した。

図124-5001(写真図版44)は泥面子。高さ28mm、幅23mm、厚さ9mm。中実で、頭部の前半分だけを表現する。類例は江戸時代中期~幕末に多く、土面子・面打ち・面形などともいう。

(6) 02-5区第2面(図125・写真図版40)の遺構と遺物

面の高さは約T.P.+7.3mで、遺構なし。第1面と同様に北東部ではグライ化が著しい。

第2面調査後に掘り下げた第2層中から、埋木A・B・Cと仮称した遺構(写真図版41:第3面の写真参照)を検出した。これらは、両端に金具(腐食して原型不詳)が付く木の棒。南北両端はビット状の掘り込みがあり、いずれも南側の掘り込みの方が深い。上面では検出できなかったが、形状から近現代に地中に埋設された構造物と推定する。これら3ヶ所の掘り込みから、須恵器2片、土師器2片、瓦器1片、計5片出土した。ただし、埋木が近現代の埋設物であるという推定に基づけば、これらの土器片は下層からの混入と考えられる。

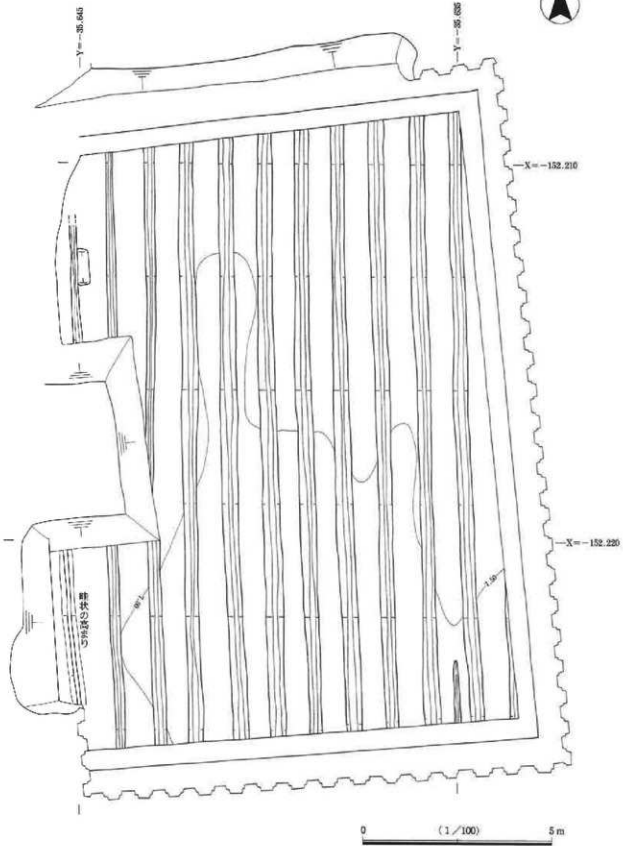


図122 02-5区攪乱層除去面

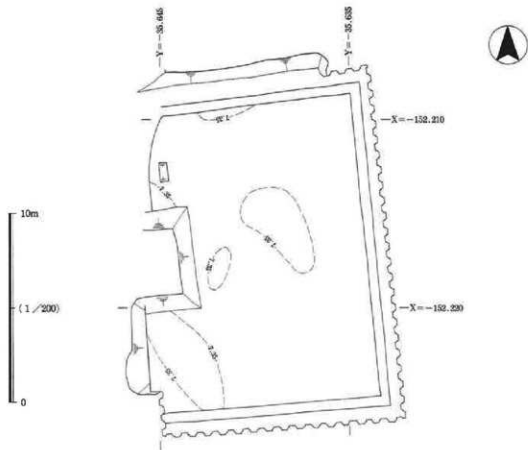


図123 02-5区第1面

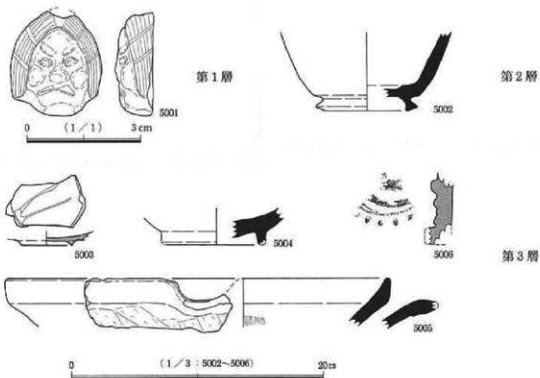


図124 02-5区第1～3層出土遺物

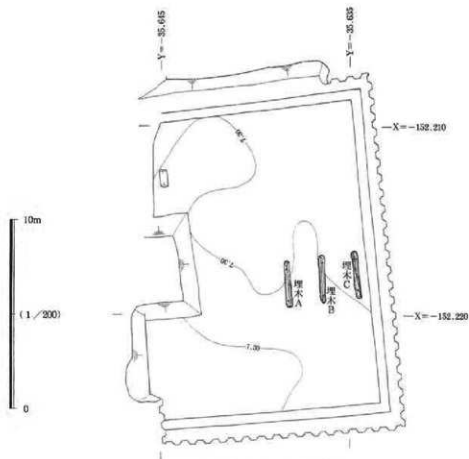


図125 O2-5区第2面

(7) O2-5区第2層の遺物 (図124)

土師器109片、須恵器26片、瓦24片、瓦器14片、陶器9片、磁器5片、瓦質土器5片、黒色土器A類1片、弥生土器1片、計194片出土した。

図124-5002は奈良時代の須恵器長頸壺底部。ただし、O2-5区第2層には、鎌倉～室町時代の軒丸瓦や瓦器、さらに新しい時代の陶器片も含まれており、中～近世の包含層と考えられる。

(8) O2-5区第3面 (図126・写真図版41) の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.9～7.2mで、南が高い。溝20条、土坑1基、ピット5個、足跡を検出した。

溝は東西または南北にのびる。切り合いからみると古い順に、東西方向(溝5016以外)の溝→南北方向の溝→東西方向の溝5016となる。しかし、これら溝群からの遺物は、溝5001から磁器1片と土師器1片、溝5005から江戸時代の磁器1片と土師器2片、溝5016から土師器1片と鎌倉時代と思しい瓦器椀細片1片、と以上のみで時期の特定は難しい。

個々の溝のデータは、表15にまとめた。いずれも出土遺物はない。

土坑5021は、調査区北西部に位置する。溝5007に西側を切られている。平面形は直径約102cmの円形と推定され、深さ7cm、埋土は暗緑灰7.5GY 4/1シルト。出土遺物はない。

ピットを5個検出した。個々のピットのデータは、表16を参照。

調査区南東部、溝5020の南では、直径約10cmのウマ(奇蹄目)と考えられる足跡を検出した。

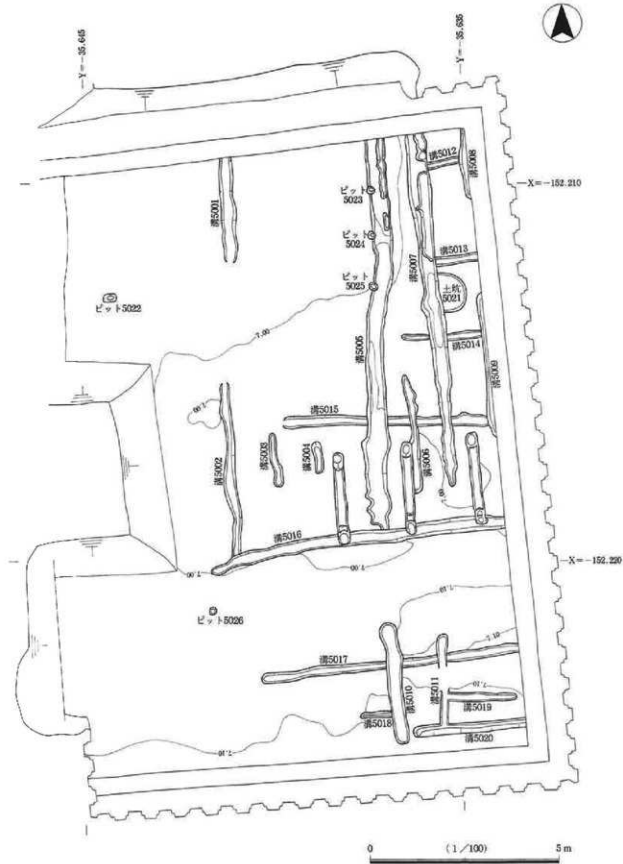


図 126 02-5区第3面

表15 02-5区第3面の溝一覽

溝番号	グリッド	主軸方向	寸法			埋土 (全てシルト)	出土遺物						時期				
			検出長さ m	幅 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒B	黒A	土師	須恵		その他	合計		
5001	XS14, 他	北	(2.8)	22~30	4	暗灰黄2.5Y4/2											
5002	XS15	北	(4.6)	16~30	4	オリーブ褐2.5Y4/3											
5003	XS15, 他	北	1.9	16~24	3	暗灰黄2.5Y4/2											
5004	XS21	北北西	0.8	20~23	8	暗灰黄2.5Y4/2											
5005	XS20, 他	北	(10.4)	20~75	7	暗オリーブ灰5GY3/1				2			磁器1		3		江戸時代?
5006	XS21	北北西	(3.1)	13~25	8	暗灰黄2.5Y4/2											
5007	XS20, 他	北北西	(9.4)	15~60	14	暗オリーブ灰5GY4/1											
5008	XS25, 他	北北西	(1.9)	(6~20)	16	暗オリーブ灰5GY4/1											
5009	XS26, 他	北北西	3.3	(7~19)	16	暗オリーブ灰5GY4/1											
5010	XS22	北北西	3.2	34~44	5	暗灰黄2.5Y4/2											
5011	XS22	北	(1.8)	19~28	8	灰黄褐10YR4/2											
5012	XS19	東北東	(0.8)	12~16	4	暗オリーブ灰5GY3/1											
5013	XS20, 他	東西	(1.1)	18~22	6	暗オリーブ灰5GY3/1											
5014	XS20, 他	東西	(2.1)	6~18	4	暗灰黄2.5Y4/2											
5015	XS21, 他	東西	(5.4)	19~38	5	暗灰黄2.5Y4/2											
5016	XS21, 他	東北東	(7.7)	15~37	6	暗灰黄2.5Y4/2	1							1			2鎌倉前半?
5017	XS22, 他	東北東	(6.8)	17~26	7	灰黄褐10YR4/2											
5018	XS22	東西	(0.8)	11~15	3	灰黄褐10YR4/2											
5019	XS28, 他	東西	(1.8)	13~23	4	灰黄褐10YR4/2											
5020	XS29, 他	東北東	(3.0)	19~27	7	灰黄褐10YR4/2											

表16 02-5区第3面の土坑・ピット一覽

遺構名	グリッド	平面形	主軸方向	寸法			埋土 (注記なしはシルト)	出土遺物						時期			
				長さ cm	短径 cm	深さ cm		瓦器	瓦質	黒B	黒A	土師	須恵		その他	合計	
土坑5021	XS20, 他	円		102	(69)	7	暗緑灰7.5GY4/1										
ピット5022	XS14	楕円	東西	33	19	17	暗灰黄2.5Y4/2										
ピット5023	XS20	円		18	18	6	暗オリーブ灰5GY4/1										
ピット5024	XS20	不整円		19	18	6	暗オリーブ灰5GY4/1										
ピット5025	XS20	楕円	北西	23	18	4	暗オリーブ灰5GY3/1										
ピット5026	XS16	円		18	17	9	暗灰黄2.5Y4/2										

溝5016出土の瓦器碗は鎌倉時代に属するが、上下の包含層の出土遺物や溝5001・5005出土の磁器から、02-5区第3面は室町時代の遺構面と考えられる。

(9) 02-5区第3層の遺物 (図124)

土師器96片、須恵器55片、瓦50片、瓦質土器26片、瓦器25片、陶器9片、磁器5片、黒色土器A類1片、弥生土器3片、焼土塊1点、計271点出土した。

図124-5003は瓦器碗の底部。見込み部のヘラミガキは散漫で、高台は断面三角形で低い。5004は青磁碗の底部。5005は片口が付く須恵器播鉢。体部外面のヘラケズリが顕著。8分の1周ほど現存しているが、内面の播目は1単位しかみられない。5006は外区に珠文帯、内区に巴文がみられる軒丸瓦。

これら出土遺物から、02-5区第3層は室町時代の包含層と考えられる。

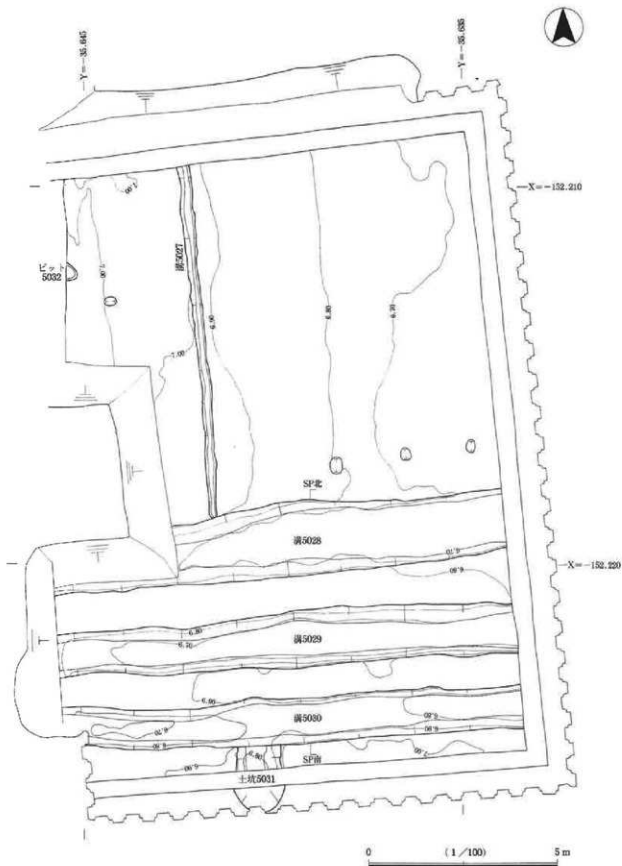


図127 02-5区第4面

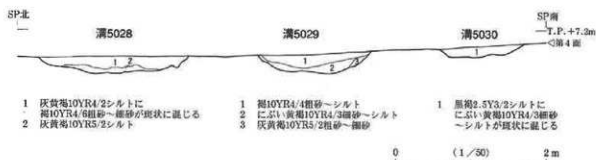


図128 02-5区第4面溝5028～5030断面

(10) 02-5区第4面(図127・写真図版41)の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.6～7.0mで、南が高い。溝4条、土坑1基、ピット1個を検出した。

溝5027は調査区北西部で、南北にはしる。幅21～34cm、深さ10cm。埋土は灰黄褐10YR4/2シルト。出土遺物は、土師器10片、瓦器2片、須恵器1片、計13片出土。遺物から鎌倉時代以降に位置付けられる。

溝5028～5030は調査区南部で、東西にはしる。これらの断面を図128に掲げる。

溝5028の幅は1.4～2.0m、深さ25cm。埋土は2層に分かれる。土師器28片、瓦19片、瓦質土器9片、須恵器8片、瓦器5片、青磁1片、陶器1片、計71片出土した。図129-5007～5010は瓦質土器。5007は火鉢。口縁部直下の外面に型押し菊花印花文が並ぶ。室町時代に属する。5008・5009は瓦質の鉢。5008の体部外面は横方向のヘラケズリ、内面には不定方向のハケメがみられる。5010は瓦質の甕。外面には粗いタタキが施される。復元口径約40cm。5010は第2層中検出埋木B・第3層・第4面溝5028出土

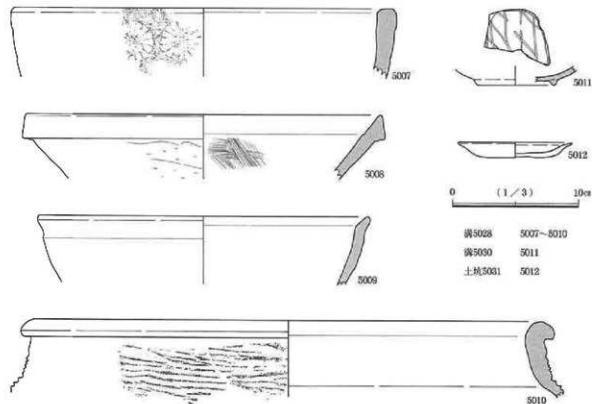


図129 02-5区第4面溝5028・5030、土坑5031出土土器

の3片を接合して図化した。これらの遺物から、溝5028は室町時代に位置付けられる。

溝5029の幅は1.1~1.5cm、深さ28cm。埋土は3層に分かれる。出土遺物は、土師器32片、瓦器11片、須恵器11片、瓦3片、黒色土器A類2片、陶器1片、瓦質土器1片、計61片。

溝5030の幅は1.0~1.3m、深さ24cm。埋土は単層。土師器13片、瓦器5片、須恵器5片、瓦3片、陶器1片、瓦質土器1片、計28片出土した。図129-5011は瓦器碗。見込み部に痕跡的な斜格子状の暗文が残る。平安時代末~鎌倉時代初頭に属する。

土坑5031は調査区南部に位置する。当初は東西方向の溝5030に切られそれ以北には伸びない南北方向の溝と認識していたが、南辺断面を撤去しながら第4面を追加調査すると、調査区内で南端を検出できたので土坑とした。東西幅1.2m、深さ60cm。埋土は調査区断面(図120のF層)に示すように3層に分かれる。土師器2片、弥生土器1片、計3片出土した。図129-5012(写真図版44)は土師器皿。

ピット5032を調査区北部の西端で半分だけ検出した。南北径29cm、深さ7cm。埋土は灰黄褐10YR 4/2シルト。土師器3片が出土したが、いずれも小片で時期不詳。

(11) 02-5区第4層の遺物(図130)

土師器64片、須恵器54片、瓦器25片、瓦23片、瓦質土器8片、磁器3片、黒色土器A類2片、陶器1片、製塩土器1片、弥生土器5片、サヌカイト剥片1点、計187点が出土した。

図130-5013は白磁碗の底部。見込み部と体部との境は片切形状の段をなす。底部は削り出し輪高台。内面は施軸されているが、外面は高台部分を含めて露胎である。5014は奈良時代中頃の須恵器杯で、第4層の他の遺物よりも古い。5015は須恵器甕。5016は製塩土器か。口縁部はわずかに内彎ないし直立し、口縁端部は幅約1cmの端面をなす。内外面ともナデ調整で指の痕跡が残る。

遺物組成からみて、02-5区第4層は室町時代の包含層と考えられる。

(12) 02-5区第5面(図131・写真図版42)の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.4~6.9mで、東に傾斜している。溝2条、土坑1基、ピット2個を検出した。調査区北西部と中部では、第6層が広く露出している。

土坑5034(図132・写真図版42)は、直径3.2~3.7mの不正円形、深さは70数cm。その東に溝5035が接しており、両者の底の高さはT.P.+6.0mと一致する。この形状は「淵」と呼ばれる小規模水利施設に類似する。土師器9片、須恵器3片、磁器2片、瓦器2片、瓦1片、サヌカイト剥片1点、計18点出土した。

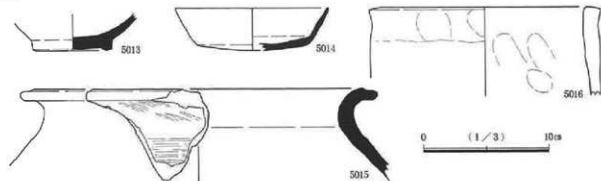


図130 02-5区第4層出土土器

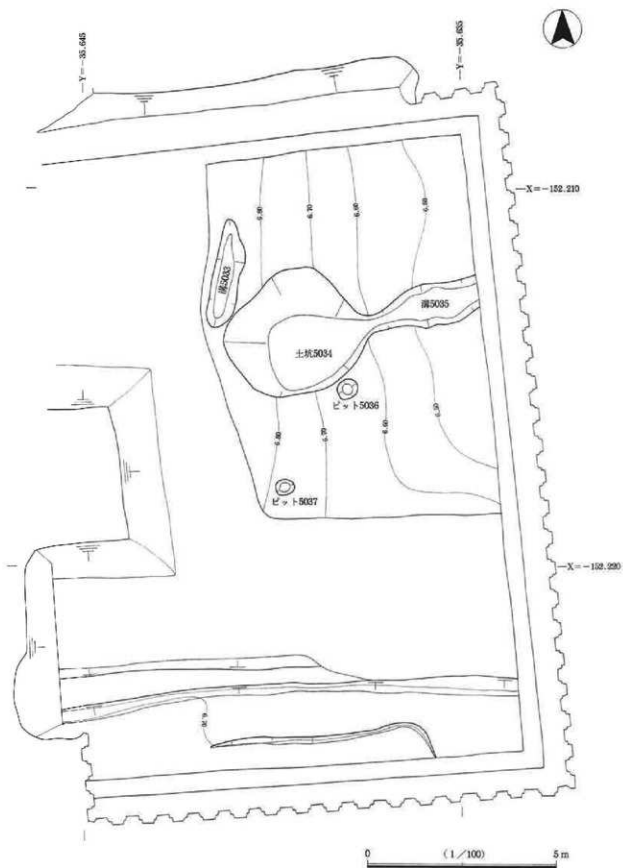
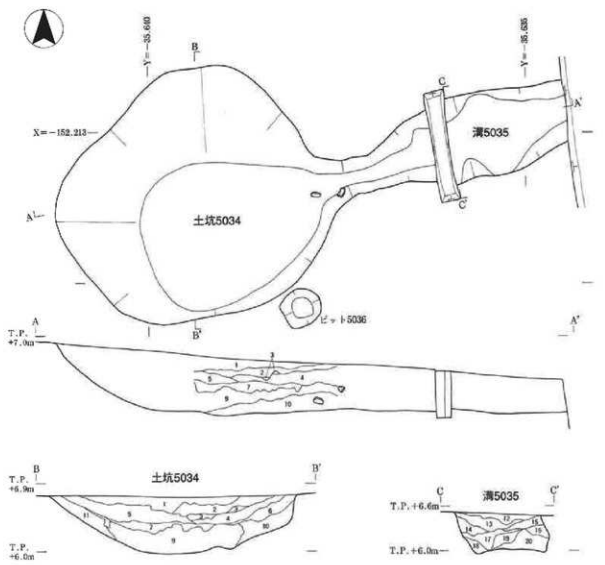


図131 02-5区第5面



土坑5034

- 1 灰黄褐10YR4/2細砂混じりシルト
- 2 にぶい黄褐10YR4/3シルトとにぶい赤褐5YR4/5粗砂が混在し混じりあり
- 3 褐灰10YR5/1粘土
- 4 褐10YR4/4粗砂に灰黄褐10YR5/2シルトブロックが混在する
- 5 暗褐10YR3/3シルト
- 6 褐灰10YR6/1シルトに褐10YR4/4粗砂のブロックが混在する
- 7 灰5Y4/1シルトに褐10YR4/4粗砂のブロックが混在する
- 8 にぶい黄褐10YR6/4粗砂
- 9 暗オリーブ灰5GY4/1シルト～粘土
- 10 灰オリーブ5Y4/2粗砂と灰5Y4/1シルトが混在し混じりあり
- 11 褐灰10YR4/1シルトに褐10YR4/4粗砂が混在する

溝5035

- 12 黄褐2.5Y3/2シルトに褐10YR4/4粗砂が混在する
- 13 オリーブ黒10Y3/1シルト～粘土
- 14 灰10Y4/1シルトと灰オリーブ7.5Y4/2粗砂が水平方向の細かなラミナをなす
- 15 灰10Y4/1シルト、褐10YR4/4粗砂が混在し混じりあり一帯水平方向のラミナをなす
- 16 にぶい黄褐10YR5/3粗砂と灰10Y4/1シルトのブロックが混在し混在する
- 17 灰7.5Y4/1シルトと灰10Y3/1粗砂が不定方向のラミナをなす
- 18 灰7.5Y4/1シルトと灰10Y3/1粗砂がほぼ水平方向のラミナをなす
- 19 オリーブ黒10Y3/2シルトに灰10Y5/1粗砂が混在する
- 20 灰7.5Y4/1シルト～粘土に灰10Y4/1粗砂が混在する

0 (1/30) 2m

図 132 02-5区第5面土坑5034・溝5035



図133 02-5区第5面土坑5034出土土器

図133-5017・5018の土師器杯は土坑5034と溝5035との接続部から出土した。いずれも口縁部はヨコナデされ、体部外面は不調整で指頭痕が残る。室町時代中頃（平安京Ⅱ期）に属する。5019は磁器。底部は削り出し輪高台。晝付以外には施軸され、見込み部に草花文が描かれている。5020は白磁碗。削り出し輪高台の底部。内面施軸だが、外面は露胎。他に土坑5034からは、庄内式の甕や弥生時代と推定されるサマサイト剥片なども出土しているが、遺物組成から室町時代の所産と考えられる。

溝5035（図132・写真図版42）は土坑5034から東北東に続く。検出長約3m、幅0.5～1.1m、深さ60cm。土師器2片、須恵器1片、磁器1片、計4片出土した。出土遺物からは時期の特定はできないが、遺構の検出状況から土坑5034と同時存在と考えられる。

溝5033は土坑5034の北西に位置し、南北方向に長軸をもつ。長さ2.9m、幅60～77cm、深さ11cm。埋土は灰オリーブ7.5Y 4/2粗砂。出土遺物は、古墳時代の須恵器杯の底部1片のみ。

ピットを2個検出した。ピット5036は土坑5034の南東に位置する。平面円形で、径47～55cm、深さ9cm。埋土はにぶい黄褐10Y R 4/3シルト。ピット5037は土坑5034の南2.1mに位置する。平面不整形円で、径39～51cm、深さ9cm。埋土は灰黄褐10Y R 4/2シルト。いずれも出土遺物はない。

(13) 02-5区第5層の遺物

土師器29片、須恵器20片、瓦器6片、瓦質土器3片、瓦1片、弥生土器1片、計60片出土した。

(14) 02-5区第6面（図134・写真図版43）〔第Ⅰ・Ⅱ面相当〕の遺構と遺物

面の高さはT.P.+6.3～7.0mで、東に傾斜する。溝2条、土坑1基、ピット2個を検出した。

溝5038は、調査区北東に位置する。南南東から北北西を主軸とする。幅0.9～1.2m、深さ5cm。埋土は第5層⑧層と同じく暗灰黄2.5Y 4/2細砂～シルト。時期不詳の甕または鉢の小片1片のみ出土。

溝5039は、調査区中部東端にある。東西方向にのび、幅48～55cm、深さ8cm。埋土は溝5038と同じ。出土遺物なし。

ピット5040は、調査区中央部に位置する。平面円形と推定され、直径27cm程度、深さ11cm。埋土はにぶい黄褐10Y R 4/3シルト。出土遺物はない。

土坑5041（図135）は、下記のピット5042とともに第6層掘削中に検出した。調査区中西部に位置する。平面はほぼ円形で、直径1.7～2.0m、深さ20cm以上。埋土は4層に分かれる。出土遺物は、土師器3片、瓦2片、瓦器2片、須恵器2片、計9片。出土遺物から、平安時代後半の所産と考えられる。

ピット5042（図136・写真図版43）は、調査区西南部にある。第6層中の検出時点で、平面不整形円形、直径31～34cm、深さ10cm以上。埋土は灰黄褐10Y R 4/2シルト。須恵器3片、土師器2片、石2個、計7点が出土した。須恵器3片はピット底から出土。石は、北側の大きい方が凝灰岩、南側の小さい方

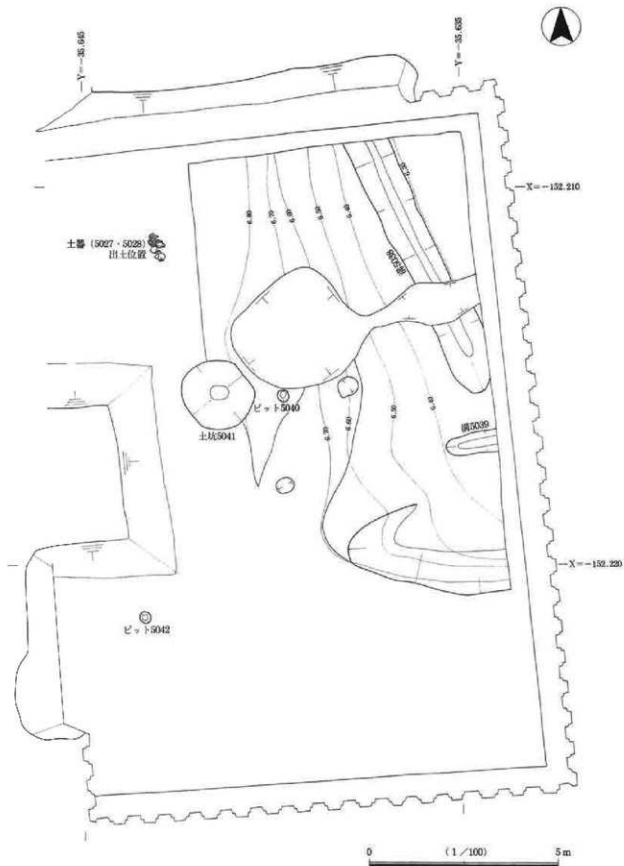


図 134 02-5区第6面

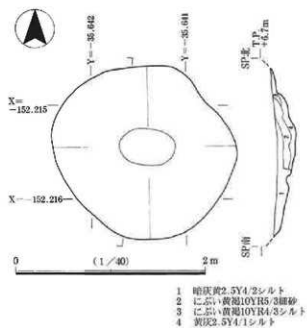


図135 02-5区第6面土坑5041

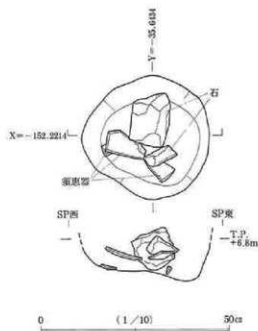


図136 02-5区第6面ピット5042

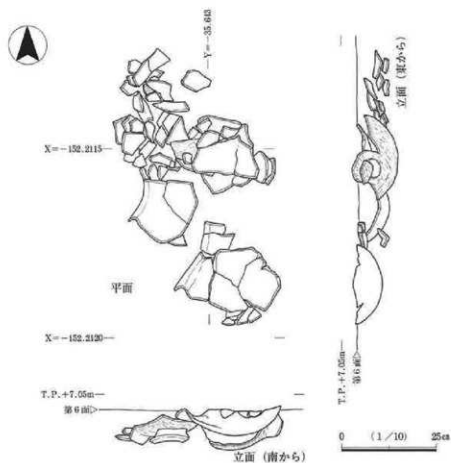


図137 02-5区第6層中土器(5027・5028)出土状況

が石英斑岩である。図138-5021（写真図版44）の土師器杯は石よりさらに高いレベルから出土した。器表の剥落は著しく調整不明だが、形態から奈良時代後半～平安時代初頭と考えられる。

(15) 02-5区第6層の遺物（図138）

磁器3片、瓦15片、瓦質土器5片、瓦器10片、須恵器70片、土師器64片、弥生土器3片、計170片が出土した。

02-5区南西部（X S 16・17・22グリッド：図121参照）からは、平安～鎌倉時代の土器が主に出土している。図138-5022は瓦器碗。外面にミガキは施されず、内面のミガキは粗雑である。貼付けられた高台は断面逆台形を呈する。鎌倉時代初頭（尾上編年Ⅲ-2期）に属する。5023（写真図版44）は瓦器皿。口縁部はヨコナデ、見込み部のミガキは軽く、底部外面は無調整。5024（写真図版44）は土師器皿。5025は奈良時代～平安時代初頭の須恵器杯。その他、凸面縄タタキ、凹面布目の平瓦15片も、02-5区では全て調査区南部から出土している。

一方、02-5区北部からは、古墳時代以前の土器が多く出土している。5026は須恵器すり鉢。分厚い円板状の底部の上に外上方にのびる体部が乗る。5027・5028の甕は、調査区北西部（X S 14グリッド）から図137のような状態で出土した。5027（写真図版44）は布留式粗形甕。外面は右上がりのタタキの後、ハケでなでており、内面にはヘラケズリが施される。5028（写真図版44）は弥生形甕。底部は分割成形された平底で、体部外面には右上がりのタタキが施される。内面は磨耗しているがナデ調整か。5029は弥生時代後期の広口壺だが、水流によるローリングが著しく調整は不明。

(16) 02-5区第7面（図139・写真図版43）〔第V面相当〕

庄内期に埋没した流路の上面。T.P.+6.2～6.7mで、起伏に富んでおり、基本的に東に傾斜している。検出遺構はないが、調査区北西部には流路状のくぼみがみられる。

(17) 02-5区第7層の遺物（図138）

第7層は流路充填堆積物。弥生土器16片、須恵器7片、瓦4片、土師器3片、瓦器2片、磁器1片、サヌカイト剥片1点、計34点出土した。

図138-5030（写真図版44）の鉢は、02-5区南西隅、設計上の調査終了面（T.P.+6.23m）よりもわずかに下（T.P.+6.097～6.172m）から逆位で出土したが、掘形は認識できなかった。底部の中心からややずれた所に、径4mmの焼成前穿孔が外面から施されている。器壁は全体に磨耗しているが、内面には緻密なヘラミガキが認められる。5031も鉢。口縁は外反し、端部は面をなす。体部内外面はヘラミガキの後ナデている。胎土は生駒山西麓産。5032は弥生形甕の底部。外面は底部近くまでタタキが施される。

以上、02-5区第7層には磁器、瓦、瓦器、須恵器も含まれるが、周辺調査区との対比や出土遺物の組成から古墳時代前期の流路充填堆積物と考えられる。

第7層の流路充填堆積の途中、T.P.+6.23mで調査予定深度に達した。

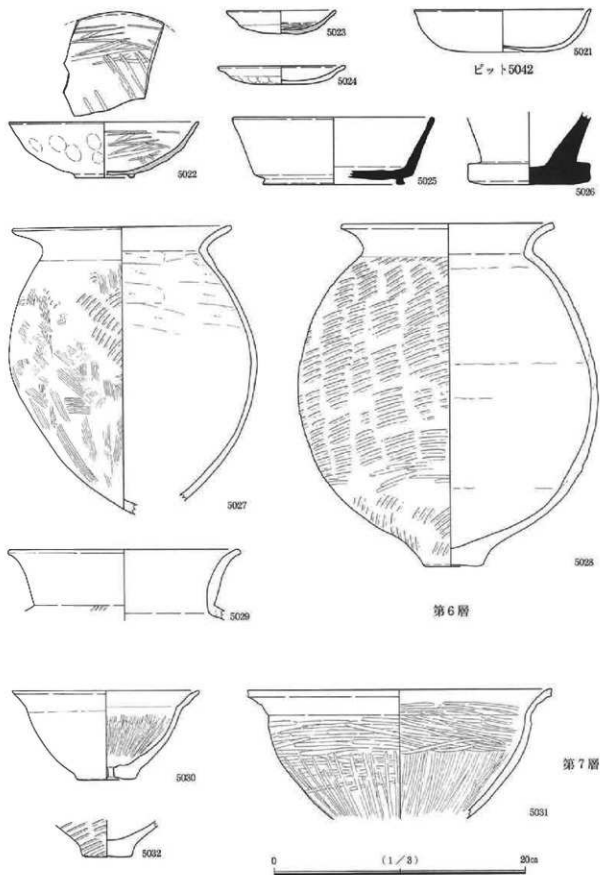


図138 02-5区第6面ビット5042、第6・7層出土土器

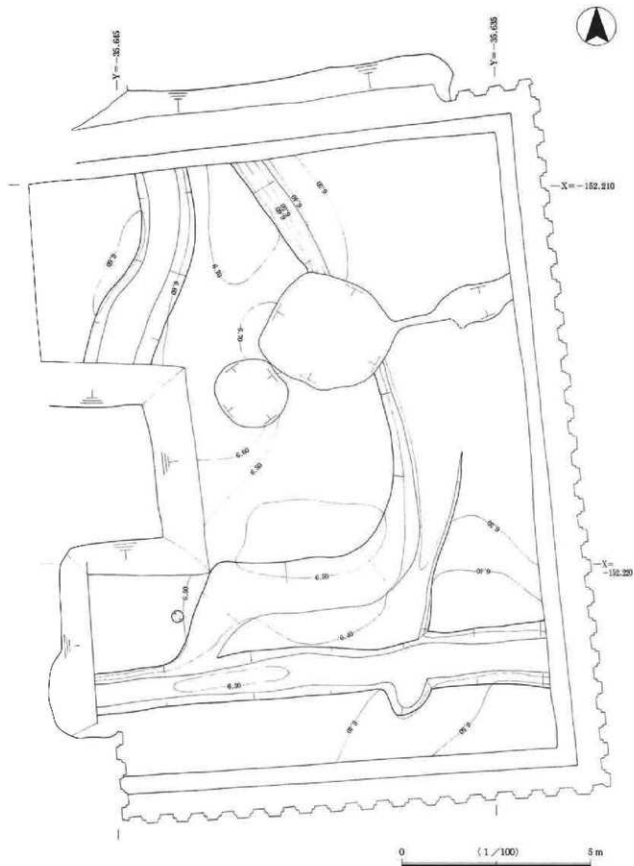


図139 02-5区第7面

第7章 02-6区の調査成果

第1節 第1～3面の遺構

(1) 02-6区第1面

当調査区は近年の埋設管等による擾乱が多く、隣接の02-3区の第1・2面に相当する遺構面の検出は困難であった。T.P.+7.2m前後で安定した面が現れ、これが遺構面として認識できる最初であったので第1面と名付けた。この面は、調査区東半部では褐色(7.5YR 4/4)土、西半部ではオリーブ灰色(10Y 5/2)シルトを基盤層とするもので、02-3区の第3面に相当すると考えられる。

井戸825 調査区中央で検出した井戸である。掘方の東西径は2.0mであるが、遺構北半部が調査区外となり全容は不明である。掘方は下方に行くに従い小さくなる。

井戸枠は深さ1.5mの掘方内の底から、径40cm程、幅7～20cm程の曲物を二～四重に重ねて積み上げたものである。底から1.3mの高さまでの曲物が確認されたが、本来はもっと上まで積み上げられていたものであろう。これらは矢板で破壊されたり調査中のたびたびの水没によって残存状況の良くないものとなり、原状のままの取り上げは困難であった。

井戸枠内の埋土は緑灰色(7.5GY 5/1)あるいは灰色(N 5/)粘質土で炭片を多く含み、炭層と言えるものもあった。

土壌826 井戸825の南で検出した遺構であるが、その北部は同井戸に切られ、南部は調査区外となって南北の大きさは不明と言わざるを得ない。東西は1.5m、深さは0.2mを測る。埋土は灰色(7.5Y 4/1)粘土である。

溝817 調査区西半部で検出された東西溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.1m、検出長25mを測る。方向は国土座標の東から南へ約5°振るものとなる。埋土は暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土であった。

溝818 調査区東半部で検出された東西溝である。幅0.25～0.4m、深さ0.15～0.2m。近年の擾乱で途切れ途切れとなるが、検出長は35mとなった。調査区中央より西へは延びないと考えられる。方向は国土座標の東から南へ約1°振るものとなり、溝817と若干の相違を見せる。埋土は褐色(10YR 6/1)粘土である。

自然流路827東 上述の井戸825・土壌826を挟んで、自然流路による砂層の堆積が見られた。827の遺構番号を付したが、その後の調査の進展によって時期の違う二つの流路が重なり合っており、その切り合い部分がさらに井戸と土壌に切られているものと判明した。そこで井戸・土壌の東を「自然流路827東」、西を「自然流路827西」と分けて区別することとした。断面観察によって切りこみ面が違い、827東は当第1面、827西は次の第2面の遺構となることが明らかとなった。

自然流路827東は、井戸825より東4m離れてその東肩を検出した。この部分を見る限り、この遺構は座標北と同じ方向に走る。西肩は上述のように井戸と土壌によって切られており、従って流路幅は不明である。流路底は東肩から徐々に下がり、深さ0.5mで最底面となる。最底面では足跡と思われる凹凸が観察された。

埋土は緑灰色(7.5GY 6/1～5GY 6/1)砂層に灰色(N 5/)シルト層等が挟まる互層である。

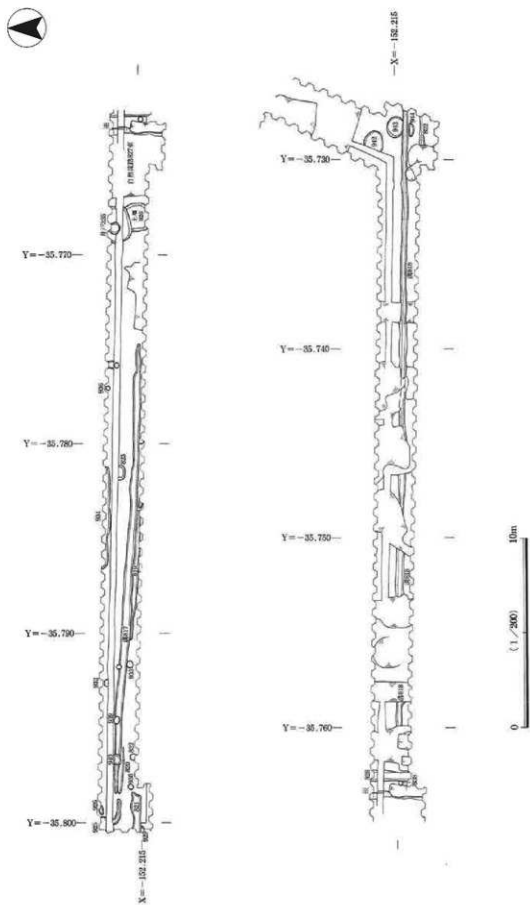


図 140 02-6区第1面

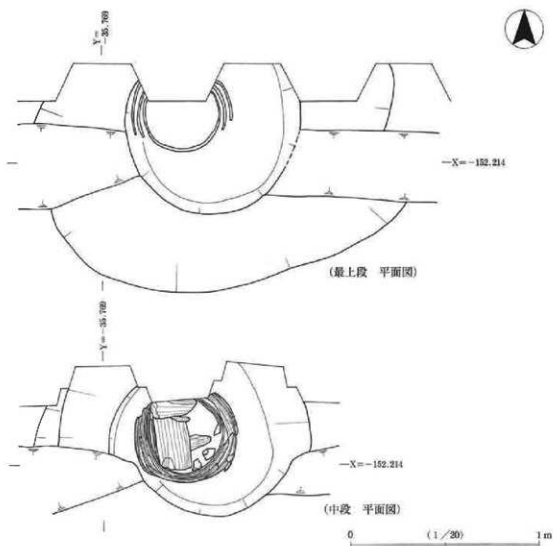


図141 02-6区第1面井戸825

小ビット群 調査区西半部で径0.2～0.4m、深さ0.1mほどの小ビット十数個を検出した。埋土は主として褐色（10YR 4/1）粘質土である。これらのビット群は建物として組み合わない。

また調査区東端では、径1.0m、深さ0.05～0.1mの浅い小ビット二個を検出した。埋土はにぶい橙色（7.5YR 6/4）土である。

(2) 02-6区第2面

第1面の基盤層である褐色土・オリーブ灰色シルトを除去して検出した遺構面である。調査区東半部は後述の古墳時代河川963の埋土である粗砂～礫砂層、西半部は灰色（5Y 6/1）を主とする砂に一部粘質土が混じる土層を基盤とする。レベルはT.P.+7.0m前後で、自然流路や小ビットを検出した。

自然流路827西 自然流路827西は前述のように当初同東と同一考えたが、前述のように切り込み面が違うことが判明したため時期の違いが明らかとなった。従って西と東とは切り合い関係にあり、西の方が古いものとなる。

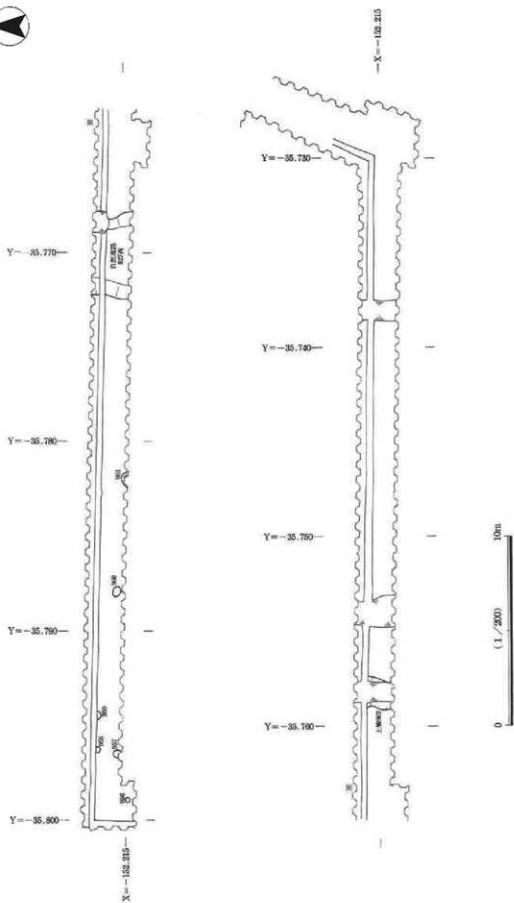


图 142 02-6区第2面

この遺構の西肩はこの面からの切り込みとなるので明確であった。一方の東肩は上述のように同東および井戸825に切られるが、遺構の底が深かったため復跡を残しており、幅4.5m、深さ0.7mを測るものであることが判明した。埋土は上層がにぶい黄褐色（10YR 6/3）～灰色（N 5/ ）粘質土、下層が灰色（N 6/ ）～緑灰色（10GY 5/1）の砂やシルトの互層で、ラミナが見られた。

土壌962 調査区中央やや東寄りの位置で検出した遺構である。東西の幅は1.5mであるが、南北の長さは北のセクションにこの遺構が及ばず、また南は調査区外となっているので、今のところ1.5m以上と言うはかない。深さは0.05mと浅く、埋土は黄灰色（2.5Y 6/1）砂で、土器片を多く含んでいた。

小ピット群 調査区西半部で、径0.2～0.5m、深さ0.1～0.2mの小ピットが数個検出された。これらは散在した状態で、建物として組み合わせるものはない。埋土はにぶい黄褐色（10YR 5/2）粘質土～にぶい黄褐色（10YR 6/3）土で、うちP-957は炭片が混じるものであった。

（3）02-6区第3面

第2面の基盤層である灰色砂を除去して検出した遺構面で、暗灰黄色（2.5Y 4/2）シルトを基盤層とする。当該面のレベルはT.P.+6.8m前後を測る。この面で当区東半部に広がる自然河川の西肩と若干の小ピットを検出した。

自然河川963 02-1～5区の調査区全体を流れる自然河川は、当02-6区の中央部でその西肩を検出した。当区ではこの河川に963という遺構番号を付した。

この河川は西肩から水平距離4.0m、高低差1.8mの勾配で下がって川底となり、その法尻より5.5mの地点で幅3～4m、深さ0.7mの落ち込みとなって川底をさらに下刻している。ここから西の川底は緩やかな勾配で下がっていき、02-3区へと続く。レベルは河川の西肩ではT.P.+6.8m、川底では西端が同5.0m、調査区東端が同4.6m、下刻して最も深い所が同4.3mを測る。

埋土は黄灰色（2.5Y 5/1）～にぶい褐色（10YR 5/3）の粗砂あるいは礫砂に、灰色（N 5/ ）粘土や浅黄色（2.5Y 7/3）シルトなどが互層としては挟まるもので、ラミナが発達し、激しい流れがあったことを伺わせる。

この河川の西肩から東へ2mの範囲に、0.2m程下がったレベルの埋土中で土器器が多数出土した。これらは流れてきたものではなく、川岸よりまとめて投げ込まれたか据え置かれたものであろう。川辺における祭祀跡の一端と考えられる。

また河川の埋土中層～下層からは古式土器器が多く出土しており、完形品も得ている。

小ピット 調査区西半部で径0.3m、深さ0.1m程の小ピット二個を検出した。第1・2面に比べると遺構の密度がさらに小さくなる。遺物の出土はほとんどなかった。他に遺構は見当たらず、この周辺は人の活動痕跡の希薄な場所と言える。

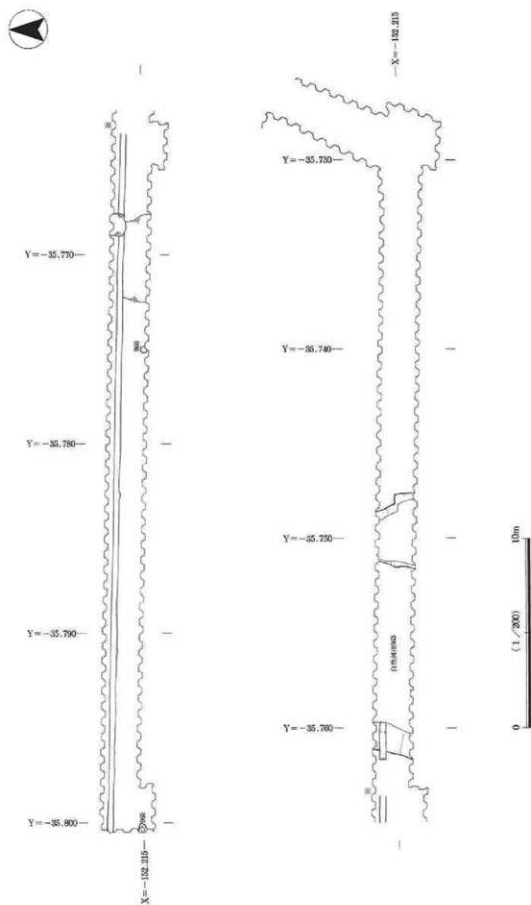


図 143 02-6区第3面

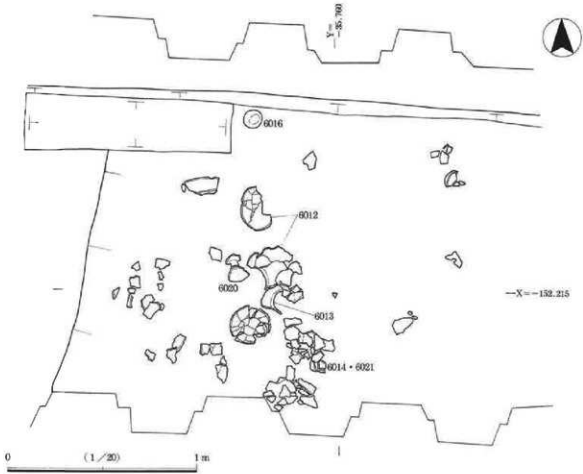


図 144 02-6区第3面自然河川963〔西側部〕土器出土状況

第2節 第3面以上の遺物

(1) 02-6区攪乱・盛土層の遺物

土師器34片、須恵器8片、磁器3片、陶器2片、瓦器1片、弥生土器3片、計51片出土した。現代の磁器から弥生土器まで各種の土器類である。

(2) 02-6区第0層の遺物

土師器183片、須恵器65片、陶器10片、瓦9片、瓦器9片、磁器8片、瓦質土器7片、黑色土器A類(内黒)2片、黑色土器B類(両黒)1片、裂塩土器1片、弥生土器8片、焼土塊1点、計304点出土した。各時期の土器類が含まれるが、数的には平安時代の土師器が主体を占める。

(3) 02-6区第1面の遺物(図145)

溝818から、土師器6片、陶器1片、平瓦1片、灰軸陶器1片、須恵器1片、計10片出土した。図145-6001は灰軸陶器小形碗。高台の断面は三角形で、灰軸陶器の中では比較的新しい様相を示す。11世紀代(百代寺宮式)の所産。この碗を含め遺物組成(陶器は混入か)から、溝818は平安時代後半に位置づけられる。

井戸825からは、土師器124片、須恵器15片、黑色土器A類4片、瓦器2片、緑軸陶器1片、弥生土器2片、計148片出土した。図145-6002・6003は土師器碗。6002は無高台、6003(写真図版49)は断面三角形の低い高台が付く。6004は土師器羽釜。6005(写真図版49)は黑色土器A類碗。「ハ」字状に開く細い高台の径は比較的大きい。内外面ともヘラミガキで、内面には特に密に施される。このほか弥生土器や瓦器も出土しているが、図示した土器および遺物組成から、井戸825は平安時代中頃に位置づけられる。

土坑826から、土師器27片、須恵器5片、瓦器3片、黑色土器A類1片、平瓦1片、計37片出土した。図145-6006は瓦器皿。平安時代後半に属する。6007(写真図版49)は土師器皿。

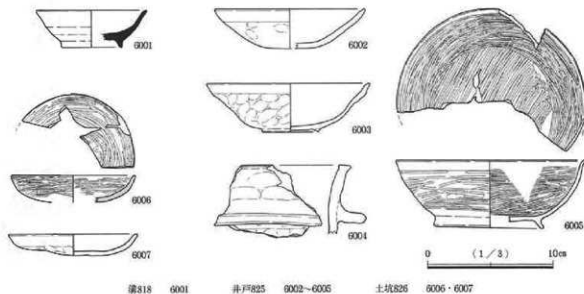


図145 02-6区第1面溝818・井戸825・土坑826出土土器

表17 02-6区第1面の遺構出土遺物

遺構名	出土遺物(片・点数)					時期	遺構名	出土遺物(片・点数)					時期
	瓦器	黒色B	黒色A	土師器	須恵器 その他・備考			合計	瓦器	黒色B	黒色A	土師器	
溝917				1		1 古代	溝928				1		1 古代
溝918				6	1 陶器1, 瓦1, 灰輪1	10 平安後半	ピット933				5		5 古代
溝922				2		2 古代	落ち込み934				1		1 平安
井戸925	2	4	124	15	陶器1, 弥生土器2	148 平安中頃	ピット938		1			弥生土器1	2 平安前半
土坑926	3	1	27	5	平瓦1	37 平安後半	ピット939				1		1 古代
自然流路 827東	1		126	39	瓦2, 弥生土器2	170 平安後半	土坑943				5	弥生土器1	6 古代

自然流路827東からは、土師器126片、須恵器39片、瓦2片、瓦器1片、弥生土器2片、計170片出土。須恵器・土師器は古墳～平安時代の各時期に及ぶ。

その他の遺構出土遺物は、表17にまとめた。

(4) 02-6区第1層の遺物

土師器793片、須恵器134片、製塩土器3片、瓦1片、黒色土器A類1片、土鍾1点、弥生土器15片、サヌカイト剥片1点、計949点出土した。ただし、南北は2mながら、東西は77mと細長い02-6区第1層の遺物組成は、下層の堆積物の関係もあり調査区の東西で異なる。

東半(西からおよそ40m以東)から、土師器710片、須恵器132片、製塩土器3片、瓦1点、土鍾1点、弥生土器14片、計861点が出土した。数的に多い土師器は平安時代を主とし、それらに次ぐ数が出土した須恵器や凸面縄タキ、凹面布目の瓦も平安時代を下限とする。

西半(西からおよそ30mまで)からは、土師器83片、須恵器2片、黒色土器A類1片、弥生土器1片、サヌカイト剥片1点、計88点出土した。土師器では庄内式の特徴を示すものが多い。

(5) 02-6区第2面の遺物(図146)

自然流路827西から、土師器338片、須恵器118片、弥生土器14片、磁器1片、計471片出土した。図146-6008～6011は土師器。6008は鉢。飛鳥～奈良時代の所産か。6009(写真図版49)はミニチュア高杯。

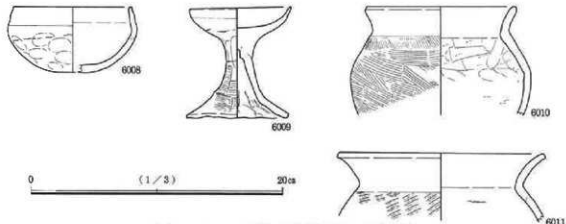


図146 02-6区第2面自然流路827出土土器

口縁部はヨコナデにより端正に仕上げられているが、杯底部から脚裾にかけては手づくね成形である。薄内面最上部に成形時に用いた心棒を挿した穴が残り、脚裾の一部には黒斑がみられる。6010は布留式の小形甕。6011は弥生形甕。

ピット958・959から、時期不明の土師器が2片づつ出土した。

ピット961からは、土師器31片出土。内面をヘラケズリした薄手の甕や外面にタタキを施したなどの、古式の特徴を示す破片が多い。

土坑962から、土師器101片、須恵器34片、平瓦1片、弥生土器4片、計140片と比較的多くの土器が出土した。須恵器や土師器には古墳～平安時代のものが含まれる。

なお、02-6区第2層からは遺物は出土していない。

(6) 02-6区第3面の遺物 (図147・148)

自然河川963から、土師器888片、弥生土器216片、須恵器81片、瓦5片、サヌカイト剥片3点、陶器2片、黒色土器A類2片、韓式系土器2片、瓦器1片、製塩土器1片、縄文土器1片、石包丁1点、計1203点出土した。

自然河川963〔西肩部〕の出土遺物は、土師器434片、須恵器37片、弥生土器6片、瓦2片、陶器1片、製塩土器1片、計481片。それらのうち出土状況が図化(図144)された土器群は、布留式の甕(図147-6012;写真図版49・6013)、庄内式の甕(6014)、小形丸底土器(6015・6016;写真図版49)、布留系の高杯(6017)、高杯脚部(6020・6021)など、古式土師器244片である。図化された土器群の下層からは、高杯3点(6017-6019)などの土師器29片と弥生土器3片が出土した。さらに、この周辺から、土師器161片、須恵器37片、弥生土器3片、瓦2片、製塩土器1片、陶器1片、計205片出土している。

次に、自然河川963〔流路部〕の出土遺物をレベルによって分けると、以下のようになる。

上層(おおむねT.P.+6.4-7.1m)からは、土師器208片、須恵器36片、弥生土器9片、瓦3片、黒色土器A類2片、韓式系土器2片、瓦器1片、サヌカイトチップ1点、計262点出土。

図148-6022(写真図版50)は有蓋高杯杯部。体部外面には不定方向のヘラミガキが施され、内・外・断面とも黒色を呈する。第1次調査第Ⅱ面土坑577出土の韓式系土器(『第1次報告書』図45-95)に類似するが、同一個体ではない。6023は外面が黒化処理された土師器。6024(写真図版50)は土鍾。素焼きで、よく焼け締まっている。115g。

下層(おおむねT.P.+4.5-6.6m)では、土師器246片、弥生土器201片、須恵器8片、サヌカイト剥片2点、突帯文土器1片、石包丁1点、陶器1片、計460点となる。

図148-6025(写真図版50)は複合口縁甕。付加された口縁部の下端に2個一組の円形浮文が貼付される。6026は庄内式の甕。胎土は生駒山西麓産。6027(写真図版50)も甕だが、外面はやや左上がりの粗いケズリの後、左上がりのヘラミガキが施されている。6028は外上方に直線的に伸びる体部に、やや外反気味に上方に拡張された口縁端部が付くもので、形態的には小形器台の受部に類似するが、復元径は21.6cmもある。外来系の高杯であろうか。6029は布留系の高杯杯部。6030の高杯脚部は6029と同時期かやや遅る可能性がある。6031(写真図版50)は小形丸底土器。口縁部内外面と体部中位以下には横方向の緻密なヘラミガキが施され、体下部には径約5mmの焼成前穿孔がある。布留式に属する。6032は鉢。6033(写真図版50)はやや下膨れの体部をもつ小形甕。胎土は生駒山西麓産。6032・6033は小さめの底部をもつので庄内式頃の所産であろう。6034(写真図版50)は刻目突帯文土器。深鉢肩部の破片である

ことから二条突帯の土器で、突帯上の刻みが比較的しっかりしているので、縄文時代晩期後半の船橋式と考えられる。

下層では、古式を主体とする土師器が主体を占めるのは上層と同様だがその比率は低下し、上層でみられた瓦・瓦器・黒色土器が含まれなくなる。その一方、弥生土器が増加し、弥生時代の石包丁や縄文時代晩期の突帯文土器もみられる。ただし、それらは水流によるローリングが著しい。

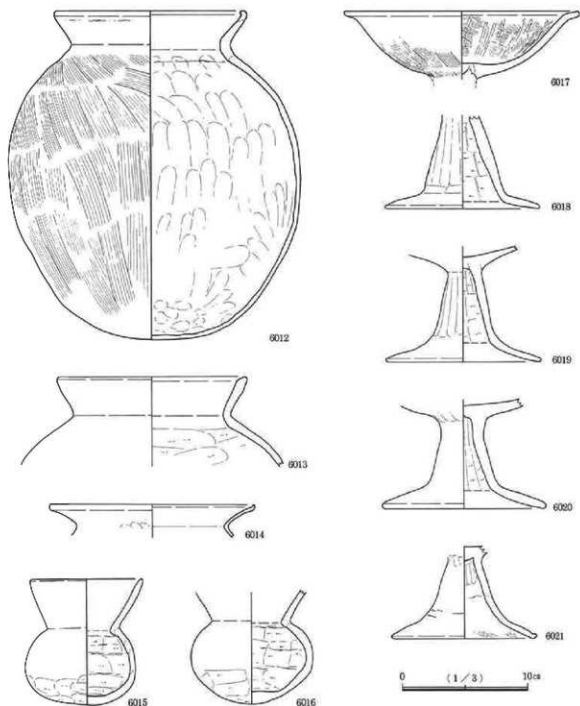


図147 02-6区第3面自然河川963〔西側部〕出土土器

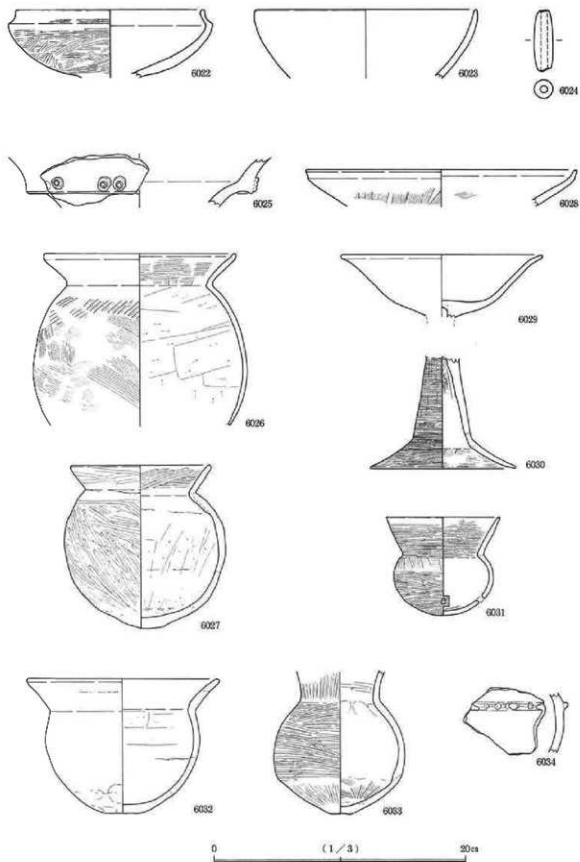


图 148 02-6区第3面自然河川963〔流路部〕出土土器

第3節 第3層以下の層序

02-6区第3面以下の北辺断面(図149)を掲げる。

なお、古植生変遷、堆積環境変遷および水田稲作有無の検証のために、第3層～第8層において、分析用サンプル9点を採取した(第8章参照)。

第3層(①層) 暗灰黄2.5Y 4/2シルト。

第4層(②層) 暗オリーブ灰2.5GY 3/1細砂～シルト。水田作土層と考えられる。

第5層(③層) 暗オリーブ灰2.5GY 4/1細砂～シルト。水田のベース層と考えられる。

第6層(④～⑩層) 上部は暗オリーブ灰5GY 4/1細砂～シルト(④層)。第6層の主体を占めるのは暗緑灰7.5GY 4/1シルト～粘土(⑤層)である。

第7面に流路状のくぼみが存在するが、それに伴って第6層下部には、ラミナが明瞭な灰オリーブ7.5Y 5/2粗砂～細砂(⑥層)、暗オリーブ灰5GY 4/1細砂の薄いラミナを含むオリーブ灰5GY 5/1細砂(⑦層)、灰オリーブ5Y 5/3細砂と暗オリーブ灰2.5GY 4/1細砂～シルトのラミナ(⑧層)がみられる。第6層の最下部には暗オリーブ灰5GY 4/1細砂～シルト(⑨層)が堆積する。⑨層は下方ほど粒子が粗く、水平方向のラミナが明瞭になる。⑥・⑦層は⑨層を切り込んでいるようにみえる。⑦層が分布するくぼみ最下部(⑩層)は、⑨層をはさんではいるが、⑦層によく似た細砂～シルトである。

第7層(⑪～⑬層) 暗緑灰10GY 4/1シルト(⑪層)は、第6層⑤層の下部周辺に分布する。⑪層は⑥～⑩層同様に第7面のくぼみに伴う第6層下部層とすべきかもしれないが、⑥～⑩層にラミナがみられるのに対し、⑪層がより粒子の細かいシルト層なので第7層に含めた。

第7層上部には暗オリーブ灰2.5GY 3/1シルト(⑭・⑮層)が広く分布する。いずれも植物遺体を含むが、⑭層の方がその含有量が多い。その下層の⑯・⑰層も一連の地層であるが、第3面自然河川963に接する部分は植物の地下茎を斑状に含む暗オリーブ灰5GY 4/1シルト(⑱層)で、それ以西には薄い植物遺体層が複数枚みられる暗オリーブ灰2.5GY 3/1シルト(⑲層)となる。以上⑭～⑲層は、細部の相違はあるが基本的に似ている。

第7層下部の一部は、細砂と植物遺体を含む緑灰7.5GY 5/1シルト(⑳層)である。

第8層(㉑～㉓層) 調査区中央部、第7面のくぼみ部の下層には炭酸カルシウムの結核を含むオリーブ黒5GY 2/1シルト(㉑層)が溜まる。これ以外の第8層上部は、植物遺体を多く含む黒2.5GY 2/1シルト～粘土(㉒層)。かなり黒味が強い。その下層は暗オリーブ灰2.5GY 4/1細砂～シルト(㉓層)。水平方向の薄いラミナや植物遺体層が発達している。㉒層の下層の一部には、暗オリーブ灰5GY 4/1粘土(㉔層)と粒子が細かい部分が見られる。

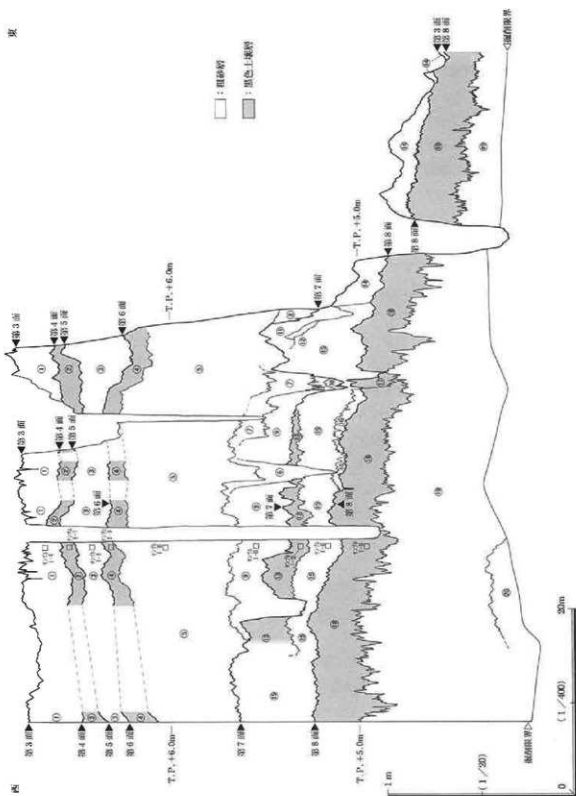


图 149 02—6区北边断面 (第3面以下)

第4節 第3層以下の遺構と遺物

(1) 井戸971 (図150・写真図版48)

井戸971は、02-6区西端から約20m東、調査区北辺のセクションベルト部分に位置する。第3層掘削時に検出したが、明らかに第3面あるいはそれより上層からの掘り込みである。

北半が調査区外になるため、全貌は明らかではない。第3面に相当するセクションベルト上面で掘形上端と井戸側との平面距離は、西へ約55cm、東へ1m以上、南へは(側溝幅の)30cm未満と不等であり、井戸側を中心とした円形とは考えにくい。上面幅30cmと狭いセクションベルト内ではあるが、そこでの状況から推して、掘形の平面形は井戸側南南西60~70cmに一周をもつ矩形と推定する。検出面からの深さは約1.8m、底面のレベルはT.P.+4.9mで第8層に達する。

材A(図150-6037)と材B(6038)が井戸側を構成する。両者とも上部はやせているが、端面が残っている。高さは材Aが166cm、材Bは172cm、厚さは材A・Bとも5~6cm。材Aの下端は直線状だが、材Bには段が付いている。材C(6039)は、材Bの外側に沿って張り付くようにある。現存部のほぼ中央に、上下18cm、左右15cm、図示した右奥に向かって約45°の角度で断面菱形に角欠が穿たれている。材Dは材Cの上方に位置し、東下がりながら水平に近い状態にある。材A~Dは全てクスノキ。4点とも矢板で切られており、さらに北に伸びる。

井戸971からの出土遺物は古式土師器15片。その内訳は、掘形から6片、井戸側内側から3片、井戸側内側最下部から6片である。図150-6035・6036は布留式甕の口縁部。6035は井戸側内、6036も井戸側内最下部から出土した。

(2) 02-6区第4面(図151・写真図版48)【第Ⅶ面相当】の遺構と遺物

水田土壌と考えられる黒色土壌化層の上面である。02-6区東半は第3面自然河川963(小阪合分流路跡)に削られているので、西半でのみ検出した。面の高さはT.P.+6.5~6.6mで、西が低い。

畦畔967~970(図152)を検出した。いずれも方位に対してほぼ45°振れる。畦畔の規模は、下底幅40~60cm、上面幅20~45cm、検出高2~5cm。ただし、土層断面では畦畔の盛り上がりは不鮮明。水口や補強材もみあたらない。

畦畔の間隔(心々距離)は、北東に向かう畦畔968と畦畔969で8.4m、北西に向かう畦畔967と畦畔970では約12mとなる。ただし、ちょうど中間部が上面の溝に切られている。98-7区第Ⅶ面の水田では、北東に向かう畦畔では心々距離4.2~6.7m、北西に向かう畦畔では約7m、と南西-北東に長い長方形となり、面積は水田949が31.5㎡、水田953が42.2㎡であった。したがって、02-6区第4面の水田も4.2m×6mの2単位と推定できる。

畦畔969の西1.5~2.5mの範囲で動物の足跡を検出した。この周辺では第3層の厚さが約20cmあり、その上面からの踏込みとは考えにくいので、動物の足跡は第4面に印されたものである可能性が高い。

上下の包含層からの出土遺物はないが、面の高さ・畦畔の向き・層相が北に隣接する98-7区第Ⅶ面と一致するので、それと同様に弥生時代中期以降の水田面と認められる。

なお、畦畔969の西側で南北方向に連なる木杭痕を検出したが、弥生水田とは関連が窺いにくく、南北を指向していることから条里施行以後の杭の痕跡と推定する。

これより下層、第6層まで出土遺物はない。

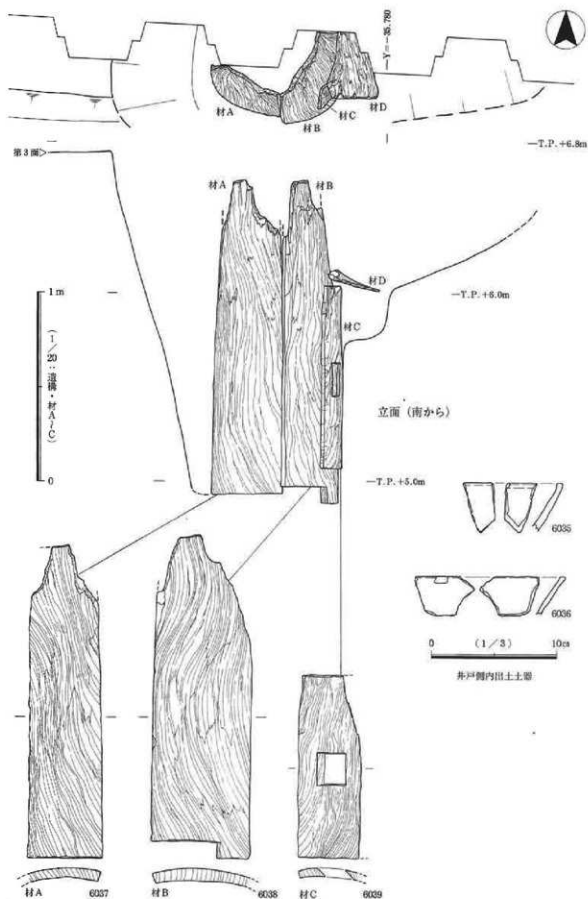


図150 02-6区井戸971および出土遺物

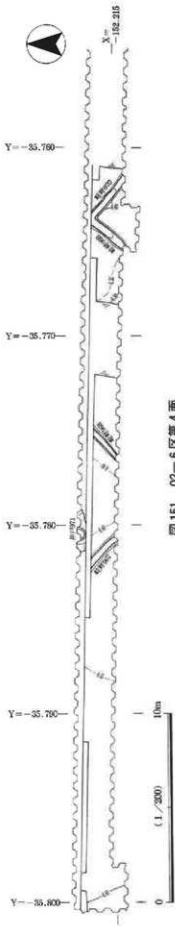


図 151 02-6 区第 4 面

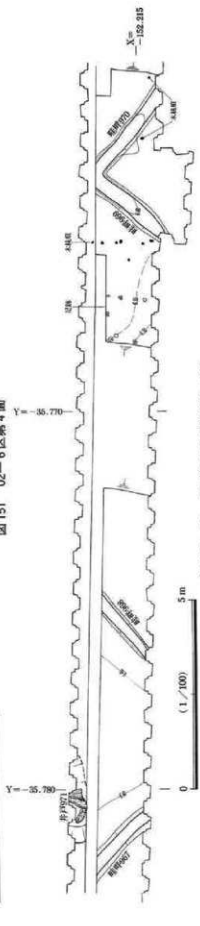


図 152 02-6 区第 4 面階群 967~970

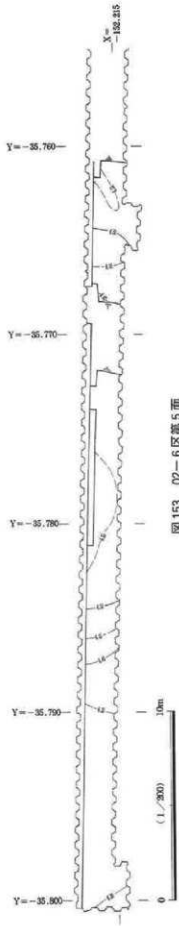


図 153 02-6 区第 5 面

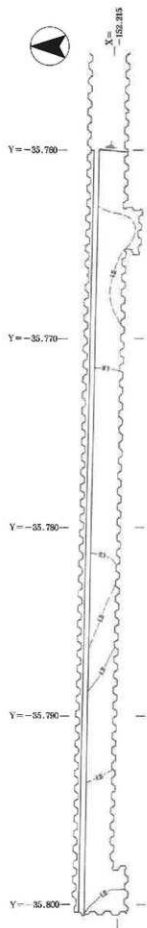


図 154 02-6区第6面

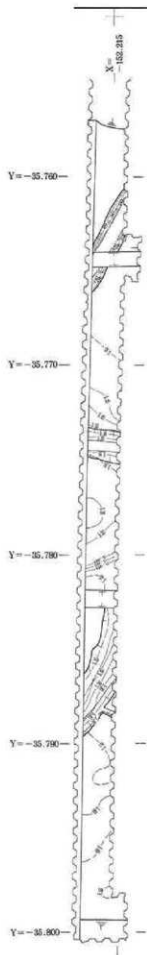


図 155 02-6区第7面

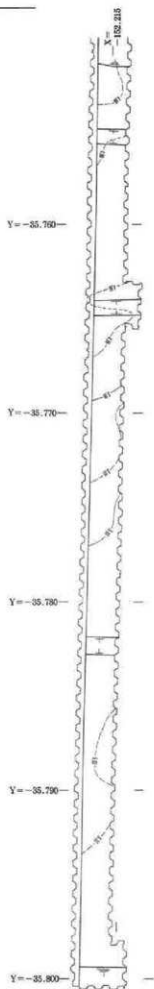


図 156 02-6区第8面



(3) 02-6区第5面 (図153)

第4層の黒色土壌化層を除去したいわゆる水田のベース面。面の高さはT.P.+6.3~6.5mで、第4面同様に西が低い。遺構・遺物ともに全くみられなかった。

(4) 02-6区第6面 (図154)

黒色土壌化層の上面。面の高さはT.P.+6.2~6.4mで、中央部がやや高く、わずかに東西に向かって下がる。遺構・遺物なし。

(5) 02-6区第6層の出土遺物

第6面下の黒色土壌化層で、断面観察ではアシ原のような植生の集積にみえる。層中から、変形の弥生土器の口縁部片とサヌカイト剥片が1点ずつ出土した。

(6) 02-6区第7面 (図155)

流水堆積である細砂を主体とする層を除去した面。面の高さはT.P.+5.3~5.7mで、一時的な流路と考えられる緩やかな起伏がある。

(7) 02-6区第7層の出土遺物

トチノキの種子殻が1点出土した。

(8) 02-6区第8面 (図156)

黒色土壌化層の上面。面の高さはT.P.+4.8~5.2mで、西に向かって傾斜している。遺構・遺物ともにない。

第 8 章 小阪合遺跡（第 2 次）発掘調査に伴う 花粉・珪藻・植物珪酸体分析

辻本裕也・田中義文・辻 康男・伊藤良永・馬場健司
バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析では、弥生時代の層準における古植生と堆積環境および耕作に伴う人為層の有無の確認、古墳時代前期（庄内式～布留式期）に埋没した流路の肩部に堆積した植物遺体層の分析からの河川周辺の古植生、平安時代の土坑の埋没環境について検討することが目的として設定された。この目的に対して、堆積環境を推定するために珪藻分析、古植生や堆積物の由来を検討するために花粉分析、植物珪酸体分析、大型植物遺体洗い出し同定と炭化材同定を実施した。

1. 試料

試料は、サンプル番号 1 と 2 に分かれる。サンプル番号 1 は、02-4 区第 7 面落ち込み 4007 の 3 試料（試料番号 1-1～1-3）、02-2 区西辺断面の 2 試料（試料番号 1-4、1-5）、02-6 区北辺断面の 9 試料（試料番号 1-6～1-14）の計 15 試料である。サンプル番号 2 は、02-3 区北壁断面の 7 試料（試料番号 2-1～2-7）である。これらの試料の層相や時代性については表 18 に示した。また、試料採取層準やその位置については、図 157・158 に記載を行っている。

今回の自然科学分析の目的および課題を整理して示すと以下ようになる。

（1）縄文時代晩期～平安時代の古植生変遷と堆積環境変遷

この目的に対しては、サンプル番号 2 の 02-3 区北壁断面の 7 試料（試料番号 2-1～2-7）とサンプル番号 1 の 02-6 区北辺断面の 9 試料（試料番号 1-6～1-14）と 02-2 区西辺断面の 2 試料（試料番号 1-4、1-5）02-4 区第 7 面落ち込み 4007 の 3 試料（試料番号 1-1～1-3）の 21 試料を使用して、それぞれ花粉分析と珪藻分析を実施する（表 18）。

（2）古墳時代前期（庄内式～布留期）の河川周辺の古植生

この目的に対しては、古墳時代初頭に埋没した河川の流路肩部に堆積した植物遺体を含む砂層から適量を洗い出して大型植物遺体同定を実施する（表 18）。

（3）弥生時代の層準における水田稲作の有無の検証

この目的に対しては、サンプル番号 1 の 02-6 区北辺断面の 9 試料（試料番号 1-6～1-14）を使用して植物珪酸体分析を実施する（表 18）。

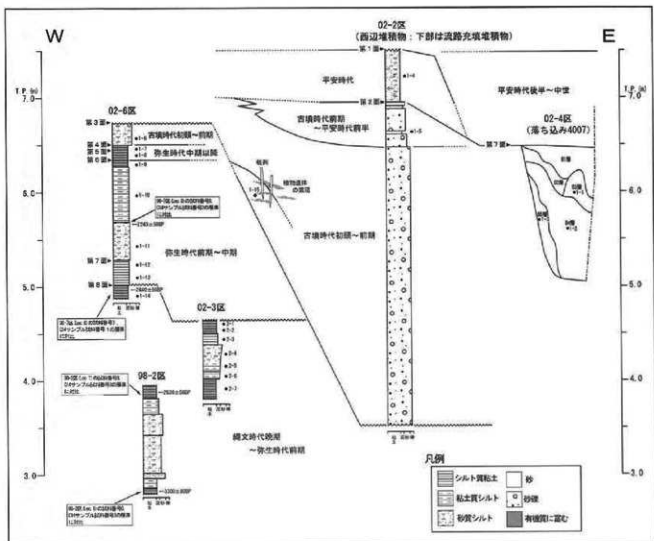


図157 分析試料採取位置図と層序

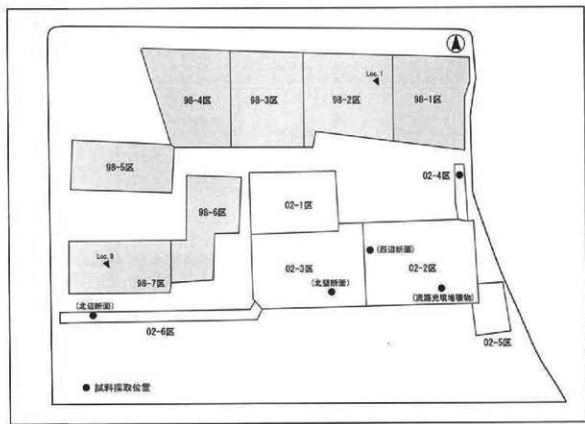


図158 調査区配置図と試料採取地点

表18 試料表

サンプル番号	調査区	遺構・地区	土層番号	層相	時代	分析項目*						98区の分析層番号
						P	D	PO	S	W		
1-1	02-4区	落ち込み4007	B3層	黒褐色砂混じりシルト	平安時代末期	○	○					
1-2	02-4区	落ち込み4007	B4層	オリーブ黒色シルト	平安時代末期	○	○					
1-3	02-4区	落ち込み4007	B5層	暗灰色砂混じりシルト	平安時代末期	○	○			○	○	
1-4	02-2区	西辺断面	第1層の3層	暗褐色砂質シルト	平安時代前半	○	○					
1-5	02-2区	西辺断面	第2層の心層	暗灰色色砂混じりシルト	古墳時代前期～平安時代前半	○	○					
1-6	02-6区	北辺断面	第3層	暗褐色砂質シルト	古墳時代初期～前期(庄内式期)	○	○					98-7区Loc.8013
1-7	02-6区	北辺断面	第4層	灰色砂混じりシルト	弥生時代後期	○	○					98-7区Loc.8012
1-8	02-6区	北辺断面	第5層	灰オリーブ色砂混じりシルト	弥生時代後期	○	○					98-7区Loc.8012
1-9	02-6区	北辺断面	第6層最上部	黒褐色シルト	弥生時代前期	○	○					98-7区Loc.8012
1-10	02-6区	北辺断面	第6層中部	暗灰色色シルト	弥生時代前期	○	○					98-7区Loc.8012
1-11	02-6区	北辺断面	第6層下部	暗オリーブ灰色砂混じりシルト	~	○	○					98-7区Loc.8010
1-12	02-6区	北辺断面	第7層上半	黒褐色シルト	弥生時代中期	○	○					98-7区Loc.8011
1-13	02-6区	北辺断面	第7層下半	灰色シルト	弥生時代中期	○	○					98-7区Loc.8012
1-14	02-6区	北辺断面	第8層	灰色砂混じりシルト	弥生時代中期	○	○					98-7区Loc.8012
1-15	02-2区	道路京橋堆積物断面	第3層	植物遗体混じり黄褐色中～粗粒砂	古墳時代初期～前期(庄内式期)	○	○			○		98-7区Loc.8013
2-1	02-3区	北壁断面	第5層の8層	灰色シルト	古墳時代前期以前	○	○					98-2区(a)Loc.1012
2-2	02-3区	北壁断面	第5層の3層	オリーブ黒色シルト	古墳時代前期以前	○	○					98-2区(a)Loc.1011
2-3	02-3区	北壁断面	第5層の2層	暗褐色シルト	但し、層高および層相から、98-2区(a)のLoc.101の上半部に対比され、C14年代値から遺文時代略	○	○					98-2区(a)Loc.1010
2-4	02-3区	北壁断面	第5層の心層上層	暗褐色砂混じりシルト	期～弥生時代前期頃と推定され	○	○					98-2区(a)Loc.1009
2-5	02-3区	北壁断面	第5層の心層下層	灰色シルト	期～弥生時代前期頃と推定され	○	○					98-2区(a)Loc.1009
2-6	02-3区	北壁断面	第5層の心層	黄灰色シルト	期～弥生時代前期頃と推定され	○	○					98-2区(a)Loc.1009
2-7	02-3区	北壁断面	第5層の心層	黄灰色シルト	期～弥生時代前期頃と推定され	○	○					98-2区(a)Loc.1009
合計						21	21	9	2	1		

*P:花粉 D:建遺 PO:植物遺骸体 S:種子 W:材

(4) 平安時代末期の落ち込み4007の埋没環境

この目的に対しては、サンプル番号1の02-4区第7面落ち込み4007の3試料（試料番号1-1~1-3）を使用して、それぞれ花粉分析と珪藻分析を実施する。また、試料番号1-3については、大型植物遺体洗い出し同定と炭化材同定も合わせて実施する（表18）。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Witkowski et al（2000）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム：比重2.5）の順に物理、化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。これをカバーガラス上に滴下、乾

燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1g当たりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求めらる。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層的变化から稲作の緑蘗や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層的变化を図示する。

（4）大型植物遺体同定

土壌試料200cc程度を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣をシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実・種子・葉などの大型植物遺体を抽出する。種実遺体の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類を同定・計数した。イネの穎の破片は、基部の果実序柄の個数を計数した。同定後の大型植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、乾燥個体は乾燥剤を入れ、水湿を帯びた個体は50%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施した。

（5）炭化材同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

（1）珪藻分析

サンプル番号1と2に分けて結果を述べる。

・サンプル番号1

結果を表19、図159に示す。02-2区西辺断面の試料番号1-5、02-6区北辺断面の試料番号1-6～1-9の5試料は、珪藻化石の産出が少なかったが、それ以外の9試料からは豊富に産出する。完形殻の出現率は、落ち込み4007と02-6区北辺断面の試料番号1-12～1-14が70%前後と化石の保存状態が比較的良かったが、02-2区西辺断面の試料番号1-4、02-6区北辺断面の試料番号1-10、1-11は約40%と悪かった。産出分類群数は、合計で37属210種類である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・02-4区第7面落ち込み4007

試料番号1-1～1-3は産出種の生態性や群集が近似しており、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻と淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻という）とが高い割合で混在することを特徴とする。陸生珪藻の主なもの、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の

高い陸生珪藻A群(伊藤・堀内, 1991)の*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *N. contenta* fo. *Biceps* 等である。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は、貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)、真+好アルカリ性種(アルカリ性水域に最もよく生育する種)、流水不定性種(流水域にも止水域にも普通に生育する種)が優占する。水生珪藻の主なもの、川などの流水域に好んで生育する好流水性の*Surirella ovata* var. *pinnata*、富栄養～中栄養の水域に多く生育する*Scellaphora pupula* 等が産出する。なお、低率ではあったが栄養塩類の高い富栄養水域や淡水～汽水域に生育する好塩性種の*Rhopalodia gibberula*, *Nitzschia frustulum*, *Navicula veneta*, *Navicula goeppertiana*, *Nitzschia palea* 等を伴う。このうち、*Navicula veneta*, *Navicula goeppertiana*, *Nitzschia palea* は、有機汚濁の進んだ腐水域にも耐性のある好汚濁性種(Asai and Watanabe, 1995)である。

・02-2区西辺断面

珪藻化石が産出した試料番号1-4は、水生珪藻が優占し全体の約80%を占める。産出種の特徴は、好流水性の*Navicula elginensis* var. *neglecta* と流水不定性の*Navicula kotschy* が15～25%と多産し、流水不定性の*Amphora affinis*、それに陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、好汚濁性種であり水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群(伊藤・堀内, 1991)の*Navicula confervacea* を伴うことである。このうち*Navicula kotschy* は、電気伝導度の高い温泉や泉などからしばしば産出する種とされている(Krammer and Lange-Bertalot, 1986)。なお、珪藻化石の少なかった試料番号1-5も陸生珪藻と水生珪藻とが混在している。

・02-6区北辺断面

珪藻化石が産出した試料番号1-10以深は、試料により多産種が異なっていた。下位の試料番号1-14は、陸生珪藻が全体の約60%を占め多産する。その主な種は、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、未区分陸生珪藻(伊藤・堀内, 1991)の*Pinnularia schroederii* である。このうち、後者の種は模式地のヨーロッパや南アフリカでは、山地性でさらさらと水の流れる岩上やコケなどに優勢に付着生育する好気性の種とされている(Krammer and Lange-Bertalot, 1986)。水生珪藻としては、流水不定性で好汚濁性種の*Criticula cuspidate* 等が産出する。試料番号1-13、1-12は、水生珪藻が約70%と優占する。これらの種は生態性や群集が近似しており、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種が多産する。このほか、真+好止水性種が比較的多かったことも特徴である。主な種は、流水不定性の*Amphora affinis*、好止水性の*Fragilaria construens*、陸生珪藻の*Amphora montana*, *Pinnularia schroederii* 等である。試料番号1-11は、水生珪藻が優占する点では変わらないが、真+好流水性種が多産する点で異なる。産出種の特徴は、好流水性で中～下流性河川指標種群(安藤, 1990)の*Cymbella turgidula*、その変種の*Cymbella turgidula* var. *nipponica* が多産し、流水不定性の*Amphora affinis*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella tumida*, *Fragilaria ulna* 等を伴うことである。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群のことである(安藤, 1990)。試料番号1-10になると再度、陸生珪藻が多産する。特徴は、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys* が約25%と多産し、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻B群(伊藤・堀内, 1991)であり、沼沢湿地付着種群(安藤, 1990)でもある*Eunotia praeurupta* var. *bidens*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia schroederii*、真流水性で上流性河川指標種群の*Gomphonema sumatorensis*、流水不定性の*Cocconeis placentula*, *Cymbella tumida*、好止水性で湖沼沼沢湿地指標種

表20 02-3 区の土層分析結果 (1)

種 属	生態性			環境 指標種	02-3 区北層断面								
	塩分	pH	流水		4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層		
					2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7		
<i>Nitzschia littoralis</i> Grunow	Meh				-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Synedra tabulata</i> Agardh	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Thalassiosira lacustris</i> (Grun.)Hale	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Bacillaria paxillifera</i> Grunow	Ogh-Meh	al-bi	h-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Hydrosera triquetra</i> Wallich	Ogh-Meh	al-bi	r-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula gossypifera</i> (Bleisch)H.L.Smith	Ogh-Meh	al-bi	ind	S	-	-	1	-	-	1	1	-	
<i>Navicula integrans</i> (W.Smith)Ralfs	Ogh-Meh	al-bi	unk	S	-	-	-	-	1	-	-	1	
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-bi	ind	S	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Rhodolalia gibberula</i> (Ehr.)O.Müller	Ogh-Meh	al-bi	ind	S	-	2	1	-	-	-	2	1	
<i>Achnanthes clevei</i> Grunow	Ogh-ind	al-3	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Achnanthes conopsea</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-3	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Achnanthes oroides</i> Grunow	Ogh-ind	al-3	ind	T	1	1	3	1	-	1	-	-	
<i>Achnanthes esqiva</i> var. <i>heterovalvata</i> Krasske	Ogh-ind	al-3	ind	S	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K.T	-	1	1	1	2	3	3	-	
<i>Achnanthes linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Achnanthes subaffinis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-3	r-ph	T	-	-	-	-	3	-	-	-	
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	2	4	-	6	1	4	-	
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RAU	-	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Amphora normani</i> Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1	1	-	-	-	-	-	
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	-	1	1	2	2	-	
<i>Auloscocea ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-2	h-bi	NU	-	-	-	-	1	-	-	3	
<i>Auloscocea granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-2	h-bi	MU	2	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Auloscocea italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-2	h-ph	U	-	-	-	-	-	1	1	-	
<i>Caloneis angustivalva</i> Petit	Ogh-unk	unk	unk	RE	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Caloneis boissieri</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Caloneis boissium</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-2	r-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Caloneis silvula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-3	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Caloneis</i> sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	RE	-	2	9	-	-	-	-	-	
<i>Coconosis placenticula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	2	3	1	5	-	5	-	
<i>Coconosis placenticula</i> var. <i>euclatya</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-2	r-ph	T	-	-	-	-	2	2	7	-	
<i>Cratichia cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-3	ind	S	8	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Cymbella nevadiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	1	-	-	1	
<i>Cymbella silasticata</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	1	-	7	1	3	-	
<i>Cymbella smuta</i> Gregory	Ogh-ind	al-3	r-ph	K.T	-	2	3	-	14	5	8	-	
<i>Cymbella turrida</i> (Breb.) Kuetz./V.Heurck	Ogh-ind	al-2	ind	T	-	-	1	-	2	-	-	-	
<i>Cymbella turridula</i> Grunow	Ogh-ind	al-2	r-ph	KT	1	-	-	-	9	7	10	-	
<i>Cymbella turridula</i> var. <i>nipponica</i> Sivertsov	Ogh-ind	al-2	r-ph	T	-	-	-	-	1	3	3	-	
<i>Diatoma mesodon</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-2	r-bi	KT	-	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Diatoma baRouriana</i> (W.Smith)Grevill	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Diplosira ovalis</i> (Hale)Cleve	Ogh-ind	al-2	ind	T	1	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Eunetia formica</i> Ehrenberg	Ogh-heb	ae-1	h-bi	U	-	-	-	1	1	-	-	-	
<i>Eunetia imitata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-heb	ae-1	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Eunetia insula</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-heb	ae-1	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Eunetia pectinella</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-heb	ae-1	ind	O.T	-	2	-	2	3	5	-	-	
<i>Eunetia praevarata</i> var. <i>bicolor</i> Grunow	Ogh-heb	ae-1	r-ph	RB.O	-	1	2	1	-	-	3	-	
<i>Fragilaria cacabica</i> Desmazieres	Ogh-ind	al-2	ind	T	-	-	-	-	2	-	-	-	
<i>Fragilaria costans</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-2	h-ph	U	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Fragilaria costans</i> var. <i>bicolor</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-2	h-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Fragilaria silina</i> (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	-	-	1	4	2	1	-	
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Peterson	Ogh-ind	al-3	r-ph	KT	-	-	2	1	5	3	1	-	
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-3	ind	U	-	-	-	2	5	1	-	-	
<i>Frustulia weinholdii</i> Hustedt	Ogh-ind	al-3	ind	U	-	-	-	1	1	-	-	-	
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema aculeolatum</i> (O.Müller)Cleve-Euler	Ogh-ind	al-3	h-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-3	ind	U	-	-	1	-	-	1	1	-	
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	al-3	r-ph	T	-	-	2	1	3	-	5	-	
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-3	h-ph	O.U	1	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Gomphonema cf. helveticum</i> Brün	Ogh-unk	ind	r-ph	T	-	-	-	-	2	-	-	-	
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	5	
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	-	-	1	-	2	1	-	
<i>Gomphonema quadrilaterum</i> (Cesroup.)Miloud	Ogh-ind	al-2	r-ph	KT	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema subclavatum</i> (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-3	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema sumatrense</i> Fricke	Ogh-ind	al-3	r-bi	J	-	2	-	1	-	2	1	-	
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	h-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Gomphonema</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	1	-	2	-	-	-	
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-2	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Gyrosigma pseudokuetzingii</i> Kobayasi	Ogh-ind	al-2	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Gyrosigma scalopoides</i> (Rab.)Cleve	Ogh-ind	al-2	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-3	ind	RAU	32	40	23	2	4	34	22	-	
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constictum</i> (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-3	h-bi	KT	-	1	-	-	-	-	-	6	
<i>Navicula cohnii</i> (Hale)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RE	-	1	1	-	-	-	-	-	
<i>Navicula confinis</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RBS	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-3	ind	RA.T	2	4	1	-	4	1	-	-	
<i>Navicula cryptotenella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	1	
<i>Navicula stigmensis</i> (Grun.)Ralfs	Ogh-ind	al-3	ind	O.U	2	1	1	-	10	-	-	-	
<i>Navicula stigmensis</i> var. <i>consecta</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-3	ind	U	-	-	-	-	-	1	1	-	

表20 02-3 区の珪藻分析結果 (2)

種 属	生態性			環境 指標種	02-3区北登新築							
	塩分	pH	流水		4層	5層	6層	7層	8層	9層		
					2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	
<i>Navicula elgimensis</i> var. <i>neglecta</i> (Kraus) Patrick	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	1	-	1	-	-	
<i>Navicula flavellata</i> Meister	Ogh-ind	al-l	r-ph		-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula ignota</i> Krause	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Navicula mobilensis</i> var. <i>minor</i> Patrick	Ogh-ind	al-l	ind		-	-	-	-	1	1	2	
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	ind	RA,S	1	5	9	-	3	13	6	
<i>Navicula soppinata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-l	ind	T	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Navicula parvicollis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-l	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula planzambii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		1	1	-	1	2	1	-	
<i>Navicula pseudonucleola</i> Kobayasi	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	1	
<i>Navicula rosacea</i> fo. <i>nipponica</i> Sivertow	Ogh-ind	al-l	ind	T	-	-	-	-	-	3	-	
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Navicula tentula</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RLU	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-l	r-ph	KU	-	-	-	-	-	-	3	
<i>Navicula viridula</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rotellata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-l	r-ph	KU	-	-	-	-	2	7	3	
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rotata</i> Eiv.	Ogh-ind	al-l	r-ph	T	-	-	-	-	4	5	3	
<i>Navicula yuzensis</i> Negro et Gotoh	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	2	3	1	
<i>Neidium alatum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Neidium amplatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	r-ph		1	-	-	-	-	2	2	
<i>Neidium hercynicum</i> A.Mayer	Ogh-ind	ind	ind		-	1	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	ind	RB,U	-	1	-	-	-	-	1	
<i>Nitzschia linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	-	2	1	
<i>Nitzschia sinuata</i> var. <i>delongi</i> (Grun.) Lange-Bartsch	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Orchastria roseana</i> (Rabenh.) Meire	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	2	-	-	-	2	-	
<i>Penicularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	4	-	-	-	-	1	
<i>Penicularia globa</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-l	ind	O,U	2	-	1	-	1	1	-	
<i>Penicularia globa</i> var. <i>dissimilis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-l	ind		1	-	-	-	-	-	-	
<i>Penicularia globa</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-l	ind		1	-	-	-	-	1	-	
<i>Penicularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-l	ind	S	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Penicularia schoenfeldtii</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	PE	1	3	3	-	2	2	1	
<i>Penicularia schoenfeldtii</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	PE	23	9	7	-	1	1	1	
<i>Penicularia subcaolata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-l	ind	RB,S	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Penicularia substriata</i> (A.Cleve.) Cleve-Euler	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	
<i>Penicularia substriata</i> Krammer	Ogh-hob	ac-l	ind		2	1	-	-	-	-	-	
<i>Penicularia substatematophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-l	r-ph		-	-	1	-	-	-	-	
<i>Penicularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Penicularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	1	-	
<i>Rhizosolenia abbreviata</i> (Ag.) Lange-B.	Ogh-hl	al-l	r-ph	K,T	-	2	2	-	3	2	-	
<i>Rhopalodia globa</i> (Ehr.) J.Müller	Ogh-ind	al-l	ind		-	-	1	-	-	1	-	
<i>Seliophora laevissima</i> (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-	
<i>Seliophora papula</i> (Kuetz.) Merezhkovsky	Ogh-ind	ind	ind	U	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	r-ph		1	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis anomes</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-	-	-	1	-	-	
<i>Stauroneis boreishi</i> (Pal.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	PE	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis laurburgiana</i> fo. <i>angulata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-l	ind		-	-	-	-	-	-	1	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	3	4	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	r-ph	O	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	3	-	-	-	1	-	
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	1	-	-	-	1	
<i>Surirella linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	ind	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Surirella ovata</i> var. <i>sinuata</i> (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	2	-	-	-	-	-	
<i>Synedra inaequalis</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-l	r-ph	J,K,T	-	-	-	-	3	-	-	
藻水生物					0	0	0	0	0	0	0	
流水～汽水生物					0	0	0	0	0	0	0	
汽水生物					0	0	0	0	1	0	2	
淡水～汽水生物					0	3	3	0	2	4	3	
淡水生物					109	108	100	17	137	136	153	
珪藻化石総数					109	111	103	17	140	140	158	

凡例
 H.R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 O.R. : 流水に対する適応性
 Mch : 汽水生物 al-l : 藻アリの付着性 r-ph : 真水性指標
 Oph-Mch : 淡水～汽水生物 al-l : 好アルカリ性 r-ph : 好水性指標
 Oph-hl : 真塩好性指標 ind : pH 不定性 ind : 流水不安定性
 Ogh-ind : 真塩性指標 ac-l : 好酸性 ind : 好流水性指標
 Ogh-hob : 真塩性指標 ac-l : 真酸性 r-ph : 真水性指標
 Oph-unk : 真塩不特異性 unk : pH 不特異性 unk : 流水不特異性

環境指標種群
 J:上流河川指標種, K中～下流河川指標種, M:湖沼浮遊性種,
 N:湖沼沉澱地指標種, O:沼沢地付着性種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R:陸生藻類 (RA:RA群, RB:B群, RC:水区分, 伊藤・堀内, 1991)

群の *Aulacoseira ambigua* 等を伴うことである。上流性河川指標種群とは、河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群、湖沼沼沢湿地指標種群とは、湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することからそのような環境を指標することができる種群、沼沢湿地付着生種群とは、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標することができる種群のことである(安藤, 1990)。なお、珪藻化石の少なかった試料番号1-6~1-9も陸生珪藻と水生珪藻とが混在している。

・サンプル番号2

結果を表20、図160に示す。02-3区北壁断面の試料番号2-4は、珪藻化石の産出が少なかったがそれ以外の6試料からは産出した。完形殻の出現率は、約60%以上と化石の保存状態は比較的良い。産出分類群数は、31属128種類である。珪藻化石群集は、試料番号2-7~2-6、2-5、2-4~2-1で違いが認められる。

試料番号2-7~2-6は、水生珪藻が80%以上と優占し、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水性が優占する。産出種の特徴は、好流水性の *Gyrosigma scalproides* が15~25%と多産し、中~下流性河川指標種群の *Cymbella sinuata*, *C. turgidula*, 流水不定性の *Gomphonema parvulum*, 流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor* 等を伴うことである。種試料番号2-5は、淡水生種の生態性は前試料に近似する。とくに多産するものはなく中~下流性河川指標種群の *Cymbella sinuata*, *C. turgidula*, *Fragilaria vaucheriae*, 流水不定性の *Amphora affinis*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Frustulia vulgaris*, 流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Navicula elginensis* 等が産出する。試料番号2-4~2-1は、陸生珪藻が全体の60~80%と多産することで特徴付けられる。その主なものは、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* が25~35%と優占し、同じくA群の *Navicula mutica*, 未区分陸生珪藻の *Pinnularia schroederii* を伴う。水生珪藻としては、好流水性の *Gyrosigma scalproides*, *Cymbella turgidula*, 流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Navicula elginensis* 等が産出する。

(2) 花粉分析

サンプル番号1と2に分けて結果を述べる。

・サンプル番号1

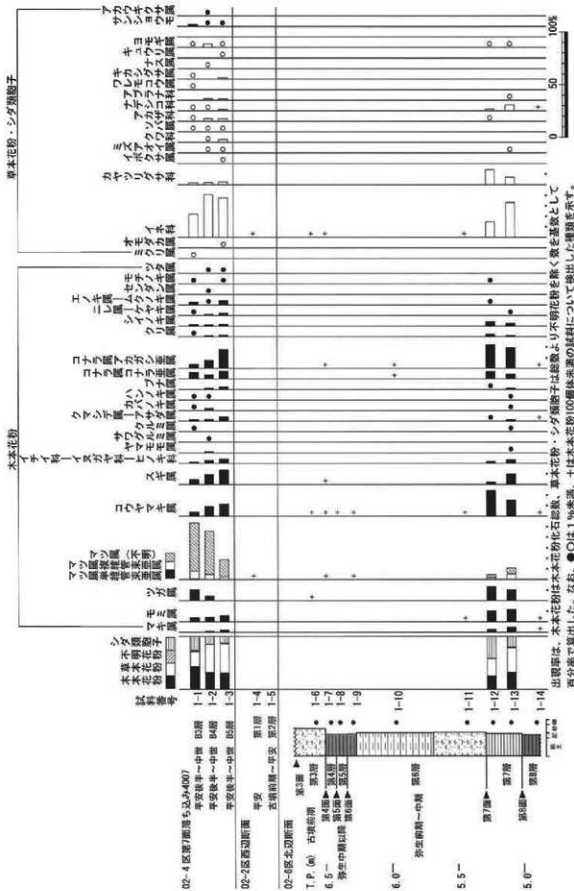
結果を表21、図161に述べる。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。以下、地点別に述べる。

・02-4区落ち込み4007

いずれの試料からも、花粉化石が検出される。花粉群集組成は、試料番号1-3、1-2では草本花粉の占める割合が高く、試料番号1-1では木本花粉の割合が高い。木本花粉についてみると、試料番号1-3では、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属などが、ほぼ同率で認められる。試料番号1-2、1-1ではマツ属の占める割合が高くなり、試料番号1-1では50%を占める。群集は上位の試料に向かい、マツ属が急増し、ツガ属が増加するとともに、コウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属が減少する傾向が認められる。その他では、モミ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属なども産出する。草本花粉の

表21 02-4区・02-2区・02-6区の花粉分析結果

種 類	02-4区遺物サンプル001			02-2区西遺跡		02-6区北遺跡													
	試料番号	B1層 1-1	B4層 1-2	B5層 1-3	第1層 1-4	第2層 1-5	第3層 1-6	第4層 1-7	第5層 1-8	第6層 1-9	第6層 上部	第6層 中部	第6層 下部	第7層 1-10	第7層 1-11	第7層 1-12	第7層 1-13	第8層 1-14	
基本花粉																			
ネオ木属	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	11	2	
モミ属	9	8	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	22	27	2			
ツバ属	24	8	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	28	24	-	-		
マツ属単純常葉葉属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
マツ属複純常葉葉属	17	8	3	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	13	-	-		
マツ属(不明)	104	76	20	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	13	-	-		
コウヤマキ属	9	17	14	-	-	2	4	1	1	-	-	2	52	35	1	-	-		
スギ属	11	17	17	-	-	-	1	-	-	-	-	-	5	23	-	-	-		
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	5	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	8	-	-	-		
ヤマモモ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-		
ヤマウルシ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
クルミ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
クマシロ属-アサダ属	3	3	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	1	-	-		
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
カハバキ属	2	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
ハシバミ科	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
ブナ属	-	-	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-		
コナラ属コナラ属	14	7	9	-	-	-	-	-	-	-	1	-	15	10	-	-	-		
コナラ属アカガシ属	9	14	22	-	-	-	1	-	-	-	-	-	48	45	1	-	-		
クリ属	1	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	3	-	-	-		
シイノキ属	3	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	6	-	-	-		
ニレ属-ケヤキ属	2	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-		
エノキ属-ムクノキ属	6	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-		
センダン属	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-		
モチノキ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
ムクロジ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
ツバ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ノボリ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
シナノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
ウコキ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ハイネキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イボクノ木属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
上木コナ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
基本花粉																			
ミクリ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イネ科	112	234	146	2	-	1	5	-	-	-	-	-	1	124	235	-	-		
カヤツリグサ科	9	11	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	117	83	-	-		
イボクノ木属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ミズアオイ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-		
ウツリ	-	3	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ギンギン属	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
サナエタ字部-ウナギンカサ節	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-		
タデ属	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ソバ属	4	4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アカザ科	2	14	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-		
ナデシコ科	4	4	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	40	1	-		
カラマツノ木属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ギンギン科	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
タケコノ木属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アブラナ科	-	8	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-		
ウレモコウ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
バラ科	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
マメ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
エンゴウ草属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キリシタ科	1	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
セリ科	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-		
ナス属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
オオハコ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
キュウリ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
豆科	5	13	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	2	-	-		
クワ科	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カンナ科	2	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
不明花粉	13	4	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	6	-	-		
シダ類種子																			
スズランビ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	1	-	-		
ヤシノ木科	10	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アカウケクサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
他のシダ類種子	127	77	45	12	8	152	56	21	69	185	125	249	144	58	-	-	-		
合 計																			
基本花粉	228	185	123	2	0	3	7	1	3	4	3	213	250	7	-	-	-		
基本花粉	143	308	220	2	0	1	5	0	0	0	1	272	337	1	-	-	-		
基本花粉	11	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	0	-	-	-		
シダ類種子	128	83	47	12	8	152	56	21	69	185	127	353	145	58	-	-	-		
合計(不明花粉除く)	509	576	399	16	8	158	63	22	72	189	131	628	712	87	-	-	-		

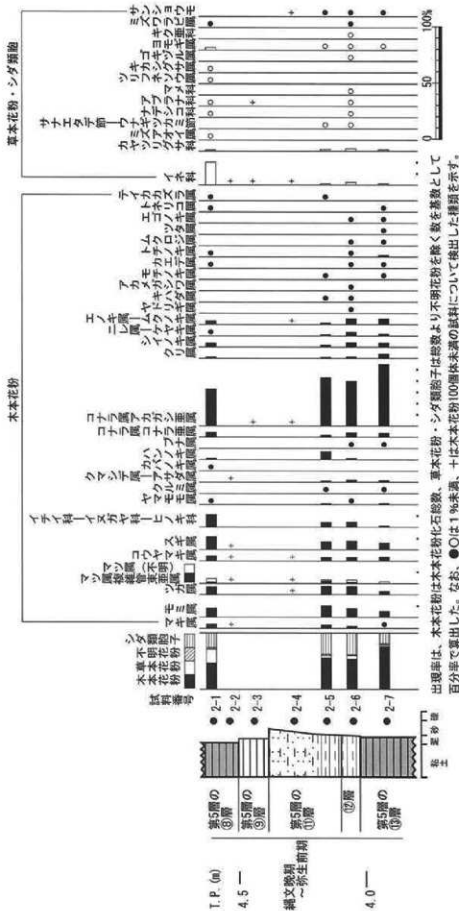


出現率は、本花粉は本花粉化石総数、草花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基款として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図161 02-4区・02-2区・02-6区における主要花粉化石群集の層位分布

表22 02-3区の花分析結果

種 類	試料番号	北壁断面						
		4層 2-1	5層 2-2	6層 2-3	7層上層 2-4	7層下層 2-5	8層 2-6	9層 2-7
草本花粉								
マキ属	9	1	-	-	-	9	6	1
モミ属	19	-	-	-	-	29	22	18
ツバキ属	16	-	-	-	1	21	21	10
ヤマモミ属(管状葉類)	3	-	-	-	-	6	3	-
マツ属(本組)	7	1	-	-	1	3	6	5
コウヤマキ属	10	1	-	-	3	9	9	12
スギ属	27	1	-	-	-	20	22	20
イチヒ科-イヌギヤク-ヒノキ科	26	-	-	-	-	12	13	4
ヤマモミ属	1	-	-	-	-	3	2	4
クルミ属	-	-	-	-	-	2	-	3
クマシツ属-アサダ属	-	1	-	-	-	3	6	5
カビノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	3	-	-	-	-	10	3	-
ブナ属	-	-	-	-	-	-	2	1
コナラ属コナラ亜属	10	-	-	-	-	5	11	12
コナラ属アカガシ亜属	77	-	1	4	4	121	115	188
クリ属	3	-	-	-	-	3	4	13
シノノキ属	8	-	-	-	-	5	11	12
ニレ属-ケヤキ属	2	-	-	-	-	3	9	5
エノキ属-ムクノキ属	8	-	-	1	4	15	15	17
ヤドリギ属	-	-	-	-	-	-	1	-
キハダ属	-	-	-	-	-	1	1	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	2	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	1	-
カエデ属	1	-	-	-	-	-	-	2
トネノキ属	1	-	-	-	-	-	1	5
ムクロジ属	-	-	-	-	-	-	1	1
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	1
サルスベリ属	-	-	-	-	-	1	-	-
アオキ属	-	-	-	-	-	-	1	-
ハビノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-
エゴノキ属	-	-	-	-	-	-	1	1
トネリコ属	2	-	-	-	-	-	-	1
ヤカカズラ属	1	-	-	-	-	1	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	1	-
草本花粉								
イネ科	99	1	1	5	5	13	5	5
カヤシロ科	6	-	-	-	-	9	12	6
スズアオイ属	1	-	-	-	-	-	-	-
サナエダ子実-ウナギツカ科類	-	-	-	-	-	2	1	-
タヌキ	-	-	-	-	-	-	1	-
アザミ科	-	-	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	4	-	-	-	-	-	1	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	1	-	-
アブラナ科	1	-	1	-	-	-	1	-
マメ科	-	-	-	-	-	-	1	-
ソリアネソウ属	1	-	-	-	-	-	-	-
キクシクシ属	2	-	-	-	-	-	-	-
ゴキウ属	-	-	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	11	-	-	-	-	4	3	1
キク科類	-	-	-	-	-	-	1	-
不明花粉	15	-	-	-	-	12	9	12
シダ類孢子								
ヒカゲノカズラ属	2	2	6	9	7	2	1	-
ゴンマイ属	-	-	-	-	-	-	1	-
イモモリ属	21	7	10	35	20	24	12	-
スズウラボシ属	3	-	-	-	-	-	1	-
サンショウモ	-	-	-	1	1	1	1	-
他のシダ類孢子	100	27	50	183	164	181	70	-
合 計								
草本花粉	235	5	1	10	293	290	340	
草本花粉	125	1	2	5	22	36	12	
不明花粉	15	0	0	0	12	8	12	
シダ類孢子	131	36	76	226	192	210	84	
総計(不明を除く)	491	42	77	243	497	526	426	



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類花粉は総数より不明花粉を除く数を基拠として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図162 02-3区における主要花粉化石群集の層位分布

群集組成は、いずれの試料においても大きな変化は認められず、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ヨモギ属などを伴う。また、ミクリ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生植物に由来する花粉・胞子や、ソバ属、キウリ属などの栽培種に由来する花粉も、わずかながら認められる。

・02-2区西辺断面

いずれの試料も花粉化石はほとんど、あるいは全く産出せず、シダ類胞子もわずかである。

・02-6区北辺断面

試料番号1-13、1-12以外の7試料からは、シダ類胞子が検出されるものの、花粉化石はほとんど検出されない。試料番号1-13、1-12では、コウヤマキ属、コナラ亜属が多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属などを伴う。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が多産し、アブラナ科などを伴う。また、ゴキヅル属、サンショウモなどの水湿地生植物も、わずかに認められる。

・サンプル番号2

結果を表22、図162に示す。

02-3区北壁断面試料番号2-4～2-2の3試料では、花粉化石はほとんど検出されない。試料番号2-7～2-5では、木本花粉が優占し、アカガシ亜属が多産する。その他では、モミ属、ツガ属、スギ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科などがわずかに認められる。最上位の試料番号2-1になると、木本花粉の割合が高いものの、下位層に比べ草本花粉の割合が増加する。木本花粉は下位と同様、アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などを伴う。草本花粉はイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表23、図163に示す。

02-6区北辺断面の各試料からは、植物珪酸体が検出される。しかし、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、植物珪酸体の産状を下位より述べる。

試料番号1-13の植物珪酸体含量は約3.2万個/gと最も多く、試料番号1-12と試料番号1-9で2.2万個/g前後、試料番号1-8が約1万個/gと最も少なく、他は1.5万個/g前後である。栽培植物のイネ属は、試料番号1-14で短細胞珪酸体、試料番号1-13より上位では連続的に短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。ただし、その含量は層位的に変化し、試料番号1-13で最も多く、上位の試料番号1-12も多いが、これらの上位の試料では減少する。また、試料番号1-12では稲初穀に形成されるイネ属顆粒珪酸体の含量も多い。

この他、各試料からはネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が認められる。このうち、試料番号1-14と試料番号1-13ではヨシ属の産出が目立つ。上位の試料ではネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つものの、ヨシ属の含量も多い。

試料番号1-7の植物珪酸体含量は約1.6万個/gであり、下位層よりもやや多い。イネ属の含量も増加する傾向が見られる。この他に検出される種類は下位と同様であるが、ヨシ属の産出が目立つ。

試料番号1-6の植物珪酸体含量は、下位の試料番号1-7と同様である。しかし、イネ属の含量は増加する。また、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つものの、ヨシ属の含量も多い。

表23 02-6区北辺断面の植物珪酸体含量

種類	(個/g)									
	第3層 試料番号 1-6	第4層 1-7	第5層 1-8	第6層 最上部 1-9	第6層 中部 1-10	第6層 下部 1-11	第7層 1-12	第7層 上半 1-13	第7層 下半 1-14	第8層 1-14
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	496	306	121	147	141	77	951	1,994	26	
タケ亜科ネササ節	662	429	217	472	506	1,875	1,170	472	231	
タケ亜科	1,158	337	410	1,533	1,997	1,952	1,194	1,312	771	
ヨシ属	1,654	2,297	555	2,329	2,925	2,108	2,584	2,571	2,416	
ウシクサ族コブナグサ属	33	92	24	147	225	103	146	52	51	
ウシクサ族ススキ属	364	1,317	0	914	1,125	360	756	1,154	1,157	
イチゴツナギ亜科	165	398	217	354	189	128	98	105	77	
不明キビ型	2,248	2,083	1,207	3,685	3,206	1,849	2,218	3,988	2,879	
不明ヒゲシバ型	1,125	1,348	314	1,739	1,237	1,489	1,316	1,469	925	
不明ダンチク型	628	980	290	973	562	699	926	1,312	874	
イネ科葉身短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	3,407	1,133	507	1,091	703	308	3,632	9,182	0	
タケ亜科ネササ節	529	735	989	2,712	875	1,644	1,292	1,364	823	
タケ亜科	992	613	1,086	1,710	1,268	1,669	1,243	2,046	746	
ヨシ属	926	2,236	1,665	2,565	1,041	622	829	2,678	2,931	
ウシクサ属	397	888	459	1,091	225	360	244	735	360	
不明	1,025	888	1,255	1,091	478	950	512	1,049	334	
珪化組織片										
イネ属珪酸体	0	0	0	29	28	26	2,377	0	0	
樹木起源珪酸体										
IV型	99	184	363	412	310	951	98	156	104	
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	8,534	9,587	3,355	12,293	12,093	10,838	11,359	14,429	9,407	
イネ科葉身短細胞珪酸体	7,276	6,493	5,961	10,260	4,388	5,753	7,752	17,052	5,194	
イネ属珪酸体	0	0	0	29	28	26	2,377	0	0	
樹木起源IV型	99	184	363	412	310	951	98	156	104	
総計	15,909	16,264	9,679	22,994	16,819	17,566	21,586	31,637	14,705	

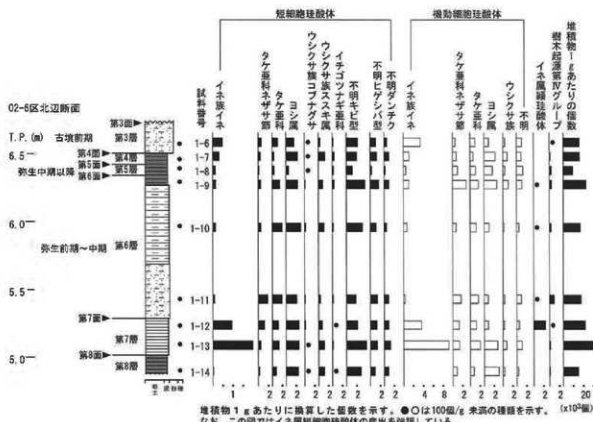


図163 02-6区北辺断面における植物珪酸体含量の層位分布

表24 大型植物遺体分析結果

和名	学名	産出部位	状態	調査区・地点・層名・試料番号	
				02-4区	02-2区
				落ち込み4007	道路元埋地植物
				B5層	第3層
				1-3	1-15
時代					
				平安末期	石境初層～前期
試料量					
				200cc	200cc
				322.91g	309.53g
木本					
モミ属	<i>Abies</i>	葉	-		2
サワグルミ	<i>Pterocarya rhoifolia</i> Sieb. et Zucc.	果実	-		1
イヌシデ	<i>Carpinus Tschonoskii</i> Maxim.	果実	-		5
アサダ	<i>Ostrya japonica</i> Sarg.	果実	-		2
ブナ科	<i>Fagaceae</i>	果実	-		+
コナラ属	<i>Quercus</i>	果実	-		1
コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Quercus</i>	殻斗	-		1
アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	幼果	-		35
イチイガシ	<i>Quercus gliva</i>	幼果	-		3
ヤマグワ	<i>Morus australis</i>	種子	-		2
カシノキ属	<i>Broussonetia</i>	種子	-		3
マタビ属	<i>Actinidia</i>	種子	-		1
ヒサカキ属	<i>Eurya</i>	種子	-		6
サクラ属	<i>Prunus</i>	核	-		1
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	核	-		4
カラスザンショウ	<i>Fagora alnifolia</i> (Sieb. et Zucc.) Engler	核	-		7
キハダ	<i>Phellodendron amurense</i> Ruprecht	核	-		2
アカメガシワ	<i>Melilotus japonicus</i> (Thunb.) Mueller-Arg.	種子	-		3
カエデ属	<i>Acer</i>	種子	2		-
イイギリ	<i>Mossia polycarpa</i> Maxim.	種子	-		5
ブドウ科	<i>Vitaceae</i>	種子	-		2
ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子	-		9
ヤブガラシ	<i>Cayratia japonica</i> (Thunb.) Gagn.	種子	-		1
アブドウ	<i>Aspidosiphon brevipedunculata</i> (Maxim.) Trautv.	核	-		1
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemslay	核	-		1
クマノミズキ	<i>Cornus macrophylla</i> Wallich	核	-		2
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	種子	-		2
クサキ	<i>Clerodendron trichotomum</i> Thunb.	核	-		1
草本					
イネ科	<i>Gramineae</i>	穎	-		3
		胚乳	炭化		-
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	穎	-		14
			炭化	21	3
			炭化	72	15
アワ-ヒエ	<i>Setaria itarica</i> Beauv. = <i>Echinochloa crus-galli</i> Beauv.	胚乳	炭化	28+	-
オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i> L.	胚乳	炭化	28	-
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	果実	-		2
カナムグラ	<i>Hemulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	種子	-		2
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	果実	-		2
タデ属	<i>Polygonum</i>	果実	-		6
サナエタ子近似種	<i>Polygonum cf. lapathifolium</i> L.	果実	-		1
ソバ	<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	果実	炭化	6	-
アカザ科	<i>Oenopodiaceae</i>	種子	-		6
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	種子	-		2
ササゲ属	<i>Vigna</i>	種子	炭化	2	-
カタハミ属	<i>Oxalis</i>	種子	-		3
チドメグサ属	<i>Hydrocotyle</i>	果実	-		1
キランソウ属	<i>Aliza</i>	果実	-		1
イヌコウジュ属	<i>Mollis</i>	果実	-		2
ナス科	<i>Solanaceae</i>	種子	-		-
メロン類	<i>Cucumis melo</i> L.	種子	-		1
タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.	果実	-		-
不明種実			-		+
木の芽			-		43
木材			-		+
炭化材			+		+
不明植物			+		+
不明炭化物			+		+
藓苔類			-		+

注1) +は、断片を基むための個数推定が困難である種類を示す。

注2) 数字+は、断片を含み数字以上の個数が推定される種類を示す。

なお、各試料からはイネ属以外のイネ科作物（キビ類やムギ類など）に由来する短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、珪酸体は全く認められない。また、各試料からはイネ科起源の植物珪酸体の他に樹木起源珪酸体第Ⅳグループ（近藤・ピアソン, 1981）も検出される。第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈し、多くの樹木葉部で観察されるものである。

（4）大型植物遺体群の種類構成

各試料における大型植物遺体分析結果を表24に示す。表より明らかなように02-4区第7面落ち込み4007のB5層の試料番号1-3と02-2区流路充填堆積物断面の第3層の試料番号1-15とは種類構成に際立った違いが認められた。

試料番号1-3は、草本が多く9科、9属、6種類検出されたのに対して、木本は1科、1属と少なかった。種類構成は、炭化したイネの胚乳を含むイネが最も多く93個体、次いでアワーヒエ、オオムギ等が多かった。また、個体数は10個体以下であったがソバ、アカザ科、ササゲ属、カエダ属などの種子が産出した。

試料番号1-15は、木本が多く15科、21属、14種類検出された。草本は10科、9属、2種類であった。種類構成は、木本ではアカガシ亜属が最も多く35個体、草本ではイネが多く32個体検出された。また、個体数は10個体以下であったが、木本のブドウ属、カラスザンショウ、ヒサカキ属、イヌシヤ、イイギリ、サンショウ属、モミ属、アサダ、コナラ亜属、イチイガシ、アカメガシワ、エゴノキ属、草本のタデ属、アカザ科、カタバミ属、カナムグラ、カヤツリグサ科、ギンギシ属等が検出された。

（5）炭化材同定

02-4区第7面落ち込み4007のB5層の試料番号1-3に含まれていた炭化材1点は、イネ科タケ亜科に同定された。

4. 考察

（1）調査地点およびその周辺の縄文時代晩期～平安時代の古植生変遷と堆積環境変遷

02-3区北壁断面の試料は古墳時代初頭以前とされているが、標高および層相から、前回当社で花粉分析（バリノ・サーヴェイ, 2000）を行った98調査区の縄文時代晩期～弥生時代前期の層準に対比されるものと推定される。標高および層相から対比が想定される98-2区（a）の試料番号8～12と、今回の分析結果を比較すると、いずれも木本類の割合が高く、常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産し、温帯性針葉樹のモミ属、ツガ属、スギ属などを伴っている。また、最上位で草本類の割合が増加し、イネ科が多産する点も類似している。このような花粉組成の特徴から、02-3区北壁断面の第5層の⑬～⑯層は、98-2区（a）の試料番号8～12に生層序対比されると考えられる。98-2区（a）の試料番号7～1、は第5層の⑬層より下に対比されると考えられる。古植生変遷について述べるに当たっては、前回調査を行った98-2区（a）の試料番号7～1の結果も合わせた上で、縄文時代晩期～平安時代末期にかけての古植生変遷について述べる。

縄文時代晩期～弥生時代前期と推定される98-2区（a）の試料番号0～7および02-3区北壁断面の第5層

の⑬層(試料番号2-7)～第5層の⑪層下層(試料番号2-5)堆積時は、暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であるアカガシ亜属を主体とする林分が、生駒山水系や大和川水系の丘陵や後背山地に存在し、より高い標高の場所にはモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などの温帯性針葉樹が生育していたと推測される。

02-3区北壁断面の第5層の⑪層下層(試料番号2-4)～第5層の⑨層(試料番号2-2)堆積時は、花粉化石の産出状況が悪く、古植生について述べることは困難である。産出した木本類についてみると、マキ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属など針葉樹に由来する花粉化石が多く認められ、シダ類胞子も多産した。一般的に花粉・シダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている。珪藻分析結果および分析試料や松田(2000a)で記載された層相から、本層準は古土壌であると判断される。このことから、該当層準では、堆積層の形成後に好氣的な土壌環境へと変化し、堆積時に取り込まれた花粉が分解・消失して、分解に強い花粉が選択的に残されたと考えられる。

02-3区北壁断面第5層の⑬層～第5層の⑥層(試料番号2-7～2-1)の珪藻化石群集では、沼沢湿地付着生種群を伴い中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産する群集(第5層の⑬層～⑪層下層; 試料番号2-7～2-5)から、陸生珪藻が優占する群集(第5層の⑩層～⑧層; 試料番号2-3～2-1, 02-6区北壁断面の第8層; 試料番号1-14)への変化が認められる。本層準の下部(98-2区(a)の試料番号0～7)には、砂質泥層を主体となすより粗粒な堆積物が累重しており、T.P.3.3～4.7m付近(02-3区北壁断面第5層の⑬層～⑧層)で上方細粒化の傾向が観察される(松田, 2000a)。このような層相変化および珪藻化石群集から、02-3区北壁断面第5層の⑬層～第5層の⑥層では、河川氾濫の影響を頻繁に受けるような不安定な後背湿地から、その後背湿地が離れ土壌が形成されるような堆積環境の変化があったことが推定される。このような堆積環境変化からは、第5層の⑬層～第5層の⑥層にかけて、相対的な水位低下や滞水域の埋積などの地形変化が生じた可能性が示唆される。

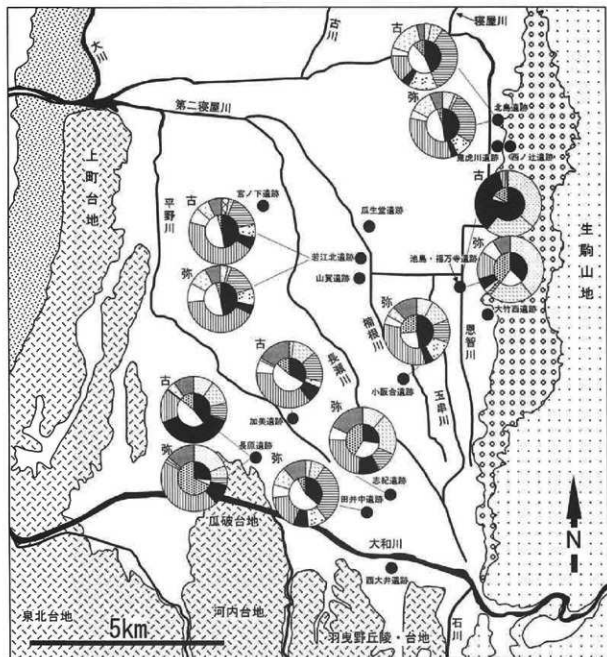
弥生時代前期～中期の02-3区北壁断面第5層の⑬層(試料番号2-1)～02-6区北壁断面の第7層(試料番号1-13, 1-12)になると、アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などを伴うが、草本類の割合が増加し、イネ科花粉の産出が多くなる。よって、該当層準堆積時は、後背地は依然としてアカガシ亜属を主体とする照葉樹林とモミ属などの温帯性針葉樹が分布しているが、遺跡の周囲ではイネ科を中心としてカヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属などが分布する開けた場所が増加したと推測される。

弥生時代中期頃～後期と推定される02-6区北壁断面の第6層～第4層(試料番号1-11～1-7)の層準では、微化石の産出状況が悪い。前回の当社が行った花粉分析においても、本層準に対比される分析試料では、花粉化石の産出状況が極めて悪い状況であった(バリノ・サーヴェイ, 2000)。これらの層準では、後背湿地からより乾燥した自然堤防の堆積環境に変化したことが推定されている(松田, 2000a)。前回および今回の微化石分析の結果をふまえると、本遺跡では、後背湿地から自然堤防への土地条件の変化が、下位の層準に比べ02-6区北壁断面の第6層～第4層(試料番号1-11～1-7)で、微化石の保存状態に大きな影響を及ぼしたことが推測される。このことについては、前回の花粉・植物珪酸体分析結果の総評を行った松田(2000a)が既に指摘を行っており、今回、それを追認する結果が得られたものと判断さ

れる。なお、本時期の遺跡周辺の古植生については、志紀遺跡（辻本ほか，2002）、田井中遺跡（鈴木・藤根，1996）、長原遺跡（辻本・金井，2003）、西大井遺跡（渡辺，1995）、巨摩・若江遺跡（古環境研究所，1996）、池島遺跡（辻本，2001）などの結果から、弥生時代前期頃と同様にアカガシ亜属を主とした植生が成立していたことが推定される（図164）。ただし本時期には地点によっては、照葉樹林要素が減少傾向を示し、弥生時代後期後半にかけて二次林の代表的な樹種であるマツ属が増加傾向を示すようになることから、多様な植生が認められるようになったと考えられる。

02-6区北辺断面の第7層～第3層（試料番号1-13～1-7）の珪藻化石群集は、下部（第7層～第6層下部：試料番号1-13～1-11）の混合群集や流水性種の中～下流性河川指標種群が多産する群集から、上部（第6層中部～第4層：試料番号1-10～1-7）の陸生珪藻が多産ないし珪藻化石の産出が極めて少ない群集へ変化する。なお、混合群集とは、優占種が認められず、例えば流水性種と止水性種などの生育環境が相反する種群が雑多に存在する洪水氾濫堆積物や水田作土に特徴的な珪藻化石群集を指す（堀内ほか，1996）。珪藻分析結果および分析試料や松田（2000a）で記載された層相から、河川氾濫の影響を頻繁に受けるような氾濫原ないし後背湿地から、地表面下で継続的に土壌形成が行われるような自然堤防へ堆積環境が変化したことが推定される。このような堆積環境変化からは、第7層～第3層にかけて、相対的な水位上昇や滞水域の埋積および上方への堆積物の累重に伴う微高地化などの地形変化が生じた可能性が示唆される。第6層最上部～第4層では、花粉・珪藻化石の産出が不良であった。これらの層準は、堆積後に好気的な土壌環境が形成されやすい自然堤防堆積物に相当しており（松田，2000a）、このような土地条件下において、微化石が分解消失してしまった可能性が示唆される。

平安時代末期とされる02-4区第7面落ち込み4007になると、B5層（試料番号1-3）ではマツ属、コウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属がほぼ同率で認められ、B4層～B3層（試料番号1-2、1-1）ではマツ属が多産する。群集の変化をみると、上位層に向かってマツ属が増加し、同時にアカガシ亜属、コウヤマキ属、スギ属が減少する。河内平野では、奈良～平安時代の層準でマツ属の花粉が増加する傾向があり、このような分析結果は、志紀遺跡や北島遺跡などで確認されている（松田・バリノ・サーヴェイ，1996；辻本ほか，2002）。草本類ではイネ科が多産し、水田雑草となりうるミクリ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属なども認められる。また、大型植物遺体分析では、B5層（試料番号1-3）からイネが多産した。よって、周辺での稲作の可能性が考えられる。また、ソバ属、キウリ属などの栽培種に由来すると考えられる花粉化石やオオムギ、ソバなどの植物遺体が産出したことから、これらの栽培もうかがえる。これらの分析結果から、落ち込み内を充填する堆積層の形成時である平安時代末期には、遺跡周辺で耕作地が広がり、その後背地の丘陵や山地斜面でアカマツの二次林や植林が増加したことが推定される。ちなみに大阪平野では、古墳時代後期、6世紀頃以降から多くの地点でマツ属の花粉化石が増加する傾向にあり、アカマツ二次林や植林が成立したとされる（中村，1967；那須，1980・1989；前田，1984など）。しかしながら、河内台地周辺では、丹上遺跡などで奈良・平安時代にもカシ類などの照葉樹林が遺跡周辺に広く分布していた可能性を示唆する分析結果が得られている（大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター，1999）。人間の干渉に伴う二次林化の過程は、大阪平野内の各地域ごとに異なっている可能性があり、この点については、今後の検討課題であると認識される。



- 凡例
- | | | | | | | | | | |
|--|------|--|-------|--|-------|--|-------|--|----|
| | 沖積低地 | | 砂州・浜掙 | | 沖積扇状地 | | 台地・丘陵 | | 山地 |
|--|------|--|-------|--|-------|--|-------|--|----|
- 外円
- | | | | | | | | | | |
|--|-----|--|------------|--|-------|--|-----------------|--|-----|
| | モミ属 | | ツガ属・コウヤマキ属 | | スギ属 | | イテイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 | | |
| | マツ属 | | アカガシ亜属 | | コナラ亜属 | | クリ属-シイノキ属 | | その他 |
- 内円
- | | | | | | |
|--|----|--|----|--|-------|
| | 木本 | | 草本 | | シダ類孢子 |
|--|----|--|----|--|-------|
- 古：古墳時代前期 弥：弥生時代前期

図164 弥生時代前期・古墳時代前期の花粉化石群集

(2) 古墳時代初頭の河川周辺の高木

古墳時代前期（庄内式～布留式期）に埋没し、流路肩部に堆積した流路充填堆積物からは、アカガシ亜属や栽培植物に由来するイネが多産した。また、ブドウ属、カラスザンショウ、ヒサカキ属、イヌシデ、イイギリ、サンショウ属、モミ属、アサダ、コナラ亜属、イチイガシ、アカメガシワ、エゴノキ属などの木本類、タデ属、アカザ科、カタバミ属、カナムグラ、カヤツリグサ科、ギシギシ属等の草本類が産出した。これら検出された種実のうち、イイギリ・イヌシデ・アサダは河畔林を構成する要素、アカメガシワやエゴノキ属は荒地や日当たりの良い場所、ブドウ属は林縁、草本類が河岸などに多い種類である。とくにイチイガシを含むアカガシ亜属は、前述したように照葉樹林の主要構成種として縄文時代晩期～弥生時代前期から弥生時代前期～中期にかけて丘陵部や山地部に生育していたとされたが、本地点の結果も加えて考えると照葉樹林は古墳時代初頭にも及んでいた可能性がある。当該期の層準では、花粉化石の保存が悪く、古木の推定を行うことが不可能であった。本時期の遺跡周辺の古木については、長原遺跡（辻本・金井, 2003）、西大井遺跡（渡辺, 1995）、巨摩・若江遺跡（古環境研究所, 1996）、池島遺跡（辻本, 2001）、加美遺跡（辻本ほか, 2003）などの花粉分析結果がある（図164）。これらの成果から、河内平野周辺植生は、基本的にはアカガシ亜属を主とし、温帯性針葉樹の種類を伴う照葉樹林であったことが推定される。ただし、本時期には弥生時代に比較して温帯性針葉樹の種類が増加しており、台地に近い場所ではマツ属が多産する地点も認められることから、弥生時代の植生とは様相を異にしていたことがうかがえる。このような花粉分析および今回の種実分析結果から、古墳時代前期には大和川水系沿いの山地から丘陵にはイチイガシなどの常緑広葉樹を主体とした暖温帯性の広葉樹林が成立しており、山地上部や沢沿いなどで温帯性針葉樹が分布域を拡げたことが推定される。また、暖温帯性の広葉樹林は、流路沿いなどの平地にも林分を形成していた可能性があり、流路に沿って、帯状にタデ属・ギシギシ属などの草地、その後背にはイヌシデ・アサダ・コナラ亜属などの落葉広葉樹、氾濫の影響の小さい場所にイチイガシなどが分布していた可能性がある。平地林の様相については各地での古植物情報の蓄積と同時に、水系沿いの地形発達と合わせた評価が必要である。

(3) 弥生時代相当層における土地利用の検討

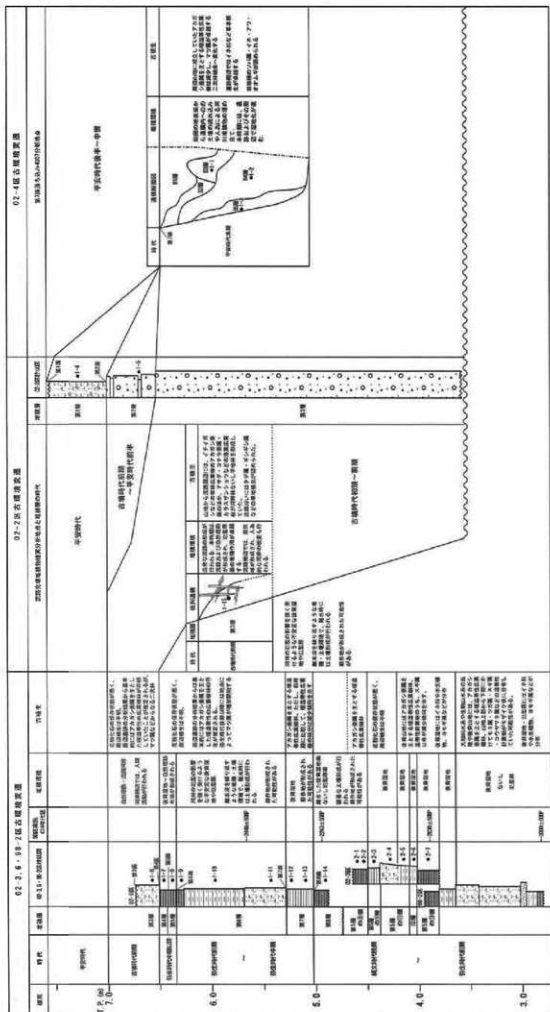
植物珪酸体分析は、02-6区北辺断面の第2層～第8層（試料番号1-14～1-16）において実施した。このうち、弥生時代前期～中期とされる第8層～第5層、弥生時代後期とされる第4層、古墳時代初頭～前期とされる第3層の層準から、イネ属に由来する植物珪酸体が検出された。このうち、弥生時代前期～中期とされる下位の第7層下半や第7層上半ではイネ属の含量が多かった。稲作が行われた水田跡の土壌ではイネ属の機動細胞珪酸体5,000個/g程度が検出されることが通例であり、安定した水田稲作が行われたと推定される（杉山, 2000）。前回調査を行った98-7区での調査では、稲作跡の有無を判断する基準値を3,000個/gとしている（古環境研究所, 2000）。第7層下半でのイネ属機動細胞珪酸体の含量は約9,200個/gであり、これらの基準を超えるものである。また、短細胞珪酸体も約2,000個/gの含量であり、調査した層準で最も多かった。これらの点および当時の地形や堆積環境を考慮すれば、第7層下半ではイネ属の植物体が混入しており、本層準において水田での稲作を伴う人間活動があった可能性が高いと考えられる。このことは、第7層上半についても同様である。とくに、第7層上半にはイネ属顆粒珪酸体の含量が多く、稲初播種や脱穀後の切殻廃棄などがうかがえる。第3層でも、イネ属の含量が増加した。特にイネ属機動細胞珪酸体の含量は約3,400個/gとなり、前述の基準値と同等である。そのため、こ

の産状を見る限り、第3層でも水田での稲作を伴う人間活動が行われた可能性が示唆される。

第6層～第4層では、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出されていることから、イネ属の植物体が混入していると考えられる。しかし、イネ属機動細胞珪酸体の含量は前述の基準値を下回っていることから、この地点での稲作を伴う人間活動の有無について、分析結果のみからでは積極的に支持しえない。しかしながら、弥生時代中期以降～古墳時代初頭以前の第4層上面（第4面：試料番号1-7）では畦畔が検出されているが、イネ属機動細胞珪酸体の密度は1,100個/g程度に止まる分析結果であった。基準値を下回る要因としては、本地点の周辺での稲作や、この場のイネの生産性が低かったり、耕作期間が短かった可能性などが考えられる。

ところで、今回の02-6区の北側に隣接する98-7区の同一層準においても植物珪酸体分析が行われており（古環境研究所、2000）、今回のイネ属の産状とは異なった産状が見られた。すなわち、今回の02-6区で水田の可能性が指摘された第7層上半と下半は、前回の98-7区の結果（試料番号4、5）ではその下の第8層に対比される層準（試料番号2、3）を含めてヨシ属が多産しイネ属の含量は少なかった。そして、98-7区で水田耕作の可能性が指摘された第6層～第5層に対比される層準（98-7区試料番号6～10）では、イネ属含量が減少し水田耕作の可能性は低いと判断されている。畦畔が検出されている弥生時代中期以降～古墳時代初頭以前の層準では、前回と同様にイネ属含量が少ない分析結果が得られた。

以上、02-6区と98-7区の分析結果から、同一層準においても分析結果が異なる傾向が存在していることが確認された。同一層準でありながらサンプリング地点によって植物珪酸体組成にばらつきが認められる傾向は、大阪平野において池島・福万寺遺跡や勝部遺跡の弥生時代の水田作土層で確認されている（辻本、2001；辻本・辻、2002・2003；外山、2002）。特に、外山（2002）では、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いによって、イネ属やその他の植物珪酸体の検出数や量にかなりの差異が生じることを明らかにしている。本地点は、河川堆積物を主体とした堆積物が累重する場である。このような場所では、サンプリング地点の違いによって組成に大きなばらつきが存在しやすいことが、これまでの当社の分析事例からもうかがえる。以上のような既往の分析結果をふまえると、単一地点の層序データのみで判断することは非常に危険であるが、数量的に水田耕作の可能性が認定できた層準は、弥生時代前期～中期の第7層、古墳時代初頭～前期の第3層が該当し、その他の層準でもその地点ないし近接地に水田が存在していた可能性が示唆される。今回、各堆積層の土地利用については、分析試料の層相の観察を行えなかったため、分析結果のみからの推定に止まった。水田耕作土の存在の有無は、経験値から導き出されたイネ属の機動細胞珪酸体の密度（杉山、2000）に準じて推定を行った。この密度はあくまで目安に過ぎず、例えば志紀遺跡では、畦畔が検出されている弥生時代前期～古墳時代中期の水田面（第7面～第14面）のイネ属機動細胞珪酸体の密度が800個/gであった（金原、2002）。前回の98-7区では、堆積物中に含まれる植物遺体片のC14年代値が弥生時代前期に相当する（今村、2001・2003）と考えられる層準から1,000個/gのイネ属機動細胞珪酸体の分析結果が得られている（古環境研究所、2000）。弥生時代前期における水田構成層のイネ属機動細胞珪酸体の密度は、六甲山地南麓地域に位置する改町遺跡で、イネ属機動細胞珪酸体の密度が高い試料が3,000個/g前後、少ない試料で1,000個/g前後の分析結果が得られている（古環境研究所、1989）。河内平野では、志紀遺跡や池島・福万寺遺跡で分析結果が得られている。志紀遺跡では、イネ属機動細胞珪酸体が800個/gの分析結果が得られている（金原、2002）。池島・福万寺遺跡では、イネ属機動細胞珪酸体が3,000個/g前後および1,500個/g前後の値を示すが、400個/g程度の試料も存在している（辻本、2001）。岡山平野に位



・墳墓頭頂や空産生の位置には、今回調査した区別の分析結果のほか、現区での発掘調査の結果を参考にした。

図165 小板合遺跡における古墳構造図

置する津島遺跡では、イネ属機動細胞珪酸体が2,000個/g前後の値を示した1試料を除く他の3試料が150~350個/g前後の分析結果であった(バリノ・サーヴェイ, 2003a)。上記の分析結果では、水田耕作土の存在の目安となる3,000や5,000個/g程度の密度を大きく下回る分析値も多く存在している。実際、畦畔が検出された02-6区の第4面(試料番号1-7)では、イネ属機動細胞珪酸体の密度が1,100個/gであった。また、松田(2000a)は、第5層より下位、T.P.6~5m付近のC14年代値から弥生時代前期~中期と推定される層準で、遺構の一部をなす堀込み、盛土状の攪乱やイネ科草本と考えられる多量の炭化植物片が含まれていることを記載している。以上のことから、本遺跡では、第5層より下位の層準で耕作地跡などの遺構が存在している可能性が高いことがうかがえる。

(4) 平安時代末期の落ち込み4007の埋没環境

黒褐色砂泥じりシルトのB3層(試料番号1-1)~暗灰色砂泥じりシルトのB5層(試料番号1-3)からは、A群を主体とする陸生珪藻と中~下流性河川指標種群を含む淡水生種が高い割合で混在することによって特徴付けられた。これより、落ち込み内は半乾半湿の状態にあったか、河川の氾濫堆積物によって落ち込みが埋め立てられたか、あるいは周囲から陸生珪藻を含む土壌が落ち込みに流れ込んだと考えられる。また、B5層(試料番号1-3)の炭化材同定の結果からイネ科タケ亜科が認められたことから周囲の乾いていた場所には、タケ亜科なども生育していたと考えられる。さらに大型植物遺体分析結果からすると、イネ、アワヒエ、オオムギ、ソバなどの栽培植物が多産した。これらは、人間が遺跡内に持ち込んだ種実由来であると推定され、当時の栽培植物の一端をうかがわせる資料として注目される。

(5) 小結

02および98区(古環境研究所, 2000; バリノ・サーヴェイ, 2000)の分析や堆積物の観察結果(松田, 2000a)から、本遺跡での相対的水位変動は、縄文時代晩期~弥生時代前期にかけて低下、弥生時代中期に上昇、弥生時代後期頃に再び低下したことが推定された。これらの相対的水位変動は、本遺跡での堆積環境変化とそれに伴う地形発達によるものであると思われる。すなわち、縄文時代晩期~弥生時代前期には、後背湿地からその地形面が離水し、地表面付近で土壌発達が行われるようなより乾燥した環境へ変化し、弥生時代中期には、再び氾濫堆積物や滞水堆積物が上方へ累重するような後背湿地や氾濫原となり、弥生時代後期には、これらの地形面を覆って氾濫堆積物が累重し、より高燥な自然堤防が形成されたものと推定された。このような地形変化のなか、植物珪酸体分析と堆積物観察結果からは、弥生時代前期~中期に水田などの耕作地を造成および維持・管理するような人間活動が存在していたことが示唆された(図165)。

遺跡およびその周辺の古植生は、T.P.5~4.5m付近で存在する弥生時代前期の古土壌の上部付近で草本類が多く生育するような開けた植生景観へと変化したことが推測された。弥生時代前期の古土壌より下位の層準では、木本花粉が優占する花粉組成となっており、本層準上部を境にながら植生変化があったことが想起される。しかしながら、現段階のデータでは、植生に変化が生じていた可能性を示唆するに止まらざるを得ない。この変化については、今後、遺跡周辺の古植物学データと地形発達史を合わせ検討していくことが課題である。弥生時代後期以降、本遺跡では、顕著な流路形成があったことが明らかにされている(松田, 2000b)。前回の分析では、流路形成が活発に行われていた古墳時代前期の古植生のデータを得ることができなかった。今回の分析では、流路肩に存在する枕列付近の有機質層の

種実分析を実施することで、当該期の古植生を推定することが可能となった。古墳時代前期の流路周辺では、イチイガシなどの常緑広葉樹のほか、アサダ属・コナラ亜属・カラスザンショウなどからなる平地林が存在した可能性が推定された。河内平野では、早くに一瀬(1987)によって、河川堆積物中の花粉組成と遺跡周辺から採取した可能性が高いと考えられる杭材などの樹種構成が異なることが指摘されてきた。花粉などの微化石と種実などの大型植物化石は、堆積物中に取り込まれる過程が異なっている(百原, 2003)。そのため、より詳細な古植生の推定を行う際には、微化石と大型植物化石の双方の結果を考慮する必要があることが指摘されている(百原, 2003)。河内平野では、多くの花粉分析データが存在している。しかしながら、粉川(1983)や黒松・粉川(1986)などの先駆的な業績以降、自然堆積層内に含まれる種実のデータについては、あまり蓄積されてこなかった状況が存在している。今回の流路肩部堆積物中の種実分析によって、遺跡やその周辺において流路周辺に生育していた植物について詳細なデータを得ることができた。このように種実や材化石といった大型植物化石分析は、河内平野での今後のより詳細なスケールや、社会-自然複合(松田, 2000c)レベルでの景観復元を行う際にも有効なデータと成りうる 것이予想される。また、今回、古代の遺構堆積物から、多くの栽培植物を洗い出すことができた。河内平野では、弥生時代の遺構堆積物について多くの種実データが蓄積されているが、それ以前および以降の時代のデータが希薄である。この点についても、今後のデータの蓄積によって、栽培植物などの歴史的や地域的な考察が可能になってくるものと予想される。

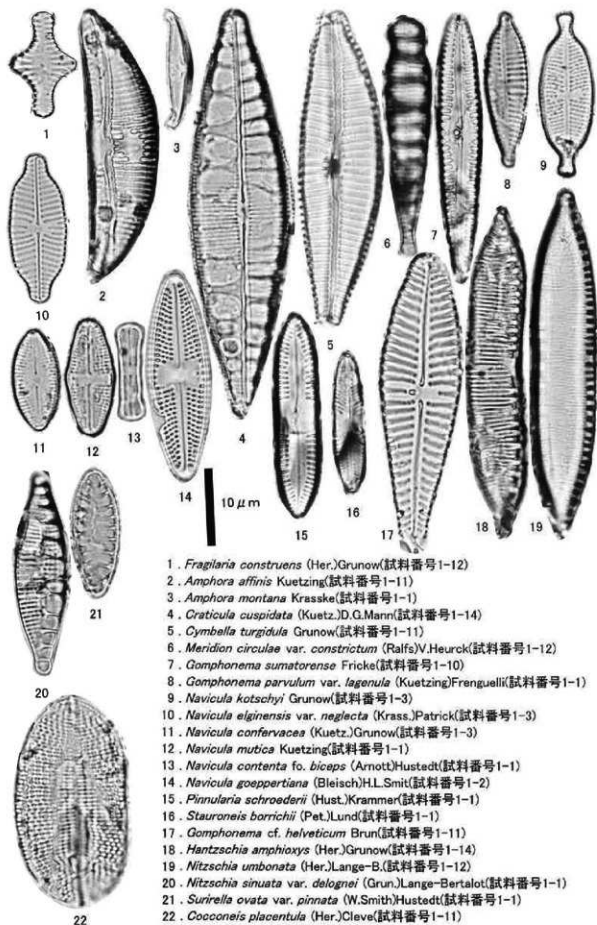
引用文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 一瀬和夫(1987)木製品。「久宝寺南(その2) - 久宝寺・加美遺跡の調査 - 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-本文編一」, (財)大阪文化財センター, 243-287.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会.
- 今村孝雄, 2001, 縄文~弥生時代移行期の年代を考える - 問題と展望一, 第四紀研究, 40, 509-516.
- 今村孝雄, 2003, AMS-¹⁴C法と弥生開始時代の歴年代, 歴博, 国立歴史民俗学博物館, 11-15.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫, 1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について - 混合群集の認定と堆積環境の解釈一, 日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集, 62-63.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘, 1968, 埼玉の産物 珪藻類, 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 伊藤良夫・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 第四紀研究, 27, 1-20.
- 金原正子, 2002, 志紀遺跡3区における古環境復元, 「志紀遺跡(その2・3・5・6) 大阪府宮八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 209-232.
- 古環境研究所, 1996, 花粉・珪藻、プラントオーバー分析, 「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書-第5次-都市計画道路大阪中央環状線三摩横交差点南行跨道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 166-190.
- 古環境研究所, 2000, 大阪府小阪合遺跡の植物珪藻体化石分析結果, 「小阪合遺跡 都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 252-257.
- 近藤麻三・ピアソン 友子, 1981, 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体につ

- いて、高松大学研究報告, 12, 217-229.
- 近藤謙三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-64.
- 粉川昭平, 1983, 若江北遺跡出土の植物遺体. 「若江北 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-本文編-」, (財)大阪文化財センター, 94-102.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, 353p., BERLIN - STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 黒松崇徳・粉川昭平, 1986, 亀井遺跡出土の大型植物遺体. 「亀井(その2) 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-本文編-」, (財)大阪文化財センター, 339-370.
- 桑原 徹, 1975, 濃尾傾動盆地と濃尾平野. 資料・第四紀の日本列島-3, アーバンクボタ, 11, 18-25.
- 前田保夫, 1984, 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷. 宮島 昭(編著), 日本植生誌 近畿, 至文堂, 87-99.
- 松田順一郎, 2000a, 98-1~7区発掘調査の年代測定と微化石分析. 「小阪合遺跡-都市基盤整備公園八尾団地建設に伴う発掘調査報告書-」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 236-237.
- 松田順一郎, 2000b, 八尾市小阪合遺跡における弥生時代~古代の河川堆積作用と地形発達. 「小阪合遺跡-都市基盤整備公園八尾団地建設に伴う発掘調査報告書-」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 259-276.
- 松田順一郎(2000c) 調査地周辺における中世と近世の耕作地のちがひ. 「鬼鹿川遺跡北部の中・近世耕作地跡-浄化槽建設に伴う鬼鹿川遺跡第43次発掘調査報告書-」, (財)東大阪市文化財協会, 9-12.
- 松田順一郎・バリノ・サーヴェイ, 1996, 「北島遺跡の耕作地と古環境-寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書-」, (財)東大阪市文化財協会, 157p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 642p., 東北大学出版会.
- 那須孝徳, 1980, 花粉分析からみた二次林の出現. 関西自然保護機構会報, 4, 3-9.
- 那須孝徳, 1989, 活動の舞台: 概論. 「弥生時代の研究1 弥生人とその環境」, 永井昌文・那須孝徳・金岡 恕・佐原 真編, 雄山閣, 119-130.
- 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター, 1998, 微化石分析, 「丹上遺跡 近畿自動車道と歌山線・都市計画道松原大津線建設に伴う発掘調査報告書 本文編」, 80-89.
- バリノ・サーヴェイ, 2000, 大阪府小阪合遺跡の花粉分析結果. 「小阪合遺跡-都市基盤整備公園八尾団地建設に伴う発掘調査報告書-」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 242-251.
- バリノ・サーヴェイ, 2003a, 岡山県陸上競技場改修に伴う自然科学分析. 「津島遺跡4 岡山岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査」, 岡山県教育委員会, 523-539.
- Sato, H., Tanimura, Y. and Yokoyama, Y., 1996, A Characteristic Form of Diatom Melosira as an Indicator of Marine Limit during the Holocene in Japan. The Quaternary Research, 35, 2, 99-107.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 鈴木 茂・藤根 久, 1997, 田井中遺跡96-1区のご環境分析. 「田井中遺跡(1~3次)-志紀遺跡(防1次)陸上自衛隊

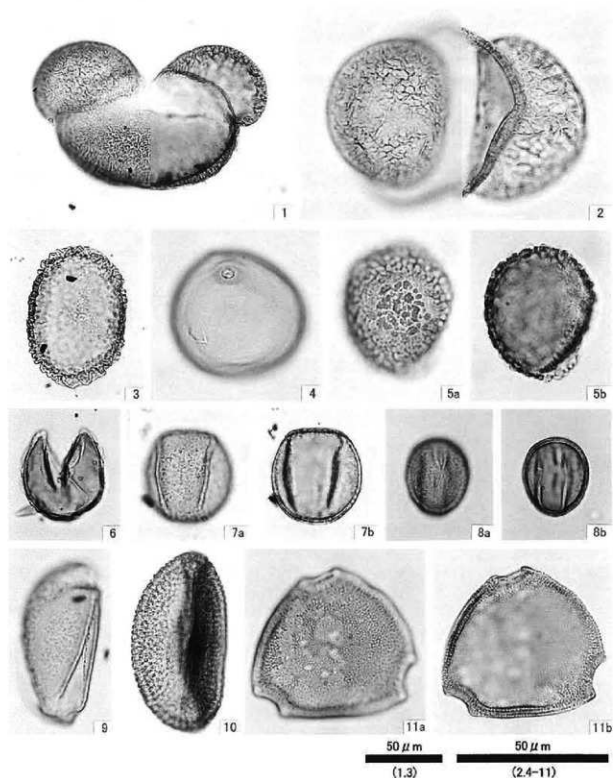
- 八尾跡宅地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 278-301.
- 辻本裕也・辻 康男, 2002, 池島・福万寺遺跡の古環境復元, 「池島・福万寺遺跡2 (福万寺I期地区) 一級河川思知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編」, (財)大阪府文化財センター, 361-410.
- 辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司, 2002, 志紀遺跡における縄文時代から中世の古環境解析-6B区の調査成果を中心に-, 「志紀遺跡 (その2・3・5・6) 大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 605-613.
- 辻本裕也・金井慎司, 2003, 長原遺跡の自然科学分析, 「長原遺跡東部地区発掘調査報告VI 2000年度大阪市長原東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財協会, 67-82.
- 辻本裕也・田中義文・馬場健二・渡邊正巳, 2003, 自然科学分析, 「加美遺跡発掘調査報告書I 2001年度大阪外環状鉄道建設に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財協会, 85-111.
- 辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司, 2003, 自然科学分析の成果, 「勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 151-192.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・孢子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 外山秀一, 2002, 池島・福万寺遺跡の立地と環境, 「池島・福万寺遺跡2 (福万寺I期地区) 一級河川思知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編」, (財)大阪府文化財センター, 411-429.
- 渡邊正巳, 1995, 西大井遺跡 (93年度調査) における花粉・珪藻分析, 「西大井遺跡-大和川下流東部流域下水道事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 149-174.
- Witkowski, A., H.Lange-Bertalot, and D.Metzeltin, 2000, Diatom flora of Marine coast I *Iconographia Diatomologica* 7: 881p., Koeltz Sci. Koenigstein.

分析写真図版1 珪藻化石



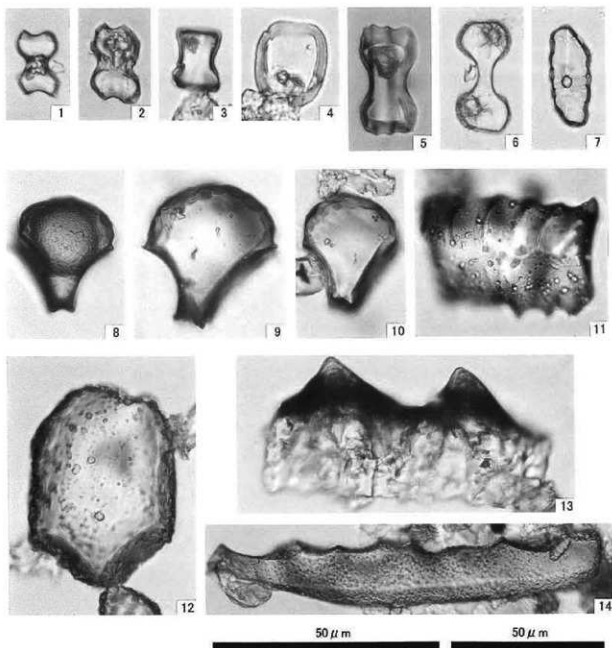
1. *Fragilaria construens* (Her.)Grunow(試料番号1-12)
2. *Amphora affinis* Kuetzing(試料番号1-11)
3. *Amphora montana* Krasske(試料番号1-1)
4. *Craticula cuspidata* (Kuetz.)D.G.Mann(試料番号1-14)
5. *Cymbella turgidula* Grunow(試料番号1-11)
6. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck(試料番号1-12)
7. *Gomphonema sumatrense* Fricke(試料番号1-10)
8. *Gomphonema parvulum* var. *lagenula* (Kuetzing)Frnguelli(試料番号1-1)
9. *Navicula kotschyi* Grunow(試料番号1-3)
10. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick(試料番号1-3)
11. *Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow(試料番号1-3)
12. *Navicula mutica* Kuetzing(試料番号1-1)
13. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott)Hustedt(試料番号1-1)
14. *Navicula goeppertiana* (Bleisch)H.L.Smit(試料番号1-2)
15. *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(試料番号1-1)
16. *Stauroneis borrichii* (Pet.)Lund(試料番号1-1)
17. *Gomphonema* cf. *helveticum* Brun(試料番号1-11)
18. *Hantzschia amphioxys* (Her.)Grunow(試料番号1-14)
19. *Nitzschia umbonata* (Her.)Lange-B. (試料番号1-12)
20. *Nitzschia sinuata* var. *delognei* (Grun.)Lange-Bertalot(試料番号1-1)
21. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W.Smith)Hustedt(試料番号1-1)
22. *Cocconeis placentula* (Her.)Cleve(試料番号1-11)

分析写真図版 2 花粉化石



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. モミ属(試料番号1-13) | 2. マツ属(試料番号1-2) |
| 3. ツガ属(試料番号1-3) | 4. イネ科(試料番号1-2) |
| 5. コウヤマキ属(試料番号1-3) | 6. スギ属(試料番号1-13) |
| 7. コナラ属コナラ亜属(試料番号1-13) | 8. コナラ属アカガシ亜属(試料番号1-3) |
| 9. ミズアオイ属(試料番号1-3) | 10. ソバ属(試料番号1-1) |
| 11. キウリ属(試料番号1-3) | |

分析写真図版3 植物珪酸体



- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号1-12) | 2. イネ属短細胞珪酸体(試料番号1-6) |
| 3. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号1-11) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号1-14) |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号1-7) | 6. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号1-7) |
| 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号1-7) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1-6) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1-6) | 10. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1-12) |
| 11. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号1-11) | 12. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号1-14) |
| 13. イネ属穎珪酸体(試料番号1-12) | 14. 樹木起源第IVグループ(試料番号1-8) |

第9章 まとめ

第1節 小阪合遺跡の変遷

大阪府八尾市小阪合遺跡における(財)大阪府文化財センターの第1次調査(98-1~7区:『第1次報告書』2000年)および第2次調査(02-1~6区:本書)の「調査面」を本書第1章第3節で対照し、それを基本に報告してきた。

しかし実際には、沖積地に立地する複合遺跡での遺構検出状況は複雑であり、同一面でも時期の異なる遺構を調査している場合が多々ある。そこで、本節では出土遺物から時期が推定できる遺構を中心に、小阪合遺跡の各時期の変遷を復元的にたどる。

(1) 縄文時代

遺構は検出していないが、わずかに土器が出土している。

中期前半の船元式(1次図152-1648)の深鉢が1片出土。

晩期の刻目突帯文土器が、02-2区第3層(図72-2134)、02-3区第5層、02-6区第3面自然河川963(図148-6034:船橋式)から出土した。

縄文土器はいずれも古墳時代初頭に埋没した「小阪合分流路跡」(松田順一郎2000「八尾市小阪合遺跡における弥生時代~古代の河川堆積作用と地形発達」『第1次報告書』)の砂層からの出土。縄文土器片は著しくローリングを受けており、上流からの二次堆積と考えられる。

(2) 弥生時代(図166)

98-7区第Ⅶ面・02-6区第4面(T.P.+6.5~6.6m)で水田を検出した。畦畔は方位に対してほぼ45°振れる。畦畔の規模は、下底幅40~60cm、上面幅20~45cm、検出高2~5cm。水口や補強材はみあたらない。畦畔の間隔は、北東-南西の畦畔では心々距離4.2~6.7m、北西-南東の畦畔では6~7mと北東-南西に長い長方形となる。面積は98-7区水田949が31.5m²、水田953が42.2m²。98-7区第Ⅶ層から、弥生土器19片(うち中期12片、後期1片)と土師器2片が出土しており、中期以降の水田と考えられる。

ところが、黒味が強くその上面で畦畔が検出された98-7区第Ⅶ面・02-6区第4面ともイネ属機動細胞珪酸体の密度は、水田耕作土の目安とされる3000~5000個/gに大きく及ばない(古環境研究所2000「大阪府小阪合遺跡の植物珪酸体化石分析結果」『第1次報告書』・本書第8章)。逆に、畦畔は検出できなかったが、植物珪酸体分析から水田耕作の可能性が指摘された層は、弥生時代中期以前の02-6区第7層(肉眼でも黒くみえる)や古墳時代初頭の第3層であった。考古学的成果と自然科学的分析が一致しない理由として、イネの生産性が低かった、耕作期間が短かった、同一層準でも植物珪酸体組成にばらつき傾向がある、と指摘されている(第8章)。

周辺調査区の成果から弥生時代後期には水田はさらに広がっていたと推定されるが、調査範囲の中央部以東は古墳時代初頭に埋没した「小阪合分流路跡」により削られている。

水田より下層の第Ⅷ面で掘立柱建物938を検出した。ただし、掘戻面の決め手を欠く。

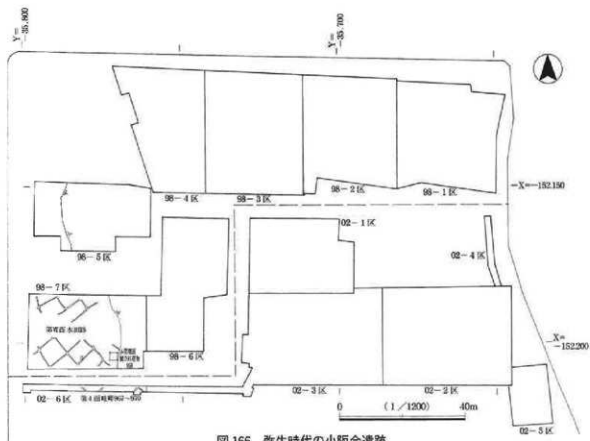


図 166 彌生時代の小阪合遺跡

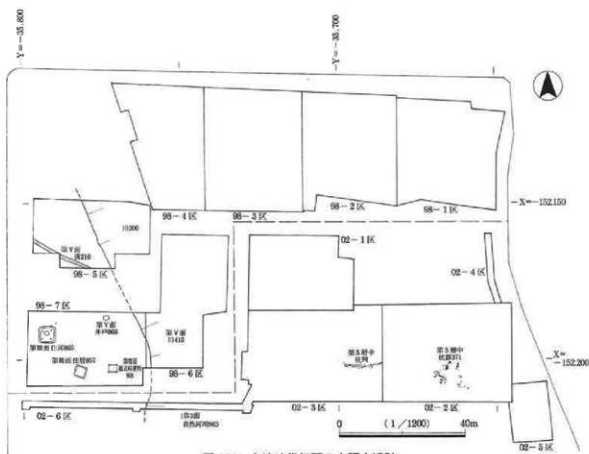


図 167 古墳時代初頭の小板合遺跡

(3) 古墳時代初頭 (図167)

古墳時代初頭(庄内式期)に「小阪合分流路」が、拡幅・埋没した。南から順に、02-6区第3面自然河川963、98-6区第V面川415、98-5区川200(古墳時代部分)と名付けた流路で、それら以東の調査区では特に遺構名は付けていない。

その時期の川の西岸にあたる98-7区第Ⅲ面で庄内式期の住居857・865および住居865内から土器棺1蓋を、第V面で布留式初頭の井戸866を調査した。さらに第Ⅲ面で検出した掘立柱建物938は、検出状況や配置からみると第Ⅲ面の遺構の可能性もある。98-5区第V面溝216出土土器は弥生時代後期後半が主体だが、庄内式も含まれる。若干の時期差はあるが、住居2軒+倉庫1棟+井戸(+溝)という川辺の小集落の景観を呈する。

この時期の集落は、南約500mの小阪合遺跡や西北西約500mの東郷遺跡でも見つかっている。

小阪合分流路の流路充填堆積物の中で杭群・杭列を検出した。02-2区第3層杭群371は、流路がある程度埋まった段階での流水制御施設だが、杭群の遺存は悪い。02-3区第5層杭列は小阪合分流路の流下方向にほぼ直行し、直線状に東西方向に13m以上のびる。状況からみて、堰の可能性が高い。

98-2区の下層確認において、流路充填堆積物を約4.5m掘り下げ、T.P.+2.6mで流路の底に到達した。02-2区ではT.P.+3.6mまでトレンチ掘りで下層を確認したが、川底には至らなかった。大半の調査区では、流路充填堆積物の途中で調査限界に達した。

この流路肩部の堆積物の分析から、周辺はアカガシ亜属を主とする照葉樹林であったと推定されている(第8章)。

小阪合分流路は布留式前半に埋没し、その上面はT.P.+5.9~7.2mでゆるやかな起伏をなす。

(4) 古墳時代前～後期 (図168)

布留式期に埋没した「小阪合分流路跡」の上面に古墳時代の遺構が営まれる。

大きな流路は埋没したが、その西寄りでは98-6区第V面川415、98-5区川200(古墳時代部分)、98-4区第V面川410とした流路が、再下刻、充填等を繰り返しながら古墳時代後期まで存続した。

古墳時代前期(布留式期)には、98-1区第V面井戸196・197・198や02-6区井戸971のように井戸が目立つ。98-2区第Ⅳ面落込み310や98-7区第V面土坑890も同時期。98-3区第Ⅲ面落込み416では、下層から古墳時代前期の土師器、上層からは中期の須恵器・土師器が出土した。

古墳時代中期の遺構には、98-2区第Ⅲ面掘立柱建物936や第Ⅲ～Ⅳ面検出の土坑群等がある。98-2区第Ⅲ面溝235・236(「第1次報告書」では古墳時代後期としたが、中期の可能性が高い)と98-3区第V面溝549が、それぞれ掘立柱建物936の主軸と平行・直交し、その周辺に土坑やピットが分布する状況がみられる。

出土土器からみると、98-3区第Ⅲ面土坑435や98-2区第Ⅲ面落込み217は、5世紀前半(TK216型式期まで)に位置付けられる。98-4区第Ⅲ面土坑331・350、02-1区第4面土器溜り468、02-3区第4面土器溜り663・802等は5世紀後半(TK208~TK47型式期)で、02-1区第4面土器溜り467の土師器(辻編年第4段階)には、その出土状況・遺物組成・甕の底部穿孔等から祭祀の様相がうかがえる。

古墳時代後期～飛鳥時代は遺構・遺物ともに希薄だが、02-3区第1面溝602から7世紀中葉の鳳山廃寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦(図92-3005)、同区第3層から7世紀後半の重弁八弁蓮華文軒丸瓦(図97-

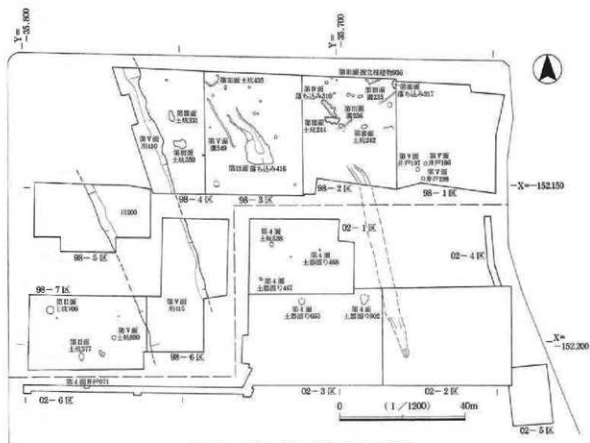


図 168 古墳時代前～後期の小阪合遺跡

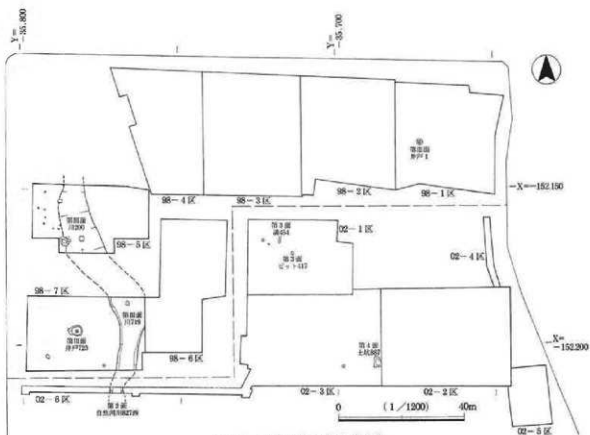


図 169 奈良時代の小阪合遺跡

3055) が出土している。後者の同范瓦は、小阪合遺跡において、八尾市教育委員会の調査で2点、大阪府教育委員会の調査で4点出土している。

(5) 奈良時代 (図169)

小阪合遺跡は、律令制下の河内国若江郡(玉申川と長瀬川にはさまれた地域)にある。調査地は巨麻郷(東郷集落)と刑部郷(小阪合集落)の中間に位置する。

奈良時代前半には、明確な遺構はない。

奈良時代中頃(平城宮土器Ⅲ期)には、98-7区第Ⅲ面井戸723がみられる。掘形は東西4.4×南北3.3×深さ3.3mと大きく、水溜めに曲物を用いた木組み井戸である。

奈良時代末(長岡京期)の遺構には、98-1区第Ⅲ面井戸1がある。4枚の板を井桁に組んだ井戸で、人面黒書土器が出土した。02-3区第4面土坑887も同時期である。

奈良時代～平安時代前半には、川が調査区西部をやや蛇行しながら北流する。南から順に02-6区第2面自然河川827西、98-7区第Ⅲ面川719、98-5区第Ⅲ面川200である。黒書土器を含む奈良時代後半～平安時代初頭を主体とした大量の土器や、和同開珎(和銅元708初鑄)61枚をはじめ計69枚もの皇朝銭が出土した。98-5区川200では、和同開珎28枚(A群)が川底から10cm上、南北1m×東西50cmの範囲に散在し、その南南東約2.5mでも和同開珎30枚(B群)が、南北9.5×東西6.5cmの狭い範囲に折り重なっていた。出土時の銭は赤銅色で、研磨痕も残っており未使用と考えられる。98-7区川719の南部では、和同開珎3枚、隆平永寶(延暦十五796)2枚、富寿神寶(弘仁九818)2枚、承和昌寶(承和二836)1枚、長年大寶(嘉祥元848)1枚、饒益神寶(貞観十二870)2枚、さらに銅製の巡方が散在していた。その他、獣骨(ウマ9割:ウシ1割)も出土しており、祭祀色が強い。

川が流れていた時期には98-5区川200の西岸にピットが散在する程度で、顕著な遺構は見当たらない。

この他、02-1区第3面溝454から奈良時代、同区ピット417奈良時代後半、02-3区第3面ピット678から奈良～平安時代初頭の土器が出土している。

(6) 平安時代前半 (図170)

平安時代の遺構からは多くの土師器が、次いで須恵器、瓦器、黒色土器、瓦、陶器等が出土する。しかし、遺構の時期を遺物から特定できる場合は少なく、多くは土器片の組成から推定した。

【第1次報告書】では、黒色土器A類を含む遺構を「平安時代前期」、黒色土器B類や瓦器を含む遺構を「平安時代後期」として報告した。しかしこの場合、平安時代前期(8世紀末～10世紀初頭)が150年間弱、後期(10世紀中頃～12世紀末)が約250年間となり、時間幅の短長の差が大きかった。

そこで、本書(第2次報告書)では、黒色土器A類や佐藤編年平安時代Ⅰ期～Ⅱ期中段階の土師器を含む遺構を「平安時代前半」(8世紀末～10世紀初頭)、黒色土器B類や佐藤編年Ⅱ期新段階～Ⅲ期の土師器(「て」字状口縁皿等)を含む遺構を「平安時代中頃」(10世紀中頃～11世紀中頃)、瓦器や佐藤編年Ⅳ期の土師器を含む遺構を「平安時代後半」(11世紀中頃～12世紀末)として報告した。

98-5区第Ⅰ面掘立柱建物935は、梁行2間、桁行2間、柱間約1.9m、面積約14.5㎡。東側のピット55・64・68を底部と考えた。南西隅のピット89から根石?2点検出。全ピットから土師器や黒色土器A類が出土しており、平安時代前半と考えられる。建物の約1.2m北には東西方向の溝51が、約6.5m東には

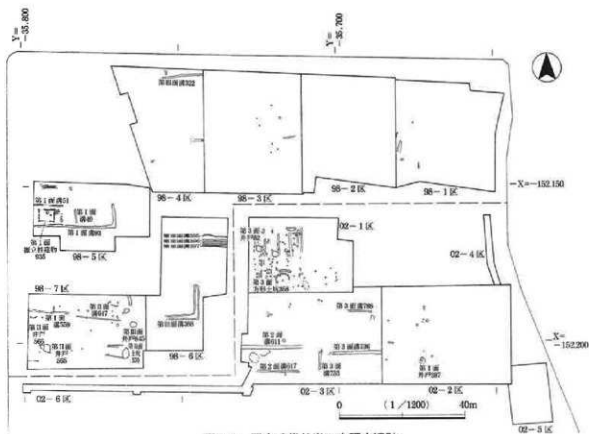


図170 平安時代前半の小阪合遺跡

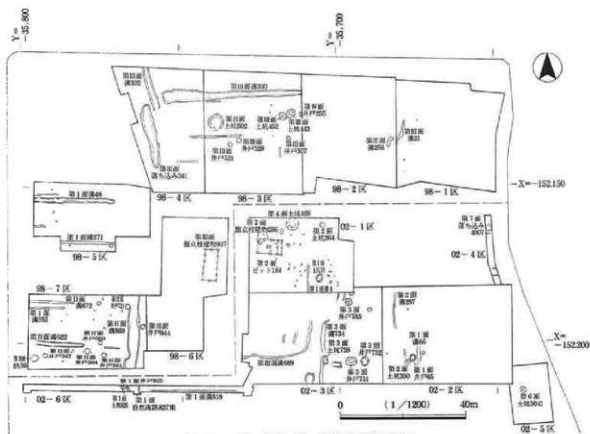


図171 平安時代中頃～後半の小阪合遺跡

南北方向の溝49が存在する。建物の南約1.5mにある溝93を『第1次報告書』では、瓦器13片が出土したことから平安時代後期と報告したが、掘立柱建物935や溝49・51との位置関係や出土土器の組成からみて、平安時代前半に機能していた可能性もある。と考えるとよければ、溝に囲まれた南北約6m、東西7m以上の空間に掘立柱建物935が存在したという景観が復元できる。さらに溝49の掘立柱建物の東側にも同様の空間があるが、そこでは遺構はみられない。

平安時代前半の溝は、東西あるいは南北にのびることを基調とし、直角に曲がる98-6区第Ⅲ面溝388や先述の98-5区第Ⅰ面溝93も同様である。

02-1区には黒色土器A類を含む土坑・ピット・南北方向の溝等が集中している。第2面では根石の入ったピット211・214・224等、第3面では井戸82や方形土坑358等がみられた。この他、時期が特定できないので図示していないが、98-3区・98-7区・02-1区でも、平安時代前半の可能性のある溝・井戸・土坑・ピットは多い。

出土遺物では、02-1区第3面井戸82・方形土坑358、02-2区第1面井戸287出土の佐藤福年平安時代Ⅱ期古段階（9世紀第1～3四半期）の土師器は一括性が高い。

(7) 平安時代中頃～後半（図171）

調査区中央部に掘立柱建物が2棟みられる。

98-6区第Ⅲ面掘立柱建物937は、主軸が北からわずかに東に振れ、梁行2間（北4.1m、南4.4m）、桁行5間（東9.6m、西9.8m）、面積約42㎡。この建物を構成するピット379から黒色土器A類、ピット363から「T」字状口縁の土師器皿、その他のピットからは平安時代と思しき土師器片が主に出土した。

02-1区第2面掘立柱建物286は、梁行南北2間（4.4m）、桁行東西3間（6.5m）、面積約29㎡の母屋の東に幅1.3mの底部が付くと考えられる。この建物を構成するピットのうち、2個から黒色土器B類、1個から瓦器、さらに1個から両方が出土しており、平安時代後半の可能性が高い。掘立柱建物286の南に位置するピット184にはヒノキの柱が残っており、これを含めて掘立柱建物あるいは櫓列を構成する可能性のあるピット群も存在する。

上述の3棟の掘立柱建物は、数少ない土器片から推して、98-5区掘立柱建物935（平安時代前半）→98-6区掘立柱建物937（同前半～中頃）→02-1区掘立柱建物286（同後半）の順に建てられたと考えられる。しかし、98-5区掘立柱建物935と02-1区掘立柱建物286は同様に東側に庇部をもち、建物の方位は平行あるいは直交する。出土土器片の組成によると時期差はあるが、これら3棟は同様の規制にしたがって建てられていた可能性もある。

溝は、平安時代前半と同様に東西あるいは南北にのびるものが多い。加えて、弧を描く02-3区第Ⅲ面溝689や南南東-北北西にのびる98-4区第Ⅲ面溝332・落ち込み341もある。

平安時代中頃の遺構を東から順にみると、02-1区第1・2面のピット群、02-3区第3面井戸731・土坑728・溝734、曲物井戸である98-7区第Ⅲ面井戸844や02-6区第1面井戸825等がある。

02-4区第7面落ち込み4007からは、平安時代末の一括遺物が出土した。この落ち込み4007埋土の珪藻や大型植物遺体の分析では、周辺に耕作地が広がり、その後背地の丘陵や山地斜面でアカマツの二次林や植林が増加したことが推定されている（第8章）。同区第5面では素掘り小溝を検出した。

さらに、平安時代後期の遺構を東から順にみると、02-5区第6面土坑5041、02-2区第1面溝66、同区第2面土坑350、02-1区第1面土坑10、02-3区第3面井戸732・井戸783、98-3区第Ⅲ面土坑

443・井戸507、98-3・4区第Ⅲ面溝330、02-6区第1面溝818・土坑826等がある。これらのうち、02-2区第2面土坑350から平安時代末の瓦器皿等、02-3区第3面井戸732からは尾上編年Ⅰ-2期・平安京土器Ⅳ中の一括遺物が出土した。

以上の他に、出土遺物や配置等から考えて平安時代として矛盾のない溝・井戸・土坑・ピットが多く存在する。

(8) 鎌倉時代以降

平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構として、98-1～4区で耕作に伴うと考えられる溝多数、02-2区第1面井戸65等の井戸や土坑を検出した。

鎌倉時代には、02-3区第1面溝601がみられる。尾上編年Ⅳ-1～2期の瓦器碗が出土しており、13世紀中頃に位置付けられる。02-5区第4面溝5027も鎌倉時代であろう。

室町時代中頃（平安京Ⅱ期）の02-5区第5面土坑5034は、直径3.2～3.7mの不正円形、深さは70数cm。そこから東北東に溝5035がのびる。両者の形状は「瀧」と呼ばれる小規模水利施設に類似する。この他、02-5区第4面溝5028や02-5区第3面の溝群も室町時代と考えられる。

02-5区擾乱層除去面では、近年までの耕作によると推定される畝溝11条と畦状の高まり1条を検出した。

第2節 古墳時代前期の外來系土器

小阪合遺跡を含む八尾市東部・中田遺跡群では、弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構・遺物が豊富である。(財)大阪府文化財センターが2次にわたって調査した小阪合遺跡の北西部では奈良～平安時代が主体であったが、古墳時代前期頃の土器も小阪合分流路跡（それ以外の出土は層位・遺構を明記）等から多く出土している。

以下文中の〔 〕内は調査次＋遺物番号で、図172に掲載した土器には番号末尾に☆を付けた。

東海系 二重口縁加飾壺の肩部〔1次916☆ 廻間Ⅱ式後半：庄内式末～布留式初頭併行〕、台付甕の底部〔1次1619〕、S字状口縁甕の台部分〔1次970☆〕、いわゆる柳ヶ坪型壺〔2次2120☆ 廻間Ⅲ式：布留式前半併行〕がみられる。

近江系 受口状口縁の甕〔1次1620☆ 近江古墳2様式：庄内式後半併行〕がある。

大和系 外面に右下がりのタキが施された大和型庄内甕〔1次1613☆〕が出土。ただし、体部は厚く、胎土は角閃石を多く含む生駒山西産。

山陰系 長く直立する複合口縁の壺・甕・鉢が特徴的である。山陰地方は東西に長く、編年案も多い。庄内式初頭併行期には、口縁端部外面に縞縞平行沈線がめぐる壺〔1次1602☆〕がある。庄内式～布留式前半併行期の複合口縁壺〔1次961・1次962・1次1601・1次1604〕や甕〔1次1514・1次1621☆・2次2126・2次2127〕は多い。布留式前半併行期では、複合口縁壺〔1次1184（98-3区第Ⅲ面落ち込み416上層）〕、甕〔2次3095☆・2次2101☆〕、平底の大型鉢〔1次1254☆・1次1255・1次1256（いずれも98-3区第Ⅲ面落ち込み416上層）〕等がある。この他、低脚杯〔1次968☆〕や襷形連続刺突文の施された壺肩部〔1次969〕もみられる。

吉備系 口縁部形態が特徴的な甕が目立つ。オの町式〔1次1616☆ 庄内式初頭併行（98-3区第Ⅲ層

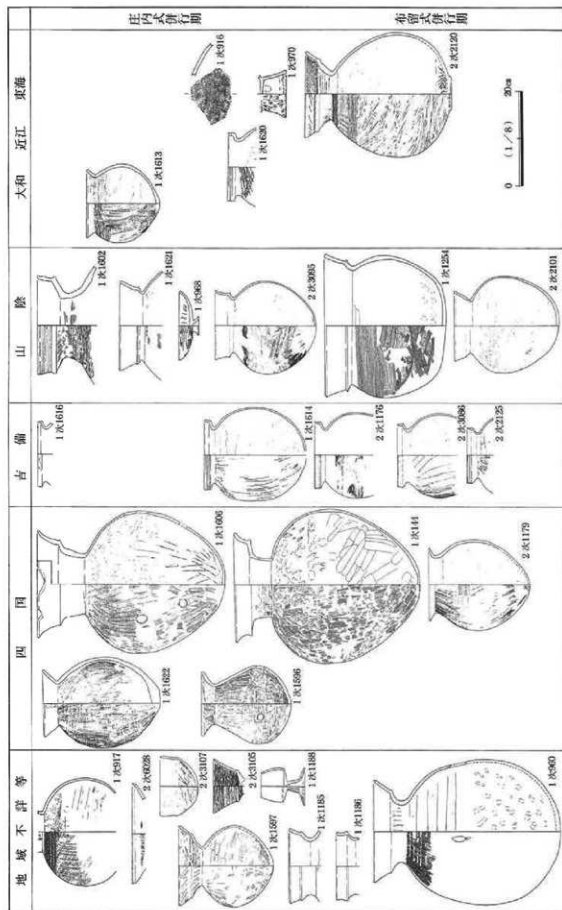


図 172 古墳時代前期の外來系土器

出土)、オの町Ⅱ式～下田所式〔1次1618(98-5区第Ⅱ層出土)〕、下田所式〔1次120(98-7区第Ⅲ面溝793出土)・1次966・1次967・1次1617 庄内式前半併行〕、下田所式～亀川上層式〔1次1614☆・1次1615・2次1176☆〕、亀川上層式〔1次1515・2次2123・2次2124・2次2125☆・2次3086☆ 庄内式後半～布留式前半併行〕の各期に及ぶ。

四国系 阿波系の複合口縁壺には、頸部が外反するもの〔1次1606☆ 黒谷川Ⅱ式?; 庄内式前半併行〕と頸部が直立するもの〔1次144☆(98-7区第Ⅲ面住居865内の土器箱)・1次1605 黒谷川Ⅱ～Ⅲ式; 庄内式併行〕がある。丸底の甕〔2次1179☆ 黒谷川Ⅲ～Ⅳ式?; 庄内式後半～布留式前半併行〕もみられる。

讃岐系では、底部をはじめとして全体的に器壁が厚い甕〔1次1622☆ 下川津Ⅲ式; 庄内式前半併行〕や、外反する口縁・下膨れ気味の球形の体部・極めて小さな底をもつ壺〔1次1596☆ 庄内式併行?〕が出土した。

北四国系では、口縁部が上方に直線的にのびる複合口縁壺の口縁部〔2次3102〕がある。

その他 地域や時期を特定できないが、在地の普遍的な土器としては違和感のあるものを掲載する。

肩部に直線文・3条の波状文・直線文が施された広口壺体部〔1次917☆ 山中式～欠山式; 庄内式前半併行〕は、文様構成は東海系だが、体部は球形である。

高杯らしき口縁部〔2次6028☆〕も外来系であろうか。

口縁部が直立する鉢〔2次3107☆〕、杯部が外上方に開き、ミガキ調整が卓越する高杯〔1次3105☆〕、杯部がカップ状の高杯〔1次1188☆(第Ⅲ面落ち込み416出土)〕は吉備あるいは山陰系か。

複合口縁壺には、口縁部が大きく外反するもの〔1次1597☆(98-1区第Ⅳ層)・1次960☆〕や、庄内式併行の北近畿・北陸系か布留式後半併行の山陰系か判断しにくいもの〔1次1185☆・1次1186☆(いずれも98-3区第Ⅲ面落ち込み416上層)〕がある。

第2～7章および本節では、各地域の古墳時代前期の土器について次に掲げる主要(あるいは古典的)な福年案に依り、『庄内式土器研究』各号や『全鼓』に掲げた最近の文献2本も参照した。さらに、西村歩 合田幸美 石井里英の各氏にご教示賜った。深謝。
全鼓: 合田幸美 2000『溝形遺跡出土の外來系土器について』『溝形遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集

森岡秀人・西村歩・竹村忠洋・胸井正明編2003『古墳出現期の土器と実年代 シンボジウム資料集』(財)大阪府文化財センター

東海系: 岩塚次郎 1990『考察』『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

近江系: 植田文雄 1988『古式土器の福年』『斗西遺跡(1次調査)』能登町埋蔵文化財調査報告書第10集

大和系: 岡川尚功 1976『廻間遺跡の古式土器器』『総合』奈良県桜井市教育委員会

山陰系: 青木道隆発掘調査団1978『土器論』『青木道隆発掘調査報告書Ⅲ』青木道隆発掘調査団

吉備系: 柳瀬昭彦 1977『川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土器について』『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書16

阿波系: 菅原康夫 1986『まとめ』『黒谷川郡遺跡1』徳島県教育委員会

讃岐系: 大久保徹也 1990『下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について』『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

遺物観察表

表25 (1) ~ (14)	02-1 区の遺物	1001~1191
表25 (14) ~ (24)	02-2 区の遺物	2001~2137
表25 (24) ~ (31)	02-3 区の遺物	3001~3117
表25 (31) ~ (34)	02-4 区の遺物	4001~4039
表25 (34) ~ (36)	02-5 区の遺物	5001~5032
表25 (36) ~ (38)	02-6 区の遺物	6001~6039

表 25 小坂台遺跡(第 2 次調査)遺物観察表(1)

図 番	遺物番号 番号	調査 区	層位	出土層位・ 位置	器種	時期	計測値	口部形状	体部形状	底面・脚部形状	色調	備考		
図10	1001	02- 11区	第30層	土師器 甕	平安時代	口径:160mm 器高:495mm	口部平				外装 5YR6/6、内装 2.5YR8/4 脚)灰緑 2.5Y4/1~脚底 10YR6/1 内) 5Y7/6			
		02- 11区	第30層	土師器 杯	奈良~平安時代	口径:140mm 器高:4935mm	口部平				外)明赤黒 2.5YR5/8~2.5Y 黄緑 10YR7/3 脚)灰白 10YR6/1 内)明赤黒 2.5YR5/6~2.5Y 脚底 5YR7/4 脚底 黄緑 7.5YR8/4 内)脚底 5YR7/6~脚底 2.5YR7/6			
	1002	02- 11区	第30層	土師器 甕	平安時代	口径:200mm 器高:17mm	口部平					外装 5YR6/6~底黄緑 7.5YR8/4 内)脚底 5YR7/6~脚底 2.5YR7/6		
		02- 11区	第30層	土師器 高林杯(身)	奈良時代	口径:19120mm 器高:4933mm	口部平					外装 7.5YR6/6、内装 10YR3/1 脚) 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3 内) 5YR6/6、内装 10YR3/1 脚) 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3 内) 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3		
	1003	02- 11区	第30層	漆桶形器 甕	平安時代	高径長:100mm 残存高:19mm	口部平					外装 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3 内) 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3		
		02- 11区	第30層	漆桶形器 甕	平安時代 前半	高径長:70mm 残存高:4925mm	口部平					外装 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3 内) 5YR6/6~2.5Y 脚底 5YR7/3		
	図13	1007	02- 11区	第30層	軒瓦	奈良~平安時代	残存高:64mm 厚さ:4934mm						外装 5Y5/1 脚)灰黒 2.5Y7/2 内) 5YR6/6 脚底 5YR6/6	内外面に運符書
			02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:120mm 器高:46mm	口部平					脚底 5YR6/6	
		1009	02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:146mm 残存高:49mm	口部平					外)に5Y 脚底 3.5YR6/4 内)脚底 3.5YR6/4	
			02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:152mm 器高:25mm	口部平					外)に5Y 脚底 7.5YR7/4 脚)に5Y 脚底 2.5Y7/2 内)脚底 5Y5/1 脚底 5YR6/6	
1011		02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:137mm 器高:4931mm	口部平					外)に5Y 脚底 7.5YR7/4 内)に5Y 脚底 5YR6/6		
		02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:146mm 器高:4931mm	口部平					外)に5Y 脚底 7.5YR7/4 脚)に5Y 脚底 5YR6/6		
1012		02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:166mm 器高:4931mm	口部平					外)に5Y 脚底 3.5YR6/4 内)脚底 3.5YR6/4		
		02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:150mm 器高:4931mm	口部平					外)に5Y 脚底 5YR5/3 内)に5Y 脚底 5YR6/4		
1014		02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	奈良~平安時代	口径:184mm 残存高:4949mm	口部平					外)脚底 5YR6/6~2.5Y 脚底 10YR7/4、 脚底 2.5Y3/1、内)に5Y 脚底 10YR7/3、 脚底 5YR6/6、に5Y 脚底 10YR7/3、 脚底 10YR3/1、内)に5Y 脚底 10YR7/3、 脚底 10YR3/1		
		02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	奈良~平安時代	口径:180mm 残存高:494mm	口部平					外)脚底 5YR6/6~2.5Y 脚底 10YR7/4、 脚底 2.5Y3/1、内)に5Y 脚底 10YR7/3、 脚底 10YR3/1		
1016	02- 11区	第31層 土灰9	土師器 甕	平安時代 前半	口径:178mm 残存高:493mm	口部平					外)脚底 5YR6/6 内)に5Y 脚底 5YR5/4			

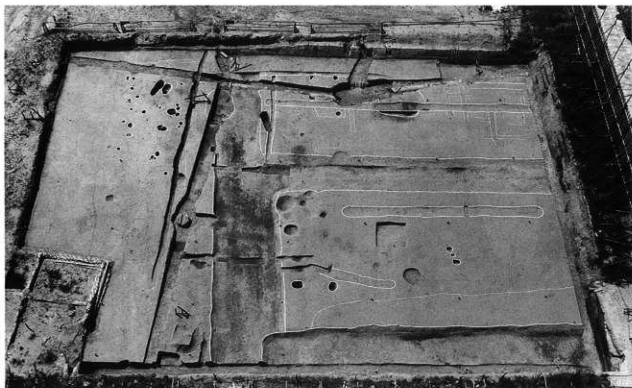
1016	1区	土庫口	土庫	土庫器	平安時代 前半	埋存高さ:70mm 口径:55mm 底径:42mm	図帳ノ子 外:赤土ノ子 内:白土ノ子	赤切刃	内:黒色 NYR4/1 外:黒色 N8/ 内:黒色 N6/ 外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1 灰白 5YR6/1
1018	1区	土庫口	土庫器	平安時代 前半	埋存高さ:4925mm 口径:60mm	内:白土ノ子	高取皿	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1020	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:28mm 口径:100mm 底径:27mm	ココノ子	高取皿・高台	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1021	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:60mm 口径:100mm 底径:27mm	ココノ子	高取皿・高台	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1022	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:160mm 口径:156mm	ココノ子	高取皿・高台	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1023	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:160mm 口径:156mm	ココノ子	高取皿・高台	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1024	2区	土庫口	土庫器	奈良～平安時代 前半	埋存高さ:140mm 口径:110mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1025	2区	土庫口	土庫器	平安時代 前半	埋存高さ:140mm 口径:110mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1026	2区	土庫口	土庫器	平安時代 前半	埋存高さ:140mm 口径:110mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1027	2区	土庫口	土庫器	平安時代 前半	埋存高さ:50mm 口径:90mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1028	2区	土庫口	土庫器	平安時代 前半	埋存高さ:985mm 口径:65mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1029	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:405mm 口径:110mm 底径:28mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1030	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:405mm 口径:110mm 底径:28mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	
1031	2区	土庫口	土庫器	平安時代 後半	埋存高さ:405mm 口径:110mm 底径:28mm	ココノ子	高取皿・高台 内:白土ノ子	外:黒色 80R/4 内:黒色 30R/1	

写 真 图 版

写真图版 1	調査地全景
写真图版 2～7	02-1 区遺構 (1)～(6)
写真图版 8～16	02-1 区遺物 (1)～(9)
写真图版 17～19	02-2 区遺構 (1)～(3)
写真图版 20～24	02-2 区遺物 (1)～(5)
写真图版 25～28	02-3 区遺構 (1)～(4)
写真图版 29～36	02-3 区遺物 (1)～(8)
写真图版 37・38	02-4 区遺構 (1)・(2)
写真图版 39	02-4 区遺物
写真图版 40～43	02-5 区遺構 (1)～(4)
写真图版 44	02-5 区遺物
写真图版 45～48	02-6 区遺構 (1)～(4)
写真图版 49・50	02-6 区遺物 (1)・(2)



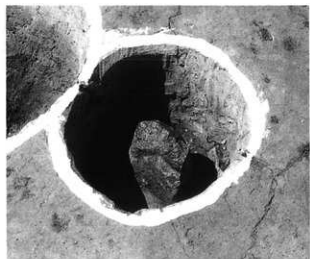
調査地全景(手前:02-1区第2面,中央:02-2区第2面)(北西から)



第1面(北から)



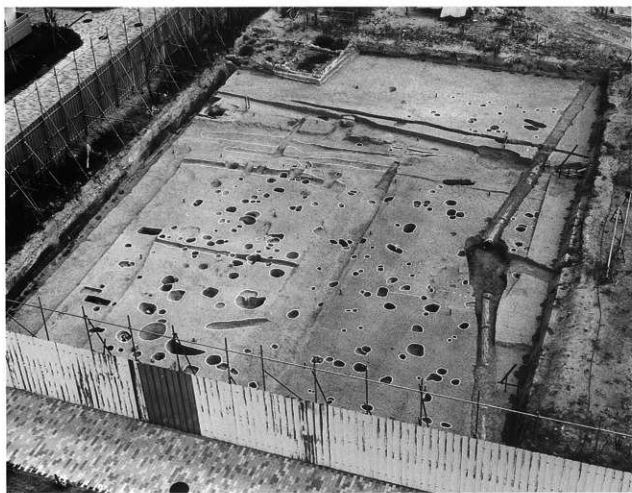
第1面土坑9(南から)



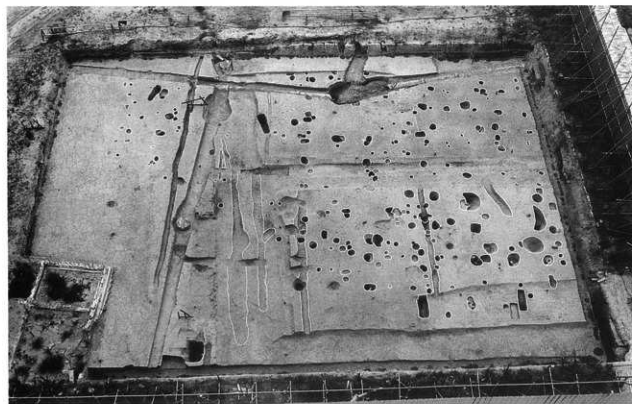
第1面ビット28(北から)



第1面ビット39(南から)



第2面(南西から)



第2面(北から)



第2面ビット90 (北西から)



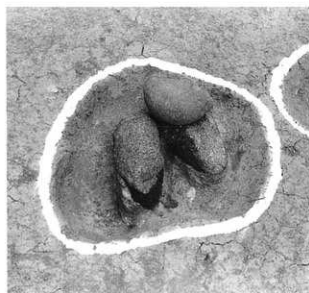
第2面ビット98 (北から)



第2面ビット184 (南から)



第2面ビット118 (東から)



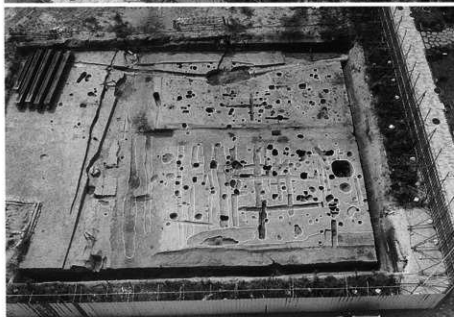
第2面ビット211 (西から)



第2面ビット214 (北から)



第3面(南西から)



第3面(北から)



西側セクション(東から)



第3面井戸 82 (北西から)



第3面方形土壇 358 (南西から)



第3面方形土壇 358 (南東から)



第4面(南西から)



第4面土器溜り467(西から)



第5層遺物出土状況(西から)



1002

第0層出土土器



1021

第1面溝2出土土器



1034

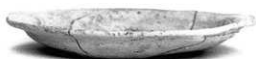
第1面ビット39出土土器



1038



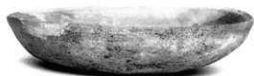
1045



1039



1047



1041



1048

第1層出土土器



1054

第2面ビット101出土土器

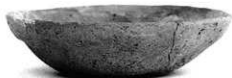


1070



1071

第2層出土土器



1061



1075



1062

第2面ビット199出土土器



1078



1064

第2面土坑264出土土器



1079

第3面井戸82出土土器



1082



1089



1084



1090



1085



1096



1086



1088



1102



1118



1121



1123



1125



1127



1117



1131



1133



1134



1135



1136



1137



1138



1139



1140



1141



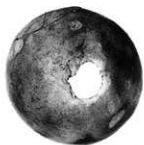
1142



1144



1145



1146



1171



1163

第4面土器溜り468出土土器

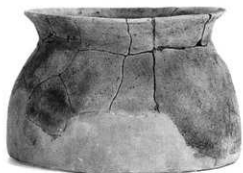


1172



1166

第4面土坑470出土土器



1170

第4面土坑538出土土器



1173

第4層出土土器



1175



1176



1178



第5層(上層)出土遺物



1179



1180



1181



1182

第5層(下層)出土土器(1)



1183



1185



1190



1186



1191



攪乱層除去面(西から)



第1面(東から)



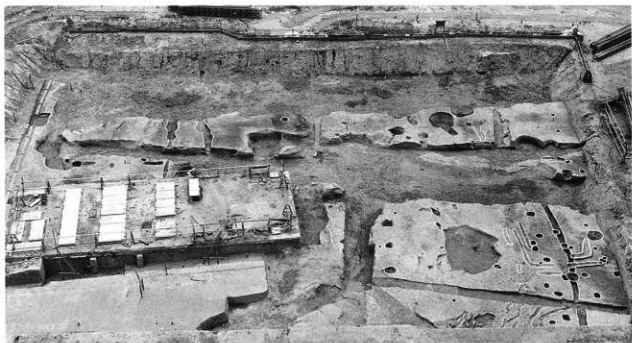
第1面(北から)



第1面井戸 287 上部遺物出土状況(南から)



第1面井戸 287 井戸側断ち割り状況(南から)



第2面(北から)



第2面(西から)



第2面土坑 350 遺物出土状況(南から)



第2面ビット 322 (南から)



第2面ビット 330 (南から)



第3面(北から)



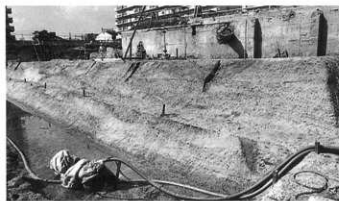
第3層中杭群 371 西部(南から)



第3層中杭群 371 北部(南から)



調査終了面(西から)



深堀りトレンチ断面(南東から)



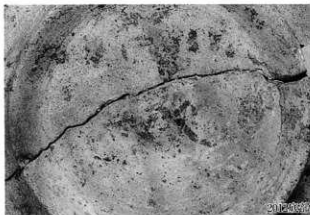
2004



2012



2005



2007



2017



2022

2015

第1面井戸287出土土器



2046



2056



2065



2066

第1面土坑67出土土器

第1層出土遺物



2067



2068



2069



2070



2071



2072

第2面土坑 350 出土土器



2084

第2面落ち込み 340 出土土器



2090

第2面溝 353 出土土器



2100

第2層出土土錘



2101



2105



2102



2106



2107



2108



2109



2114



2117



2118



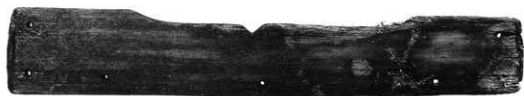
2112



2130



2120



2122

第3層(T.P.+6.0~4.6m)出土遺物(2)



2135



2136

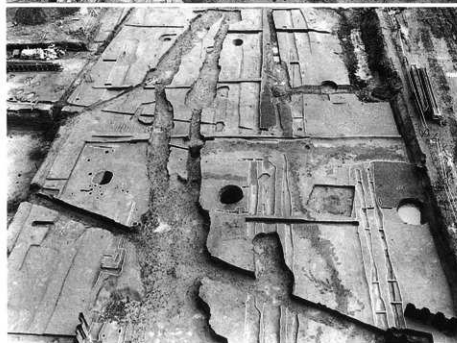
第3層(T.P.+4.6~3.6m)出土土器



第1面(西から)



第2面(北から)



第2面(西から)



第3面(西から)



第3面溝735他(南西から)



第3面井戸732断面(西から)



第4面(西から)



第4面土器溜り 663 (北西から)



第4面土器溜り 802 (東から)



第⑥・⑦層
杭列出土状況(南から)



第⑥・⑦層
杭列出土状況(東から)



第⑥・⑦層
杭列内土器出土状況(南から)



3003

第1面溝601出土土器



3005

第1面溝602最下層出土瓦



3006

第1面溝604最下層出土土器



3010



3017



3012



3018



3013



3022

第2層出土遺物



3023



3026



3024



3027



3028



3032



3029

第3面井戸732出土土器



3037



3040

第3面井戸731出土土器



3043

第3面土坑740出土土器



3050



3050底部



3055

第3層出土遺物



3064

第4面土器溜り663出土土器



3066

第4面土器溜り802出土土器



3071



3072



3073



3074



3075

第4面土坑887出土土器



3084



3085

第5層(上層)出土土器(1)



3086



3087



3089



3090



3088



3093



3094



3096



3095



3097



3098



3100



3099



3107



3101



3108



3109



3110

3111

第5層(下層)出土遺物(3)



3113



3112



3117

第5層出土木器



擾乱層除去面(北から)



第1面(北から)



第2面(北から)



第3面(北から)



第4面(北から)



第5面(北から)



第6面(北から)



第7面(北から)



第7面落ち込み4007断面(南西から)



第7面落ち込み4007サンプリング状況(南西から)



東辺断面北半第0～4層(南西から)



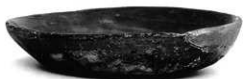
東辺断面南半第0～4層(南西から)



東辺断面北半第5～7層(南西から)



東辺断面南半第5～7層(南西から)



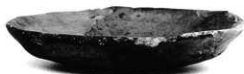
4021



4029



4030



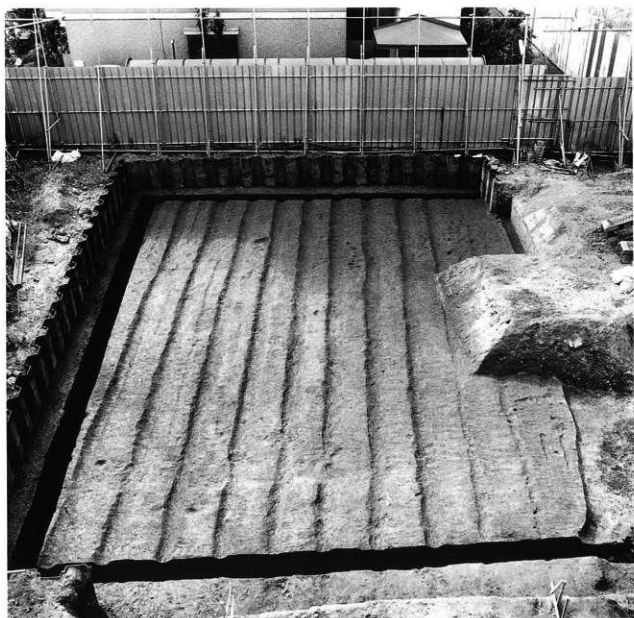
4022



4026



4036



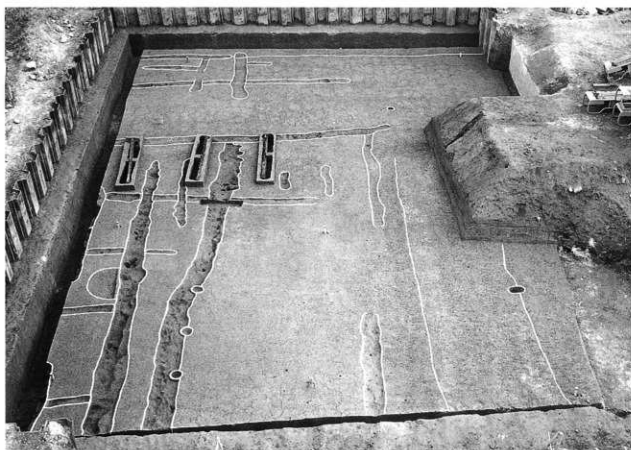
攪乱層除去面(北から)



第1面(北から)



第2面(北から)



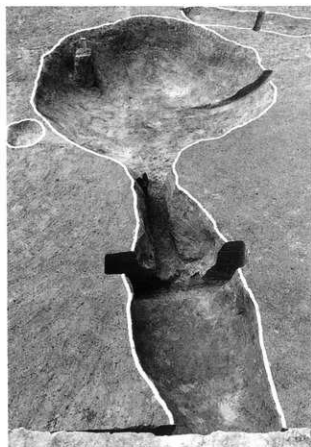
第3面(北から)



第4面(北から)



第5面(北から)



第5面土坑5034(奥)・溝5035(手前)(東から)



第5面土坑5034(中央)・溝5035(右上方)(南西から)



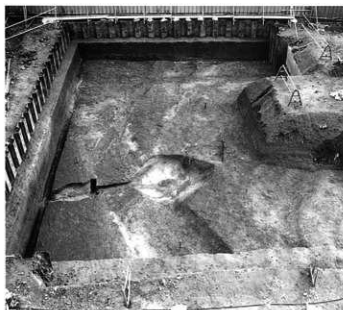
第5面土坑5034から溝5035を見る(西から)



第6面(北から)



第6面ピット5042(南から)



第7面(北から)



第6層土器(5027・5028)出土状況(西から)



第6層土器(5027・5028)出土状況(南から)



北辺断面(南南西から)



5001

第1層出土泥面子



5012

第4面土坑 5031 出土土器



5021

第6面ピット 5042出土土器



5023



5024



5030

第7層出土土器



5027



5028

第6層出土土器



第1面(東から)



第1面(西から)

第1面井戸 825 最上段
(南西から)



第1面井戸 825 二段目
(南西から)





第2面(西から)



第2面西半部(東から)



第3面自然河川963内
遺物出土状況(北東から)



第3面自然河川963 (南東から)



第3面自然河川963 (南西から)



第3面自然河川963内
土師器出土状況



井戸 971 (南西から)



井戸 971 (南東から)



第4面(東から)



第4面畦畔 969・970 (西から)



第1面検出井戸 825 最下部(南から)



6003



6007

第1面土坑 826 出土土器



6005

第1面井戸 825 出土土器



6009

第2面自然流路 827 西出土土器



6012

第3面自然河川 963 (西側部) 出土土器



6015



6016



6022



6031



6027



6033



6024



6025



6034

報告書抄録

ふりがな	こぎかみい いせき (その2)						
書名	小阪合遺跡(その2)						
副書名	八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第2次)						
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第116集						
編著者名	本間元樹, パリノ・サーヴェイ, 辻本武, 福田由里子						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 Tn072-299-8791						
発行年月日	西暦2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
こぎかみい いせき 小阪合遺跡	おびさかふ やほし 大阪府八尾市 わかべさちよう 若草町	27212	40	北緯 34° 37' 38" 東経 135° 36' 37"	2002. 4. 1 ~2004. 3. 31	3270㎡	都市基盤整備公団 八尾団地建替に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小阪合遺跡	水田	弥生時代	畦畔				
	集落	古墳時代 初頭	川・杭群	土師器			
	集落	古墳時代 中期	土器溜り	土師器・須恵器			
	集落	奈良時代	川・土坑	土師器			
	集落	平安時代 前半	溝・井戸・土坑・ピット	土師器・黒色土器入類 ・緑釉陶器			
	集落	平安時代 中頃~後半	掘立柱建物・溝・井戸 ・土坑・ピット	土師器・瓦器			

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第116集

小 阪 合 遺 跡 (その2)

八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第2次)

発行年月日/2004年3月31日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁目4番4号

印刷・製本/株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号

